

目次

第 1.....はしがき
.....2
第 2.....資料編
.....3
1. 証
 抛番号 5（手書きの書面の文字起こし） 3
2. 平
 成 10 年の秋、安藤健次郎さんに出した手紙.dotx（公開用テキスト版） 46
3. 令
 和 5 年 9 月 3 0 日付 金沢弁護士会に対する求意見書

130

第1. はしがき

「証拠番号5」は、平成10年の8月頃、「平成5年11月28日付の手書きの書面」の一部をパソコンで文字起こししたテキストデータになります。

「平成10年の秋、安藤健次郎さんに出した手紙.dotx（公開用テキスト版）」は、同じく平成10年の9月20日頃になると思いますが、被害者安藤文さんの父親、安藤健次郎さんに出した手紙で、他の資料と一緒にダンボール箱に入れて、石川県能美郡辰口町（現在は能美市）の郵便局から郵送した記憶で、「証拠番号5」も印刷したものを同梱したようなことが書いてありました。

曖昧な記憶となっていますが、平成10年の9月20日頃というのは、管工事施工管理技士2級のような試験で名古屋市に行ったことがあり、この数日前に安藤健次郎さんが部長を務める西鐵工所に郵送をしたような経緯があったように思います。

/home/a66/Documents/証拠番号5.txt

/home/a66/Documents/旭丘.txt

レンタルサーバや OneDrive などあちこちに保存してあるテキストファイルですが、今回はコピーした上記2つのファイルを使いました。元のファイルは Windows パソコンの改行で文字コードが Shift-JIS になっていましたが、UNIX の改行コードと文字コードを UTF-8 に変換しています。

もともとはいずれもワープロソフト一太郎で作成し、印刷しているはずと思うのですが、今のところ、このテキストファイルのみが現存となっています。

<<< : Linux LibreOffice : 2023-10-04 12:01:53 <<<

第2. 資料編

1. 証拠番号 5（手書きの書面の文字起こし）

>>> : Linux LibreOffice : 2023-10-04 11:34:55 >>>

- 証拠番号 5（手書きの書面の文字起こし） | 再審請求と刑事告発の証拠方法公開サイト\金沢地方検察庁御中 <https://note.com/hirono2020kk/n/nbab43ac2f07c>

証拠番号 5

平成三年五月下旬

主要事項

① 一日一万五千円の日当の話がきっかけで、急配に入社。

② この頃いつの間にか池田も転社。

③ 市内配送の仕事をする。

平成三年六月中

特になし

平成三年七月中

主要事項

① 東度の包丁事件と安田某スイカ積み替え

② 七月十八日、妻家出する。

③ 一度二階事務所に、私と、池田と、彼女と、松平といたところ、松平の提案で、彼女が松平のおごりでアイスクリームを、希望を私に訊いて買いに行った。彼女は、私の頼んだレモンのアイスを買って来てくれた。

平成三年八月中

主要事項

① 妻子、一度神戸より戻ったが、すぐに戻った。

② 中頃に、私が妻の実家に行って離婚届を渡した。

③ 東力町内の焼き肉屋で、松平主催の飲み会があった。（25日頃）

言葉

「大丈夫」（彼女）

福井刑務所における再審請求時の追加記載

二階事務所で、池田が文さんに、彼氏のことを話しかけ、彼女は、高校のとき以来いないと答えたことを、八月中のこととして付け加えておきます。11／9

平成三年九月中

主要事項

①8／31）日通白菊倉庫にて、神奈川県厚木市行きの荷物を安田と一緒に積んだ。（積み置き）

②（9／1）安田と一緒に2313号で出発（大糸線経由）

③（9／2）厚木で降ろし、東京晴海でバナナを積んだ。

④（9／6か7）事務所前で、彼女の乗用車6601号、大倉さんの4トン車に後部をぶつけられた。あるいは、13日か14日かもしれない。

⑤（9／11か18）前日に晴海から積んできた（2313号で）バナナを早朝6時より石川丸果バナナセンターで降ろす。A. M9時頃出社松平に、午後4時から館山農協に梨を積みに行くように指示を受けた。そして、会社前で、自分の乗用車アルトワークスにフィルムを貼り始めた。初めに4トン車で大阪に向かう山下つよしと多田が集まり、それにマルモ整備のパンチパーマの男が加わっていたところ、突如、彼女が加わって、手伝ってくれた。

午後になって、一時半だったかに、私が一人で作業をしていたところ、彼女が来て、手伝いをはじめてくれた。途中、松平、竹

沢、松平の友人のカベヤがそれを見て驚いていた。

カベヤは、「お前ら、夫婦やったんか？、と驚きの声をあげた。」

彼女は、「そんなん、見えるけ」と答えた。

⑥館山に行くちょっと前、浜上さんに福島の上河市の日本工機の地図を渡してくれるよう、彼女に頼んだ。

⑦（9／14か、あるいは21）私は、午後四時頃、石川経済連に、山下つよしが持ってゆく馬鈴薯を2313号に積んだ。その時、トラックの中に赤い小物入れ袋を忘れた。

その日は、大網周一さんの結婚祝いに出席するため、早めに退社して、午後五時頃自宅に戻った。

そしてすぐに、忘れ物を思い出して、会社に電話を掛けた。

加田君の自宅に寄って、一緒に私の軽四に乗って、午後七時頃、大場町東213の4の、大網健二君宅に到着した。すでに、浜口さん、中町さん、麻田さんなど集まっていた。

夜中に、加田君の運転で自宅に帰った。

翌日の朝か昼、会社に行って、トラック2313号の中より忘れ物を持ってきた。その時会社は無人であった。

言葉

彼女は、「私、取ってきてあげるか」と言ってくれた。

⑧（9／14か21）私は午後から片山青果か柿良青果の仕事で、中央市場の地野菜売場より青果物を積んで、マルエー松任店、小松市の若宮店（マルエー）、マルエー根上店に行った。

そして、五時頃、会社に戻ったところで、山梨の桃の回収容器を4トンウイング車に積む作業と私の乗用車が障害となって、立ち往生しているような見えた6601号に乗る彼女に、私はかけつけて、自分の軽四を移動してあげた。

でも、近くに行ってみると、私の軽四はそれほど障害になっていなかった。
これは初めて記述するが、午前中に松平に頼まれて、松任に誤配の荷物を取り替えに行ったのも、この当日であったかもしれない。また、その時、私が、松任のなんとかママと言うサラダなどを作る食品工場から会社に電話を掛けたとき、彼女は黙ってあまり返事をせず、なにかを訴えかけるように感じられたことがあった。

言葉

彼女は初め、私の顔を見て満面の笑みを見せたが、移動後は、私の会釈を無視して走り去っていった。

⑨（下旬の某日）二階事務所にて、私が池田に金沢信用金庫中央市場支店にて作成したキャッシュカードの郵送において不在であったため、泉野郵便局に取りにくるよう通知があったことを話しかけたところ、彼女がうれしそうな声をあげ、池田が「印鑑とかいるし、本人じゃないといけんよ」などと冷静にやさしそうに彼女をなだめた。

言葉

「それ私の家の近く、私行って来てあげる」と彼女

また、この数日前であったと思います。昼頃二階で、彼女と二人切りになり、彼女は私に、「今度、後ろの方にもフィルム貼りたくないけ？．．．．．なんか後ろの車（人）から丸見えて、嫌やぞいね」などと話しかけてくれたことがあった。

そのあと彼女は、電話を取っていずこかに電話を掛け、「山下さんいますか？、アノウです」などと言ってすぐにそれを切った。

また、この頃、二度ほどこの当日もそうであったのですが、私と二階で二人切りになると彼女は席を立てて台所にゆき、そこで化粧を直しておりました。

また、フィルム貼りを実際に手伝ってくれた日の数日後（二、三日後）、彼女は台所付近で話しかけてくれ、私が自分の車に貼ったフィルムの色が薄かったことより、濃い方が良かったと言ったところ、彼女は明るい声で、「私、薄い方がいい」と言ってくれたのです。ちなみに彼女の車のフィルムは濃い色であります。

⑩九月下旬の某日

私は、安田の自宅に掛けた電話で、彼女が好きで交際を求めようか迷っていると告白した。すると安田は、明るくなだめるように、「やめとけや、ダメやったら大変なことになるぞ、同じ会社でこれからどうやって顔合わせてゆくんや」などと説諭するようなことを言った。これは２０日頃ではなかったかと思います。

⑪九月下旬の某日

私が午前十一時頃、事務所階段の出入り口にとめてあった、動かなくなった朝野のソフトバイク（たしか、ホンダロードバル）にまたがってエンジンをかけようとしていたところ、その前に停めてあった６６０１号に乗り込もうとした彼女から突如声がかかった。と思ったら、二階の窓から叫ぶような池田の声がとどろいた。

言葉

「どっか行くが、送って行ってあげるか？」＝彼女

「ダメよ広野さん、乗ったらダメよ、どっか行きたいんやったら私の車使いなさい。」＝池田

⑫九月下旬の某日

これは二十日頃だったように、あるいは月末だったように思います。初めて記述することです。

その日私は午前九時頃に出社して、それから一階控え室で、一人で日報を書いておりました。そこに彼女が二階から降りてきて、なにか仕事のことを尋ねたのです。少しはにかんだような明るい感じですごく好感を覚えました。

この当日であったか、それともかなり後日であったか、午前十時頃に、私が二階に上がろうとしたとき、上から降りてきた彼女は、私の顔を見て、泣きそう顔をして走り去っていったのです。これは彼女の話しかけに私がひどく遠慮してあまり応じなかったためと思われ、それと、今思うと、池田がよからぬことを彼女に吹聴していたためであったのかもしれませんが。

そしてこのことが、10月5日の私の交際申し込みのときに、彼女がそれを断って見せた直接の原因としてつながっていたように思われるのです。とにかく彼女はかなり傷付いていた様子でした。私に直接の身に覚えがないことから考えても、池田がよからぬことを言ったことはまず間違いないように思います。そしてこの事が、私に、彼女に自分から交際を申し出ることを決意させたのです。誤解とは言え、傷つけてしまったから、その償いのような気持ちもあって、私は自分から直接彼女に告白をしたのです。また、絶対の気持ちがあったからこそ、駆け引きなどせず、ズバリ申し奉ったものであります。

また、なぜ、私がこれまでこの事を記述しなかったのか、それは余りにも時期がはっきりしないからであります。

また、その階段で彼女とすれ違った時、そこに偶然朝野がいたように思うのです。これは後述する10月12日の夕方の時と同じような状況でした。

⑬九月下旬から十月上旬にかけての某日

その日正午頃、多田の友人であり、市内配達の運転手である中村りょう太が、堂野さんの愛人の息子である大野君を同乗させて、西金沢方面に向けて配達中、金沢市玉鉾五丁目と米丸町の境あたりで、一時停止を無視して信号機のない優先道路に進入し、乗っていた二トン車を横転させ、優先道路を通行していた乗用車を民家の玄関先に突入させるという事故を起こしたのであります。

私は安田と一緒に、散乱させた青果物を收拾するなどの事後処理に向かいました。その時、偶然近くに仕事に来ていた大網健二君と現場で出会ったことを覚えております。

また、その後私は、松任の石川製作所に荷物を積みに行きました。

事故現場に駆けつけたときも、同じ2313号だったと思います。また、石川製作所で、安田と一緒に荷物を積んで午後四時頃会社に戻ったところ、ちょうど一階の控え室の前で、池田と彼女と、他二人ほどの市内配達の社員が、回収してきた青果物を整理していた光景を私はよく覚えているのですが、その時私は、彼女との関係は錯覚であったとほとんどあきらめたような気持ちになっていたと思います。なぜだがよく覚えていないのですが、その場面における私の心境だったように思います。しかし、絶望や落胆と言ったものではなく、ただ、思い違いであったと思ったようであります。

それと、なにか満足そうであった安田の顔を覚えております。自分の反対意見が私に絶妙の効果を与えていることに内心ほくそ笑んでいたのかもしれませんが。もしくは、本当に彼女が私など相手にするわけがないと思っていたのかもしれませんが。

⑭九月の終わり頃か十月の初め頃の某日

これも、午後四時頃であったとは思います。先の中村りょう太の事故の当日と似たようなうららかな天気の日でした。

私が一階控え室にいたところ、山下つよしだったか、誰かが、発泡スチロールの魚箱を、二階の階段の出入り口の所において、数人の人がそこに集まってきたのです。なにかと思い私も見にゆきました。すると松平が、誰かに、二階に行って池田さんらと呼んでくるように言ったのです。この件で、私は初めて彼女の名前が「安藤」であることを知ったのでありますが、これは今考えてみる

と、どうも松平が意図して私に名前を教えたように思えてなりません。なぜなら、それまで松平は、ずっと、池田と同じように「文ちゃん」と呼んでいたのです。

言葉

「上に行って、池田さんと安藤さんにサンマ欲しかったらナイロン袋持って取りにくるように呼んでくれ」＝松平

平成三年十月

1 十月の初め頃（あるいは、9／28土曜日の夜かも）

主要事項

その日、私は初めて（急配に入社して）岐阜の市場に馬鈴薯を持って行ったのです。そして、夜十時頃だったかに（あるいは八時頃だったかも）、私は岐阜の市場で荷卸しをして、すぐに、そのまま金沢に戻る途中、岐阜羽島インターの近くの一般国道より安田敏の自宅に電話を掛け、彼女に交際を申し込む相談をしたのです。その時私は、自販機でおみくじソーダなる缶ジュースを購入したところ、それに恋愛運絶好調などと記してあったことから、私は気を良くしてさらに決意を固めたことを覚えております。そしてこの時の安田は、かなり親身で友好的であったと印象に残っております。

あるいは、10月5日の前日だったのかもしれない。

2 10月5日土曜日

主要事項

その日私は、正午頃、出社と同時に、安田、東度、浜上、竹沢、松平、朝野、池田（河野さんはもしかすといなかったかも）などと、そのまま会社内に入らないままレストラン十字に行ったのです。

そして、そこでミーティングが行われ、ステーキセットを食べました。食事が終わると、私はすぐに、その会議の途中より考えていた、留守番中である彼女に電話を掛けようと思いついたことを実行しようと思ったのですが、すぐに慌てて出てきたため自分の軽四の中に財布を忘れ一円も持っていないことに気づいたのです。10円さえあれば0120で通話できると思い、安田に少しでも金を貸してくれ、と頼んだのですが、安田は私の考えを察したのか、全く持っていないとはねつけました。そこで私は頭をひねり回し、乗用車だったかのスペアキーをジャスコの中の以前利用したことのある鍵屋に行って作ることを口実に思いつき、そして池田に言って、初め千円だったかを貸してくれるように頼んだのですが、一万円しかないと言われ、それを借りて私は会議の途中に出てジャスコの鍵屋に鍵を渡し頼んでから、その近くのエスカレータの横の公衆電話に行き、そこから会社に電話をかけたのです。

すぐに思ったとおり彼女が出ました。私は、思いあまって声が出ず、それを切ってしまいました。そして暫くして勇気をふるってもう一度掛けたのです。

言葉

「もし、もし、広野やけど」（私）

「はい」（彼女）

「あの、頼みあるんやけど」（私）

「.」（彼女）

「今晚、おれの自宅、電話掛けてきてもらえんけ？」（私）

「はい」（彼女）

「あの、電話番号. 書くものあるけ？、92の1563」

「はい」

「はい」

それで、夜八時頃に彼女に電話を掛けてくれるように頼んだのです。彼女は、事務的にたんと「はい」と答え、私の自宅の電話番号さえ訊こうとはしませんでした。あらかじめ予想していた当然の成り行きと言ったような感じさえありました。全く動揺がなかったのも、今思えば、彼女の配慮だったと思います。そしてそのことごとくの足を引っ張ったのが地獄の安です。

それから十字に戻ると、ちょうどみんなは店から出てきたところでした。私は来たときと同じように、誰かの車に同乗して会社に戻りました。

それから、私は、裏駐車場で朝野さんに一万円を渡し、池田に返してくれるように頼んだのです。その日私は、一度も二階事務所には顔を出さず、よって、彼女の姿を見ることはありませんでした。

《補足》

会社を出るときだったと思うが、二階の窓から顔を出している彼女の姿を見たように思う。誰かに用事があるって探しているような感じだった、と印象にある。

それからすぐに、私は安田と東度のトラックに同乗して、羽咋あたりの海に近い所にある肥料工場のような所に行って、東度の積んできた一つ60kgのズタ袋を汗にまみれて卸したのです。そして、その途中に東度の目を盗んで、私は安田に、彼女に電話を掛けたことなど、それまでのいきさつを話したのです。安田は、明るく「まあ、半々やなあ」とか、言ってくれました。そして、冗談ばく励ますような、まあ、がんばってやってくれ、と言った感じでありました。

それから、私たちは会社に戻り、私と安田は、そのまま石川丸果の倉庫に行って、2313号に名北行きの馬鈴薯を積み込んだのです。

なぜこの時松平は、私を休ませ安田に一人で名北に行くように指示をしたのか、あるいは、これも、計算ずくしだったのかかもしれません。本来ならば、安田に運転指導として私と一緒に行かせるのが妥当ではないかと疑問を感じたことを覚えております。あるいは、すでに、当夜彼女に私から申し込みがあったなら断るような、池田を通じて手を回したあったのかかもしれません。

それが終わってから、私は、安田を誘って諸江町のオートバックスに行って、それから、軽油グループのガソリンスタンドで給油をして会社に戻ったのです。安田は結果を教えに電話を掛けてくれと言い、ダメやったら明日一緒に名北に付き合ってくれと冗談ばく言っておりました。それと、電話が掛かってこないような脅かしのような、不安を煽り立てるようなことも言っていたと覚えております。

3 10月5日夜の電話

主要事項

8時を7、8分ほどまわって電話が掛かりました。「もしもし安藤です」、彼女の声はすこぶる明るいものでした。それがかえって、安田の言う、彼女の余裕のあしらいと同僚としての気遣いとして感じられたのです。私は本当に金がなかったので、冗談にも一緒に連れていってくれとはいえませんでした。飲みにはあまり行かない、好きではないようなことをはっきりと言ったように思います。私は、ゆっくり話したかったのに、なぜ彼女は時間を短く限定して宣告したのか、配慮に乏しいのではないかと正直言って不快に思いました。それでなおさら腹をくくってズバリ言ったのです。「友達って、女の人け?」、「文ちゃん、彼氏おるが?」。

私は安田が言うように、やはり彼女は彼氏がおりながら会社での対面を考えてごまかしてきたのか、やはり、それが今時の女の子の常識なのか、残念、無念に思ったのです。その諦めがかえって大胆となり、私は思い切ったのです。「あの、もし良かったら、できたらおれと付き合ってもらえんけ?」。彼女はすかさず、「ごめんなさい」と言いました。そしてまるで追い打ちをかけるように「私、好きな人おるし」と言ったのです。

言葉

「もしもし安藤です」

「今日どこも走らんかったん」

「給料もらった？月曜日になったやろ、私一万円頼んで前借りしてん。それで今から友達と片町飲みに行くげん。広野さん飲みに行ったりせんが、．．．．．八時半に友達迎えにくるげん」

「う．．．ん（もったいぶって）残念ながら女の子なんです」

「う．．．ん」（もっと時間をかけて、いかにも答えにくそうに）

「いないんです。ハハ。」（軽い笑い声）

「ごめんなさい」

「私、好きな人おるし」

私は、ただただ打ちひしがれ、もう立ってもおられないようにへたり込むように「あきらめる」と言って、「気にせんといてくれ」などと言って電話を一方的に近い状態で切ったのです。

それから、私は安田の自宅に電話を掛け、ダメだったと伝え、酒をあおって眠りました。夜中に目が覚めました。テレビがついたままになって、恋愛物の洋画をやっておりました。それを見ると私はますます落ち、落ち、落ち込んでしまう内容だったのです。今思えば、この夜が本当に悪夢の始まりでした。

4 10月6日日曜日

主要事項

それから私は眠れない夜を過ごし、朝になって安田の自宅に電話を掛け、一緒に名北に行くことにしたのです。AM10時30分頃に金沢（会社を）出発して戻ったのはPM8：00時頃だったと思います。

5 10月7日月曜日

主要事項

その日、私が朝会社に出社すると、昨夜裏駐車場に停めてあった2313号の前の方が若干ではありますがぶつけられておりました。松平は完全に安田を疑ってかかったのでありますが、それを私が証人として無実を説得したのです。今思えばこれも松平か東度の工作だったのかもしれませんが。彼女はすまなそうに反省しているような様子でした。なるべく顔を合わせないようにしたことを覚えております。

また、その日、裏駐車場に本が来て、私にトラックを移動せよと命令したことを覚えております。

私は断りそれを一蹴しました。

6 10月9日か11日頃

主要事項

これは初めて記述することです。その朝、午後一時過ぎ頃、私は一人で二階事務所で池田が来るのを社長の机に座って待っておりました。この事は外に出ていた池田も彼女も知っていたはずなので（詳しい事情は覚えていない）。まもなく池田と一緒に外に出ていた彼女が一人で二階事務所に入ってきました。つまり、私と彼女は二人切りになったのです。彼女は私の顔を見ると、自分の机の方には向かわず台所の方に行きました。そこで暫く沈黙が続き、私は本当にになにか池田に用事があったので座ったまま台所には行って姿の見えない彼女に「池田さんは？」と声をかけたところ彼女は「下におる」と答えたのです。そのあと私は下に降りて池田の所に行ったのですが、今思えば、これも池田と彼女が相談して決めて実行した機会であったに違いありません。その時の彼女は冷たい感じでした。私に対し、いらだちのようなものを含んでいたように感じられました。

言葉

「池田さんは？」

「下におる」

7 10月11日(?)

主要事項

その日正午前頃、私は出社と同時に、出社後暫くして、一階控え室において佐藤と安田某と会い会話したように思います。その時が安田某が片町で暴行を受け怪我をしていたときであったかもしれません。その時私は、二階で給料をもらってきたところでした。そこで私は銀行に行くのに佐藤を付き合わせ、それから、市場輸送の旧事務所（西念町りの1）の建物の中のうどん屋の隣の小さな食堂で、食事をおごって一緒に食べたことを覚えております。

その時佐藤は、会社の裏駐車場に、60万円だったかで最近購入したという、かなり旧型（57、58年型）のトヨタマークIIを停めておりました。そして、津幡町あたりで前から付き合っていた女子大生と同棲し、近くのとび職の会社に勤めているようなことも言うておりました。

私は以前上申書の中でもこの事柄を、十一月の中頃か12月中頃ではなかったか、と記述したように思うのですが、それは私の勘違いでこちらの方が確かだと思います。また、上申書の中でもそのように訂正したように思います。

なぜなら、十一月の給料はすべて文さんが北国銀行に持って行ってくれたからで、12月の給料は、12月20日をかなりすぎてから年末近くになってもらったからです。なのになぜ私が勘違いをしたのか、と言いますと、それは佐藤と一緒に銀行に行ったとき、私は北国銀行の面前に軽四を停めたからであったと思います。つまり十月のその時点では、私が入ったのは金沢信用金庫だったはずなのです。しかし、その記憶は今も私にはありません。

8 10月12日土曜日

主要事項

その私は、朝から松平の指示で、入江と玉鉾あたりに（多分ウェルマート）配達に行ったことを覚えております。そして、会社に戻る途中に、私は大豆田大橋の近くの入江の交差点を玉鉾方面から来て信号待ち中に、右交差点を西金沢方向から金沢駅西口方面に走行する天皇陛下のパレードを目撃したのです。

それから私は、会社に戻って二階に上がったところ、彼女と二人いつものように机に座っていた池田が、私に「広野さんお払い行くの、私たち二人一緒に連れて行って．．．私大きいトラックって、まだ乗ったことないげん。一回乗ってみたいと思ってる。ねえ、文ちゃん」、のように声をかけたのです。私は、彼女の「ほんなん、池田さん乗ったことないが、私運転してみたいぞいね」、のような明るい社交的な言葉に、彼女は誰か他の運転手にトラックに乗せてもらったり、親しくしていたことがあるとばかり思い、そして、彼女はそのような水商売の女のような軽い性格があると思って、これもかなりの失望を受けたのです。そして、私は、返事もせずに仕事のことであったかに話題を変えたように思います。

それから午後四時頃になって、予定よりかなり遅れて日野自動車が新車である3068号を持ってきました。そして、平成三年三月中頃の浜上さんの三菱の新車の仮見試乗の時と同じように、会社面前に真横に駐車させられたのです。その時、私たちは皆二階事務所におり、松平も池田も、そしてカベヤも居りました。カベヤは彼女に声をかけ、冗談ばくワシが運転して乗せてやろうか、などと言いましたが白けたようでした。

それから私はすぐに新車に乗って、石川護国神社にお払いに行ったのです。時間が早ければ池田の勧めた、以前7559号の新車乗務時にも行った鶴来の白山神社に行こうかとも思っていたのですが、午後四時頃にもなっていたので、又、あらかじめ遅くなることが予想されたので、私は近くの護国神社に電話で確認を前もってしており、それですぐに向かったのです。

福井刑務所における再審請求時の追加記載

☆ この納車が遅れた件（本当は昼過ぎに来る話だった）について羽、松平の根回しだったかもしれず、日野自動車に確認できればよいと思います。11/9

☆ トラックが来るちょうど10分から20分ぐらい前に、松平はカベヤと他二人くらいと会社に戻ってきたのです。

お払いをしてもらい会社に戻ったのは、夕方五時二十分頃だったと思います。本来ならば、すでに彼女は退社している時間だったのです。しかしなぜか、その日彼女は、六時近くまで会社におりました。これは全く初めてのことであったと思います。そこで、その退社に直前に次のようなことがあったのです。私と安田が会社前で、新車を見ていたところ、彼女が二階から駆け降りてきて、私に「広野さん、今日どっか走るが?」、のように言ったのです。

その直後に、私は池田に用を思い出して、彼女の後を追うようにして二階に向かったのです。そのところ、階段の途中で、二階から来た朝野が、二階に戻る彼女を呼び止めて、彼女に、自宅に帰るついでに市川タイヤまで乗せて行って欲しいと頼んでいたのです。彼女は本当に嫌そうな顔をして、返事をためらっておりました。このように朝野は、入社当時ちょくちょく彼女にちょっかいのようなことを仕掛けていたようですが、それも彼女の態度を悟り、まもなくすっかりやめたようです。

《補足》

訂正浜上の新車のことを平成三年の三月と書いてありますが、これは明らかな間違いで平成四年の三月のことです。

9 10月12日土曜日夜

主要事項

その日の夜の様子を要点だけを取り上げ次に記します。

★午後七時から八時半頃に、私の自宅に二、三回無言電話が掛かった。

★午後十時四十分頃、私は104番号案内にて、初めて彼女の電話番号を知り、自宅から彼女の自宅に電話を掛けた。彼女の母が出て彼女にかわってくれた。私は無言電話の件で、今日会社に自分に宛てそれらしい所在を尋ねる電話はなかったか、訊ねた。彼女は、私は受けていないと答えてくれた。私は礼を述べて電話を切った。

言葉

「ちょっと待って．．．．（階段をかけたのぼる音が聞こえた）．．．． はい」

★私は、10分ほど迷いに迷ってもう一度彼女に電話を掛けた。彼女はすぐに出てくれた。私はすぐに「この前の話やけど、もう一度考えてみてもらえんけ?」、のように申し向けた。彼女は「．．．．（暫く考えて）．． ごめんなさい」、のように答えたが、そのあとやさしく話しかけてきてくれた。それで会話は十二時に十分ほど前まで続いた。途中私は遅いから切ろうかと言うと、彼女は「大丈夫や」、のように言ってくれた。

その電話を切った直後、離婚後初めて、八月の初め頃以来、前妻より電話が掛かった。前妻は、それ以前の私の長電話をいぶかしむ様子は全くなく、無言電話のことも全く知らないといっていた。（それまでの時間帯、前妻は仕事でであった可能性が強い。）

話の内容は覚えておりませんが、あたりさわりなく三十分ほどで終えたように思います。

10 10月中頃

主要事項

10月の中頃の様子は、次のようなものであったと思います。

★神戸L4より高崎に向けて走行中、北陸道徳光PAより午後五時頃会社に電話を入れたところ、彼女が対応に出た。

★大阪府堺市、通称泉北より石川丸果 に向け、青果物（キウイなど）を積むにつけ会社に午前九時頃より十一時半頃まで電話を掛けたのであるが、いずれも彼女が出て、社長は不在だと言い、三十分づつあとにかけ直すように私に言った。

★水曜日の休市日すなわち17日か24日あるいは30日のことであるが、当日私は、前日に石川丸果 倉庫で積んだ大阪府高槻市全農向けの馬鈴薯を出発するところ、早めに午前中に出社してトラック（3068号）にフィルムを貼ろうとしたところ、途中二階に上がって誰にともなくマジックを貸してくれるよう申し向けたところ、彼女は真っ先に「はい」と言って、マジックを差し出したが、それは水性のようであったので私は受け付けなかった。その時彼女は、泣きそうな顔をしていた。ちなみにそのマジックとは、十月の初め頃（これは初記述）、私が彼女にマジックを借りたところ色が出なくなってしまったため、私が新品を購入して彼女に渡した。十色入り700円ぐらいのものであった。また、二階で私がそれを彼女に渡そうとしたとき、彼女は、私が壊したマジックは会社の物で私物ではないと言って受け取りをためらっていたのであるが、それを見た池田が、明るく諭すように、「広野さんの文ちゃんにあげるプレゼントや、もらっておきなさい文ちゃん」と、助言したもので、彼女が受け取ってくれたマジックである。また、私は、それが水性であるか否かは知らなかった。ただ、彼女の交際を断りながら気を引く姿に反感を覚えたからそれに応じなかったものである。

そして、午後二時頃になって彼女は退社していきました。そのあと私が大阪に向け出発するところ、東度が池田の乗用車に同乗していずこかに走り去るのを私は目撃したものであります。その翌日、私は神戸L4より高崎行きを積んだように思います。（高槻から神戸に向かったことははっきりしている。）

11 10月下旬頃

主要事項

右当時の主な事柄は次のとおりです。

①19日か26日の土曜日

その日、私は会社にて、安田と一緒に午後より暇を持て余しておりました。まず安田が二階に上がって、彼女にコーヒーの作り方を教えてもらい。それから安田は、片町のことなど話題にして話しかけておりました。

そして、夕方五時をまわって私が退社して東力に丁目の自宅に向かって軽四を走行していたところ、長田地内あたりより追跡するような彼女の車（6601号）に気づき、新神田あたりで、それをはっきり確認したのです。

その夜、私は自宅より、二度目の彼女の自宅への電話をしました。午後七時半から八時頃だったと思います。それから二時間ほど会話をしたように思います。会話の内容は現在覚えておりません。福井刑務所における再審請求時の追加記載

☆私が今日は飲みにいかなかったんと切り出したところ、彼女は、友達みんな用あるっ

て．．．．．だやいしやめてん、と話したことは実によく印象に残っております。また、すこぶる穏やかでありました。11／9

②26日か11月2日の土曜日

その日、私は、神戸市の中央市場の近くのパナナセンターより高岡・富山行きのパナナを積み、当日の夜に高岡の市場に着き、夜中に富山の市場に移動し、朝より富山で卸し、高岡で卸し、昼頃には金沢に戻ってトラックステーションにトラックを駐車させて、迎えに来てもらった大綱君の自宅に遊びに行きました。

また、その神戸にゆく前日か前々日に、前妻より自宅に電話があり、その時私は、文さんとの事はダメになったとばかり思いこんでいたこともあり、暫く前妻と会話を交わしたもので、その時前妻

は、神戸の湊川公園の近くに住んで、その近くの市場で働いているようなことを話しておりました。

また、私が神戸のバナナセンターから戻った二日後か三、四日後にも前妻から電話がありました。私はその時前妻に、数日前に神戸に仕事で行った旨を話したのです。

十一月上旬

右当時の様相と主要事項は次のようなものです。

①十一月の初め頃の休日（3日、4日、10日のいずれか）、私は安田の自宅に行き、彼を誘って、片町にキャッシュカードで金をおろして洋服を買うつもりで出かけました。しかしカードはどこも使用できず、私と安田は結局近江町まで歩いて行き、そこでくるくる寿司を食べて、車を停めた堅町の有料駐車場まで戻って帰って来たのです。

②その日夜の八時頃、突如前妻より電話が掛かりました。当日その時点で、私は文さんに電話を掛けるか、かかってくるのを待っていたこともあり、前妻の態度が復縁を求めるようになってきていることもあり、私は前妻に対し冷たく対応したのです、そしてそのあとの文さんの電話でも、私は彼女に、交際はあきらめているから気にしないで、構わないで欲しい旨を伝えたように思います。

また、この電話（文さん）の前の、数日前の電話では、二時間以上に及び私は彼女と会話していたような覚えがあり、一方、前妻からの電話も、最終的には十一月十日頃にかかってきた時、私が腹を立てて（先方が喧嘩腰であったので）それを一方的に切ってしまったのですが、それが年内最後の前妻からの電話だったように思い、また、その当日にも私は文さんと電話で話をし、この時は短い話で、ほとんど一方的にあきらめるからもうこれで電話は掛けないと申し向けて、彼女の返事を得ないまま切っているのです。そしてこの次に、私が彼女に電話を掛けたのが、およそ半月後の十一月二十五日なのです。

だいたい右の通り話がややこしくなってしまったのですが、それは今の私の記憶の通り実に混然としているのです。事件直後の記述ほど正確だと思います。今では、会話の内容も当時の状況も断片的にしか覚えておりません。

《補足》

最後に前妻から電話があった時、彼女はうれしそうな感じだった。久しぶりにみた態度だったが以前にはちょくちょくあった機嫌のいいときの話しぶりだった。私はすぐそれを一蹴して二度と電話を掛けないように宣告したのである。以前の彼女の性格からしてすぐにまた掛けてくると思っていたが意外にもそれっきりだった。したがって、これ以降に前妻から電話が掛かったことも、それ以前に電話で口論のようになったことも考えにくいかもしれない。しかし、それが絶対だとは言い切れない。記憶が鮮明に近かったことを考えると一度私が不愛想な対応をした数日後に電話があったこともあり得るかもしれない。

また、前妻に絶縁を宣告した直後の電話で文さんにもはっきり断りを告げたがこの時だけは真剣な気持ちでその旨を話した。それ以前の電話でもほとんどの場合最後の方であきらめると告げていた。

十一月中頃の状況

①私は給料をもらってその運行前に池田に給料を渡し、北国銀行中央市場支店で通帳を作ってくれるように頼みました。

②東度は古河の青果市場で夕方荷積み作業中、山三青果のベルトコンベヤーに指を挟んだと騒いでおりました。山三青果の人達はいずれも東度のことを最も良く知るものでありますが、完全に白けきっておりました。

③東度の代わりに山下つよしがベニヤを積んで東京都東大和市に行き、翌日私と古河の市場で一緒になりました。

④安田は、会社より東度のトラックに乗って七尾のパチンコ屋にいた東度にそれを届けたそうです。

⑤東度は多田を連れて古河の市場に来ておりました。その時、私は初めて個人的に親しく多田と話したのです。また、この時点でも私は彼女との関係はすっかりダメになったものと思ひ込んでおりました。

⑥その日昼頃、私は昼前に池田に通帳のことを聞かされ「彼女に行ってもらった」、「30万円と3万円を別々にしてしまった」、「彼女は、今、出かけている」それから私は、多田を誘って昼食に行ったのです（これは、古河で親しくなった直後のように思われます）。そして私は昼食を多田におごってからジャスコ若宮店に行き、そこで2000円のチーズケーキと250円ぐらいのショートケーキを4個買って会社に戻ったのです。

そして車から降りるときに多田にそのケーキを二階に持って行って池田さんに渡してくれるよう、お前も一個もらって食べろと言って頼み、そして一階控え室に入ったのです。そのところ間もなく私に、山下つよしが子供のことで話しかけ、私が返答をごまかして話題を変えようとしていると、そこに東度が、まるで斬り込むようにここぞとばかり「もうそんな必要ないもんな、ひでき」のように申し向けたのです。つまり私は離婚したので子供におもちゃを買ってやる必要もなくなったなどと勝手に山下に説明を始めたのです。私はいたたまれなくなって控え室より出ました。その出たところで、二階から私の新しい通帳を持って降りてきた彼女にばったり会ったのです。彼女は控え室に入る直前だったのです。私はそれを受け取ったのですが、東度の言葉に憤慨していたためまともに彼女にお礼すら言えなかったのです。

言葉

「ありがとう（彼女）」

⑦11月16日だと思います。私は一人松平に誘われて、中央市場前の食堂に連れて行かれたのです。その時、松平は初めて私の離婚のことに触れました。そして会社に戻る途中の中央市場内高瀬商店の横の公衆トイレの前あたりで、松平はベンツを運転しながら二度目の悪魔の囁きを見せたのです。ちなみに一度目は、九月の中頃私と彼女が会社の前でフィルム貼りをしていたのを見た二、三日後二階事務所においてです。

言葉

「時々子供に会っとるんか」（松平）

十一月下旬当時の状況は次の通り

①その日、午後二時半か三時頃、私は会社前でトラック（3068号）を洗車していたところ、市内配達の55歳ぐらいの名前の知らない時々市場輸送に麻雀に来ていたおじさんに声を掛けられ、二階に来よう伝言を受けたのです。

そして二階に上がったところで松平と誰か二三人、私と入れ違いのように外出して行きました。そこで私は二階内で池田と二人切りになり、池田に勧められるままにケーキと缶コーヒー（ジョージア）をいただいたのです。そして暫く雑談をしていたところに、いつもその時間帯市場輸送に

行っていないはずの彼女が戻ってきて、それを見るや池田は「このケーキ、広野さんが文ちゃんのために買ってきてくれてんよ」（池田）、のように彼女に申し向けたのです。

言葉

「おれ、買ってきたんじゃないよ」（私）

②社内で、松平主催のジャスコ若宮店内芝寿司から買ってきた「鳥弁当」と「シャケ弁当」支給の上のミーティングがあったのも、この頃だったと思います。その時安田が来なかったため、私は東度と浜上さんから冷たい非難を受けたのです。そして当日の夕方に、安田のトラック（2313号）に同乗して市場輸送に給油に行ったことを覚えております。なぜなら、その時、車内に昼支給された鳥弁当が置いてあったことを私ははっきりと覚えているのです。

また、この日は土曜日だったように思え、そうすると9日かもしれません。また、この頃より安田の「線抜き」が始まり、松平や浜上さんから安田はスピードを出しすぎるそうであるから注意するよう真剣な面持ちで言われるようになったのです。（三度くらい暴走だとか言われ、大丈夫なのか、と自分のことのように言われ真綿で責められた）

③安田の工事現場突入ですが、これは十一月の上旬だったかもしれません。そのポイントとなるのは、ただ一つ、東度の娘を当日の事件直前に見たことです。それは東度が、多田を連れて古河に来たちょうど一週間ほど前に、私はその娘を見たように思うのです。ゆえに、多田が東度の自宅で食事に呼ばれたと聞いたとき、私はすぐに娘のことを頭に浮かべることができたように思うのです。（私はその食事の翌日に、古河で多田に聞かされた）

④入江派出所にて駐車違反に問われた当日です。私はその日を11月23日の祝日ではなかったかと最近になって記述したのですが、その可能性は高いのですが、ただし、当日に水戸に向けて走った（運行に出発した意）というのは間違いのようです。それはまず、よく当時の日付を見ると、24日が日曜日であって23日とは連休になっているからです。私は25日にあがっているのでありますから、当初私は、23日に出発して25日に帰着したものと考えたのでありますが、24日が休日になると行き荷は卸せず、さらに23日の祝日に日本たばこ産業が営業していたとはまず考えられないことであります。しかしながら、この入江派出所の当日がもっとも25日に近い出来事であり、そしてこの時の彼女の態度がより一層私に再度彼女に電話を掛けさせることを決意とさせたことは確実であります。

⑤十一月二十五日

私はこの日、初めてある種の自信を持って気後れなく彼女の自宅に電話を掛けました。午後七時四十五分頃だったように思います。この時も彼女は、それまでと全く同じように「今日どこも走らんかったん？」と始めに声を掛けてくれました。会話は午後十時二十分か三十分頃まで続きました。彼女の家族の方が電話を使いたいという申し出により会話を終えたのです。

私が「好きな人どうなったん」と訊ねると、彼女は、「ダメになったあ．．．みたい．．．私、悪いげん。冷たかったかもしれん．．．よお言われるぞいね。冷たい感じするって．．．これから直そうって思っとるげん」などと言っておりました。

この時の会話は初めて終始穏やかでありました。福井刑務所における再審請求時の追加記載（聞く私の心境として11／9）

私が「このまま明日の朝まで話しておりたいな」と冗談っぽく言うと彼女は笑っておりました。

そして私は意を決して、彼女に「本当はすごく好きで諦め切れんげんけど、迷惑じゃないけ？」と訊くと、彼女は「大丈夫やあ」と明るく答えてくれ、そして私が初めて「また電話してもいいけ」と訊くと、彼女は「いいよ」と答えてくれたのです。

⑥十一月二六日

その日私は、午後から大阪行きの馬鈴薯を石川丸果 倉庫にて積み込みました。会社に戻ってから、私と多田は浜上さんのおごりで使いを兼ねて高瀬商店（中央市場内、通称ババアの店）に行き、そこでカップラーメンなどを買ってきたのです。そして私は二階に上がって台所にてお湯を沸かそうとしました。ところが使い方がよく分からなかったので、私は誰にともなく声を掛けたのです。すると、すぐに彼女が駆けつけてくれたのですが、ちょうどガスが付いたのですぐにそれを断ってしまったのです。

そのあと、夕方になって私たちは、浜上さん、多田、西口などと出発の待ち合わせを一階控え室においてしておりました。そのところ、彼女はなぜか退社時間が過ぎても二階で一人電話を掛けたりしておりました。

そして六時半頃になって、白いファミリアかパルサーまたはミラーージュのような車が会社の面前に来て、彼女は自分の軽四を会社前に停めたままその迎えに来た白い車に乗ってどこかに行ってしまったのです。私は、それが彼女の以前からの親しい女友達であると西口の言葉から知ることができたのです。

そのあと私たちは、南条S Aで集まって食事をして、私は大阪で馬鈴薯を卸して、二度目にかつらぎ農協に入ったのです。

⑦十一月二十九日

その日私は、かつらぎ農協よりミカンを積んで小松に向かう途中、名神高速道伊吹S Aより午後七時四十分頃か半頃、彼女の自宅に電話を掛けました。五分間ほどの短い会話でした。

言葉

「私、今から出掛けなんし」（彼女）

①十一月三十日

この日、私が出社すると、なぜか彼女と池田の車が裏駐車場の一番奥の方に駐車しており、それに中村りょう太（ベージュ色のソアラ旧型）、長山（赤色のRX-7）、田川（赤色の新型シルビア）の車も、それまで中央市場裏側の側道に駐車していたものが一緒に裏駐車場に停められておりました。

②彼女の市川タイヤお迎え（十一月中頃）

12月中における主な事柄は次の通り

①一階控え室において早朝より、東度、浜上さんなどと雑談をしていたところ、午前九時頃浜上さんより現金を預かって頼まれてコーヒーパーンなどを買に出掛けようとしたところ、会社前の洗車機のあたりで、出社してきた彼女とばったり顔を合わせた（たしか二千元ほど預かった）。その時、彼女はうつむいて沈んだ面持ちで、まるで逃げるように会社内に入ってしまった。そのあと一時間ほど経った頃、二階から呼び出しコールがかり、私が出たところ、彼女はまるで泣いたような声でなにか訴えかけるように「梅野さんか、朝野さんいらっしゃいますか」と言ったのです。

そしてその当日の午後だったと思います。午後三時半か四時頃、私は、他の運転手の馬鈴薯の積み込み作業を手伝って石川丸果 倉庫より会社に戻り、日野自動車に修理に出した3068号のことで先方より連絡があったはずなのでその伝言を聞こうと二階に上がったところ、池田がまずその伝言を私に申し向けたのでありますが、その時、彼女がそれを遮るようにしてその伝言を声を大にして、これも泣きそうな顔で訴えるように私に申し向けたのです。

福井刑務所における再審請求時の追加記載

☆竹沢会長と夫人が応接席に座っておりました。また、彼女は松平の伝言も伝えたように思います。11／8

②これは初めての記述です。その日午後四時頃、私が二階に入ったところで次のような会話が聞かれました。「あの焼きそば、あの子（文さんのこと）お湯入れて作っておいてくれたよ．．．．やさしいやろ。こんな子お嫁さんにもらわんなん．．．」。察するところこれは、二階どころにおいて、市内配達の社員であった阪本（または坂本、当時二十一歳で、額あたりに家があるらしい。8月頃「北食」より移転（成瀬と一緒に）してきた者）が、カップ焼きそばを食べようとお湯を沸かしていたところ、彼女（文さん）が、それをお湯を入れてソースなどを入れ食べられる状態にしたようでした。そしてそのことを池田が明るい調子で、私がケーキを彼女のために買ってきただけと言ったときと同じような感じで阪本に申し向けたのです。その時私は、彼女の彼氏とは阪本ではないかと、いささかの疑いを持ったのです。それと池田の言葉は、社交辞令のようなものでそれは私においても同質のものであったと思ったのです。そしてそれは、安田敏の意見を肯定するものでもありました。いずれにせよ、今思うに、池田が彼女に私の真意を見せてやるとか称して、私に揺さぶりを掛けたものと思われま（時期ははっきりしない）。

③これも初めての記述です。ほとんど本件とかかわりはないのですが、一応記しておきます。その日午前中、松平を訪ねて、毛皮売りが二階にて、狼やミンクなどの毛皮を並べて松平に見せておりました。その時松平が冗談で、彼女にミンクの襟巻きをつけさせたところ、それはすごく似合っていました。私はそれを見てすっかり自信をなくし、彼女のような美人が自分のことを真剣に思っているわけがない、やはり安田の言うように、互いの立場を考慮の上憐憫の情を掛けているのにすぎないと改めて認識を覚えたことを、私は印象にしております。これは十一月の中頃だったかも（その可能性はかなり低い）しれません。またあるいは、この日、同時頃（毛皮売りの帰ったあと）、日暮一家とかとび職のような変な名称の無線クラブの大きなステッカーを後部ガラスに貼ったソアラのようなかなり高級な乗用車にかなりの改造を加えた乗用車に乗って、その車を会社よこ洗車機の前あたりに停めて、そして松平に、持ち込み運転手として面接に来ていた。若いかなりつっぱったやくざっぽい男の姿を、多田と二人で私は見たように思います。かなり寒い日で、あるいは雪がちらつくような灰色の天候の日であったと覚えております。これも第二点と同様、時期ははっきりせず漠然とした記憶であります。はっきりしていることは、その当時すでに、私はすっかり多田と仲良くなっていたということと、12月二十日頃以前だったということとであります。（また、その男は入社しませんでした。）

④その日私は、午前十一時頃（もしくは十時頃）出社して初め一階控え室にて、前日かつらぎ農協にてもらったミカンを数人の運転手にあげ、それから残りを段ボール箱ごと二階に行って彼女に渡しました。その時、彼女は明るい笑顔で対応してくれたことを印象にしております。これは12月十日頃だったと思います。

⑤十二月十三日

その日、私は彼女が裏駐車場に車（6601号）を停めるようになったのは直接私と話がしたいからだと考え、それに応えるつもりで意を決して、タイヤ置き場となっている四トン保冷箱の前あたりに停めて会った彼女の車の横に自分の車を止め、その中で彼女が仕事を終わってくるのを待ったのです。通常彼女は午後五時頃に退社し、遅くても五時半には必ず退社するのです。ところが、六時十分ほど前になっても彼女は退社のため自分の車の所には来ませんでした。そこで私は、あまり度が過ぎるとかえって嫌がらせになると思って帰ったのです。

また、この当時もしくは当日、すっかり私が彼女に好意を抱き接触を求めていることは社内に知られた様子で、特に朝野が、私の顔を見てニタニタとなにか言いたそうにしておりました。

すなわち、私がすっかり社内に彼女との関係を悟られたと感じたのは（完全の意味でもある）十二月の十日頃だったと思います。

また、この時梅野が私の車の横を歩いて会社の方に入っていました。私の車は、エンジンを掛けっぱなしにしていたこともあり、多分絶対に梅野は私が彼女を待っていることに気づき、そしてそのことを池田や彼女に報告したものと思われます。また、梅野が、私に、二階で、彼女が二階で仕事をしているときに、「あの元気のいいが、最近連れてこんな、どうしとる。今度また連れてこいや．．」などと言ったのは、これも時期がはっきりしないのですが、十月の終わり頃か十一月の初め頃でなかったかと思います。当時私は、梅野が私と彼女の仲を知り、それに関与しているとは全く夢想にしておりませんでした。

また、梅野が、二階にて彼女に家族のことなどを訊ね、それに彼女が私は嫁に出るつもりだとか、兄貴も家を継ぐつもりはないとか、爺さん婆さんが家にいてキンさんギンさんみたいだとか、明るく応えていたのはこの頃だったように思います。（初記述）

ちなみに私は当時、金山ギンさんが何者とは全く知らず、鶴は千年亀は万年のようなことわざに似た言葉であるとばかり解釈していたことを覚えております。

また、これは、九月の終わり頃だったかに梅野が彼女に、「アズさん、今晚片町に待ち合わせいいやろ」などと冗談ばく声を掛けたところ、彼女もそれに合わせて承知した旨返答していたことがあったのです。（初記述かも）

右の事柄はいずれも似たような感じでした。今思うに、これらはすべて前もって彼女との間に打ち合わせがあったもので、私の耳に入れ、又、反応を見ることをあらかじめ意図していたものと思われ、それは当時においても、私の薄々感じるところであったのですが、私はそれを梅野の善意と、彼女のことを心配する気持ちとばかり解釈することにより、よけいに認識の錯誤を重ねたものがあります。また、その梅野の真意は、いまだにもって私には了解不能であります。すなわち、この梅野の心理及び人間性にも、本件にかかわる謎を解く、真実を解明する鍵の一つであります。また、梅野と東度のかかわりと密通も重要な課題であります。

⑥この日も天候はかなりどんよりとしておりました。私は午後から石川丸果 倉庫において馬鈴薯を積み込み、いったん会社に戻ってから和田のプレリウドを借りて、送り状を取りに行きました。その時、彼女があてもなくさまようように駐車場を歩いていたことを覚えております。また、この時安田敏の同乗しておりました。また、この時の馬鈴薯の行き先は、東京太田市場ではなかったかと思えます。時期ははっきりしないのでありますが、１２月５日から１５日までの間のように思います。

⑦その日私は出社後間もなく正午前に、七尾に荷積みに向かうのに二階から降りたところもしくは二階にて声を掛けられて、一階控え室にて会長夫妻にジャンパーとズボン（茶色）をもらったのです。そして間もなく、洗車機横に停めてあった３０６８号に乗り込むところで、この時もあてもなくさまようような彼女の姿を裏駐車場タイヤおき保冷箱前あたりにて見たものであります。

⑧その日午前二時か三時頃、私は裏駐車場の多田四トンウィング車の中で初めて彼女との関係を多田に告白し、彼女のことについて訊ねました。多田は初め「事務員喰ってしもたん」などと訊き、そして彼女については、見ての通りや、あんまりしゃべらん子やなどと言って多くを語りませんでした。これはその時、彼がひどく眠そうであったことも大いに関係していたように思われます。その当日の朝多田はマルエーの青果物の配達で小松方面に行くともうしており、私は、付き合うから出発するときはトラックの中（３０６８号）に寝ているから起こしてくれるように言ったのですが、多田は起こさず一人で配達に行ったようでした。これは１２月１０日頃かしくは１７日未明のことと思われます。

また、もしかすると福井に行ったあと仕事を終えてしげちゃんに行き、そこで浜上さんと河野さんと偶然に合った直後だったかもしれません。（古河便を終えて）

⑨これは初めての記述です。その日私はあがりであったところ、夕方六時頃になって浜口さんと浜上さんが、浜口さんのトラック（いすゞの1414か1413のどちらか）でかつらぎの近く（かつらぎ農協ではなくその近くの農協で、私は行ったことはない。他の人達は時々行っていたようである。）よりミカンを18トンほど積んで、七尾に卸しに行く途中に会社に立ち寄り、私は浜口さんに誘われて七尾に同行したのです。金沢に戻ってから、たしか松村町のエバラの近くの北海ラーメンで、ラーメンをおごってもらったことを覚えております。七尾には浜口さんと浜上さんと三人で行ったのですが、その時彼は、私と文さんとの関係を話題にすることも触れることも一切全くなかったと覚えております。時期ははっきり覚えていないのですが、これも十二月の中頃だったように思います。もしかすると多田に未明に告白した当日だったかもしれません。（この当時は忙しく、あがりの日は他の月よりも少なかったように思います。）

⑩その日は12月19日です。

その日私は未明に前日山三青果から積んできた荷物を降ろし、あがりのつもりで午前十一時頃に出社して二階に上がったのです。そのところ私の予期に反して彼女の隣の隣の席に座った東度は私に七尾から関東に走るように指示を出しました。その東度の言葉を聞いた瞬間文さんが、がつくりと首をうなだれるのがはっきりと見て取れました。それは12月21日の私が24日東京に行くことに決まっていると言った時、そしてそのあと藤江陸橋下にて私がプレゼントを車外に投げた時と全く同じような反応であり、それは裏駐車場を彷徨彼女の姿とともに当時の彼女の苦悩をあらわす特徴であります。

また、この時東度は私の反応をあらかじめ計算に入れていたらしく、なにやらもっともらしい説得のようなことを私に申し向けており、かつ、なにやら憐憫の情を私に言外に込めて印象づけておりました。それがより顕著となって私の心に訴えかけ悪いように印象づけたのが12月24日の、私の高崎インターの近くの関越道のPAからの午後二時半頃の電話の時です。今思うに、この時点で私と彼女はともに、東度の暗示に強く支配されていたのであります。

また、その直後に彼女はしたに降りて行き、5～6分ほどで元の自分の席に戻り、そのあと、私は下に降りたところで彼女が5～6分外に出た間に裏駐車場に停めてあった自分の車（6601号）を以前停めていた会社面前に戻してきたことに気付いたのです。これで私は大きく心を救われたのでありますが、今思うに、私と彼女の心のダメージを与えることこそが東度の狙いであったように思います。しかし、当時の私は、彼女と同じ年頃の娘を持つ東度がそのような企てをしているなど、全く想像さえしたことはありませんでした。またそれは、彼女においてはより以上、東度をやさしいおもしろいおじさんだと信じ込んでいたものと思われれます。

⑪十二月二十一日

当日私は未明から朝方に前日古河青果市場で積んだ青果物を卸し、朝方自宅に戻り、仮眠を取り、午前九時半か十時頃に起きてそのまま金沢駅前の三越デパートに行き、「ティファニー」という宝石貴金属店で消費税込みで六万四千円ほどのネックレスを彼女に対するプレゼントとして購入しました。

それからそのまま会社に向かい、会社に着いたのは午前十一時一五分か二十分頃だったと思います。ちょうど裏駐車場に安田がいたので、私はプレゼントを買ってきた事情を話し、安田に彼女を呼んでくれるように頼み、そして会社内には全く入らずに裏駐車場の真ん中の奥の方に駐車したトラックの中で（3068号）、安田の呼びかけにより彼女が来るのを待ったのです。間もなく彼女はうれしそうな笑顔で恥ずかしそうに「なんやぁ」と、私の運転席の下より声を掛けてくれま

した。私が助手席に乗るように頼むと、彼女は「これどうやって乗るがぁ」と恥ずかしそうに言いながら素直に応じてくれました。

〈このあとの会話については上申書などで何度も記述しているので省略しますが、ポイントとなる言葉を一応記しておきます。〉

★「もうじきクリスマスやね。オレ、クリスマスの日」東京行くの決まっとるやけど、これ先にもらって欲しいもんあるんや。一応クリスマスプレゼントと言うことで」＝（私）★「なんやぁ」

「私、こんな高価なもんもらえん．．．．．だって私広野さんになんもしてあげれんもん」「それに、私、好きな人おるし．．．．」＝（彼女）

★「なんで家電話掛けても出てくれんが？」＝（私）

「寝とったんじゃないか、私最近早く寝るし」＝（彼女）

「おまえの家の人、出掛けとるって言いとったぞ」＝（私）

「ほんならその時出とったんじゃないか」＝（彼女）

★「好きな人ってどうなったんや。その男と付き合っとるんか？」＝（私）

「わからん」＝（彼女）

「わからんってどうや。これだけ言っておくけどオレ付き合っとる男おりながら他の男と付き合うような女なら初めからいらんぞいね」＝（私）「．．．（無言）」＝（彼女）★「私の気持ち変らんし」＝（彼女）

「ほんなはっきりもの言えるんやったらもっと早よ言えや」＝（私）

★「そんなんやったらこんなもん（プレゼント）もろても迷惑なだけやろな」＝（私）車外に投げた

「初めに言ってきたん、あんたの方やしね」＝（彼女）

そのあと私は、七尾に行って能登木材よりたしか東京都練馬区行きの製材を積んで夕方五時十分ほど前に会社に戻りました。そして二階に上がったところ、浜口さん、浜上さん、河野さんなどがいて（東度はいなかったかもしれない）、彼女は私の姿を見ると（目は合っていない）、先ほどトラックで別れたときと同じように張りつめた緊迫した沈痛な面持ちで無言のまま足早に帰って行きました。その時二階にいた人々は知らぬ風をしておりましたが内心ニタニタしているのが特に河野さんにおいて感じられました。

これは一月二十二日の夕方七時頃私と彼女が東インターから西インターをまわって戻ってきたあと一階控え室に入った時、と実に似た雰囲気でした。

また、その七尾に向かう直前、彼女がトラックを降りてから3～5分ほど遅れて私が二階に入ったところ、彼女の姿は見え（台所にいたように思われるがはっきりしない）、池田と松平が満面の笑顔で私になにか優しく声を掛けそして松平はその時緑色の帽子を私にくれました。この時の松平と池田の態度は一月二十二日の午前十時半頃私がハサミを借りたあと二階の出入り口のドアを蹴って穴を開けたとき及びその直後の態度と実によく似ていたと印象にあります。当時私は、それを松平らが私と彼女に会社を辞められたくない一心によるなだめであるとばかり思っていたのです。それは彼女においても同様であり、その影響力はより大きなものであったと思います。

そのあと私は自宅に戻り、まもなく投棄現場に行きそこでプレゼントを拾ってそのまま南新保の浜口さん宅アパートを訪ね、そして浜口さんが入浴中に財布を取りに（忘れてきた）自宅に戻り、午後八時半頃浜口宅を浜口夫人の運転によるダイハツシャレードに乗せてもらって出発。会社に浜口さんと寄ったところその時一階に梅野と中山さんなど数人がめずらしく残っておりました。私と浜口さんは中央通りと片町の境あたりに降ろしてもらい。夫人はそのまま自宅に戻られたようです。

そのあと私と浜口さんは、四軒ほど飲み屋をまわりました。途中浜口さんが前もって連絡していた大網周一さんと合流したり、麻田正美（旧姓佐田、通称チャーミ）と小島ひろ美さんの働く店などに入り、最後に入った店でその閉店とともに二人の二十代の女性と店を出たのですが、私が男女

二組に分かれ別行動することを拒んだため二人の女は腹を立てていなくなり、それで浜口さんも腹を立てて、私は午前三時頃一人でタクシーに乗って片町スクランブルあたりより会社に戻り、トラックの中で一時間ほど経ってから（会社に着いて）眠りました。

⑫ 12月22日の私の行動

未明に片町で浜口さんと別れ会社に戻ってトラックの中で寝た私は当日の朝九時半頃に目を覚まし、それから一階控え室で電話を掛けてから十時半頃到大場町913の4の大網健二君宅に訪れました。そして暫くしてから、無理を言って一緒に花を彼女に贈るため花屋さんを探しに武蔵が辻の名鉄丸越に行きましたが、目的の店は見つからず、それから市場輸送の近くのパチンコオークラの横の花屋に行き、そこで赤いバラの花一本800円を10本、24日の夜七時に彼女の泉ヶ丘の自宅に届けてくれるよう手続きして代金を支払いお願いして、それから、中央病院の近くの8号線バイパス沿いの「アンデルセン」というレストランで大網君と二人食事をして、それから、大網君の申し出によりゴルフの練習場に行くことになり、初め宇ノ気の山間部のゴルフ場に行ったのですが都合が悪く、それから、津幡町と森本町の境あたりの8号線に近いゴルフ練習場に入って打ちっぱなしを二時間ぐらいして、それから、大網君の自宅に戻ってその近くに停めてあった自分の車に乗って私は午後五時近くに自宅（東力二丁目28の2）に戻って、それから自宅の斜め前前方50メートルほど先にある中森という床屋に行ってそこで、久しぶりに短く散髪してもらったのです。

（髪を短く切ってもらった）

自宅に床屋から戻ったのは午後七時頃だったと思います。私は食欲もなく、それからすぐに安田敏の自宅に電話を掛け今から訪ねる旨申し向け、彼の承諾を受けすぐに花里町の彼の自宅に向かい訪れたのであります。

「やっぱりダメやったか。ダメやと思っとったわい。お前が呼んどるってあの子に言った時、すごい嫌な顔しとったわい。あの子前縫い物してくれて頼んだ時、ちょうどあの子忙しかったらしくって顔曲げて（のような意味の方言）嫌な顔で合図しておったわい。その時と同じような感じやったし、ああ、こりゃダメやなってすぐ思ったわい。そしてあの子なかなかお前や呼んどるってゆうたら返事せんかったわい。まあせっかくやし、行くだけ入ってやればってゆうてやってんけどな」などと感情たっぷりうれしそうに安田は申しおりました。私は安田に前日の夕方に拾ってきたプレゼントを差し出し、24日に出社したときに彼女に渡してくれるように頼みました。最初、安田は渋ると思ったので私はもはや他には方法がないと諦め、「事務所誰がおってもかまわんし池田さんに渡して彼女に渡してくれるよう頼んでくれ」などと私は池田の顔を立て且つもっとも簡単な手段を安田に頼んだのですが、あとになるとそれはやはり軽率であってまたしても彼女を傷つけることになりかねないと思い直し、安田のご機嫌をとってそのあとで前言撤回の上、彼女を人目の付かぬように呼んだ上で、「文ちゃんのこといい加減な女やと思っとらんし、頼むしもらっただけもらってくれ」と頼み、それでもダメなら無理強いしないでくれと安田に頼んだのですが、安田はあまり真剣には聞かず、それでも返事だけはしっかりと何回もしていたので私は承知してくれたものとはばかり思い、肩の荷がようやく下りた気持ちになっていたのです。

また、その会話の途中突如安田に松平から電話が掛かり、山下つよしが喧嘩をして怪我をしたので代わりに豊橋に行ってくれと頼まれたらしく、安田は仮眠をして夜中二時頃に出発すると云ったので私はそれからすぐにおいとまして自宅に帰ったのです。

また、私が初めて安田の妻の顔を見たのもこの時でした。出産直前でもありました。

福井刑務所における再審請求時の追加記載

☆私が安田に前言を撤回し頼んだのは、たしか松平から電話があった後で辞去する直前です。H6年11/10

現在の意見

私は安田から 誰からの電話であったか尋ねていないはずですが。その電話の時は松平か東度のどちらかで半々くらいに考えていましたが、初めのうちは会社からの電話とは考えにくかったのです。結構長い会話で通常ならば要件を先に話すはずなのに具体性が感じられなかったのです。安田の態度も会社での態度とは違っていて親しい者と話しているような雰囲気だったのです。終始淡々としていて突然の電話のはずなのにそのようなそぶりは全くありませんでした。私は何となく不可解な気がして深く会話の内容に立ち入る気がしませんでした。それで安田に誰からなのか聞けなかったように思うのですが、あるいは安田の口から松平という言葉を知っていたのかもしれませんが。しかし、私の印象は東度という方が可能性として強かったのです。ここでなぜ私が松平とはっきり記述しているのか分かりませんがこれを書いたときは深く考えずにいたのかもしれませんが。

⑬十二月二十四日

当日私は池袋インターから首都高速に乗り東北道を通って午前九時か九時半頃に古河青果市場に入り、青果物を積み正午頃に出発しました。

そして二時半頃、渋川インターの手前のPAより、彼女が市場輸送に行っていないことを計算の上会社に電話を掛けました。（駒寄PA、関越道渋川伊香保～前橋間）

初めに彼女が出て次に東度にかわったのです。この時私は風邪をこじらせて特にのどの調子が悪く不機嫌な声になっていたのは致し方ないのですが、この事も池田や東度に存分に利用されたように思います。

この時の東度は妙にやさしく、同情に堪えないと云った深刻ぶった感じでした。これは当時何度も見られた東度の態度の特徴の一つであります。とにかく深刻ぶることにより相手方に不安を与えるのが東度の常套手段で、松平はよりソフトにその傾向を有するものであります。この時の彼女は私の言葉を待つようにして、そして本当にすまなそうでした。

そのあと私、関越トンネルの手前にある谷川岳PAより電話を掛けました。その時は池田が出て、それとなく私の声のことを訊ねたので私は風邪のためだとはっきりと答えたのです。

そのあと私は、午後七時頃、富山県の北陸道有磯海SAにて食事にレストランに入った事を覚えております。

そのあと私、中央市場内高瀬商店の隣の公衆トイレの前あたりで、福井分を多田の四トンウィング車に中継しました。その時の多田はすこぶる友好的且つ上機嫌でした。

そのあと私は、午後11時30分頃か12時30分頃仕事を終えて自宅に向かう途中、長田本町と大豆田本町の境あたりの路上で、なにか白い塊のようなものを走行中にてまいたのです。（自分の軽四アルトワークス）

⑭12月25日の行動

その日私は、午前十一時頃に出社しました。そして事務所横の洗車機の横で軽四を停めて、自宅を出発したときから気になっていたオイルの油圧メーターの変調により、車外に出てオイルパンのオイル漏れがないかどうか車の下を覗いていたのです。右の状況と前後して私が進入してきた会社正面とは逆に裏駐車場の奥の方から彼女が自分の軽四に乗って進入してきたのですが、ちょうど駐車場が一杯だったこともあり彼女はUターンして中央市場横の道路に出て会社正面の方に走っていきましました。

そのあと5～10分ほどして私が二階に上がって事務所内に入ったところ、彼女は何事もなかったように机に向かって仕事をしておりました。

私は池田の顔を立てる意味（安田に頼んだことも含まれる）と、高価な贈り物に対する彼女の心の負担を減殺することを目的として、池田に給料を預かってもらっていたことなどを名目に現金を二千元ほど池田に手渡し、彼女と一緒にケーキでも買って食べてくれ旨申し向けたのであります。その時彼女は、下から見上げるように私の顔をにらんでおりました。（私は目を合わせなかった）（しばらくの短い間のこと）その時池田はかなり遠慮して困ったような態度でありました。

そして私は、その時来客か電話があって話し中であった松平に、オイルパンが割れたことを話し、修理を頼んで（スサキ自動車にしてもらったらしい）、それから七尾に荷積みに向かったのです。

また、福井分を中継する時、ただに当日の彼女の様子を訊ねたように思います。多田は見えていないようなことを申ししておりました。

福井刑務所における再審請求時の追加記載

☆これは十二月二十四日の夜に間違いありません。H 6. 1 1. 1 0

⑮十二月二十五日夜、足利給油所からの電話

当日の夜十一時半頃、私は七尾から積んだ荷物を関東地方の某所に運ぶ走行中、栃木県足利市の国道50号線沿いの太陽鉱油の給油所に給油に立ち寄ったところ、その機会を利用して給油所内の公衆電話より金沢の安田の自宅に電話を掛けたのです。夜中にならないと帰らないと思っていたのですが、予期に反してもまもなく安田本人が出ました。そこで私は初めて彼女がプレゼントを受け取ってくれたことを知ったのです。

安田の話によると、「お前のいい通り、二階に上がって池田さんに、これ秀樹がどうしても文ちゃんにもらってくれと」などと、彼女の面前において池田にプレゼントを渡したところ、池田は「はい、文ちゃん、広野さんから」と言って彼女に渡したそうです。

そして、私が彼女の反応を安田に訊ねると「どうしたん、文ちゃん、真っ赤っかの顔して」などと池田にからかわれていたとだけ言い。そのあと安田は、自分が当日の昼に土浦市内でトラックを接触させたことなど余裕たっぷりに機嫌よく話題を変えて話し始めたのです。

また、私はその前日である24日の夜にも何度も安田の自宅に電話を掛けたのですが、ちょうど夫人が入院したところだったようでだれも出ませんでした。（私は安田本人が不在であることは承知していたけれど、安田はよく夫人に電話を入れるので伝言による結果を知っていないかと、夫人の存在を期待して電話を掛けたのです。）

⑯12月26日の夜

当日私は、古河より夜中に金沢の中央市場に入り、そしてこの時は、福井分を中継せずに多田を同乗させて福井に卸しに行きました。その時福井の市場でウィングの荷台を開けたところ、中に小鳩が一羽いたのです。また、当日私は自宅に帰らずトラックの中で寝たように思います。

福井刑務所における再審請求時の追加記載

☆（間違いありません。）H 6. 1 1. 1 0

⑰その日の夕方彼女の退社の際、それを一階控え室にて、山下つよしと安田敏がなにか期待を秘めて私の様子を窺っていたのです。その当日の昼頃、私は安田に、今日の夕方に彼女に声を掛けると話していたのですが、その時安田は、聞こえなかったようにして返事をしませんでした。

そして、彼女はいつもより三十分ほど遅く五時半を過ぎて下に降りてきたのですが、私はそれまで彼女に声を掛けることを決意にしていたけれど、山下と安田の好奇の目にさらされることが気になってならず結局彼女に声を掛けなかったのです。その時彼女は、一度二階に戻りそれでも私の反応がないと見ると外で自分の軽四（6601号）のドアを音を立てて開け閉めしたりして、私が来ることを意思表示により要請していたのですが、それでも私は行動に出なかったので、彼女は車のエンジンを吹かしつけて乱暴な運転で帰って行きました。するとそれと同時に、安田と山下はおもしろい映画でも見物し終わったように無言のままやんわりと立ち上がって外に出て帰っていったのです。これは12月27日のことと思います。

そして多分この数日後、年明け数日後だと思うのですが、この時と全く同じような状況があり、その時は山下が一人、この時ほど露骨ではなく、彼女の方も控えめで、それでいて控え室の出入り口の前まできて、かがんでなにかを置いたのか拾ったような素振りを見せたことがありました。ある

いはこの数日前で十二月の中頃だったのかもしれませんが。いずれにせよ両者とも、彼女は退社時に軽四（６６０１号）を会社面前に停め、そこに私が直接声を掛けることを望み求めているものがあります。この時点で安田が、彼女が私に強く働き掛けていることをはっきり認識していることを私は見て取り、以来安田の意見はまともにしないよう心掛けるようになったのです。

また、今思うに、この当時の安田と山下の私と彼女に対する見解は、他の社員同様東度の解説が強く影響されていたのかもしれませんが。すなわち安田の妄執は東度の言葉を媒介して発展していったものかもしれません、なにぶんにも安田の知能の程度と固執性でありますから、それらが相俟って安田は通常の人が考えられないような認識を有し、思い込んでいたことも考えられます。すなわち客観的な常識で判断するより安田の異常心理による主観によって判断した方が真実に近づけるのではあるまいかと、私は思うのです。また、この判断を誤ったことこそがそもそも事件の原因の一つであったように思うのです。（これは２７日ではなく、両者とも一月上旬のことであったかもしれません。）

⑧ １２月２７日と思われる事柄

当日、私は午後四時過ぎ二回のミール移動を終えて会社に戻ったのです。それから暫くして山下つよしと和田が、ミール移動を山下が三回私はトラックの修理のため二回を終えて戻って来たのです。

一階控え室にて雑談をしながら、もう退社しようかと話していたところ午後五時をまわって二階から呼び出しコールが掛かり、私が出たところ彼女が、「山下さんか和田君いますか」と言ったので、私は山下に電話を替わったのです。そこで彼女は、山下に、和田君とどちらかもう一度ミール積みにハイミールに来るよう、東度さんから連絡があったと言ったようです。山下は、自分は三回運んでいるので問題外と言った風に話しました。そこで私は、和田と一緒に和田のトラックに同乗して行くことに決めたのです。そしてすぐに、二階に上がってその旨を彼女に申し向けたところ、彼女はひどく疲れ果てたような顔で、恨みを込めたような表情で私を見ておりました。

それから私は和田と一緒にハイミールに行ったのですが、その走行中、金沢港に出たあたりで和田は私に「再婚する気ないが、不便やろ嫁さんおらんと。うちの事務員のあやちゃんなんてどうや」などとさりげなく軽い冗談ぽく言ったことを覚えております。

それから私と和田はハイミールに行ってミールを積み、それから六時半頃に会社に戻り、そして北安江と諸江町の境あたりにあるクルクル寿司に行ったのです。それから一度会社に戻って（だったと思います）、私はこの時も和田の乗用車に同乗して、初めて和田の自宅アパートに遊びに行ったのです。そして夜十一時か十一時半頃に東力の自分のアパートに帰ったように（着いた）思います。

⑨ １２月２８日土曜日の夜

また、この時多田は、私が文さんとうまくいったら彼女を紹介してくれるように頼んでやると言うとうごく喜んでおりました。（２８日午後）

その日私は、午後から多田と一緒に（手伝ってもらって）石川丸果 倉庫で、新年四日卸しの岐阜卸しの馬鈴薯を積んだように思います。

そして夕方になって、一階控え室で、多田、西口、そして元急配の社員（一人は峰田だったかも）二人と一緒に雑談の末、浜口さん宅に行くことになり、一度市場輸送に行ってから、浜口さん宅に訪れ、そして諸江町内の焼き肉屋六歌苑に行き、それから浜口さんと別れ残りのメンバー５人で急配に戻り、そのまま連中と控え室で雑魚寝をしたのです。

また、夜中に多田と西口が申し合わせてサウナに行ってきたようでした。この夜になると多田は不機嫌になってあまりしゃべらなかったことを覚えております。おそらく私のおごりで片町に行き

女をナンパすることを相当期待していたと思われそれが逆恨みのようになっていたものと考えられます。そして次第にそれが彼女に投与されるようになっていったものと思われま

㊟ 12月29日日曜日

当日、私と和田と多田は、多田の四トンウィングに乗って昼頃増泉の日本通運に行き、高知からトラックを待ちながら近くのレストランココスで食事をし、それから日通で青果物を積んで会社に戻り、午後二時頃に会社を出発して右の三人で長野の市場に行きました。帰って来たのはその夜の夜中の三時頃だったと思います。それから三人で、和田の乗用車で、中央市場内のゴミ置き場の横にある食堂に入って食事をしました。

1) 12月30日の私の行動

第1項 当日午前十時頃、私が一階控え室にいたところ、彼女は何度もずっと玄関のガラスドアを拭いておりました。沈痛な面持ちで．．．．。

第2項 それから暫くして私は二階に松平に呼ばれていったところ、松平は私に頼みがあると言って、ベンツに乗って藤江陸橋の側にあるガソリンスタンドに行って、給油をして洗車をしてもらってきてくれと言いました。私は下に降りて、和田を誘って一緒にベンツに乗って出発したのですが、その時も彼女はまだ一人で玄関の掃除をしておりました。

第3項 午後三時頃、私は二階で松平から給料の一部と20万円の入ったボーナスをもらったのです。そして、28日の土曜日だったと思うのですが安田と一緒に行き服を買いズボンの寸法合わせを頼んだ紳士服モリワンにそのズボンを取りに行ったように思います（安田と一緒に行った時、強風で車のドアが曲がってしまった。また、その何時間か前には裏駐車場でトラック（3068号）より降りた瞬間に21日松平にもらった帽子を強風で飛ばしなくしてしまった。）

第4項 それから私は一度会社に戻り、それから安田に出産祝いの祝儀袋を渡すことを思い出し、それから安田を捜しまわったのです。そしてちょうど日が暮れかかった頃になってパチンコオークラで安田を見つけ、外に呼んで祝儀袋を渡し、それから私も暫くそこでパチンコをして午後七時頃に東力の自宅に戻ったのです。そしてまもなく私はかねて思いを決めていた通り彼女の自宅に電話を掛けたのです。しかしこの時も彼女のお母さんが出て彼女は不在であると言われたのです。訂正 私が自宅に戻ったのは八時十分ぐらい前だった。それまで安田と二人で近くの焼き肉屋に行っていたのであるがこの記述をした時点ではまだ思い出せていなかったようである。

2) 十二月三十一日

当日、私は能登の実家に帰省するのに先立って夕方に彼女の自宅に電話を掛けたのですが、この時もお母さんが出られて「先ほど友達が迎えに来て一緒に出掛けたんです．．。」と言われました。この時も夜七時半頃だったように思います。

3) 12月中頃の安田の話

それは12月の上旬だったかもしれません。ある日安田は私に自慢気に「この前、事務所であの子セーターの編み物しとったわい。好きな人にあげるやと。市場輸送の若い女の事務員来て教えてもらうとか言いとったな．．。」およそ右のようなことを、さも彼女にはちゃんとした彼氏おるんや。すっかりあきらめやなどといわんばんりのうれしそうな口振りで言っておりました。

訂正 私の記憶では彼女の方が出向くように聞いている。ここでなぜ相手の方が来るように書いているのか釈然としない。

平成四年一月中

平成四年一月中において有ったと思われる主な事柄は次の通り、なお順序はなく疑問点と確かな事実を中心に記載したいと思います。

第1章（第一点）

第1節

新年顔合わせがあったのは一月四日と思われる。当日私は正午過ぎ皆より遅れて二階事務所に入った。安田敏、浜口さんなどがいたのでその近くに座った。そこは換気扇の下であった。彼女は黒い皮のコートを着ていた。よく私の方を振り返って気にしていた。それもあってか松平が私に換気扇を作動するように申し向けた。

会社の面前で、彼女が帰りがけに、私は偶然に横に停めてあった自分の車に煙草を取りに行った。その時彼女は私が声を掛けることを期待しているように見えた。

①そのあと私は浜口さんに誘われて河野さんの自宅に行った。あとでカベヤと松平がベンツに乗って来た。そして夕方六時頃、私は松平とともにカベヤと三人で河野さん宅をおいとまして松平に会社まで送ってもらった。そのあと、私はトラックの中で暫く仮眠しようと思ったが眠れず、まもなく岐阜に向け出発した。岐阜からは夜中か、途中で仮眠して朝方に金沢に戻った。訂正 私が岐阜から金沢に戻ったのは夜中である。朝明るい時間であったとは考えられない。

そしてその次の日の午前、私は安田のアパートに遊びに行った。その時初めて安田の生まれたばかりの赤ちゃんを見た。それから加湿器を返すという安田に付き合って安田の車で泉野のリース屋に行った。その帰り道電柱に彼女の住所である泉ヶ丘二丁目の標示を見た。そのあと赤坂プラザに行って地下の遊技場で安田と卓球などした。

②そのあとで私はその赤坂プラザの地下にある貸しレコード店でCDを借り（この時私はカードを作ってもらったかもしれない）、それから安田の自宅で夜にかけてそれを録音してもらったかもしれません。

私は先の上申書の中で、東力ストアの前で追突事故にあったのは安田に付き合って安田がその前日に古河から積んできた荷物を降ろしに行き会社に安田のトラックを停めて安田の自宅に戻る途中小立野のギョーザの王将で食事をおごってもらったあと安田の自宅の前に停めてあった自分の軽四に乗って午後十一時頃東力の自宅に戻り煙草を切らしたことに気付きすぐに東力ストアに買いに出たところで事故にあったものと記述してきたように思うのですが、これは次のような疑問点があるようです。

③まず、休市日の前日に安田が古河で青果物を積んだとすると、5日日曜日の前日は4日であって当日安田は新年顔合わせに出席しており古河にいることは考えられない。

④12日の月曜日、私は池袋に向かって出発しているのであり得ない。

⑤15日の祝日に私が安田の自宅に遊びに行ったことはまず間違いないと思われる。しかし、それを（私が安田の古河便に付き合い帰りにギョーザの王将に行った）15日とした上で東力ストアの事故も当日だとすると次のような問題が出来るのです。

⑥出所後H9. 3/6の追加記載

☆まず6日と思われる。

私は事故の翌日に出社したところ、二階にて梅野、大倉などと一緒に、大雨の中彼女が裏駐車場にわざわざ車（6601号）を停めて来たことがはっきりしており、そのあと彼女にコーヒーを入れてもらうのに梅野がかなり気を遣って見せた。

⑦そしてその日の午後、二階事務所で浜口さんと河野さんと竹沢が日産ディーゼルのセールスマンと新車の発注のことで談合していたところ、私が「コーヒー飲んでもいいが？」と誰にともなく申し向けたのに対し、彼女が大きな声で「うん」と答え、その直後に私のいた台所に駆けつけ食器を

洗い始めたところ、私がそこを出ると、ちょうど談合が自分の希望するように終えた浜口さんが私の体を押して彼女のいる台所の中に連れて行き、彼女に「お嬢. . .」何かを申し向けたのです。そこで私は緊張のあまりとっさに話題をあげようと「昨日追突された」旨を浜口さんに申し向けたのです。また、その日、そのあと浜口さんは関東方面に出発することを話しており、私は関西に向かうところであったように思うのであります。訂正 談合という言葉は不適切であると思われる。ここでの表現叙述は私自身が読んででも分かりずらく、内容がはっきりしない感がある。私が二階に入ったのは仕事先かどうかは分からないが外から戻ってすぐだったと思う。この日以来三月の上旬まで台所のコーヒーメーカーは姿を消したのであるが、それ以前にコーヒーを飲んだ記憶がはっきりしない。これが分かれば時期の特定に役立つのであるが少なくとも一番近接しているのは梅野と大倉がいた朝のことである。なお、現物の記載にしたがって番号を振るようにしているが内容自体とはあまり関係がない振り方である。一応ここでも番号を打っているがパソコンの機械自体②③までしか丸数字がないのでそれを超える部分は違ったものを使っている。また、ここで私は浜口さんが関東、自分が関西に向かうところであったと思うのです、などといささか曖昧な表現をしているが、これはまず確実なことです。私は今気付いたのですが、この時浜口さんに昨夜の事故のことを話したのは確実なことで、これは他の書面でも再三記述していることですがその時彼は金になるとか金を取るべきであるようなことを言ったのです。刑務所にいた頃の記述ではこの日の特定が出来なかつたので重視していなかったのですが、先の趣意書にも記載したように事故の資料によってもその日が15日の夜と特定されているので、やはりこのコーヒーの件があったのは16日ということになります。そこで問題の日報を見たところ、16日の木曜日に私は水島倉庫に二回ミール移動をしたことになっているのです。さらにその翌日はこれも問題の大きい七尾から山梨に行き池袋から展示会の引き上げの仕事をした運行に出発したことになっているのです。私がなぜこの16日をコーヒーの件のあった日だと考えなかったかといいますと、その一番の原因はこの時期に文さんとの連続会見があったからです。会見の時の彼女はすごく恥ずかしそうにしていました。言い換えれば私と彼女の関係がもっとも穏やかだったのです。その穏やかさと、私が台所で彼女から逃げるような行動をとってしまったことはとても同時期の状況とは考えられなかつたのです。まだまだ検討の必要がありますが、その会見の時期自体にも特定が困難な問題が伏在しているのは趣意書に指摘してあるとおりです。特に初めて彼女に会社の横で声を掛けたときはいい感じの雰囲気だったのです。しかしながらあまりにそのことがうれしく印象的だったため私はその前後のことをほとんど覚えていないのです。その場のことだけ、彼女に声を掛けた瞬間の情景だけ鮮明に残っているのです。外はすっかり暗くなっていますが遅い時間であったとか待ち時間が長かったという印象はないので遅くても五時半頃だったと考えられます。また、コーヒーの件の埋め合わせに彼女に声を掛けたという覚えもなく、唐突に声を掛ける気になったのでもなく、その場の状況で邪魔者がいなかった事などで偶然の機会を捉えたにすぎないのですが、私と彼女の関係自体は概ね良好で熟した感があつたと思います。あるいはその時の彼女恥ずかしそうでありながらうれしそうな態度がそれまでの暗雲を一気に吹き消したのかもしれません。その彼女の反応は私の予想外の事でした。私の観念ではこの印象が前妻が訊ねてきた翌日に事務所で見た彼女の悲しそうな姿まで続いていたのです。それゆえ、この間に彼女本人が夕方の電話で今晚自宅に電話を掛けてくださいといいながら自宅に電話を掛けたところ出なかったことなど入り込む余地はないのです。また、その16日に関西に行ったこともまず間違いないと思うのですが、ここでも翌日の夕方に刀根PAからの電話で彼女に最高の女やと思うなどと言ったこともこの時期のこととしてはやはり考えられないのです。その前日の夕方には梅野のシャブ中発言がありこれが電話の内容の一番の動機になっていたことも再三述べているとおりなのです。数多くの問題がありますが考えれば考えるほど頭が痛くなる現状です。ここで一番の解決になりうるのは、会見が三度であつたというのは私の思い違いで実際は二度しかなかったということかもしれません。先の一度の時は、彼女が美容院に行くと言って帰ったことでこの時は私が二本の缶コーヒーを彼女に手渡しています。特にコーヒーメーカーの件のことを

意識していた訳ではなくその可能性もないと思います。そして最後の時が、前妻から連絡があった翌日の夕方での時はほとんど喧嘩のような状態になっているのであり、この事実は水口なども目撃しており客観的にも裏打ちされたことなのです。最初に声を掛けたとき、缶コーヒーを用意していた覚えは全くなく、その缶コーヒーはその少し前に中央市場の中で買った物なのです。その中央市場に行ったのも会社に電話を掛け彼女に話すのが目的だったような気もするぐらいなのです。しかし実際に電話で彼女と話してから声を掛けたという覚えもないので断定することは出来ません。今や私の望みのようにさえなりますがこれが二度であればその他の事実も整合性をもって論証できるのです。最後の時以外は彼女の申し出により実に短い時間で、具体的話などほとんどなかったのです。はっきりしていることはいずれの時も駐車中の私のトラックに乗ってもらいその中で話したということです。なお、これは初めての記述になるかもしれませんが、缶コーヒーをあげたとき、私はトラックの助手席の方からドアを開け、そこから車の中に入って帰りがけの彼女に外で渡したのです。さて、裏駐車場での会見は二度であったのかそれとも三度であったのかこれは謎を解く大きな鍵となる問題です。しかし安易には断定できないのでさらに検討してゆきたいと思います。

ところで、16日に関西に運行に出たとすると会社に戻ったのは18日の土曜日ということになる。三度目の会見があったのは私の記憶によると21日の火曜日、松平提出の日報によると22日の水曜日ということになる。私のはっきりした記憶では18日の土曜日に積み込んだミールを日曜日の夕方に出発して翌日名古屋大橋の近くの倉庫で卸しそこから岐阜県の大垣市に行きパレットを積んでその日の夕方遅くに金沢の浜田漁業の工場で卸している。この運行自体は松平の日報においても同様の内容であるが、積み込んだのが20日の月曜日で翌日に名古屋で卸して戻ったことになっているのであり、その運行の前には17日の金曜日に七尾をミールを積み込み土曜日に山梨で卸し、東京で一泊して日曜日に池袋のデパートで展示会の荷物を積んで月曜日にそれを金沢で卸したことになるのである。いずれを見ても長距離の運行に出ている日にちが多いので夕方に会社で彼女に声を掛けた可能性は限られている。私は記憶の場合では、18日の土曜日以外に可能性は考えられず、日報では、16日の当日と20日の月曜日の夕方名古屋に出発する前がかりうじて考えられるのみである。名古屋行きの運行では夜遅くに出発するのが通常で感覚的にも長距離というよりローカルに近い負担の仕事である。あまり早く出発するとかえって重量オーバーで捕まる可能性が高くなるということもあり、だいたい早くても7時以前に出発することは経験上ほとんどなかったはずである。これが大阪となるとかなり事情が違って積み荷の内容にもよるが、遅くても6時半頃には出発する。勢い時間的な意味の精神的余裕は少ない。可能性とすれば16日の木曜日にコーヒーメーカーの件があり、その数時間後に会社の横で初めて彼女に声を掛けたことも考えられるのである。これが名古屋行きの仕事であったなら私は迷わずその可能性を肯定できる。なぜなら名古屋行きの仕事前であれば精神的時間的な余裕が充分だからであり、たとえ彼女との会話が深夜にまで及んだとしても何等気にはならなかったはずである。つまり仕事のことを気にせず彼女に声を掛けることが出来たことになる。一方、これが大阪だとすると時間的な問題は抜きにしても、大阪に行った荷物は市場卸しの馬鈴薯以外にはあり得ないので大阪で荷物を降ろし終えた時間が必然的に遅くなるのであるが、深夜に馬鈴薯を卸したというのも休市日の夜中を除いて記憶にはない。只、大阪でも北部市場であれば時間はあまり気にせず余裕を持っていたはずである。本場のように市内の中心部にはいることはなく、市場の中でも込み合うことはほとんどないのでまるで事情が違うのである。どちらかといえば本場の方が多かったと思うが、着くのは8時頃がほとんどで9時以降に入ったという記憶はない。これは私の経験上本場の混雑や荷卸しに伴う問題性を十二分に認識していたためである。とりわけ鮮魚においては日本最悪の卸し先であり、青果においては勝手に知らないだけに不安が大きく過去にもひどい思いをした経験があったので最初から最後まで緊張が解けることはなかった。付随する事柄で一例を挙げても、荷卸し中に財布を取られたとか泥棒を多いと聞いていた。それ以上に気に掛かるのは山口組の菱形のマークを入れたトラックがよくいることで、普通の運送会社でも組関係の者が多いと聞いており、実際に同業者である金沢のウロコ運送の

運転手がわずかにぶつただけで何百万円の請求を受け金沢の会社まで押し掛けてきたという話を聞いていた。混み合った市場の中でそのようなトラックにぶつけてしまうことは避けることの出来ない多少の蓋然性が伴うのである。どうしても普段の倍以上に神経を使わなければならなかったのである。遅い時間になればなるほど九州や四国からのトラックが集まってきて作業に手間取ることを痛く承知していたのである。少なくとも私の認識はこうであり、そんな私が特別の事情もないのに夕方遅くまで会社にぶらぶら時間をつぶしその上で彼女に声を掛けたとは考えられないのである。加えて、これは北部も本場も共通であるが、馬鈴薯の卸しが遅くなれば当然その次の仕事先である和歌山県のかつらぎ農協の到着も遅い時間になっていたはずである。全般的に私がかつらぎに到着したのは夜中の2時頃がほとんどだった。これより早いことも遅いこともあまり記憶にない。大阪からかつらぎ農協までの所要時間は大体二時間ぐらいだった。逆算すると市場で馬鈴薯を卸し終えたのは0時前後ということになる。荷卸し自体にどれぐらいの時間が掛かったか性格には思い出せないが大体2時間ぐらいでスムーズにゆけば一時間半ぐらいだったかもしれない。これは市場に入ってから出までの時間の概算ではない。卸し始めるまでにも結構時間の掛かることがあり、受領書をもろうのにも多少の時間が掛かったはずである。一応九時に市場に着いたとすると、金沢を出たのはそれから五時間ぐらい前と見ておけばそう違いはない。すると四時に金沢を出たことになる。スムーズにゆけば四時間ぐらいであるから八時から八時半というのがやはり一番妥当な線である。これを六時に出たと考えると二時間づつのずれが出て、最終のかつらぎ農協では深夜の四時頃ということになる。こんな事も一度はあったような気がするが、滅多になかったことは確かである。そもそも六時の出発というのが中途半端なので、遅くなるときはもう少し遅く六時半か七時頃だったと思われる。当時の私の生活ぶりから考えて特に用事があったとは考えにくいので遅くなる原因は、会社で話し相手がいてついつい遅くなったということだろう。しかし、先にも述べたように大阪でも北部行きであればかなり気楽に考えていたので会社で時間をつぶしていたことも十分考えられるのである。

しかしどのように考えてみても、16日の木曜日から21日の火曜日までの間に三度の会見があったということはあり得そうにないのである。16日の木曜日以前に初めての会見があったということもこれまで再三の指摘の通り存在を認めることは困難な現状に変わりはない。先に三度ではなく二度しかなかったと仮定を立ててみたが、中央市場で缶コーヒーを買ってから会見に臨んだ時は、あらかじめ予定の行動をとったと考えられるのに対し、鮮明に覚えている初めての時は、意外な感じで偶発的な状況を捉えているのである。もう一つ気になるのは、日野自動車の前からの電話で彼女にラーメンでも食べにゆこうと誘った日の夕方に、会社に電話を掛け彼女から今晚自宅に電話してくださいと返事をもらいながらお母さんが出ていないと言っていた事実である。これとは別にある日の午後七尾から関東に向かう途中に県境付近の漁協の間から掛けた電話で彼女に「文ちゃんのお母さんという人やね。もう当分電話せんし、今度直接声掛ける」などと言ったことである。論理的に考えると、彼女が自分から電話を掛けてといいながら出なかった直後のことと考えられるのであるが、日野から電話を掛けたのは14日の火曜日である可能性が抜群に高いのである。日野に行った用事は12日の池袋のデパートでのシートの破れ以外には考えにくいのである。しかし、これは一月の初め頃のことであったのかもしれない私は現在考えている。しかし、ここでもネックとなるのは、池袋に向かった12日の日曜日の夜に彼女の自宅に電話を掛けている事実である。この時は直接彼女が出たはずである。彼女が電話に出たこと自体、十一月の終わりの伊吹SAからの電話以来だったので特に印象が強いのであるが、お母さんから彼女に電話をつないでもらったこと自体も初めて掛けた十月の新車が来た日だけで他はすべて彼女が出るか、お母さんか兄貴か父さんが出ていずれもいないと言っていたのである。

私はこれまで、彼女に「文ちゃんのお母さんという人やね。もう当分電話せんし、今度直接声掛ける」などと言った事があったのは、日野からの電話の日の件を内容にしたものとばかり考えてきたようであるが、現在思うに、それは大晦日の電話のことを指していたのかもしれないとも思えるの

である。七尾から高岡にトラックで向かっていたことはそれ自体関東への運行の他はないのである。しかしながらどの運行の時であったか、これも特定できていないのである。私の記憶の感覚では新年はじめの時期に行った関東便といえば埼玉県東松山に行った運行なのであるが、この時は東度の嘘による仕事のことで彼女と色々話しているのであって、同日のこととは考えられない。日報によればその一月の上旬に関東に運行に出たこと自体形跡がないのである。どんよりした曇り空の中で海の側の漁協の横のバスの停留所の横でもある電話ボックスから掛けた電話でこの時初めてお母さんのことを話したことは鮮明に記憶しており、それと同じぐらいに他の事柄も脳裏に刻まれているのである。

⑧いずれにせよ第一点の⑥及び⑦の事柄は、休日開けの気分だったのです。すなわちそれは11、12の慰安会（新年会）のようでもあり正月休み明けの6日のようにも思われるのです。

⑨また、この当時のポイントとなるのは、一月中においては、正月休みの市場側の都合による代休があったということです。

《補足》

出所後、中央市場に直接電話を掛けて尋ねたところによると、代休というのはないように言われた。以前運転手の間でそのように聞いていたのであるが、話した者の想像により決めつけだったのかもしれない。しかし一方で私自身もそのような経験があったような気もするのではっきりしたことは言えない。なお、この時の紹介の目的は、水曜日の臨時休市のことであった。あまりはっきりとは覚えていないが、たしか月二回で第二と第四の水曜日だが必ずそうと決まっているわけではなような話だった。

⑩そして、安田の古河便の付き合いと、その後にあったと思われる東力ストアの追突事故が必ずしも一致せず全く違った日であった可能性が半々くらいあるという事であります。H. 9, 3/6

第2章（第二点）

①その日の夕方二階事務所にて、梅野が、心労のためやつれ、そして私が思うに、ふらふらした女ではないと表示するために化粧していなかった彼女に対し、「... そんな顔しottaんか。シャブ中みたいやな」などと申し向け、「そんなん見えるけ。よく言われるぞいね」などと答えたことがありました。

今思うに、これも事前に両者の間で打ち合わせか、意思の疎通があった上で、明らかに私の存在を意識してなされた会話であったように思うのですが、私が思うに、その日、その時、私は翌日にかつらぎ農協にてミカンを積むため大阪に向け走るようになっていたように思うのです。

②そして私は、その翌日に、めずらしく午前中か昼過ぎにかつらぎ農協を出発して、そして夕方後時頃北陸道の本之木インターと弦がインターの間にある刀根PAより会社に電話を掛け、一度要件を申して切ったのですが、その時彼女が何か話したそうであったので私は戸惑いながらすぐにもう一度かけ直し、彼女に、「やっぱり文ちゃんいい女やと思うなあ...」などと言ったところ、彼女はすごくうれしそうに、「そんなことないよ。全然や」などと言ってくれたのですが、それで私は彼女がますます分からなくなり、「それだけ言っておくわ」などと言ってすぐに電話をほとんど一方的に切ってしまったのです。

③私の思うところによりますと、前記②の翌日に私は七尾から関東方面に向かう途中、国道160号線沿いの県境と氷見市のほぼ中間あたりにある小さな漁協魚市場の前のバス停のところに電話ボックスから掛けた電話で、私は彼女に「文ちゃんのお母さんっていい人やね。なんか悪いし、暫く電話せんし、そのかわり今度直接声掛けるし」などと彼女の気持ちを分かったつもりで私は申し向けたのです。しかし、その時の彼女の反応は硬いものですこぶる事務的でありました。（でも返事はしてくれていた）また、私に対し不信を抱き警戒しているようでありました。

④また、私の記憶によると、この関東便から戻った日に私はあがりて日野自動車の前の食堂の前の電話ボックスなどから数度会社の彼女に電話を掛け、「今日仕事終わったら一緒にラーメンでも食

べに行かんけ」などと誘い。そのあと夕方に掛けた電話で、彼女に、「今晚自宅のほうに電話を掛けてください」といわれた事実。（時間は何時でもよいと彼女は言った。）

⑤そして私は、その日は彼女をが出るものと思い込んで、承諾は得ている思いから負い目もなく午後八時半、そして九時と三回ほど電話を掛けたのですが、いずれもお母さんが出られ、明るく優しい声で、ちょっと申し訳なさそうに彼女の不在を伝えたのです。この事柄は極めて時期がはっきりしないのですが、でも確かに思うことは、一月二十二日の未明（夜中の二時頃）に私が掛け彼女を怒鳴りつけた以前のことであります。一月二十五日に彼女のネックレスを見た私が、夜にかけた電話では、それまでとお母さんの態度が一変して悪くなってしまったのです。さらに、以来事件まで彼女のお母さんが対応に出たことは一度もなかったのです。（例外として三月二十三日の「いつまで話しとるが」）

⑥さて、右の①～⑤の事実を他の事実当てはめてみたいと思います。

まず①を1月6日に定めてみます。

1月6日〈月〉 金沢 シャブ中みたいやな①

1月7日〈火〉 大阪 和歌山
刀根PAの電話②

1月8日〈水〉 七尾 七尾
国道160号線からの電話③

1月9日〈木〉 関東 関東

1月10日〈金〉 北陸 あがり「本庄」ってどう読むが？
北野さんからの退社時の電話

1月11日〈土〉 片山津温泉せきやにて新年会

1月12日〈日〉 金沢
は確定事実

1月13日〈月〉 池袋 古河

1月14日〈火〉 北陸 金沢から宇出津・七尾＝河野さんと一緒に行った。

1月15日〈水〉 安田と一緒に古河便を卸しに付き合った。（王将）

1月16日〈木〉

⑦それでは次に⑥の表に対する（仮定）問題点をあげてみます。

(ア)まず問題は一月十日です。この日私が日野自動車から電話を掛けたことはまず考えられないのです。それは1月10日に彼女が運行運賃表を作成しながら浜上さんに「本庄」ってどう読むが？と尋ねたこと、そのあと私が午後五時頃、彼女の退社を待って直接声を掛ける決意をしていたところ、電話が掛かり、初め池田がそれを取って気まずそうに心配そうに彼女に電話を替わったところ、彼女は先方に対し、後で自分の方から掛け直すとか、今夜の予定はわからんとか、これも気まずそうに対応していたこと、そして私がショックを受け下に降りて控え室で横になっていたところ、彼女が降りてきて浜上さんに「本庄」ってどう読むが？と再び訊いたことなどすべてこの当日なのは確定的事実なのであります。

(イ)さらに⑥の仮説を事実と考えてみると、本書（二百三十五、第十七点のAと二百三十六のB）の事実は、当日あがりであったことから考えると（これも確実）どこにも入り込む余地はなくなってしまうのです。

《補足》

二百三十五、第十七点のA

その日の夕方彼女の退社の際、それを一階控え室にて、山下つよしと安田敏がなにか期待を秘めて私の様子を窺っていたのです。その当日の昼頃、私は安田に、今日の夕方に彼女に声を掛けると話していたのですが、その時安田は、聞こえなかったようにして返事をしませんでした。

そして、彼女はいつもより三十分ほど遅く五時半を過ぎて下に降りてきたのですが、私はそれまで彼女に声を掛けることを決意していたけれど、山下と安田の好奇の目にさらされることが気になってならず結局彼女に声を掛けなかったのです。その時彼女は、一度二階に戻りそれでも私の反応がないと見ると外で自分の軽四（6601号）のドアを音を立てて開け閉めしたりして、私が来ることを意思表示により要請していたのですが、それでも私は行動に出なかったため、彼女は車のエンジンを吹かしつけて乱暴な運転で帰って行きました。するとそれと同時に、安田と山下はおもしろい映画でも見物し終わったように無言のままやんわりと立ち上がって外に出て帰っていったのです。これは12月27日のことと思います。

二百三十六のB

そして多分この数日後、年明け数日後だと思うのですが、この時と全く同じような状況があり、その時は山下が一人、この時ほど露骨ではなく、彼女の方も控えめで、それでいて控え室の出入り口の前まで来て、かがんでなにかを置いたのか拾ったような素振りを見せたことがありました。あるいはこの数日前で十二月の中頃だったのかもしれません。いずれにせよ両者とも、彼女は退社時に軽四（6601号）を会社面前に停め、そこに私が直接声を掛けることを望み求めていたものがあります。この時点で安田が、彼女が私に強く働き掛けていることをはっきり認識していることを私は見て取り、以来安田の意見はまともにしないよう心掛けるようになったのです。

また、今思うに、この当時の安田と山下の私と彼女に対する見解は、他の社員同様東度の解説が強く影響されていたのかもしれませんが。すなわち安田の妄執は東度の言葉を媒介して発展していったものかもしれませんが、なにぶんにも安田の知能の程度と固執性でありますから、それらが相俟って安田は通常の人が考えられないような認識を有し、思い込んでいたことも考えられます。すなわち客観的な常識で判断するより安田の異常心理による主観によって判断した方が真実に近づけるのではあるまいかと、私は思うのです。また、この判断を誤ったことこそがそもそも事件の原因の一つであったように思うのです。（これは27日ではなく、両者とも一月上旬のことであったかもしれません。）

(ウ)さらにこの当時に当てはまる事柄として考えられるのは、私が東度の市原行きに欺かれた結果、東松山と寄居の二カ所卸しの製材を能登木材で積み、そのあと国道160号線のちょうど県境あたりの喫茶店から掛けた電話であります。その時東度は、温情を呈して彼女に私の言う住所を控え記すように申し向け彼女に電話を替わったのですが、その時も彼女は12月24日の駒寄PAからの電話と似てすまなそうになにかを分かって欲しいような哀訴を託したような様子でありました。つまり本書二百四十九の③の時とはまるで様子が違っていたのであります。また、私はこの運行も休日開けで久しぶりの関東便であったように東松山到着時の私の心の状態より印象に残っているのであります。

《補足》

二百四十九の③

私の思うところによりますと、前記②の翌日に私は七尾から関東方面に向かう途中、国道160号線沿いの県境と氷見市のほぼ中間あたりにある小さな漁協魚市場の前のバス停のところに電話ボックスから掛けた電話で、私は彼女に「文ちゃんのお母さんっていい人やね。なんか悪いし、暫

く電話せんし、そのかわり今度直接声掛けるし」などと彼女の気持ちを分かったつもりで私は申し向けたのです。しかし、その時の彼女の反応は硬いものですこぶる事務的でありました。（でも返事はしてくれていた）また、私に対し不信を抱き警戒しているようでありました。

(F)また、私は二度目に富山県婦負郡八尾町より名鉄運輸の請負でカップヌードルのプラスチック容器を積み、茨城県取手市の日清食品の大工場（国道4号線竜ヶ崎市との境近く、来たに向かって左側沿いに所在する。）に行った時のことです。

その時、私は浜口さんと一緒に会社を出発して、関越道の越後川口SAで待ち合わせ、そこで食事をしてから一緒に現地（取手の日清工場）まで行き、歩いて500メートルほど向かいの所のコンビニエンスストアでビールなど買って、トラックの中で会話をしながら飲んだのです。そして翌朝、一緒に荷卸しをしてから、私は古河に向かい途中谷和原（ヤワラ）インターの近くの「山田うどん」で食事をしたこと、浜口さんは国道6号線をそのまま東京方面に向かったことを、私ははっきりと覚えているのです。そしてこの時、私は浜口さんが、私と文さんとの関係を知っているとは全く考えておりませんでした。そして東度のことが話題になり、浜口さんが東度を弁護して、いいところもあるんやし大目に見てやらんか、などと言っていたのであります。このように考えると、この運行は十二月の中頃だったのかもしれない。しかし、私の全体的な感覚からすると、一月の中頃であったような気がするのです。

福井刑務所における再審請求時の追加記載

☆これは間違いなく十二月の中頃だと思います。そして、河野と宇出津一七尾に行ったのも十二月の中頃です。H. 6. 11. 10

第3章（第三点）

一月十日あがった翌日、すなわち一月十一日土曜日、昼過ぎ、私は、出社してから和田と一緒に片山津温泉の「せきや」に向かったのです。

そして宴会の後の方の途中で私は一人部屋に戻り、一時間からに時間ぐらい眠って、それから起きて中村りょう太や長山、田川のいる部屋に行ったのです。そこで雑談をしていたところ、多田が戻ってきて、大倉さんのおごりでソープランドに行って来たとか申しおりました。そして、暫く経って和田と河野さんと彼女などがその部屋に入ってきたところ、多田は自分が先ほど行ったソープランドで相手の女性より「病気じゃないのか。遊びすぎ、．．．」とか、言われたとうれしそうに申しおりました。そして彼女が明るく冗談ぼく、自分ら（池田と二人と思われる。）の部屋に遊びに来ててもよい、のようなことを申したところ、多田は狂喜して、「本当にいいが？」などと申し向けたところ、彼女は明るく「おいで」と言って、一緒に来た4、5人の連中（彼女も含めて）と部屋を出たところ、多田が一人でそのあとを追って出ていったのです。そのあと10分弱ほどして、私は一番人の集まっている大部屋に行ったのです。すると多田は面白くなさそうな顔で他の人達がしているゲームに（花札ではなかったかと思いますが）参加しておりました。

《補足》

この記載では彼女が多田を誘ったようになっているが、私の記憶では多田の方からそれらしい申し出のような言葉があり、それに多田が便乗したような感じだったのかもしれない。しかし、これも今となってははっきりしたことは思い出せない。ただ私がこの記載を見て意外に思ったことはたしかである。少なくとも彼女の方から積極的に誘うようなことだけはなかったはずである。また、その時大部屋では、手前の方にある座敷で麻雀をしている連中がいた。コンパニオンの仕事を経営している男もいた。今名前を思い出すことが出来ないが、松平の友人のような初老の男である。竹沢にホテル長山を紹介して代金を一部だと言うが踏み倒されたと、大倉から聞いたことのある男。安田の工事現場突入事件の時もいた。銀色のワゴン車に乗っていた。事件当日に文さんから、新しい事務員を紹介することになったなどと聞いたのもこの男のことである。

それから私は、夜中に中村と田川を誘って、一緒に外に出てラーメンを食べて来ました。翌朝宴会場に朝食に行くと、まもなく彼女と池田が来て、彼女は私の向かいに座り池田はそれからかなり離れた中ほどの席に座って食事につきました。

《補足》

ここでは池田の座ったのは中ほどの席という事になっているが、私の現在の記憶では彼女の対極に位置する一番離れた席だったように思う。これ以降の記述でもそのように記載しているように思われるが、これもたしかなことは言えない。

また、ここまでの記載を見ると、肝心のことがいくつか抜けている。まず、大倉が初め大勝ちしていたバクチで、大負けしてから多田にソープをおごっていること、宴会の途中で私がこの時初めて彼女を睨んだこと、宴会の途中で彼女が私の方に歩いてきて思い直したように振り返って戻っていったことなどである。

それから暫くして一階のロビーのような喫茶のところで私たちは待ち合わせをして、それから午前十時頃にみんなで外に出たのです。私は、他の人達より早く和田の乗用車の助手席に来た時と同じように乗って会社に帰ったのです。

会社に着くと（高速道を利用したので30分ほどで着いた）、まもなくすぐに和田は用事があると言って帰って行きました。私は、一度、トラックに乗って中央市場に行き煙草や缶コーヒーを買って戻り、一人で一階控え室にてストーブに暖っていたのです。するとまもなく、なぜか、一部だけ開けたシャッター出入りに彼女の姿が見えました。そして彼女はいったん中に入って来ようとしたのですが、すぐにきびすを返して外に出て行きました。そして二分ほど時間をおいて（あるいは一分）、梅野と中山さんとたしか大倉さんが入ってきたのです。そして先ほどと同じくらい時間をおいて彼女が入ってきて、すぐに電話を利用したのです。そして北野さんの名前を口にして、よく内容の理解できないことを言ってすぐに切りそして帰っていったのです。

訂正

ここでは梅野らと一緒に大倉が来たことになっているがこれは大間違いだと思います。そのほかにも不正確な表現がかなり見られます。和田の車で30分とありますが、事実は15分から20分ぐらいでした。和田は高速に乗ると常時180キロのメーターを振り切るスピードで走ってきました。市内もガラガラですぐに着いたのです。これは大きな違いではありませんが、私たちが会社に着いてから文さんらが来たのは一時間からそれ以上遅れた時間でした。その間に大倉が来たように思うのですが、とにかく一緒ではなかったはずです。大倉は普段でも中山さんなどと行動を共にすることはありませんでした。どちらかと言えば避けていたのかもしれないぐらいです。現在ではあまりはっきりしたことは言えないのですが、文さんが来た時、大倉はおらず、文さんが帰った後も梅野らがいたのは一時間ぐらいだったかもしれません。あまり長い時間ではなかったと思います。大倉が会社の前で自分の四トン車を洗車していたことは確かなのですが、それも一度姿を見せて、戻ってから始めたように思います。その間に文さんらが来たと思うのです。和田も彼女らが来る前に一度妻を連れて会社で顔を出して行きました。ちょうどこの前後に大倉がいたような覚えがあるのです。それと重要なことは梅野と中山と一緒にいた人物ですが、三人いたことはまず間違いないはずで、その一人というのが、私のほぼ正確な記憶によると、その一二ヶ月前に入社した中年の男でした。よく高そうな黒色の皮のジャンパーを着ていた人ですが、一番の特定になるのは、前夜の宴会の時、文ちゃんに贈る歌のような前置きを述べてから「娘よ」とかいう歌を唄っていた人です。その人は会社でもちょくちょく文さんに話しかけたりしていたようでありました。名前は聞いたこともなかったのかどうかも分かりませんが、全く覚えておりません。一月の下旬の能瀬からの電話で、池田が私に「会社で眺めるだけにしときなさい。他の人らもそう言って満足しとるんやし」などと言ったとき、私が真っ先に思い浮かべたのもこの人物です。

また、一部だけ開けたシャッター出入りに彼女の姿が見えました。そして彼女はいったん中に入って来ようとしたのですが、すぐにきびすを返して外に出て行きました。そして二分ほど時間を

おいて（あるいは一分）、梅野と中山さんとたしか大倉さんが入ってきたのです。そして先ほどと同じくらい時間をおいて彼女が入ってきて、すぐに電話を利用したのです、とありますが、一分や二分という短い時間ではなかったと思います。それに梅野らが来てから彼女が戻るまでの時間はもう少し長かったように思います。その時の梅野はかなり上機嫌で私の姿を見るなりすぐに話しかけ、帰るまでずっと話していたのです。他の二人も愉快そうにしておりました。彼女と一緒に車に乗ってきたことがよほどうれしかったのかもしれませんが。しかし、私は直接一緒に来たとは聞いていないのです。彼女の車が会社になかったこと、ふいに出ていったまま戻らなかったことなどここでは記述されていませんが、度々述べてきているはずで。彼女がどうやって帰ったのか私は不思議でなりません。彼女が来るまで私はてっきり池田について松平らと一緒に三国ボートレースに行ったものとばかり考えていたのです。これは温泉を出てから後で聞いた話ですが、ほとんどの者が皆で三国ボートレースに行った、と聞いていたからです。温泉を出る前にそのような予定は耳にしていなかったのも、やはりこれは大倉から直接聞いたことです。大倉からその話を聞いたこと自体ははっきり覚えているので、やはりこれは彼女らが来る前に大倉が戻ってきていたことの証左となりそうです。私は午前中一杯か正午過ぎくらいまで会社にいたはずで。これは先に指示を受けていたトナミ航空での荷積みの開始時間に合わせて時間をつぶしていたものです。ずっと会社にいたことはなかったかもしれませんが、自宅に戻るようなことはなかったと思います。予定の時間より早く出て食事をしてから向かったように思います。

それから私は問屋町のトナミ航空に行き、前から指示を受けていた池袋行きの展示会の荷物を積み込み、午後四時半か五時頃に会社に戻ったのです。するとそれに前後して松平やカベヤなど4、5人が帰ってきました。これは確か片山津でチェックアウト後かなりの社員と一緒に三国ボートレース場に行くと言っていたのでその帰りではなかったかと思います。初め私は彼女も池田と一緒にいったものと思っていたのです。なぜならまず彼女の乗用車が会社に停めてなかったからです。

《補足》

ここでも片山津で三国ボートレースに行く話を聞いたことになっている。あるいは実際にそうであったのかもしれないが、具体的に話を聞いたのはやはり大倉からである。いずれにせよそれほど重要な問題ではない。彼女が大倉と一緒にあったか否かは彼女本人が覚えているはずであるから。それから私は午後六時近くになって池袋に向け会社を出発しました。そして七時過ぎ頃、私は、北陸道朝日インターの手前にある入善PAに入ってそこから彼女の自宅に電話を、新年になって初めて掛けたのです。彼女が直接出ました。これは前年の十一月二十八日の夜の伊吹PAからの電話以来のことでした。この時も彼女の態度は硬いもので、まもなくちょっと待ってと言った後、友達來たし、などと言って会話を拒み、私は今度会ってくれるように頼んだのですが、彼女は返事をせず、さらに、会っても無駄のようなことを言い、前みたいに会社で会ってちょこちょこ話す、そんなんでいいんじゃないがぁ、などと言ったので、私は、そんでいいんならいいし、話する気持ちないっちゃうんやったらそれでおれも納得いくし、ほんでいいんやね、などと申し向けると、彼女は困ったように悲しそうに黙ってしまったので、私は「おれ文ちゃんのこと好きやし、なんでもあんたのいいようにしてあげるし、とにかく会うだけ会ってもらえんけ」と言ったところ、彼女の態度は一変に柔らかくなったのですが、私は彼女の気持ちと立場が理解できず、あまりしっこくするのはかえってよくないと思い。彼女に考えておいてと言うことで話を終えたのです。それから私が目的地である池袋駅前に着いたのは夜中の十二時頃だったと思います。

そして翌日の昼の12時頃、私は荷物を降ろし終わって古河に向かうところ、池袋の駅前の通りにトラックを止め会社に電話を掛け、その時対応に出た彼女に「あの、おれやっぱりあきらめんし」などと申し向けたのです。彼女は無言のままでしたが、満足そうな感じで、暫く間をおいて誰から替わるかと尋ね、私は確か松平に替わってもらったように思います。

第4章（第四点）「河野さんと宇出津・七尾に行った日」

その日、私は昼過ぎに、中央市場にて、仲買よりミカンなどを積んで宇出津のAコープ能都店と七尾の公設市場に河野さんと一緒に私のトラックで行って来ました。

私はこの日を一月中だと思い。そうすると14日の火曜日が考えられるのですが、あるいは全然違って、これは平成三年の十二月中だったのかもしれませんが。

私は上申書の中でも一月中として記述し、感覚的には今も一月中頃で、その翌日に安田のアパートに遊びに行ったことはまず間違いなかったと思っていますのです。

問題点 H9. 3/6

1/5 ここで一つポイントとなるのは、私は十二月中か一月中に一度昼頃（午前中か午後か分らない）、文さんの件につき安田の教示を賜りたいと藁にすがる思いで安田の機嫌をとるため、寺町と平和町の境あたり野田専光寺線野田に向かって右側にある洋菓子屋で三千円分ほどケーキを買っていったのです。また私はその数日前（半月くらい）の休日の時にもケーキを買って大網君の家に持って行ったことがあります。（これは12月22日かもしれない）間違いなし

そして、私の思いによると、安田宅にケーキを持参したのと古河便に付き合ったのとは一致しないのであります。

また、河野さんと宇出津七尾に行ったのは一月二十二日以前であることは確実です。なぜなら、その一月二十二日をもって私と彼女の関係は只事ならぬものとして会社全体に認識されたのに対し、当日七尾から帰るとき河野さんが、この前問屋町の近くのレンタルビデオで彼女に会ったところ、彼女はその時、近くの問屋町内の友人宅に遊びに来ていたと、言っていたと、河野さんが何気なく話し、私の何気なく聞いていたからであります。

また、私が一月中でなかったかもしれないと思うのは、まず、その問屋町の話と前後して河野さんは、自分の一人娘のことをよく話していたのですが、その時点で私の娘さんに対する印象は薄かったのです。よって、一月四日の日に私は初めて河野さんの自宅に行きそこで初めて河野さんの娘さんを実際に見たのですが、かなりそれ以前に感じていたイメージとは違っておとなしそうな娘で中学生ぐらいに見えたほどだったのです。河野さんの話によると、十九歳か十八歳とのことで、性格のきついところがあることを実例を挙げて話しておられたのです。つまり、私が河野さんと一緒に七尾に行ったのは一月四日以前であつたように考えられるのであります。

第5章（第五点）「三度の会見」

池袋から戻った一月十四日から一月二十一日の間に、私は三回裏駐車場で彼女をトラックに乗せているのです。（三回目は21日で、これははっきりしている。）

一回目は、私がいきなり退社するところの彼女に現場にて声を掛けたもので、その時の約束により、二度目に声を掛け、その二回目の時には彼女は美容院に行きたいと言ったので、私は直前に中央市場にて買ってきたジョージアのティスティ（缶コーヒー）を彼女にあげて次の約束をもらってすぐに別れたのです。

そして、三度目に声を掛けるつもりか、声を掛け合うことを決めていたのが一月二十一日だったのです。

ところで、それを表にして一回目と二回目の当日を考えてみたいと思います。

| | |
|--------|------------|
| 一月12日日 | 金沢（トナミ航空） |
| 13日月 | 池袋（三越デパート） |
| | 古河（山三青果） |

| | | |
|------|---------------------------------|-------------------|
| 14日火 | 北陸（卸売市場） | |
| | （河野さんと宇出津・七尾に行った可能性あり） | |
| 15日水 | （安田に付き合っ | て古河便を卸しに行った可能性あり。 |
| | ギョーザの王将に行った。） | |
| 16日木 | 出社 | |
| 17日金 | | |
| 18日土 | 名古屋（名港大橋）行きミールを積み置き、あがり。午後八時頃、多 | 田食事をおごった。 |
| 19日日 | 多田の東尋坊鉄パイプ事件により安田、高槻全農に代走。 | |
| | 名古屋に向け出発 | |
| 20日月 | 名古屋でミール卸し、岐阜県可児市よりパレットを積み、当夜浜田工 | 場にて卸す。 |
| | 前妻の電話と訪問があった。 | |
| 21日火 | 遅刻による10時半頃の出社とハイミールにおけるミール移動 | |
| | 彼女との三回目の会見。 | |
| | 東インターから西インターの走行のあと浜口宅に行き彼女の自宅に電 | |
| | 話を掛けた。 | |

右の表によると、一回目と二回目の会見があったのは16日、17日、18日の三日間において他には考えられないのです。

そして一回目を16日とすると、私は当日運行に出発しなかった、すなわちあがりであったと言うことになり、そうすると、17日に運行に出たと考えると次のようなことになるのであります。

（これは仮説です。）

| | | | |
|------|-----|--------|-----------|
| 16日木 | あがり | 一回目の会見 | |
| | ㊤㊥㊦ | | |
| 17日金 | 出発 | 出発 | 出発 |
| 18日土 | 関東 | 関西 | 名古屋（空車回送） |
| 19日日 | 北陸 | 北陸 | |

右によると㊤、㊥の場合他の事実と全く一致がなくなります。

よって私の現在の見解によると、もっとも可能性が高く合理的なのは㊦でありまして、私は16日に一回目に彼女に会見してから翌17日にミール移動の後名古屋に出発。翌18日の朝に名古屋でミールを卸し、それからすぐに金沢に戻り名古屋（名港大橋付近）行きのミールを積み置いたので

はないでしょうか。それ以外に考えられるのは、16日～18日まで私はずっとミール移動をしていてどこにも運行に出発しなかったということになります。いずれにせよ、この期間に関東便に行ったとは考えられないのですから本書二百四十九の③と二百五十の④の事柄はこの期間内にあったとはまず考えられないのですが、そうすると問題となるのは、二百四十九の④における事柄の日野自動車に行ってその前の食堂から会社に電話を掛けたことですが、この時私は、シートの破れを見てもらうために日野に行ったものと思うのです。そうするとそのシートの破れは一月十三日の池袋の三越の立体駐車場のガードにこすったものと思われ、私はその運行から戻った（14日）あとのミール移動中においてその破れに初めて気が付いたのです。

《補足》

二百四十九の③

私の思うところによりますと、前記②の翌日に私は七尾から関東方面に向かう途中、国道160号線沿いの県境と氷見市のほぼ中間あたりにある小さな漁協魚市場の前のバス停のところに電話ボックスから掛けた電話で、私は彼女に「文ちゃんのお母さんっていい人やね。なんか悪いし、暫く電話せんし、そのかわり今度直接声掛けるし」などと彼女の気持ちを分かったつもりで私は申し向けたのです。しかし、その時の彼女の反応は硬いものですこぶる事務的でありました。（でも返事はしてくれていた）また、私に対し不信を抱き警戒しているようでありました。

二百五十の④

また、私の記憶によると、この関東便から戻った日に私はあがりで日野自動車の前の食堂の前の電話ボックスなどから数度会社の彼女に電話を掛け、「今日仕事終わったら一緒にラーメンでも食べに行かんけ」などと誘い。そのあと夕方に掛けた電話で、彼女に、「今晚自宅のほうに電話を掛けてください」といわれた事実。（時間は何時でもよいと彼女は言った。）

その件において考えますと、私は14日か16日に日野に行ったことになります。そうすると当日に私は承諾を受けた上で彼女の自宅による電話を掛けたことになるのです。（二百五十の④、⑤の事柄）

二百五十の⑤

そして私は、その日は彼女をがえるものと思い込んで、承諾は得ている思いから負い目もなく午後八時半、そして九時と三回ほど電話を掛けたのですが、いずれもお母さんが出られ、明るく優しい声で、ちょっと申し訳なさそうに彼女の不在を伝えたのです。この事柄は極めて時期がはっきりしないのですが、でも確かに思うことは、一月二十二日の未明（夜中の二時頃）に私が掛け彼女を怒鳴りつけた以前のことであります。一月二十五日に彼女のネックレスを見た私が、夜にかけた電話では、それまでとお母さんの態度が一変して悪くなってしまったのです。さらに、以来事件まで彼女のお母さんが対応に出たことは一度もなかったのです。（例外として三月二十三日の「いつまで話しとるが」）

⑧さて、右の①～⑤の事実を他の事実当てはめてみたいと思います。

まず①を1月6日に定めてみます。

このうち前者である14日とすると、私は休日の前の夜に彼女の自宅に電話を掛けたことになるのですが、私としてはそのような感覚はないのですが、今思うに、これはもっとも可能性の高い事実かもしれません。そうすると、当日に河野さんと宇出津・七尾に行ったことは言うまでもなく間違いで、上申書に記載したものも誤りということになります。一方で、後者である16日として考えてみると、まず、一回目の会見が当日でなかったことになり、そうすると、17日一回目の会見18日二回目の会見（美容院）となり、二日続けてあがりであったことになり、そうすると16日もあがりとして私は三日間運行に出発しなかったことになるのですが、やはりこれは不自然であります。

そうすると、私が日野に行った（二百五十の④、⑤）事柄をシート破れ以外の用で行ったものでない限りは、本件はやはり1月14日以外にはまず考えられないのであります。そして、その年開け

より私が一月十二日まで一度も彼女の自宅に電話を掛けていなかった事と、彼女のお母さんの対応を（二百五十の⑤の1）考えますと、ますます確実なのであります。

一方で、15日の夜に、私が安田の古河便の付き合いより王将で食事をおごってもらったと考え、そのあとで東力ストアーの事故にあったと考えますと、その翌日であることがはっきりしている二百四十六の事柄は16日の木曜日ということになるのでありますが、それと一回目の呼びかけによる会見が同じ日であるとはまず考えられないのです。その論拠は、まず、彼女は当日腹を立て、以来三月六日まで二度と私の前にコーヒー機を見せなかったのです。それに対し、一回目の会見の時の彼女は、かなりはにかんでいたものの満足そうに上機嫌だったのであります。それは私も同様で、コーヒー機の直後は、私も後悔の混じった複雑な気持ちだったのであります。それに対し、一回目の会見の時も、二回目の会見の時も私は当時としては最も安心且つ充足した気持ちだったのであります。

第6章（第六点）

一月十九日の日曜日、私は前日前夜と一緒に出発することを約束していた多田を会社で待っていたのです。たしか午後四時頃に約束していたところ、30分ほど遅れて、多田がもう一人の年格好の似た、私の初めて見る友人を連れて、一緒に体全体を引きずって痛そうに控え室に入ってきたのです。

事情を訊くと、多田は前夜にその友人と女の子二人と四人で東尋坊にドライブに行ったところ、言いがかりをつけられケンカとなり、いったんは相手を叩きのめしたのであるが、それで自分たちの車に戻ろうと歩いていたところを背後より相手の二人組により鉄パイプで殴られたという話で、多田らと一緒にいた女の子の話によると相手は関西系の暴力団員のやくざであると申し出ておりました。

余りからだがひどそうで、私も以前怪我をして運行に出たことがあり、その強いて仕事をするという多田の言葉を信じて、安田に電話を掛け、代わりに走ってくれるように頼んだので

す。．．．．。が、そうすると、ここで新たな疑問が出ました。私はその前日である18日の土曜日、その時多田が出発するはずであった大阪府高槻市の全農行きの馬鈴薯を一緒に手伝って石川丸果の倉庫で積んだように思うのです。そうすると先に述べた18日の朝に名古屋でミールを卸し、戻って当日にミールを積んだことはまず不可能事のように思われます。

また、多田にその前日の夜に食事をおごったのは、電気屋（金沢デンソー）の前の新しい焼き肉屋であったと思うのです。その時多田は家に帰って寝るようなこと、ひどく疲れているようなことを申し出ておりながら、一体どうしてそれから東尋坊など行くことになったのか不思議に感じたことを覚えております。

また、私は一度パチンコオークラで安田と一緒にになり、なぜか安田のおごりでその焼き肉屋に行ったこともあるのです。多田と行ったのと安田と行ったのとどちらが先であったか覚えていないのですが、同じ頃で半月から一ヶ月近く間を開けていたように思うのです。あるいは安田と行ったのは12月30日の夕方であったかもしれません。

また、私はその当時、その焼き肉屋の近くの紳士服モリワンの隣の中華食堂「翔」にも退社後何度か多田を誘って食事を一緒にしたのであります。

はっきり覚えているのは、一月二十二日の夜か、二十三日の夜、あるいは二十四日の夜に市場輸送で浜口さんたちが麻雀をしているのを待っていたときに、和田と多田と三人で「翔」に食事に行ったことであります。（これは二十四日が一番有力）また、一月二十二日の夜か二十三日の夜には、午後十一時頃市場輸送よりたしか東度の乗用車を借りて、靴流通センターとバス停の前の山崎ディリーストアー（コンビニ）の間にあるうどん屋源助に一人で食事に行った覚えがはっきりしております。

また、話は飛ぶのですが、三月二十日の祝日の日、私は、前日に五高倉庫で積み置いた清水行きのミールを出発するのに昼過ぎに出社してから、食事をしてから出発しようと思ってその源助に行ったのですが、すると先に浜口さんと浜上さんとそしてもう一人誰か（咲川さんかも）が三人いて、私が食事を始めた頃に彼らはおあいそをして出ていったのですが、その時浜口さんは、私の注文した分も支払ってくれたのです。そして彼らはその時パチンコオークラで遊んでいる途中であるといっていたように思います。このように源助は東度などもよく利用していた、ほとんどカウンター形式の店なのであり、店の主人は頑固そうな感じの、少し、ある寡黙な人物で、割と愛想の良い感じの夫人と二人だけで商売をしていて、わりとよく、いや、かなりはやっている店であります。

《補足》

東度がその店で食事をしている姿も、話も聞いた覚えはないが、これはあくまで推定であります。それから私は、一人で名古屋に向かったのであります。出発したのは午後六時半頃だったように思うのですが、なぜか名古屋の現地（目的地、名港大橋付近の卸し先）に到着したのはかなりおそく夜中の二時か三時頃だったのであります。

《補足》

ここまで見て肝心なことが抜けております。それは安田に代走を頼むのに前後して控え室から松平に電話を掛け事情を説明し理解を求めてやったことです。つまり私が多田に代わって松平に代走の許可をもらってやったような感じだったのです。松平は不機嫌そうですねぐにいいとは言いませんでした。そんなこともあり結構長い電話になったのです。なにか指示のようなものも出てかけ直しをしたような覚えもあります。多分安田の返事を得てから報告するように言っていたのだと思います。一方の安田ですが、彼もすぐはうんと言わず、私が説得して渋々承知したのですが、私が一緒に行こうというのと妙に力を込めて拒んでおりました。恐らくこれも連中の共謀で、実際に安田は走らなかったのかもしれませんが。

それから私は朝になって荷物（ミール）を卸したのですが、その時丸一運送と丸和運送の二台のウィング車が同じミールを積んでおりました。そして手伝い合って荷卸し作業をしたのです。

《補足》

これも軽視できない問題であります。なぜならこの荷物を降ろした日は、私の記憶と松平の日報の間で矛盾し対立する関係にあるからです。丸一のトラックが私とおなじ荷物を積んでいたのだから調べれば確認することができるかもしれませんが。ここでウィング車とありますが、これが事実であれば、丸一には平ボディのトラックが多かったはずなのでさらに特定を絞ることができるかもしれませんが。しかし、この時、一緒になったこと自体が東度の画策であったことも考えられるので仕掛けた罠にはまりこむことも予想されます。なぜなら私の経験上七尾のトラックが二台も一度にミールを運んできていたことは見たことがなかったからです。ウィング車であったか否かも現在でははっきり思い出せません。もう一台が丸和であったことも同様です。しかし、ここでこのように記述していることはその他の状況を勘案して考えても確実性を疑う余地は少ないと思います。そもそも丸一のトラックがミールの仕事をする姿など見たのはこの時が初めてであったかもしれません。ただ同じ頃には他の機会にも見掛けたような気はしないでもありません。何となくであります。二人の運転手とも三十代ぐらいの若い運転手であったような覚えがあります。三十代の運転手というのは案外少ないもので特に丸一などの仕事内容の運送会社ではその傾向が強かったのです。建設系とでも言いましょうか、そんな感じで、四十代から小十代の運転手が多いのです。いくつか理由があると思いますが、格好が悪いというのも理由になるかもしれません。そもそも長距離の運転手は大会社を別にすれば、二十代の若者と事業に失敗したりした中年が多いのです。特に根拠はないのですが、これは市場輸送にも急配にもびたり当てはまる法則です。他の同じような規模の運送会社でも似たような感じでした。

それから私は、蟹江インターから清洲東インターまで東名阪自動車道に乗り、国道22号線を岐阜市方向に向かい一宮インターより名神高速道に乗って中央自動車道多治見インターに降りて、国道

155号線より可児市内に至ったように思い、そのように上申書に記述したように思うのですが、あるいは、小牧インターから降りて国道41号線を通って可児市に至ったのかもしれませんが。いや、その可能性の方が高いように思います。たしか、犬山市と可児市のちょうど境あたりの弁当とうどんの店（金沢で言えば八幡のすし弁のような店）で、昼食をして、そこに電話機がなぜなかったのか、そこから一キロほど走ったところでトラックを止め、左側にある飲食街のようなところから、会社と可児市のパレットの積み込み先に電話をかけたのです。

この時の電話も、池田との会話でポイントとなる要素があったと思うのですが残念ながら全く覚えておりません。

それから私は午後一時過ぎか半頃に、その電話をかけたところから（そこはちょうど小さな山の頂上になっていた）山を下りて可児市内に入ってまもなくすぐに右折して二、三キロほど直進した右側にある結構大きな製作所のような所に入って、暫く待ってパレットを積み、午後三時頃に（二時半との間ぐらい）出発したのであります。積み荷は木製のパレットで、納入先（卸し先）は、浜田漁業金沢工場でありました。

可児市の積み込み先を出発してから私は、国道21号線を岐阜方向に向かったのです。そして30分ほど走った各務原市内の手前からバイパスに（左に）入ってすぐの道幅の広がったスーパーの前のような所にトラックを停めて、会社に電話をかけたのです。

そうしたところ、松平が出て、今から高速道路を利用して今晚浜田漁業金沢工場に着き次第荷卸しするよう指示を受けたのです。

そこで私は、岐阜羽島インターから金沢東インターまで高速道を利用して午後七時頃には目的地である右工場に到着したのです。

そこで市場輸送の4トン車の運転手で、その当時免停中であったと思われる尾野さんに手伝ってもらって（リフトの運転）午後八時四十五分頃には作業を終えて会社に向かって出発したのです。

会社に戻ってから私は暫く一階控え室にて一人でストーブをつけてボーっとしていたように思います。これは自宅に戻っても小さなストーブしかなかった（炬燵はあったけれど一度も使用しなかった。）私にとってよくあったことでもあります。でもなぜかテレビはそこにあったけれどつけて見ることはしませんでした。

それから自宅に帰った（着いた）のが、午後十時過ぎでした。戻ってすぐに風呂を沸かそうとガスをひねってお湯を浴槽に溜めようと出したところで電話が鳴ったのです。

出るとそれは前妻でした。

十一月の下旬以来の連絡でありました。前妻がどうしても一目会いたいというので、私も写真とか子供の服とか渡したいものがあったので、たしか0時半に来ることを決めて十一時四十五分頃に電話を切ったのです。それから風呂を沸かし直し、入浴中にもうあがろうとしていた頃に、前妻が来たので私はすぐにあがって、そして渡すものを渡し、必要なものを持って行くように言ったのです。その時前妻は表に子供たちを乗せたままタクシーを待たせていたようです。それからすぐに前妻は帰って行きました。

そして、帰ってから二十分ほどすると、また電話が掛かり、出ると前妻でした。それから、最後の電話だからと言って会話は長引き、午前五時頃まで途中二度ほど切ってまた向こうから掛け直しがあって続き、そして前妻はどうしても、私の寝顔でもいいから逢いたいと言ってゆずらず。それを承諾してから電話を切り、私は疲れており翌朝より仕事もあったので布団に入っていたのです。午後五時半頃だったと思います。約束通り前妻が来たのは、十五分ぐらいいたように思います。（あるいは10分か20分ぐらいだったかもしれません。）

当日私は、ミール移動のため午前七時半頃には出社しなければならないことになっていたのです。（ハイミールに八時頃入るため）

しかし、私は精神的にも身体的にも疲れがたまっていたため寝過ごしてしまったのです。会社に出社したのは午前十時半頃だったと思います。

この時も、池田が私に声を掛けると、すぐに彼女がそれを遮るようにして「東度さんが、すぐにハイミールに来てって」などと哀しそうに訴えかけるように言ったのです。それは十二月の初め頃の日野自動車からの伝言の時と同じような感じであり、私は、その彼女の心痛の原因が、前日（当日でもある）に連絡があった前妻によるものと確信を強めたのであります。

当日（一月二十一日）、私は、午後四時過ぎにミール移動より、翌朝卸しの積み置き分を積んで会社に戻りました。私は当日の夕方に彼女と逢うことをほとんど約束していたのです。（三回目の会見）なのにかかわらず、その当日は退社時間に近づいても彼女は乗用車（6601号）を裏駐車場には停めず、会社前に停めたままであったのです。これは会話を拒否するに転じた意思表示であるに違いないと思った私は、焦ってしまい。何とかしようと思って（そのあと二階で見た彼女の姿は重苦しいものがあり、池田にもそれが強く感じられた。事件当日の退社時ともよく似た社内の雰囲気であった。それで私は一層不安に駆られたのである）

私はすぐに乗用車に乗って中央市場に行き、仲買（青果物）の横にある唯一の電話ボックスから会社に電話を、彼女が出ることを期待して掛けたのです。

ところが、出たのは梅野でした。梅野はかなり威圧的な強硬な態度で、渋ってから彼女に替わりました。これは私が初めて彼女に対する取り次ぎを会社の人に頼んだことです。つまり彼女との関係を公認した初めての表明だったのです。

彼女は困ったように逃げるようにそして開き直るような感じで、今日は用があるから早く家に帰らんといいかん、とか言って、会見を一方的に断ってきたのです。そこで私の不安はより大きくなったかなものとなったのです。私はとにかく焦りました。彼女が用があると言ったことは嘘であると端から信用しなかったのです。このままではますます事態は悪化する。その不安に駆られ、その回避のためにのみ私は極度の疲労を強いて彼女に会見を求めたのです。これは事件当日と全く共通してる状況であります。

私は今まで、それに偶然の要素が重なり含まれていたように思っていたのですが、今思うに、それは全く違います。すべて連中の意図により作られた状況だったのです。

この時、私は初めて彼女に強く要件を要求しました。それで彼女も渋々ながら会うことを承知してくれたのです。

それから、私は、会社に戻ってすぐに二階に上がりました。顔を見せておいた方が彼女も安心してくれると思ったのです。そのところ、二階には、十二月二十一日と同じようなメンバー（浜口、浜上、河野など）がいて、いきなり浜口さんが、「どこに車とめとるがい。自分だけの駐車場と思っとるんか」などと、私を怒鳴りつけたのです。

その時私は、会社に戻ったときに彼女の乗用車が裏になかったことにより、慌ててトラックを駐車場のほとんど真ん中に放置したままでいたのです。私はすぐに下に降りてトラックを止め直しに行きました。そして、会社に戻って一階控え室に入ると浜口さんなどもそこにいて何事もなかったようにしておりました。そこで少し雑談をしてから、私は先の電話で彼女に伝えたとおり、裏駐車場のトラックに行き、その車内で彼女が来るのを待ったのです。トラックからは二階の台所付近の人影が見えるのですが、まもなくその台所の冷蔵庫の横で髪をとく彼女の姿が暫く見られました。その姿がなくなってまもなく、彼女の車が中央市場の横の道路を走って裏側から裏駐車場の一番奥の方（彼女の入ってきた方からすると手前になる）に彼女が車を停めたので、私はトラックから降りて迎えに行ったように思います。そこで彼女に車のエンジンを切るように言ったことより、まず、応酬が始まったのです。それでもその場はすぐに彼女にトラックに乗ってもらったのです。話が前後しますが、私はその前に、会社前に彼女の車が停めてあったときに、すっかり暗くなった状況で、彼女の車の後部席あたりに紙袋に入れられたセーターのようなものを見たのです。しかし私は他のことにすっかり気を取られていたので、そのセーターのことは深く考えず、その場はすぐに忘れてしまったのです。

トラックに乗って助手席に座った彼女は、すぐに5分だけとか10分だけとか言ったのです。私は一方的に一人言（独り言）のように前夜に前妻と逢ったことなどを話しました。それによって彼女の反応を見出そうと思ったのですが、彼女はまるっきり感情を殺してそれでも真剣に私の話を聞き入ってくれました。そして、一息ついたところで、直接、彼女に今からのことを申し向けると、彼女はすぐにこれ以上会話は出来ないようなことを言ったので、私は全く感触がつかめず、かえって誤解を大きくしてしまったような不安に駆られ、強く彼女にエンジンを切ってゆっくり話したい旨を申し向けたのです。

そして、彼女が応じなかったことより、私は、ここは大事な場面だから彼女にも心を開いてもらわなければならないと必要に駆られ。それを決意として、トラックを出て、彼女の車の所に行き、彼女の車の運転席のドアを開け、エンジンを切って鍵を抜き取ろうとしたのですが、そのホンダトゥディ覇、私にとって初めて扱う仕組みになっていたのも、私は要領を得ずまごついていました。

（その時彼女の車の中は音楽が流れていた）すると後ろから彼女の声が掛かり、その時は明るい声でやさしい感じだったように思うのですが、「私の車で話そう」と言ったのです。その時私は自分の行為にひどく気後れがあって焦っていたのでその恥じ入ることを打ち消すようにあえて強く「そんなん、トラックでいいわい」などと断じたのであります。

とにかく、相当私は取り乱していたように思います。そこで彼女は一変して不機嫌となり、攻撃的な言動になったのです。私が自分の正当性を主張するため弁明のように「この前、今日逢うって約束したやろ」と言うと、彼女はますます感情的になって、「いつそんなこと言うた。そんな約束今言った。」などとくっつくかかってくるのです。それはまさに、それまでの周囲の彼女は気の強い女だと言うことを十分に私に印象づけ、認識させるものでありました。

「いったい、私のどこがいいが？」、それはまさに彼女が私の気持ちを十分に認識しながらその上でそのような言動に出ていると思わせるもので、この時も私はより一層納得のゆく話し合いの必要性を強く感じて、逆に彼女に「とにかくトラックに乗れや」などと一喝をして（と言っても、大声で怒鳴ったわけではなく、強く意志を込めて断言したような感じ）、そのまま振り返ってトラックに向かって歩いて行き、そして運転席に戻ったのです。すると少し遅れて彼女が無言のまま助手席に乗ってきてくれたのです。私はそれを確認してからすぐにトラックを発車させたのです。

私も無言のままであったのですが、すぐに彼女は「タバコもらえるけ」と言って、私が返事をする、と、彼女は助手席の窓を向きながらタバコを勢いよく吸い始めたのです。彼女の顔は反対側を向いているためと髪の毛によりほとんど見えませんでした、それは只ならぬ殺気だった形相であり、対する私もそれと似たような状態でありました。途中、八号線バイパスの交差点と、それを右に向かった次の交差点を、私は乱暴な運転で信号無視をしたのですが、彼女はまるで動じませんでした。

私はトラックステーションの所より反対側の斜線に出るため、八号線の真下をくぐったあたりで、ようやく彼女に声を掛けたのです。それまでは彼女からどこに行くのかなどと声を掛けられることもなかったのです。私は「おまえ、好きな男おるって、あれ嘘やろ」と訊ねたのです。彼女は「嘘じゃない」と言いながらも、その言葉は弱く、返答に窮したように感じられました。

それから私は反対側車線に出て、今度は福井方面に向かうようになり、そしてすぐに東インターより北陸道に乗ったのです。すぐに私は、本線との合流する側道のスペースにトラックを止め、降りて小便をしてきたのです。

車に戻ってから私は、車を発車させながら先ほどの彼女の質問に対し、「どこがいいって、全部や、初め性格悪いかなって思ったけど、今は全部好きや」などと申し向けたのです。彼女は感情を殺したまま返事は控えたように思います。そしてそれにかわってか「一体、どこ行くがぁ」と怒ったようにあきれたように私に申し向けたので、私は彼女に「九州や」などと少しふざけたように申し向けたのです。すると彼女は真剣な声で、「この前、友達来たってゆうたが嘘や、あれ嘘やけど。今日、早く家帰らんなんって本当ねんて、親出掛けるし、私代わりにご飯作らんなんげんて」

と訴えるように強く申し向けたのです。「この前、友達来た．．．。」というのは、一月十二日夜私が入善PAより掛けた電話の時を指す言葉だと思います。

私は、ここでも自分の過ちを正当するために（事実彼女の方にかなり責任があると思っています。）、また、単なる言い逃れによる対面を取り除こうと思って（つまり、彼女は、引っ込みがつかなくなったため、攻撃に転じたのではないかと思ったのです。これは前妻によく見られる性格でもあったのです。）、あえて「そんなん出前でも取ればいいがい」と言ったのです。すると彼女は、「うち、年寄りおるし、出前じゃダメねんて、私帰って作らんと」などと本当に困ったように言ったので、私は、すぐに会社に戻ることを彼女に言ったのです。

そして、西インターで高速を降りて反対側の富山方向車線の八号線バイパスに出たあたりで、私は彼女に、思い切って「あの、前から訊きたいと思いながら怖くて訊けなかったことあるんやけど」と、私は自分に向かってつぶやくように言ったのです。すると彼女は、それまでの沈んだ表情を一変させ、急に明るくなり「なんや、なんや」と子供がねだるように、はしゃぐようにして訊ねてきたので、私はその勢いで「文ちゃんの好きな人って、もしかしてオレのことか」と言ったのです。これは、彼女にとって、相当衝撃的だったらしく、彼女は、明らかに取り乱したようになって、うめくように、吐き出すように、「違う、広野さんじゃない、私．．．私．．．．．。」と、しゃくり上げるようにして顔を上げ、唇をかみしめ、じっと天を仰ぐように空間に視線を据えながら言ったのです。私はその彼女の反応に、その言葉とともに大きなショックを受け、それ以上聞く事が恐ろしくなり、彼女にとっても酷なことに思えたので、追求をやめ、それと同時に蓄積されていた彼女に対する不信感がこみ上げ、その心中をありのままに言葉にして、「おまえ、気、狂っとるんじゃないか!」と真剣に申し向けたのです。すると彼女は一変して急に笑い出しました。それは極度の精神的緊張感からなされたような、ひきつったような異様な表情で、私は少なからず戦慄のようなものを覚え、彼女はかなり重度の神経質的傾向を持つ女性だと改めて認識したのです。この会話は、ちょうど示野の交差点にさしかかるところであったと記憶しております。そして「おまえ、気、狂っとるんじゃないか」と申し向けたときにはちょうど金石街道に入る測道には行ったあたりであったと思います。そして私は、藤江陸橋の下の金石街道との交差点のあたりで、彼女に「そんなん聞いてどうするが、広野さんのぜんぜん知らん人や」と、彼女の好きな人の名前の一部を訊ねたことより言われ、「上か下か、どっちでも聞けたら、そんで納得できるんや」と言い。さらに、彼女の態度がかたくなであったので、私は「殺してやるわい。殺せばいいんやろ」とやけくそに言ったところ、彼女は急に真剣になって「そこがあんたの悪いとこやろ」とはっきり私に言ったのです。私は「冗談やろ、そんな簡単に人なんか殺せるかい」と言い放ったのですが、その時彼女は、つくづく真に受ける性格だなと感じたのですが、後になると、彼女は私と安田某との関係を心配していたものと思ったのですが、今思うに、これは、池田や東度が作り上げた私の人間像に直接かかわることであったように思います。だからこそ彼女は、あれほど過敏な反応を呈したのでありましょう。

そして、その一方で事件当日必要以上に某の名を出して私に刺激を与えたことから考えると、彼女が某との間柄をごまかしたりしようと考えたり、またその必要があったとは到底考えられないので、やはり直接私に対する誤らされた認識がものを言っていたに違いありません。しかし当時の私は、その時の彼女の予期せぬ過敏な反応と、そして当夜初めて浜口さんより知らされた彼女と某との間柄に私は重ねてダブルパンチを受け、それは並々ならぬ彼女に対する人間不信となって形成されたもので、虚像に魂が入ったような状態になったのであります。いわゆる被害妄想の本格的始まりとなったのであります。

ちょうど藤江交差点を右折しながら私は、「とにかくオレの気持ちはかわらんし（のようなこと）、どうしても嫌なら会社やめてゆけや」と言い向けたのであります。そこで彼女はすかさず、「生活かかっとるんや、なんで会社やめないかんげんて」などと強く反論を申し向けたので、私は、交差点をもう一度右に折れバイパスを戻するような格好で次は福井方向に出たのです。そして私

はハンドルを右に切りながら、「だれも会社やめてっていいとらんやろ、どうしても気が引けて嫌やちゅうがやったらやめてゆくしか仕方ないやろ」などと、私は、彼女に自業自得であることを示唆するように申し向けたのであります。すると彼女は、すぐに、「一体どこ行くげんて、私本当に帰らんなんげんて」と言い。私は、「わかっとなるわい」と言いながら、「文ちゃん、いったいどんな男好きなんや」と言うと、彼女は答えず、「ほんなら、どんな男嫌いなんや」と言うと、彼女は、気持ちを込めて「いじっくらしい男」と言ったので、私は、「なんやそれオレのこといいとらんか」と言うと、「そうなりつつある」とだけ彼女は答え、それからはほとんどなにもしゃべらなくなったのです。そのあとも、私は、手探りのように彼女の心をつかもうと弁明じみたことを独り言のように話しながら会社に向かったのです。そして会社に戻ったところで、彼女は厳しい面持ちで、トラックから降りる直前に、一言「私の気持ちかわらんし」とだけ言って帰った行きました。

それから、彼女が帰って私は一階控え室に行ったのです。時計は午後七時頃だったように思います。そこには安田敏を除くと思われるほとんど全員の大型運転手がたむろをしておりました。つまり東度、浜上、河野、浜上（浜口の間違いだと思われる。H9. 5. 20）、そして水口、山下つよしめずらしく遅くまで残っておりました。ほかに朝野などもいたように思います。そして、皆私の姿を認めると、ニタニタと意味ありげに笑っておりました。

2. 平成 10 年の秋、安藤健次郎さんに出した手紙.dotx（公開用テキスト版）

>>> : Linux LibreOffice : 2023-10-04 11:30:48 >>>

- 平成 10 年の秋、安藤健次郎さんに出した手紙.dotx（公開用テキスト版） | 再審請求と刑事告発の証拠方法公開サイト\金沢地方検察庁御中 <https://note.com/hirono2020kk/n/nf5267847a644>

>>> : Linux LibreOffice : 2023-09-28 22:14:25 >>>

一 前略、手紙で私の話を聞いてくださると言われました。お忙しい中なのでだらだらと電話での話を聞くのも大変なことだし、要領よくと言われましても事柄の性質上簡潔な言葉や表現では無理があり、大切なことを伝えることが出来ません。

初めは手紙を読んでもらえることなど考えていなかったのですが若干の戸惑いがありましたが、確かに無駄を省き要点をまとめ且つ必要な事柄を適所に添えるには書面が一番好都合だと思います。

さて、これから私が記述することはこれまでに電話などでお話しした内容のいわば詳細のようなものです。いきなり会社に責任があると言っても単なる責任転嫁と取られるのが関の山なのかもしれません。しかし、文さんの性格や人柄を知る家族の方であれば私の話がそれほど出鱈目ではないことはすでにご承知のことと推察されます。

そのような事情が確かにあったにせよ実際に暴力に及んだ私を非難し許せないと思われることも至極もっともな感情です。私自身自分が悪いと言うことは分かっておりますがただそれだけでは到底割り切れない問題であり、このままの状態ですますことは自身のみならず文さんやご家族の名誉、経済的な面での公正妥当な損害の分配という不法行為法の理念に照らしても著しく不当な結果であり、正義に反すると言わなければなりません。

また無法者を放置させのさばらしておくことは社会的にも許されないことです。真に私自身にのみ帰責原因があるのならば個人間の問題ではありますが、全体を俯瞰した視点に立ち合理的に解釈するならば民事問題の枠を遙かに超えた驚異的組織犯罪の存在が見えてくるのです。私も文さん同様にその犯罪の標的とされるところと人生そのものを踏みにじられているのです。

市場急配センターの組織的犯罪について

私が文さんの働く市場急配センターに勤めるようになったのは平成 3 年の 5 月か 6 月の下旬のことです。私の記憶では 5 月だったように思っていたのですが会社の方での資料を見ると 6 月からと言うことになるのです。

もともと市場急配センターと同じ会社で親会社のような金沢市場輸送にいたのですが、市場急配センターの方が独立した形で、その代表者が昭和63年の8月か9月頃に入社した松平日出男社長だったのです。安田敏の借金の保証人になったことがそもそものきっかけだったのですが、これも実はすでに会社側の意図した計画に乗せられての経過であった疑いがあるのです。

もともと金沢市場輸送は鮮魚と青果を主体にした長距離輸送が業務だったのですが、昭和59年頃から市場関係の市内配達の方にも少しずつ手を回すようになり次第に本格化して行き、独立してやってゆけるほどの基盤が出来たところに登場したのが松平であり、平成元年の終わり頃には完全に独立した事務所を現在の場所に建て会社名もいつの間にか「市場急配センター株式会社」となっていたのです。

>>> : Linux LibreOffice : 2023-09-28 22:26:09 >>>

昭和59年10月の時点では市内配達の仕事はまだなかったと思われる。市場急配センターの事務所の建物が出来たのは平成2年の春先。金沢港のイワシの運搬の仕事で平ボディ車の仕事が無くなり、その平ボディ車を市場急配センターの建物が建つ駐車場に持っていった記憶。その時点では中継をするとその場に3人でいたYTか藤田さんが話していた。

<<< : Linux LibreOffice : 2023-09-28 22:30:50 <<<

文さんが入社したのはそれからまもなくの平成2年の春頃だったと思います。それは金沢市場輸送の方で当時新型で出たばかりのホンダトゥディに乗り、駐車場に止めちょくちょく短時間の出入りをして文さんを見かけるようになったからです。

実際にはその前から市場急配センターの新社屋の方にいたのかもしれませんが、それにしても社屋の完成からまだ日の浅い頃だったと思います。あるいは社屋の完成自体がその年の春だったかもしれません。

私が市場急配センターの実質的同会社である金沢市場輸送で働くようになったのはですが、その前にも昭和59年の1月から10月まで、昭和61年の8月から昭和62年の1月間での間勤めいたことがあり、狭い会社で人数も大体25人ぐらいだったことから社員の顔ぶれはよく熟知していました。中でも最古参の運転手で昭和61年の12月頃から配車係をするようになったのが本恒夫という人物です。

配車係というのは仕事を取って運転手に割り振りをするものですが、大きな会社は別として金沢市場輸送のような小さな会社では会社の運営自体を任された最高責任者のようなものだったのです。の運転手も同様ですが初めに入社したときから気さくに話しをしていたので配車係をするようになった彼は何かとよく話すようになりました。

大型免許を取ったのに乗務する大型車がなかったので、それ以前に勤めていた中西水産輸送（中西運と同じ）の同僚で運転手から配車係になっていたYTという男の誘いで中西に戻ったときも私の家まで来て新車の大型車を入れて増車するから戻ってくれと勧誘したのが本恒夫だったのです。

因みにYTは後日私の紹介で（実質的には彼の方から頼んできたような感じ）輸送に来て配車係をするようになり平成2年の6月頃までいました。文さんと同じ事務所で仕事をしていた姿も覚えています。

彼はそれから守田水産輸送の子会社で都商事という運送会社で配車をしていました。守田水産も金沢市場輸送と付き合いがあり特に本恒夫が仕事のやりとりをしていたのです。一緒に青森の定期

便などとして金沢市場輸送のスタンドで給油までしていたのですが、YTが守田の世話になった頃には付き合いは殆どなくなっていたようです。

YTが去ったのは本恒夫の独善的仕事ぶりに嫌気がさしたのが一番の理由のようでした。ただ私には本恒夫と松平と吉村の間には表面的なライバル関係のようなものとは別に太いつながりがあるように感じられます。

以来私は本恒夫のもとで長距離の仕事を中心に別の市内の仕事も一時期したりしていたのですが、彼のやり方に疑問を感じ次第に衝突することが多くなり、周りの本恒夫に対する評判も批判的な声や、運転手の給料よりずいぶん少ないと言いながら裏で竹沢と契約を交わし特別高額の報酬をもっているようなことも耳にしていたのです。直接そのことで本恒夫に不信感や不満を抱いたわけではないのですが、内心で影響していた部分もやはりあったはずですが、細かいことはここでは書きませんが、覚えていることはすべて裁判の資料の中で記してあります。

一つ一つのことは大きなことではありませんが積み重ねてみれば普通に考えて意図的な挑発としか考えられないことで本恒夫と衝突して金沢市場輸送をやめることになり、そこに言い寄ってきたのがかねてから本恒夫のライバルで相性も悪いと知られる松平だったのです。タイプの違いはありますが、どちらも向上心は旺盛で松平の方が営業タイプだったのです。本恒夫の方はベテランの運転手のようなもので運送業の経験が全くないような松平とはやはり対照的でした。であると私は考えております。

私が文さんを意識するようになったのは8月に入ってからでした。前妻に家出をされたのが確か7月18日で、8月の最初の土日には一度戻ってよりを戻したかに見えたのですが荷物を取りに行くと出掛けた神戸からは戻らずその月曜日に電話を掛けたところで彼女の意志を確認し、8月の盆前に彼女の実家に行き父親と話しをして彼女の望み通り判を押した離婚届を渡したのです。

ちょうどその頃から会社で文さんを意識するようになったのですが、それは文さんの態度に何らかの兆候のが察知されたからです。一番初めの方に覚えていることはある日の午後事務所にいると同じ事務員で文さんの上司に当たる池田が「文ちゃん、彼氏は？」と話しかけ、それに対し彼女が「高校の時いたけどいない」と答えていたことです。他の社員は殆どいなかったのも二人の会話は息がピッタリしていて、どうも私に聞かせることを目的としていることを窺わせたのです。

同じ頃に松平が自分と池田と文さんと私の分のアイスクリームを文さんに買いに行かせることもありました。前妻の借金の問題でサラ金の女性社員から会社に電話があったとき取り次ぎをした文さんが悲しそうに不安そうな顔で私に取り次いだあと会話が事務的だったことからか次にはうれしそうな顔をしているように見えたこともありました。

他にも雑巾を使っていいかと声を掛けたところ、わざわざ近くまで駆け寄ってくれたり、私に対してはすごうれしそうに明るく対応してくれたのです。それまでの彼女というのは無口で無表情な姿しか殆ど目にすることがなかったので不思議に思うと同時に諸々の事情で離婚のやむなさに至った当時の私の心を和らげてくれたのです。

金沢市場輸送では仕事の面でも評価され認められ、他の社員ともよく話しをしていたので事務的に気を使ってくれているという気持ちが私の方には半分以上あったのですが、遂に確信めいた行動を見せてくれたのが前にお話したフィルム張りの一軒で、それを境に彼女の行動も一層顕著となり、直接彼女の方から話しかけてくれるようになったのです。これから先のことは前にはぼ話した

し、時間と紙面の都合もありますので割愛します。今ここで話しておきたいことはその私と文さんの関係に関与した会社の連中の関与についてです。

これもフィルム張りのあとだったと思うのですが、銀行のカードを作ったことで日中不在の私に郵便局まで取りに来るようにハガキをくれたのです。仕事の都合もありどうしたものかと池田に相談したところ、そばにいた文さんが「それ私の家の近く私行って来てあげる。」とはしゃいで言ってくれたのですが、それを池田が、何の理由だったか思い出せないのですがとにかく本人でなければならぬと落ち着いた声で文さんを諫めたのです。

会社の前に止めてあったバイクにまたがっていたところ、文さんが上から降りてきて私に「広野さんどっかいんがやったら送ってあげるか？」と声を掛けてくれたのですが、殆どその瞬間に二階の窓が開き池田が慌てた声で「広野さん乗ったらダメ、どっか行くんやったら私のくるまでいきなさい。」と確か鍵まで投げつけたのです。

私はどこにも行く気などなくそんな様子でもなかったはずです。

11月には、ある日トラックの洗車をしていた私を二階に呼び、池田が缶コーヒーとケーキを勧め、それを食べながら池田と話しをしていると池田に電話が掛かり、暫くして文さんが戻り、それを見て池田が「文ちゃん、ケーキ食べなさい。このケーキ広野さんが文ちゃんのために買ってきてくれてんよ」と言ったことがありました。

同じ11月、松平にトラックのタイヤ交換で迎えを頼むとかなり遅れて文さんが自分の乗用車で迎えに来て乗せてくれたことがありました。これなども明らかに会社側の指示があったはずです。

また、これも11月、池田に北國銀行での通帳の作成を頼んだところ、池田が文さんに頼んだといい、30万円と3万円を別々に入れたらしいと言いました。

これらなどはほんの一例ですが、池田の態度は明らかに文さんの行動と密接に関係していました。当時の私は池田個人の出しっぱりのようなものであると考えていたのです。しかし嫁入り前の文さんを預かる立場を考えれば、離婚直後の私とことは慎重に吟味する必要性があり、好意的に見守ってくれているような感じもあったのです。

この池田という事務員ももともと市場急配センターにいたわけではなく、なんと私が市場急配センターに来た直後から毎日市場急配センターで姿を見るようになったのです。つい数日までは金沢市場輸送の事務所の方で殆ど一日中姿を見かけていたのが一転して一日中市場急配センターで姿を見るようになりました。

池田が金沢市場輸送に入社したのは松平より古く本恒夫が配車係になった頃から姿を見るようになったと思います。金沢市場輸送の事務所がまだ中央市場前の2階建てビルの中にあった頃です。そして確か63年の夏の初め頃だったかに現在のパチンコオークラの裏に新社屋を完成させて移転したのです。松平が来たのは移転したあとのことです。

問題児東渡と浜上そして河野が市場急配センターに来ることになったのも私が市場急配センターに来てまもなくで7月の10日頃でした。

金沢市場輸送では平成3年の12月から翌年の1月にかけて日野二台、三菱二台の計4台のウィング車を新車で入れ、1月17日の湾岸戦争勃発の朝に来た2315号に私が乗務し、2314号

には口取修、三菱の二台にはそれぞれ小坂さんと東渡が乗務し、ミールの仕事と茨城県古河市の山三青果を中心にしていたのです。

そのあと4月頃だったかに日野の二台のウィング車が新車で追加され、この二台には河野と浜上が乗務しました。この二台はそれまでの金沢市場輸送の茶色とクリーム色のカラーとは一新して全体的な白に赤と青のラインを引いたもので本恒夫の娘のデザインによるものと聞きました。

さらに私が金沢市場輸送をやめるのに前後して同じニューカラーの三菱を一台入れたのですが、これに東渡が強引に乗務したそうでした。普通ならば一度新車に乗務するとかなり古くなって次の新車が当たるまで乗務するのが慣行だったからです。

東渡は入社直後から傍若無人で恥知らずな男でした。七尾の共栄運輸という鮮魚と冷凍魚専門の運送会社にいたというふれこみと福島組という以前県の暴力団組織の勢力を二分し七尾に本部を置いていたいわゆるヤクザに所属していたとも自慢していました。

大口が甚だしく少し頭もおかしいのではないかと思います。周囲は呆れており、突然来た特異な存在だったのです。その東渡がやはり三菱の新車に乗務したと耳にしてから10日か半月ぐらいいも経った頃次は会長の竹沢と松平がその入れたばかりの三菱の新車を市場急配センターに身売りするという話を耳にしたのです。

それと同時に少ししてその件でなにも知らされていなかった東渡が激しく怒りまくっているという話しが私の耳に入りました。そして一週間もしないうちだったと思うのですが、ある日の午後市場急配センターの事務所で東渡が台所の包丁を手に持ち松平のことを罵り殺してやるようなことまで口走りついには机の上に包丁を突き立てたのです。

その時松平は出掛けていて不在で事務所の中は池田と文さんがいつものように事務の仕事をしていました。私は安田敏と市内配達から戻ったところでいつもより少し早い時間に戻ったように思います。すぐにその場を去るのも気が引けどうしようかと思っていたとき、電話が掛かり私宛だったので出ると相手は安田繁克でした。

金沢市場輸送に前からあった箱の大きな四トン車で徳島行きのスイカを積んで向かっているが車の調子がおかしく重量的に無理があると言いい本恒夫にもあるいは松平にも連絡がつかないなどと心配そうに困った声で話していたのです。

細かいことは思い出せませんがとにかくこれも金沢市場輸送に前からあり当時は古くなって長距離には使用せず臨時の仕事に使っていた7180号という10トン保冷車で積み替えることになり、私は安田敏とその大型車をひっぱって安田繁克の待つ北陸自動車道尼御前サービスエリアに行き、そこで荷物の積み替えをして四トン車で帰ったのです。行きは高速でしたが帰りは加賀インターから八号線を走ったように思います。

翌日いつものように早朝中央市場でマルエーの青果物の積み込みをしていると体を縮めタオルを首に巻き晴れているのに長靴のようなさえない格好をした松平が来て荷積みの手伝いをし、まもなく市場内の高瀬商店というパンやおにぎりを置いた皆が出入りしている店に誘いました。

そして不安そうな声で昨日東渡に襲われ殺されるかと思ったなどと話していたのです。この時も安田敏が一緒でした。同じ日の午後だったと思うのですが会社事務所で池田からも東渡の襲撃の話を聞きこちら方はより具体的に逃げる松平を包丁を手に市場の中まで追いかけて回し、最後はたま

たま松平に同行していた者がいて武術の有段者だったので東渡を取り押さえ大事にはならなかったと本当によかったとすべてが終わったように明るい声でうれしそうに話していたのです。

それ以来東渡が再度松平に危害を加えようとしたという話を耳にすることはなかったのですが、暫くして東渡らがトラックごと市場急配センターに来るという話が決まったと聞いたのです。事務所の中でも池田と梅野がいて池田は不安そうに梅野は吐き捨てるように松平を非難し、いずれも先行きを案じ不服そうな態度でした。事前に松平からの相談もなかったことも不満のようでした。

安田繁克について

彼が市場急配センターに入社したのはまだ市場急配センターが金沢市場輸送の一部だった頃すなわち市場急配センターが設立する以前で平成元年の終わり頃だったと思います。余り姿を見ることはなかったのですが彼のことはすぐに耳に入りまして実際に顔を見る半月か一月ぐらい前から噂の方が先行していたからからです。

というのは当初、金沢市場輸送でイワシ運搬の持ち込みダンプに乗っていた堂野という人物のいわゆる愛人の息子だと聞いていたからです。ちょうど同じ頃金沢市場輸送の長距離10トンに乗っていた山田という人物の長女の彼氏が入社したのでどちらも社内の関心を集めていたのです。

こちらの方は西口という青年で安田繁克よりは年上で私に比較的年が近かったかもしれません。私の認識ではこの先市場急配センターに来て暫くするまで安田繁克は堂野の愛人の息子だと完全に思い込んでいたのですが、市場急配センターで仕事をするようになりそこに16才の大野という少年が働いていて私などの手伝いをしていたのですがその大野の方が堂野の愛人の息子だと知ったからです。

これも殆ど安田敏の口から聞いたことです。安田敏は当時市場急配センターに来て一月ぐらいだったのですが溶込みが早かったのかかなりの事情通になっていてずっと前からいる会社のように何かと説明が多かったのです。

もともと私の紹介で金沢市場輸送の方に入社したはずの安田敏が大型免許取得のため大徳自動車学校に通うことになり、金沢市場輸送の仕事内容では困難なため昼の仕事が中心の市場急配センターに出向していたのです。

初めに安田敏を本恒夫に紹介したのは5月の連休の時で実際に入ったのはそれから短くて10日ぐらい長くて20日ぐらい後のことだったと思うので大体5月の半ばから20日過ぎぐらいと考えられます。

>>> : Linux LibreOffice : 2023-09-28 22:51:17 >>>

4月の終わりの面接で、すぐに金沢市場輸送で仕事を始めていた記憶になっていた。

<<< : Linux LibreOffice : 2023-09-28 22:52:08 <<<

その間私の方は金沢市場輸送で長距離の仕事をしており時々安田敏とも会っていたのですがこのような二重状態は半月から一月ぐらいあったように思われます。

そして私が松平に誘われ市場急配センターに来たのが22日頃でそれから5日ぐらいして私が市場急配センターに正式に入社したのと同時に安田敏の方も市場急配センターの社員ということに決まったのです。

なぜ22日頃かという初めは松平から一日1万5千円の条件でアルバイトとして入ったからで、それが25日締め給料計算から正社員となりアルバイトの期間はわずか3日しかなかったと覚えているからです。

とにかく市場急配センターに来て4、5日ぐらいで松平は近いうちに大型車を導入して青果物の長距離輸送をする計画なので是非私に乗務して欲しいと懇請したのです。そう言えば本恒夫の長距離のやり方も不合理であると批判し自分ならもっとよくできると力を入れて語っておりました。実際に市場急配センターを急成長させずいぶん利益を上げていると噂を聞いていた時期でもあり経営手腕は確かにありそうでした。

実際に繁克と話しをしたのは平成三年の1月か2月頃金沢市場輸送の駐車場で雪のためスリップしていた彼の2トン車を替わりに雪から出してあげたときぐらいでした。その他にも挨拶程度はあったかもしれませんが。市場急配センターの事務所が移転してから市内配達連中と顔を合わせることはめっきり減っていたのですが、しかし、彼が乗るらしい乗用車の方は毎日のように金沢市場輸送の駐車場に止まっていたように思うのです。

その乗用車というのは私の友人大網健二君が絡んでいたいわく付きの車だったので私もそれなりに注目していたからです。車種はずいぶん古い型のBMWでした。健二君は副業で車のブローカーのようなこともしていたのです。初めは同じ市場急配センターの笹田という男に納車する予定だったようですが笹田が不義理なことをしてトラブルになったとか詳しいことは分からないのですが大網君の方は珍しくずいぶん腹を立てていました。

私は笹田の方からも苦情の相談を受けたことがあり、同じ市場急配センターのS藤という元ヤクザのチンピラのような男を連れて12月のイワシの仕事が始まった直後に金沢港まで二人で来たこともあったのです。

このS藤も元ヤクザですが繁克の方も元ヤクザだとすでに聞いていたように思います。S藤の方は指を詰めており入れ墨も入れていたと思います。私にすればどちらもチンピラに毛の生えたようなもので一時的に所属していたぐらいと考えていたのですが、これまでに出てきた西口、S藤は繁克とも程度は分かりませんがかなり親しくしていたような感じでした。

笹田の方は確か繁克より前から金沢市場輸送で市内の仕事をしていました。入社したのは梅野と同時期ぐらいかもしれませんが。この笹田といつも一緒にいたのが峰田という男で文さんに電話をするようになった時期ぐらいに文さんはこの峰田の紹介で市場急配センターに入社したと会社で耳にしたのです。残念ながら誰から聞いたのか思い出せないのですがやはり多田敏明が一番有力ではないかと思っています。

峰田と繁克の付き合いは分かりませんがそれなりのものがあつたと推定され、詳しいことは述べませんが色々な事柄が結びついて文さんの評価を下げる方向に作用したのです。実際に平成4年の2月下旬に梅野が峰田と大久保が彼女の交換をしていたなどと話し今時の若者の男女交際は予想もつかないほど呆れたものだということ話を話していたことがありました。

偶然なのか故意だったのか確かなことは分かりませんが後者であった可能性の方が高いと思われ、私の知識を利用した計算高さと計画の緻密性がこの点にも垣間見れるのです。大久保というのは笹田や峰田よりさらに前から市内配達をしていた男で私は彼とも顔を合わせればちょくちょく話しをしていました。峰田は彼女らしい少女を連れ会社の前でベタベタと抱きついていました。

7月の初め頃だと思います。ある日の午前中繁克が市場急配センターの会社に来た彼と親しく話しをしたのです。当時市場急配センターの裏駐車場では半分近くのスペースがまだ金沢市場輸送の余り使わないトラックの駐車場になっていたのですがそこに止めてある大型ダンプが彼のもので今は臨時で長距離の仕事をしたりしているという話でした。

場所を変えて事務所の中の応接席でも話しをしていたのですがその横では文さんも自分の机でいつものように仕事をしていたのです。意識したわけではありませんが文さんの態度は全く普段通りだったと思います。

繁克はずっと前に市場急配センターをやめたような口振りでこの前は東北から九州まで冷凍物を運んだようなことも話していました。この時点で都商事のトラックだと話していたように思います。先述した徳島のスイカの件はこの数日後だったと思います。

スイカの件が東渡の包丁事件の同日であったことも既述の通りですがこの日の朝刊に片町で丸西水産輸送の社長が実弟に射殺されたという事件が報道されていたのです。丸西は山田が金沢市場輸送以前に勤めていた会社でもあり、また、かねてから評判のよくない会社としてよく知っていたのです。

竹沢とも付き合いがあり私が前にいた中西とも付き合いがあったようです。竹沢は昔中西の社長を助けてやったことがあるとも自慢し口振りからは大きな貸しがあるようでした。会社でもその事件が話題になっていたところ、事務所で包丁を持った東渡もその件に関することを通称で名前を挙げて口走りまるで事件に触発され興奮しているような様子だったのです。

私はこの事件のことを7月の10日頃とばかり思っていたのですが、出所後気になっていたのも他の事とも併せ図書館で過去の新聞を調べたところ確か7月の20日頃の日付になっておりました。また、この頃になると繁克は堂野の愛人の息子ではなく松浦の愛人の息子であることも分かっていたはずでそのことに関しても繁克と話しをしたように思います。

なお、私は以前堂野の紹介で保険外交員の女性から生命保険に勧誘され契約したことがありました。女性は30代後半か40代前半ぐらいで、私のアパートに直接来て前妻とも話しをしていました。これが大野という女性です。たぶん当時から名前の方は知っていたと思います。

昭和61年の10月頃から金沢港からイワシを運搬するダンプが二台新車で導入されそれに乗務したのが三浦とその連れの同年代の人物でした。二人とも普通のダンプに乗っていたらしく仲間でした。

>>> : Linux LibreOffice : 2023-09-28 23:02:01 >>>

その後の記憶では、2台のイワシのダンプが入ったのは昭和62年の春先、イワシの運搬の仕事が始まるのは早くて11月の終わりか12月初めからだったはず。また、昭和61年の10月だとまだ市内配達をやっていた時期。その時期にイワシのダンプを見ていた記憶はない。

<<< : Linux LibreOffice : 2023-09-28 23:05:19 <<<

もう一人は比較的大人しかったのですが松浦の方はもともとヤクザ者だったらしくいかにもそう言う感じの男でした。イワシの仕事は金沢港近辺でイワシが水揚げされる一番速くて11月頃から一番遅くて5月頃までの仕事でした。まともに仕事になるのは12月の後半から3月の終わり頃までです。初めはこのおよそ半年間だけの臨時社員のようなものでした。

もう一人の方は一シーズンぐらいいなくなりましたが松浦の方は毎年来ていて現場の主のような存在になっていたのです。私自身昭和63年の暮れから元年の2月一杯ぐらいと元年の12月の下旬から平成2年の2月一杯ぐらいの間このイワシ運搬の仕事をしたことがあり松浦のことはよく知っていたのです。

堂野が来るようになったのは元年の12月の下旬からシーズンであったと思います。私などが乗務したのはダンプではなく普通の平ボディに和歌山の白浜の方で作った特製の水槽のようなものを積んだものでした。漁獲量が少ないときはダンプのみが稼働するのです。

平ボディは昭和63年の12月頃に三菱が3台、イズズが2台の計5台を一度に新車で導入したものでした。輸送のダンプは一番初めに入れた2台のみで堂野のダンプは自分が持っていた普通より二台の大きなダンプをイワシ運搬用に改造したものでした。

>>> : Linux LibreOffice : 2023-09-28 23:07:46 >>>

「二台」は「荷台」の間違いと思われる。荷台の大きさはよく憶えていないが、一般の土砂済みの大型ダンプよりかなり小さく見えた。キャビンという運転席の部分自体が小さく見えたが、古い型の三菱ふそうで、当時ほとんど見かけなくなっていた旧型車。

<<< : Linux LibreOffice : 2023-09-28 23:10:42 <<<

先に述べた繁克のダンプは金沢市場輸送が日通から払い下げてもらった普通と違ったダンプでいつの間にか繁克が金沢市場輸送のカラーに塗り替えて乗っていたのですが自分で買ったような話でした。

>>> : Linux LibreOffice : 2023-09-28 23:11:26 >>>

黄色い日通カラーしか記憶にない。市場急配センターの裏駐車場は平成3年10月6日の時点で、まだ金沢市場輸送の使わない大型車が駐車されていたが、その頃には被告発人安田繁克のダンプを見ていなかったかもしれず、一週間ほどして裏駐車場から金沢市場輸送のトラックが消えたが、その後も被告発人安田繁克のダンプを見ることはなかった気がする。

<<< : Linux LibreOffice : 2023-09-28 23:15:32 <<<

たぶん松浦が保証人か手形の裏書きをしたものと思われます。実際それらしいようなことも繁克の口から聞いたのですが細かいことは覚えていません。

私が市場急配センターで市内配達の仕事をしたのは平成三年の8月一杯です。繁克が会社に来てダンプを見たり事務所で話しをしたことがあった以降この間に繁克と会ったことは徳島のスイカの件を別にして二度ありました。いずれも私が市内配達の荷積みで中央市場の中にいた時です。一度は金沢市場輸送の7180号に乗っていて高瀬商店の前で話しをしたのです。

この時繁克は本恒夫が仕事のことで大阪方面の業者とトラブルを起こし、かなり大規模なかたちで右翼の街宣車が乗り込んでくるという話しをしていたことです。

もう一度は都商事の日産の大型車に乗って来ました。この時私は初めて日産の新型車を少し運転したのでよく覚えていたのです。ちょうど同じ頃金沢市場輸送の金山という運転手が市場に来て私に「基本給50万円て、思うたようになって思っとるな」などと吐き捨てて行ったことがありました。

喧嘩腰ではなくやるかたない憤懣を投げつけに来たようでありましたが、この行動もやや不自然でした。いちいち説明を加えていたのでは紙面が膨れ上がるので省きますが金山というのは金沢市

場輸送の私より新しいのですが古い方の運転手で池田などとも親しくしていて東渡のストライキの時には一番乗りに尻馬に乗ったような人物でした。

富山の人間で本恒夫とは、若い頃からの知り合いのようすでいじめていたともはなしていました。本恒夫は金沢の出身なのですが、20代の初めから富山に行き飲み屋を経営するようになったとよく自慢していました。

カラオケを初めて導入したのも自分のアイデアで先見の明があるといったことも話していました。数店舗を抱えるまでになったそうで10年以上は続いていたようですが、本人曰く「天狗になったがよ」で頓挫したらしく、つぎに静岡に行き、そこでこれも当時ほとんどなかったというサラ金屋を始めたそうです。

人口の数とか計算に入れ静岡市を選んだなどとこれも実に自慢そうに話し、こちらも大成功を納めたらしく静岡に御殿のような家を建てて住んでいたとも話していました。しかし、結局詐欺罪で警察の追求を受け、身の危険を感じて家族共々金沢に逃げ、飛び込んだ先が金沢市場輸送だったそうです。

運転手を始め1, 2年ぐらいてしてから司直の手が回り、逮捕されて静岡刑務所に1年か1年半ぐらい服役したという話でした。その間竹沢が身元保証人になり、出所の時も出迎えに来てくれすぐに運転手に復帰したような話でした。

詐欺の事件は個人を相手にしたものではなく大きなものを相手にしたので賠償する必要もないが数億単位の詐欺であったとこれも得意そうに自慢していました。金山の方も富山で数店舗の飲み屋を経営していたそうですが、ギャンブルに懲り一晚に5百万円負けたりする博打を繰り返し、借金がかさんで金沢の方に逃げ、金沢市場輸送に落ち着いたそうです。

借金取りからの追及をかわすため形式上の離婚をしているとも話していたのでかなり深刻な感じでもありました。本恒夫との付き合いは昔の話でそれ以来付き合いはなかったようで、金沢市場輸送で本恒夫に会ったのも偶然のように話していました。金山については以前暴力団員であったと耳にした覚えもあります。

本恒夫についても私が福井刑務所にいたとき知り合った富山の人物に暴力団員であったと聞きました。その人物は竹沢のこともよく知っているらしく昔仲間だったが仲が悪くなったと話し、やはり竹沢は裏で物凄い悪いことをしていたと話していました。

彼の話では竹沢は朝鮮人で、それも20代の頃に朝鮮本国から日本に来たような話で、竹沢の話をしたときすぐに「大日本平和会」だと言いました。これは関西に本部を置く右翼団体ですが実質的にほとんど暴力団のような話でした。金沢の他高岡にも支部があると聞いたことがあります。

この人物が出所後TKと金沢の片町でランジェリーパブを出したそうですが、資金はほとんどがこの人物の出資だと聞きました。

名前は確かNというような名前でした。ちょっと違っているような気もするのですが一応この名前にしておきます。彼は平成10年7月29日6年の4月頃福井刑務所で私が工場出役を始めそれと同時に雑居房に入ったときその房にいた者で工場も同じ2工場でした。

TKは2工場の中の当時嶺北と呼ばれていた班の班長で、私はその班に編入されたのです。他人と自由に話しを出来るようになったのは3年ぶりぐらいのことでそれも同じ金沢から来ていたので何かとよく話しをしました。

作業中でも相手が班長なので作業の説明にかこつけ話しをすることが容易でもありました。一年ぐらいしてYKという男が来たのですが、これも金沢の男でTKとはかねてからの友人でした。

YKは私の事件に強い関心を持ち何かとしつこく聞いてくることがありました。滝本組にいて自分で事務所を開いていたとも話していました。基本的に福井刑務所には現役の暴力団員は来ないのですが、辞めた者とか当局の認定を免れた現役組員らしい者も他にもいました。

TKは薬物の密売関係の事件で服役していたのですが、片町で飲み屋を経営していて、YKの方も一軒飲み屋を出しているような話しをしていました。YKは恐喝、傷害などで薬物関係では運良く一度も捕まったことがないと話し、車のブローカーや他のことも手広くやっているように話していましたが、ほら吹きなのでなにがどこまで本当なのかははっきりしません。

TKが仮出所した後後がまの班長になったのがYKでした。Nが出たのはTKより少し前だったと思います。このYKからTKとNと一緒に店を出したとか外から入った情報らしきものを私も聞いていたのです。

商売は大盛況でまもなく二軒めも出しと聞きました。どちらかが「〇〇〇ハット」という名前だったと片方の方は店の名を覚えています。刑務所で知った人のことを話すのはよくないことなのですが、これらの人物は私の事件と無縁ではないので参考資料の一つと一応の用心のために話しているのです。

というのは、安田敏が市場急配センターに来て一緒に市内配達をしていた頃、安田敏は片町でバーテンをしていた頃、自分の勤める店の経営者がその前年に新聞などでも大きく報道された片町の薬物密売事件に関与していて逮捕され、自分も逮捕されるのではないかと恐れていたなどと話していたことがあったのです。

私は関心がなかったので聞き流し、詳しく聞かなかったのですが、このようなことがあってTKと出会ったときはあるいはこの男が安田敏の知り合いではないかと考えました。安田敏の名前を出した覚えもあるのですが知らないと言われました。

ただ能都町の穴水よりの方に釣りに出掛けたことがあるという含みのある言葉がその時あったのです。なぜなら安田敏の田舎は私と同じ能都町ですが、10キロほど穴水よりの鶴川という町なのです。

刑務所を出てから安田敏と電話で話したとき、敏本人からTKやYKとは仲間で、店長の友人でよく一緒に薬物をしていたと話していました。刑務所にいた頃以前聞いた店の名前もすっかり忘れていたのですが、それも教えてくれ店長の名前の他数人の具体的名前を挙げていました。

TKもYKもよく知っていると得意そうにはばかりなく話していたのです。次にその時の電話の内容を記載したメモ書きを対象に説明を加えて作成した資料の抜粋を掲記します。

(11)安田からTELがかかる。
市場輸送で三回ぐらい免停

昨年 柳田運送 2月の終わり 70才ぐらい
岐阜 富山(?) ライスセンター・昨年
北都高速 20じめ(おそらく給料が20日締めのこと) 12.5から
18万円(何の金額か覚えていないが、おそらく当時の安田の手取りか途中からの初任給と思われる) 大型 きょり(距離) 35万ぐらい
運行費なし 4時間とれたら、仮眠、下道 丸西と同じ
昨日 滑川(まず滑川-富山県の滑川市以外は考えられない)。(読み方不明の二文字)事故(内容は覚えていないがまず事故と読める)
丸西と愛ちゃん(愛ちゃんとは昵懇、仲良し、などという意味)
3分の一北海道(運転手の三分の一が北海道の人という意味) みなと(金沢市湊のことと思われる)
24風呂 食券300円
行き(行き荷)手積みなし 帰り手積み多い
80人ぐらい 99(?)km(何のことか覚えていない)
福山通運(たぶん、しかし何のことか分からない)
市場輸送 昨々年の夏(たぶん市場輸送には昨々年の夏頃までいたという意味と思われる)
修、えらぶっている(市場輸送の運転手、口取修のこと)
輪島の連中、いない 共栄(七尾の共栄運輸のこと、市場輸送にいた輪島の連中はみな共栄運輸に移り持ち込み運転手をしているという話だった。) 160円残る(持ち込みで純利益が160万円残るような話だった。私にすれば丸ごと信じられない話)
気仙沼(宮城県気仙沼市) ダンベ(船上げされた鮮魚の鰯を通称ダンベと呼ばれる水槽に入れ水槽ごと運ぶ仕事、記録の中にもたびたび出てくる)
下根(通称コウキ、もと山水運輸の運転手、安田とは昭和58年頃からの付き合いと思われる。私も安田が当時住んでいた観音堂のアパートで知り合った。) = 浜田のトレーラー(蛸島の浜田漁業、これも記録の中にたびたび出てくる。市場輸送の得意先)
= 一人もん(独り者) 2年前に離婚
ヒロボ、山水のえらさま(現在山水運輸の幹部社員のような意味)

金山、寺川、武田(役職) = (これはたぶん現在市場輸送に残っている私を知っている運転手のことと思う。)
武田4トン(武田は現在4トン車に乗務しているという意味と思う。私自身この話を忘れていたが大型に乗務していた武田が4トン車になぜ乗務しているのか意外な話)
急配(この位置でなぜ「急配」と書いてあるのか意味がよく分からない)
東京ストアーなくなり、東陸、宮陸今でもやっている。一番いい仕事
小林七尾、スギヨ、下関 = (七尾の小林運輸の仕事で下関に行っているという意味だと解されるがよく覚えていない。私がいた当時七尾の小林運送とは取引が無かった。)
池田、荒川、(九州の) = (九州の池田運輸の配車係の名前が「荒川」という意味だと思うが、なぜ安田とそのような話をしたのか覚えていない。私が急配にいた頃安田は池田運輸の仕事をしていないはずなのでその名前も知らなかったはず、)

ヤクザ 七尾 松下 オレより二つ年下 富山の男 = (これも現在何の話であったか覚えておりません。)

ハートブレイクの次ラ〇〇〇 = (これは安田がハートブレイクの次に勤めた片町のスナックの店の名前だと思います。記録の中でも何度か出ているはずなのですが、店名はまるで覚えていなかったもので特定されていないと思います。)

別居＝（誰のことを指しているのか覚えがないので分かりません。）

近しい＝（近しいとは、仲がよい、または馴れ馴れしいという意味です。）

京都府津小鉄＝（京都に本部のある有名な広域暴力団であることは周知の事実ですが、誰のことを指しているのか思い出せません。）

吉○、別れ、8ぐらい上、健○＝（吉○とは多分安田が安田がハートブレイクの次に勤めたラ○○○の店長というか経営者のことだと思います。そうだとすればこの人物は薬物取締法違反で逮捕され、安田自身も逮捕を恐れていたという話に符合することになります。健○というのは私が福井刑務所で一緒だったTKのことだと思います。この時の安田の話ではラ○○○のマスターとTKは仲良しでよく店にも来ていたそうです。安田本人もかなりよく知っているような口振りでした。ここには書いてありませんが一緒によく麻雀をしていたようなことも聞いたような気がします。）

シャブ、LSD、ハッピー、しょっちゅう＝（これはラ○○○の店長とTKなどがしょっちゅう色々な薬物を一緒に楽しんでいたという話です。）

昨年捕まった、ヒ○○、今シャブ、去年だったかたぶん＝（これはTKらの薬物乱用グループの仲間のことだと思います。この時安田は楽しそうになめらかな口振りで話をしていた、私のまったく聞かないことまで勝手に話していたのです。捕まったのはたぶん去年で、現在はシャブを使用しているという意味だと思います。）

つれ（連れ、すなわち仲間やグループという意味）、飲みやつれ（誰を指しているのかよく分からない）

YK、愛人が片町で店、広小路、ほら吹き、知らない車も

吉○の所でよく一緒にシャブをやっていた、ヒ○○、富山＝（これもTK同様福井刑務所で一緒だった人物です。TKとはかねてからの友達のように刑務所内でも親しくしていました。愛人が片町で店とありますがこれはほら話なのか事実なのか不明です。このことも私はすっかり忘れていました。もしかすると安田が店長と一緒に薬物をしていると聞いたのはTKのことではなくYKのことだったのかもしれない。しかしどちらも同じであったという公算が大です。因みにTKは薬物の二刑持ちでの服役、YKは薬物では捕まったことがないという話で確か恐喝と傷害のような話でした。こちらも二刑で、いずれも初回は執行猶予の判決をもらっているそうです。）

○○けんいち、会津小鉄、せいどう会、コンヤ系（紺谷組、小松に本部のある県内を一昔前七尾の福島組と二分する勢力の暴力団だった。数年前に内部分裂か、幹部の台頭により消滅し、現在は宮越となっているらしい。少し聞いた話なので詳しいこと正確なことは分からない。）、ホソウ店（何のことか分からないが、現在は舗装工事の仕事をしているという意味ととられる。）

ダンプ、鶴来、穴水、羽咋、全部用意、車も、個人、ダンプ4台、一月二回（不明）、話ついとる、週三回、事故多い（不明）、住まいが優先＝これは安田が北都高速に行く前か北都高速をやめて新たに勤める就職先のことだと思う。現在の私の頭の中ではその後に安田から聞いた話との混同があるように思うが、安田と話したのはこの時と、8月の盆に彼の自宅まで行き直接話をしたときだけだったように思います。するとやはり電話をしたときに次の就職先のダンプの話をしていたことになります。週三回とか事故が多いというのは北都高速の話で、週に三運行が当たり前で事故も多いということだと思います。また、この時に安田から聞いた話ではたしか会社は鶴来で社長が一人だけのようなことを言っていたように思うのです。しかし、その後だと思うのですがダンプの会社は内灘にあるとか内灘に住んでいるようなことを話していた記憶があります。ここに書いてあるのは個人会社でダンプ4台を所有しているという意味だと思います。

国勝物流＝（ここで安田の口から国勝物流の話が出たように思うのですが内容は覚えておらず、メモ書きもされていないようです。国勝物流とは北陸ハイミールでミールを納入していた倉庫の管理会社のことです。詳細は記録にたびたび出ていますが、平成三年の1月下旬の安田の門柱でタイヤを爆発事件ではその倉庫の責任者格の人物が安田の主演する偽装計画に参画していた可能性があり、市場輸送や松平社長との関係も軽視できない会社なのです。あるいは私の方から国勝の話に向けたのかもしれませんが。安田の口からも具体的な話を聞いたような気がするのですがこれも覚えがありません。）

頭かかえとった．言いたいこともいえなかった．顔出したいと思っとった＝（これは安田が松平の事件直後の言葉を話していたものかもしれません。ただ、言いたいこともいえなかったという言葉は誰が誰に対して言っているのかよくわかりません。）

情報．アホになった．目玉あっち向いて＝（情報とは私が使った言葉だと思うのですが、要するに安田のもとに入った情報のようです。この時、彼はまったく他人事のように屈託無く話していました。）

加賀の方＝（小松の八幡温泉病院のことを言っているのだと思います。）

つぶやいとった．なんで誰も来てくれん（文）＝（彼女が病院で意識を取り戻したとき、彼女はそう言ってなぜ誰も見舞いに来てくれないのか不思議がっていたそうです。この時の安田の声には弾みがあり、笑っていました。）

助かりやろ（秀樹が）．．交通事故．うらみもない．救い＝これを見ると私が助かったなと言うことになりますが、何が助かったのか覚えが無く、交通事故というのも不明です。恨みが無いと言う言葉も誰のことを指しているのか思い出せません。お前せいと言う言葉はお前のせい、つまりお前の責任と言うことになりそうですがそのようなことを安田に言われたような記憶はないのです。安田は終始、諂いにも似た低姿勢な態度で逆に私を怒らせないような配慮まで感じられたぐらいだったのです。

罰金40万円．輪島．保険で処理．見舞い10万円もはろたか．ババァが悪い．不服申立．徐行違反＝安田が以前柳田運送で働いていた頃鳳至郡柳田村の笹川辺りで老婆に接触する事故を起こした話のことです。この話は昨年八月の盆に安田の自宅で彼に会ったときにもまったく同様の話をしていました。

>>>：Linux LibreOffice：2023-09-28 23:51:24 >>>

平成9年8月のお盆休みに、被告発人安田敏の自宅で被告発人安田敏に会ったという記憶は残っていない。鶺鴒川の被告発人安田敏の実家は、玄関先から中に声をかけた記憶だけ残っている。たぶん保育所の前辺りで被告発人安田敏の兄の妻という女性に会った時のこと。被告発人大網健二が同行していた。

<<<：Linux LibreOffice：2023-09-28 23:53:51 <<<

トッチすぐダンプ．やめて＝トッチというのは多田利明の通称で、彼は私の事件後すぐに市場急配センターをやめてダンプに乗っているという話でした。

デブおるんないか（和田）＝和田はまだ市場急配センターにいるのではないかという話です。和田のことはよく知らないと言う口振りでした。

一ヶ月ぐらいですぐ．東渡．秀樹がいなくなってから＝私がいなくなってから一ヶ月ぐらいで東渡は市場急配センターをやめていなくなったという話だったと思います。私がいなくなる20日ぐら

い前から東渡が会社により着かなくなりやめると言い、七尾で2トン車の会社を始めるなどと話していたことは記録にあるとおりです。そう言いながらもたびたび会社に姿を現し、私がいなくなったあとも私に対する処置の会議の席でただ一人私を市場輸送からの功労者として擁護するような発言をしていたことも安田から西署で聞いた話です。

本ともめた。帰り積まなくなった。会長すごく怒っておる＝誰が本ともめたのか話の内容を覚えていません。帰り荷を積まなくなったというのは市場急配センターの長距離運転手全般のことを指しているのかもしれませんが。会長とは竹沢会長以外に考えられませんが、誰に対して怒っているのかも不明です。あるいは安田に対してのことなのかもしれませんが、彼が市場輸送でケンカ別れをしたようなことも彼から聞いた覚えがありません。

いまだにミーティングで俺の話しとる。池田の仕事。イバラギ。ナスビ＝これはどうも安田本人のことを話しているようで、池田運輸の仕事でトラブルを起こし、それがいまだに会社内で話題になっているような感じにとれます。ナスビがその時の積み荷と考えられますが、イバラギの方は荷物の降ろし先なのか積み込んだ先なのかははっきりしません。たしか池田運輸は埼玉か群馬の辺りにも営業所があり茨城近辺から青果物を積み込むことは十分考えられることなのです。私も一度群馬の伊勢崎市辺りと群馬県の埼玉・茨城の県境辺りから池田運輸の仕事で青果物を積んだことがありました。確か九州から東京で池田運輸の青果物を卸したときで、一泊して積み込んだのです。このことも記録の中に記載があると思います。平成三年の春先ぐらいだったと思います。

山三やっていない。三年ぐらい前。9～10万の運賃＝私が市場急配センターにいた頃一番のメインだった茨城の山三青果の仕事は三年ぐらい前にやめてやっていない話のようです。9～10万の運賃というのは私が聞いていた運賃より安いようです。どのような経緯で彼がこの話をしたのか詳しいことは覚えがないのですが、今では東渡同様全くの他人であることを強調しているような印象がありました。

北都の傭車延着＝これもよく覚えがないのですが、傭車に頼んだ北都の運転手が延着をしたようです。北都と言っても「北都高速」なのか「北都運輸」なのか不明です。そして誰のどの仕事で延着したのかもはっきりしません。あるいは北都高速が延着をし、そのあとにも傭車で頼んだ運転手が延着することが続きそれで山三からはずされたという話だったのかもしれませんが。

丸魚。富山。金沢だけ。あと中継＝丸魚というのは石川中央魚市の商標です。このあとに中継のことなどが書いてありますが、魚の仕事となると山三は青果専門なので考えられないこととなります。もっとも考えられるのは東陸と宮陸のいずれかの東北便のことです。こちら方は今でも続いていると聞いたように思います。ちょうど山三の記載と間になっているので延着の件もどちらのことなのかははっきりしなくなりそうなのですが、いずれの北都も鮮魚を運搬していたとは考えられないので、やはり延着の件は山三と言うことになりそうです。

月10回以上。手取り。45万円ぐらい。50万円以上＝これもどの会社のことを指しているのかわかりません。一月に10回以上の運行で給料が50万円以上、手取りでも45万円以上もらっているということになりますが、市場輸送の現在の給料体制や状況を安田から聞いた覚えも現在の私には記憶にないのです。当時（安田から話を聞いた当時）の私はもっと大きなことで頭の中がいっぱいで細かいことは深く考えず、考える余裕もなく、思い起こすこともなく話を聞き流していたのだと思います。また、人との電話でメモを取ったのもこの時が初めてで、見ればすぐに思い出すという安心感でなおさら深く考えていなかったようです。

230・180＝この数字も不明ですが、唯一考えられるのは市場輸送の持ち込み運転手の売上額ぐらいです。つまり180万円から230万円の間が一月の売り上げです。

山〇ひ〇〇．前にいた輪島の男＝これは私が市場急配センターに入ってしばらくした頃に市場輸送にきた運転手で安田同様（安田はそのまま市場急配センターに移籍した）出向社員として市場急配センターで市内配達をしていた青年です。同じような青年がもう一人いていつも二人一緒にいました。もう一人の方はたしか輪島市の三井の出身だと話していたように思います。また、池田が文さんに女の子みたいなどと話していました。こちらは十月頃にやめてゆきました。山〇の方はその後翌年になってから（平成4年）市場輸送で大型の保冷車に乗務していました。あるいはもっと早い時期だったのかもしれませんが三月頃に初めて知ったような気がします。二人とも私より年下で山〇が山〇〇の同級生ぐらい、もう一人は学校を出たばかりぐらいだったかもしれません。あるいは山〇の方は私より一つ年下ぐらいだったかもしれません。ただ、ひ〇〇という名前であったことは今聞いても初耳なぐらいで容姿に照らしてもかなり以外の感があります。どちらかと言えはいかつい感じなのですが、外見とは違い話すと大人しい感じでした。

頭おかしくなった。独房に入るとると聞いた。母ちゃん泣いとるぞ＝刑務所にいた頃の私に関する噂のようです。この時も安田は文さんの時と同様うれしそうに笑っていました。

オジコ．守田＝オジコこと〇〇〇〇は現在も守田水産輸送で運転手をしているという話でした。金沢で生活するようになった去年の夏頃、日産ディーゼルの大型車に乗った彼らしい人物を私も見かけたことがあります。

輪島やめ。ウロコ。輪島トレーラー．守田新車10トン＝輪島屋鮮冷をやめてウロコ運送に行き、それから輪島屋鮮冷に戻ってトレーラーに乗り、それもやめて現在は守田水産輸送で新車の10トン車に乗務している、という話になりそうです。これもオジコのこと以外には考えられないのですが、ウロコ運送に行ったこととトレーラーに乗っていたことは今聞いてもまったく意外な話です。因みに現在輪島屋鮮冷のトラックはまったく見かけたことはありません。おそらくつぶれたものと考えられますが、噂を聞いたこともありません。

市場．守田駐車場＝市場急配センターの会社の正面から見て右側の敷地が現在守田水産のトラックの駐車場となっていることは私も実際に見て知っているのですが、これも安田から聞いたという覚えはあまりないのです。因みに反対側の左手の敷地（中央市場より）の方はなぜか郵便局の10トン車がいつも必ず2台ぐらい駐車しています。あるいは市場関係で市場急配センターと取引があるのかもしれません。また、看板だけが郵便局で市場急配センターのトラックが下請けで郵便局の仕事をしていることも考えられます。私が一度平成4年2月の10日頃に石川丸果で郵便局の仕事をしていたのですが松平社長が石川丸果の課長を通じて郵便局とつながっていることも考えられることです。

茶〇．ウロコ．10トン＝安田と同じ水産高校の出身でオジコと同じ珠洲市三崎の出身でもある茶〇〇〇さんが今でもウロコ運送で10トン車に乗務しているという話のようですが、これも安田の方から自発的に出た話だと考えられます。

タヌキ．松＝松平のことをタヌキ親父だと言っていました。私の話を誘う言葉だという印象がありました。

事件．タヌキ＝詳細は不明ですが、事件に関しても松平の対応はタヌキのようで不信感があると言っていたようです。誘いに乗らなかった私にさらに踏み込んでみたような感じでした。

ローカルいそがしい、4トン増えた＝現在（話をしていた当時ことなのかそれとも安田が市場輸送にいた当時のことなのか、市場急配センターの噂を耳にした当時のことを指しているのか不明です。これまで使った現在という言葉もほぼ同様の趣旨です。）

怖い人、池田、頭何かんがえとるかわからん＝事件後池田宏美が私に対して述べていた印象のようです。これも誘い水のような挑発的な感がありました。

あれからすぐに免停、1月半、秀樹がいなくなって＝私がいなくなってすぐに免停になったという話です。刑務所に面会に来たときの松平の話と一致しています。1月半というのは私がいなくなってからの期間なのかそれとも免停の期間なのかはっきりしませんが多分前者の方ではないかと思われます。

東名でパトカーに追跡、6点ひかれた＝これも松平の話に符合します。松平の話では東名の岡崎インター付近でした。安田もこの時同じようなことを話していたかもしれません。

岐阜、ライスセンター＝これも松平の話と同じです。安田は免停になるのでしばらく岐阜に行かせてくれと言い、面会に来て話していたときにはすでに岐阜に行っているようでした。

急配、その年11月頃に戻った＝私が以前安田から聞いていた話ではライスセンターの仕事は毎年12月の10日頃まででその後三ヶ月ぐらい出稼ぎ手帳の失業保険のようなもので遊んで暮らせる金額の支給を受けていたようです。

輸送に移った、2年前ほどやめるまで＝市場急配センターから市場輸送に移りその後この電話の二年ほど前まで勤めていたそうです。安田の話では私がいなくなってまもなく、市場急配センターは長距離の仕事を撤廃して市場輸送に引き継いだそうです。この話はほかから聞いた話とも同様です。概算になりますが話をまとめると私がいなくなった平成4年4月1日から長くて半年以内、短くて3ヶ月ぐらいで市場急配センターの長距離はなくなり運転手も市場輸送に移籍したようです。

携帯030-115-3397＝安田から聞いた彼の携帯の電話番号のようです。少なくとも私の方から教えてくれと言ったことはありません。彼の方が積極的に伝え、連絡を期待しているようでした。不安が見え隠れしていることがありありと伝わっていたので、情報を欲しがっていることが強く感じられました。

急配、おかげ＝何の話なのかわかりません。

浜口はずつと続いとる＝浜口さんはその後もずつと急配にいるという話です。ずいぶん出世しているようなことも話していたと思います。配車係をしているということはほかからも聞いています。また、ジャガーという高級外車に乗っているとも友達から聞きました。たまたま急配の前を通るので、ジャガーを見たのは一度だけでたしか銀色か黒っぽい銀色だったと思います。4ドアーだったので、もしかすると竹沢会長が乗っていた2ドアーのジャガーを譲り受けたのではないかという私の考えは違っていたようでした。また、去年の夏頃のことになりますが彼はもうじき急配をやめると話していたそうです。その後彼のことは聞いていないので現在のことは分かりません。彼と会ったことは出所以来一度もありません。その他梅野からですが、体をこわしてしばらく入院していたとも聞きました。

愛があった。色々＝現在の妻のことで、その後色々あったけれど愛があったので今でも続いていると話していました。私に対する当て付けのようでもあり、私と文さんの関係を否定することが精神の安定にもつながり、また、そう信じているようです。これは彼の事件に対する考え方を象徴している言葉のように私には感じられました。他の者もおそらく同様だと考えられます。言い方を替えれば現在の精神の支柱にさえなっているようで、反面、梅野という例外をのぞきおびえのようなものが強く出ているのです。これらは私が想像していた以上に顕著な反応でした。

安田敏が暴力団と関係を持っていたことは十分考えられることであり、その過程で竹沢や松平と知り合ったのかもしれませんが。私が安田敏の事件に対する関与に大きな関心を寄せているのは、連中の共謀関係の存在を証明するために他ならないのです。控訴審では全く違ったかたちで安田敏の関与を認識していたのですが、それは安田敏の個人的な異常行動と事実を捉え位置づけていたのです。しかし、控訴審の判決が出て冷静に過去を分析するにつれ、可能性の一つとして安田敏と会社の結託を考えるようになったのかもしれません。

添付する「証拠番号5」という資料は、私が平成5年9月7日に控訴審判決を受け、当日に起こした問題で49時間革手錠をつけられまま72時間保護房に入れられた後、半月ぐらいたったかで処分が決まり25日間の懲罰を受け、それが終わってから作成を始めたもので、10月の半ばぐらいたったかから11月の終わり頃にかけて完成させた資料の一部であります。昨年パソコンの練習がてら機械に入力したものです。

電子文字なので簡単に複製や転写が出来ます。この資料は特別な意味を持つものです。すなわちこの直後の12月の上旬、上告審で国選弁護人になった東京の斐川雅文弁護士が私の依頼に応じて郵送してくれた捜査段階の事件の資料をようやく目にする事が出来たからです。

控訴審の段階では松平、池田、梅野の三人組の半ば過失責任と安田敏や東渡の異常性が偶然に競合した現象だと認識していたものが、さらに突き詰めて再吟味することにより、連中全体の共謀ではないかと推測するようになり、その視点に立って供述を展開して全体像を明らかにしたのが懲罰後に作成した資料だったのです。

なお、この資料は、当時国選弁護人の選任に不服を抱いていた私が控訴審の私撰弁護人である木梨松嗣弁護士に上告審の弁護人を依頼しながら郵送していたはずですが、したがって上告審には提出されていないかもしれません。

そして、福井刑務所での第二次再審請求の際、自分の母親に頼んで裁判の資料を集めてもらおうと頼んだところ送ってきたのが、木梨松嗣弁護士からの事件記録でこの中に「懲罰後の書面」も含まれていたのです。

>>> : Linux LibreOffice : 2023-09-29 00:05:00 >>>

「自分の母親に頼んで裁判の資料を集めてもらおうと頼んだ」というのは記憶になかった。

<<< : Linux LibreOffice : 2023-09-29 00:05:32 <<<

「証拠番号5」は市場急配センターにきた頃から平成4年1月20日過ぎ頃までを対象とした内容で、全体の3分の一ぐらいだと思います。この全部をまとめたものより大部だと思われる資料が控訴審の判決前に作成した「上申書」ですが、こちらの方は私の手元に全くなく、裁判所に提出後見たこともありません。

判決の1週間ぐらい前にまとめて裁判所に送付したのですが、カーボン紙で取った複写の方は随時木梨松嗣弁護士に送っていたのです。

>>> : Linux LibreOffice : 2023-09-29 00:06:47 >>>

被告発人木梨松嗣弁護士に複写を送っていたことは記憶になかった。

くくく：Linux LibreOffice：2023-09-29 00:07:12 くくく

また、「証拠番号5」には福井刑務所で再審請求の時に加えた補足説明と訂正が含まれ、さらにパソコンへの入力の際にも若干の補足を加えていたかもしれません。知れませんというのは、長い間私自身事件に関する資料を全くに近く読んでいないからです。

参考までに添えますので、平成5年当時の私の認識内容であることなど上述の趣旨を念頭に置いて読んでみてください（現在の私の考えと違う部分や、ごく一部に混沌としていて記憶が固まらなかったため不正確な部分もあるかも知れません。）。

そして12月になって、木梨松嗣弁護士には何度お願いしても聞き入れてもらえなかった関係者の供述書の閲覧がようやく実現したのですが、その内容は私の推測をより確かな事実として裏付け、推認させるものでした。

梅野や繁克に較べれば露骨ではないのですが、安田敏の供述内容は事件前とは別人格を思わせるほど冷静で常識的な内容でした。しかし、実際には平成三年の12月のことを9月頃の出来事として供述していたり、ことさら虚偽としか考えられない部分があり、全体的に他の連中の供述内容に歩調を合わせているのです。

性格の問題もあると思いますが、供述には自分の関与を悟らせない慎重な配慮が窺え、良くできているなと感じたほどです。偶然であったと見えた安田敏の入社が計画の一端であったとすれば、彼の自白を引き出すことが全容の解明に大きな力を発揮するのです。また、これが一番期待できる道筋かも知れません。

何故に連中が私や文さんを犯罪目的の標的に据えたのか？。結論から言えば分からないことばかりです。しかし、個々の事実をつぶさに検討するならば、その一つ一つが一つの目的に向かって綿密かつ周到に計画されていたとしか考えられず、そう解釈することが極めて常識的なはずなのです。

しかるに日常的な生活の中で彩られた事実の一つ一つを取り上げるならば他愛のないものであり世人を納得させるようなものではなく、事実を体験した当の私本人がいくら言葉を尽くし、表現を試みても十分なものにはならないのです。

個人の力がいかに微力なものであるかを痛感すると同時に、よくよく考えるならばその方面の専門職である警察や検察の国家機関ですら個人の中に在る真実を明らかにすることは容易ではないのです。敢えて仮定された事実社会的なお墨付きを与え確定的なものとして処理するのが裁判システムだという側面があります。

一般の人は、関わりも興味も持たない世界が表面的世界の裏にあるのです。裁判制度の問題点、弁護士制度の問題点などその筋の本を見ればこれでもかというぐらい書いてあるのですが、ほとんどの人はそのようなことも知らず、関心もないはずです。

実生活において一生涯のうち裁判所に関わりを持つ人の方が圧倒的に少ないのですから当然と言えば当然だと思います。必要を感じ一念奮起して法律や裁判の勉強をした私にしてもおよその理解を得るまでには多大の労力とそれ以上の時間を費やしました。

いわゆる娑婆とは別世界の施設の中で特殊な生活をしていたから出来たことかも知れません。実社会でもお金に不自由がなく生活に困らないのであればできることかも知れませんが、例外を除き一般には困難なことだと思います。

私が何故ここでこのようなお話をするのか。その意義は幾つかあります。まず最初にお断りしておきたいことは私の説明することがかなり専門的なことで前提知識がなければ理解が困難な上、さらに十分な説明をする能力にも欠けていることです。

このことは二重の意味で意思の疎通を阻害するかも知れず、このことに憂慮を覚えるのであります。一般的に私のようなことを言う者は、理屈ばいと思われ、第一段階で相手方の不評を買うようです。物事を合理的に突き進めるならば一般との乖離を生じ、おかしい話しになるようです。特に日本人にはその傾向が強いと私は思います。結果だけを求め、結果に合わせて物事を組み立てることの方が多いのではないのでしょうか。それに合わせる事が潔く、理屈をこねることは恥とされます。切り捨てて行かねば先には進めないと考えるならば一理はありますが、それにも問題の別と程度というものがあるはずだと私は思います。

その筋のプロである日本の警察や検察がどれほどの捜査や立証をしているのか、私なりに研究しましたが、自ずから人間としての限界があると思いました。この中には敢えて限界を設けることで人権保障機能を守るという大きな存在もあるのです。

この存在は、真実追求において大きな制約になると同時に捜査機関の恣意的判断によって真実をゆがめることを阻止するという大きな働きもあるのです。このことは刑法を適用する手続を規定した刑事訴訟法が、まず最初に次の如く書いてある通りだと思います。第1条【目的】この法律は、刑事事件につき、公共の福祉の維持と個人の基本的人権の保障とを全うしつつ、事案の真相を明らかにし、刑罰法令を適正且つ迅速に適用実現することを目的とする。この理想とはほど遠いと言われているのが現状ですが、刑事事件に携わる人々に対し自戒を与える訓示としては立派な文言だと思います。法律というものは固くて融通の利かないものだと言われているようですが、私はまず最初に自分が服する日本国の法律が納得できるものなのか不合理なものであるのかを自分なりに勉強しました。

そこで見たものは、法律は沢山の利益を守るためにバランスよくまとめられているということです。また、それは決して固定されたものではなく、動きは鈍いが流動的に社会の変化に合わせて歴史的に変化するということです。鈍いということは慎重という意味も併せ持っています。そしてそれを誰が動かして行くのか、もちろん国会や政治もありますが、個別具体的な事例での個人の力も寄与しているのです。次に私の説明を補足する参考文献を紹介します。

世の中には数多くの争いがある。個人レベルの小さなもめごとであったり、国家レベルの政治的な戦争であったり。目的もまた、様々だ。規模は違えど、これらの争いには共通するものがある。当事者同士は両者とも、「権利のために」戦っているという点だ。権利の侵害やその回復を目的として争いは起こる。つまり彼ら自身は「自分の権利のために」戦っているのだ。

「権利のための闘争」の著者、イエーリングは「権利のために闘争すること」をその著書の中で奨励している。『権利のために戦うことは自身のみならず、国家・社会に対する義務であり、ひいては法の生成・発展に貢献するのだ。』しかし実際のところ、私には「権利のために闘争する」ということがよく分からない。

それはきっと彼が著書の中で述べているように、『権利侵害によって自分自身ないし、他人がどんなにおおきな苦痛を受けるか、経験したことのないものは権利の何たるかを知っているとは言えない。』からであろう。

実際、私はこの平和な時代に生まれ、特に権利侵害を感じることもなく生活をしてきた。生まれてから少なくとも現在までは、自由と平等はそこに当たり前に存在していたのである。しかし、これから先も自由と平等を享受していくためには、それらの権利の重要性を理解し、自覚することが大切となるだろう。

それでは、「権利のための闘争」とはどういうことなのか、著者の意見と私の意見を比較させながら、また男女差別など身近な問題に置き換えながら理解していきたい。はじめに著者の主張から見ていこう。権利は人から与えられるものではなく、自分の力で勝ち取るものであり、そして自分の力で得た権利でなければ、それはいつ取り上げられてもおかしくはない。よって、権利のための行動は人任せにはしないで、自分が参加することが大切なのである。

もし権利を侵害されてもその行為に抵抗せずに、蹂躪されるままでしたら、この世の中は無秩序状態になってしまう。それを避けるために人びとは権利のために戦わねばならないのである。では、なぜ彼は、権利のために戦うのは自分のためになるからと言わずに、「義務」としたのか。それは、権利を勝ち取るのは一人の力では足りないからである。

権利を享受したい人はみな、強い権利感覚のもとでそのアルバイトに参加しなければ、権利を守することは難しい。だからである。権利者は自分の権利を守ることによって、同時に法律を守り、法律を守ることによって同時に、国家共同体の不可欠の秩序を守るのだと言える。権利者は国家共同体に対する義務として権利を守らねばならないのである。

自分の権利を守ること、国家共同体の秩序を守り、法の存在意義を確認する。このように、著者は、個人の権利感覚と、国家共同体の秩序、法の有効性は、互いに比例関係を持っているのだと述べている。しかし実際には、苦労のすえ権利を勝ち取った人々はその権利を堅固に守るが、それに続く人々、はじめからその権利を保有できた人々は、実際に勝ち取った人に比べ、概してその権利に対してありがたみは少ないといえる。

では、自由と平等といったような、一度社会に浸透した権利は、新鮮味がなくなるにつれ侵害されやすくなると、言えるのだろうか。たとえば男女差別に関して、このような例がある。1986年に男女雇用機会均等法が施行された。そのため87年前後から、会社は男性と同様の条件で働く「総合職」を入社させだした。しかし、内実は法律とはほど遠く、「第一世代」と呼ばれる女性たちは「同等」を求めて会社と闘ってきた。そして「海外出張をする権利」などをようやく勝ち取ったのだ。しかし、下の世代である総合職の女性は、海外出張を「当然の権利」と認識し、それを断る。

その行為は、歯を食いしばって「海外出張する」権利を勝ち取った者にとっては、権利の重さを理解していないように見えるかもしれない。しかし、本当にそうなのだろうか。努力しないで権利を持っているものはその権利に対して執着心がないのか。そうではない。この場合にはこう考えられる。彼女は「海外出張をしない」権利を行使しているのだと。「海外出張をする権利」はすでにそこにあるが、「しない権利」を行使することも彼女に与えられた権利なのである。つまり、出張を断った女性は「男女平等」という権利を軽んじているわけではない。むしろ男女平等という権利を十分に認識しているからこそできた行動とも言える。

ようやく勝ち取った権利も社会に浸透するにつれ、ありがたみが減少する。しかし、権利感覚までもが低下するわけではない。むしろ、「そこにあるはずの」権利を侵害されれば、人は当然のように反抗するだろう。私はこの点で、イエーリングの述べている『何の苦労も無しに手に入った法はコウノトリが持ってきた赤ん坊のようなもので、これはいつキツネや鷺が取っていつてしまうか知れない』というくだりに反論したい。イエーリングは権利侵害を許すな、闘えと何度も述べている。

彼は平和のためには闘いつづけなければと考えているようだ。それは以下の文面からも感じ取れる。『財産も権利の双面神（ヤーヌス）に他ならない』のくだり、『平和を享受した世代に代わって登場した次の世代が、戦争という厳しい労働によって平和を回復する』。イエーリングのこの文には、闘争によって権利を得るがそれは次の世代の平和な生活の中で食いつぶされてしまう、といった意図がありそうだ。確かに、平和な時代とそうでない時代は交互にやってくる。戦争と平和はヤーヌスかもしれない。

現在、日本は平和な状態にある。しかし世界においては多くの紛争があり、また、起きようとしている。日本は当たり前のように平和な生活をおくっている。この状況を見てイエーリングは、日本では権利を食いつぶしているというかもしれない。だとすると、次の世代は戦争の時代というわけだ。しかし、平和の次は戦争、戦争の次は平和といった構図を取らなくても、権利は守っていけるのではないか。この考えもイエーリングに言わせれば「権利侵害の経験のないものは…」となると思う。しかし、平和な時代に生活している私たちの世代も権利を軽んじているわけではない。これからは社会には改善の余地がたくさんあるが、改善への道が血染めの道である必要はない。権利感覚を人々が自覚さえしていれば、平和な状態を保ちつつ、権利の回復や改善を求めることは可能であろう。

イエーリングは平和な時代の権利感覚について、悲観的な見方をしているが、新鮮味がないせいですたれてしまう権利などはもともと大切じゃないもので、権利の真価というのはそれが浸透したときこそ計れるものだと思う。平和な時代にも権利はすたれるだけでなく、発展もしていくのである。

これはインターネット上でコピーした論文です。論者の見解は私とは違いますが、これも生活体験や価値観の違いを考える上で参考になると思います。「権利のための闘争」という本は、私も出所後になりますが見ました。

所有権に関する色彩が強いというのが私の印象でしたが、所有権より生存権や人格権の方が強い利益だと考えるのが私の見解です。生存権や人格権の具体化されたものが所有権だとイエーリングは述べているようですが、私の立場はよりストレートに人格権や平穏に生活する権利を問題にしているので、その点のギャップが幾らかあったのと、所有権に優越させて人肉を切り取る考えは現代法の公の秩序善良の風俗（第90条【公序良俗違反】公の秩序又は善良の風俗に反する事項を目的とする法律行為は無効とす。）に合致する私には首肯出来ませんでした。

これも法律に関する考え方の一つです。法律というものを突き詰めて考えて行くと哲学に結びつきました。実際に法哲学という学問もあります。社会学というものも法律に深く関係し、経済や世界情勢、政治などすべてもものを視野に入れて統括されているのが法律です。その法律の最上位に位置するのが憲法ですが、上位に行くにつれ抽象化し、原則化するのも法律の特徴です。

段階的構造とも言いますが、下位に位置する特別法の方が現実には具体的で実効性を有するので。例えば民法の例外が商法であり、商法の例外が借地借家法、貸金業の取り締まり等に関する法

律、手形法などです。これら特別法が優先的に適用されるのです。さらには条例など無数に近い法令があり、個別具体的な事案にどの法律が適用されるのかは解釈上の問題もあり、素人ではなかなか分かりません。

専門家の間でも様々な見解があり、いわゆる学説というものがあります。法律を具体的に解釈するに当たって一番の指針とするものが判例です。特に最高裁の判例は法律の解釈・適用の統一を図ったもので大きな威力があります。高裁の判例も控訴や上告の法令・判例違反の理由になります。この最高裁の判例ですら絶対的なものではなく判例の変更によって変化するものなのです。この変化を起こすのは実際に裁判所に係属した個別具体的な事件なのです。日本の法律はアメリカのような判例法ではなく、大陸系の実定法なのですが、この実定法というのが明文によって明らかにされたいわゆる六法を中心にした法令集です。しかし、実質的にはやはり判例の解釈が法令の解釈となるのです。そして特に重要なことは一つ一つの事案は大きな側面と要素が絡み合った複合的な存在だと言うことです。一つの要素が別のさらに大きな意義を持つ要素によって淘汰されることもあれば、複合的な力を持つこともあります。今一番私が言いたい大切なことは法律はまず前提に事実を対象にするということです。真実という言葉は本当の事実であり、虚偽と区別される嫌いがありますが私がいう事実は虚偽を含まない歴史的社会的現象としての事実です。さらにその事実においても客観的事実と主観的事実というものが考えられます。主観というのは個人の認識内容であり、認識内容の事実が現実の客観的事実とは一致しない場合に事実の錯誤という問題が出てきます。逆に主観という事実が法律的に大きな意味を持つ場合があります。人を死なせたという事実があるとします。法律的には、この時行為者に殺してやろうという意思すなわち故意があれば殺人罪、うっかり死なせてしまったとすれば結果は同じでも過失致死罪です。この場合いずれも刑法が適用され故意であれば第199条（殺人）人を殺した者は、死刑又は無期若しくは3年以上の懲役に処する。■未遂罪を罰する(203条)となりますが、単なる過失であれば、第210条（過失致死）過失により人を死亡させた者は、50万円以下の罰金に処する。にしかならないのです。一般には第211条（業務上過失致死傷等）業務上必要な注意を怠り、よって人を死傷させた者は、5年以下の懲役若しくは禁錮又は50万円以下の罰金に処する。重大な過失により人を死傷させた者も、同様とする。で処理されますが、これらの違いがいわゆる構成要件の問題です。構成要件というのは法律の解釈上極めて重要なものです。刑法の場合罪刑法定主義という考えが大きな意味を持ち、国家の刑罰権の濫用を阻止し、個人が自由に振る舞うことを保証するためあらかじめ明文の規定によって規定された法律でなければ刑罰を受けることはならないというもので、言い換えれば法律に書いてあるようなことさえしなければ刑務所に行くことはないと国家が国民にした約束のようなものです。今では当たり前のようなことですが、昔は時の権力者の恣意や場合によっては気分次第で刑罰を受けたわけで、このことは17世紀のイギリスのマグナカルタや、フランス革命などに由来した人類全体の変化でもあるのです。私の稚拙な説明より次に日本国憲法の中の関連規定を紹介しておきます。憲法の刑罰に関する条文はこれがすべてです。

第31条【法定の手続の保障】

何人も、法律の定める手続によらなければ、その生命若しくは自由を奪はれ、又はその他の刑罰を科せられない。

第32条【裁判を受ける権利】

何人も、裁判所において裁判を受ける権利を奪はれない。

第33条【逮捕の要件】

何人も、現行犯として逮捕される場合を除いては、権限を有する司法官憲が発し、且つ理由となつてゐる犯罪を明示する令状によらなければ、逮捕されない。

第34条【抑留・拘禁の要件、不法拘禁に対する保障】

何人も、理由を直ちに告げられ、且つ、直ちに弁護人に依頼する権利を与えられなければ、抑留又は拘禁されない。又、何人も、正当な理由がなければ、拘禁されず、要求があれば、その理由は、直ちに本人及びその弁護人の出席する公開の法廷で示されなければならない。

第35条【住居の不可侵】

(1)何人も、その住居、書類及び所持品について、侵入、搜索及び押収を受けることのない権利は、第33条の場合を除いては、正当な理由に基いて発せられ、且つ搜索する場所及び押収する物を明示する令状がなければ、侵されない。

(2)搜索又は押収は、権限を有する司法官憲が発する各別の令状により、これを行ふ。

第36条【拷問及び残虐刑の禁止】

公務員による拷問及び残虐な刑罰は、絶対にこれを禁ずる。

第37条【刑事被告人の権利】

(1)すべて刑事事件においては、被告人は、公平な裁判所の迅速な公開裁判を受ける権利を有する。

(2)刑事被告人は、すべての証人に対して審問する機会を充分に与えられ、又、公費で自己のために強制的手続により証人を求める権利を有する。

(3)刑事被告人は、いかなる場合にも、資格を有する弁護人を依頼することができる。被告人が自らこれを依頼することができないときは、国でこれを附する。

第38条【自己に不利益な供述、自白の証拠能力】

(1)何人も、自己に不利益な供述を強要されない。

(2)強制、拷問若しくは脅迫による自白又は不当に長く抑留若しくは拘禁された後の自白は、これを証拠とすることができない。

(3)何人も、自己に不利益な唯一の証拠が本人の自白である場合には、有罪とされ、又は刑罰を科せられない。

第39条【遡及処罰の禁止・一事不再理】

何人も、実行の時に適法であつた行為又は既に無罪とされた行為については、刑事上の責任を問はれない。又、同一の犯罪について、重ねて刑事上の責任を問はれない。

第40条【刑事補償】

何人も、抑留又は拘禁された後、無罪の判決を受けたときは、法律の定めるところにより、国にその補償を求めることができる。

刑法に関する最高法規はこれだけしかないことになりますが、ここに大きな問題が集約され、刑事訴訟法などに具体的な内容が示されているのです。実際の裁判においても覚醒剤などの強制捜査などで問題になるのが令状主義に関する第35条で、この場合は手続上の欠陥として（法律上は瑕疵と呼ばれる）無罪になることも珍しくありません。ただし殺人などの重要事件では、このような問題で無罪になった例はなく、問題の程度で結論が異なる一例です。

罪刑法定主義に関する規定が第31条です。この「法律の定める手続によらなければ」というのが刑法の他特別刑法と呼ばれる覚醒剤取締法、大麻取締法、暴力行為等の処罰に関する法律などの各条文で、これら刑法の他にも商法や建設業法、宅建業法などの中にある罰則に関する条文です。そしてさらに刑事訴訟法などの手続法に則って適正な刑罰を科されることを保証しているのです。刑法の罰則に関する個別の条文で第二編罪第77条以下に規定された各則と呼ばれるものです。これと別に第一編総則において全般的に共通する項目が列挙され、ここがまた大きな意味を持ちます。例えば刑法の原則は故意犯のみを処罰するもので過失を処罰するのは例外で特別に規定がある場合に限ると明らかにされています。未遂においても然りで特に処罰する旨の規定がなければ未遂は処罰の対象ではありません。また、犯罪の完成である既遂と未完成である未遂の場合を特別に区別する規定也没有。あるのは自己の意思によって犯罪を中止した場合の中止犯の場合は裁判官が量刑において減刑しなければならないとするのみです。この中止未遂の成立もかなり厳格な要件が要求され、ほとんどの場合は外部的な問題によって既遂にならなかったという障害未遂とされ、こ

の場合裁判官は減刑する義務を負いません。裁判官の一存で左右できるのが任意規定（任意法規）、裁判官を拘束しなければならないのが強行規定（強行法規）です。民法においてもよく出てくる言葉ですが、民法の場合当事者間の契約で左右できるのが前者、契約が無効とされ決まった法律が適用されるのが後者です。民事においても構成要件は同義なのですが、こちら方では構成要件とは国家によって認められ保証された権利の内容であるといわれています。

安田敏が非常識な行動をとるようになったのも今思えば私と文さんの間に接触が始まってからのことです。もともとヒッピーのようなところがあったのでそれほど不自然には感じていなかったのですが、その安田敏が自分の非常識さと平行して文さんを自分の同類のように決めていたのです。そして文さんの方でもそれに合わせたような言葉を見せることがありました。具体的には片町に飲みに行くのが好きで飲み友達が沢山いるようなことを話していたことです。

8月の末に新神田の「飛天龍」という焼肉屋で会社の飲み会があったのですが、ふとしたことから私は安田敏に自宅まで強制的に送り返され、そのあと二次会があったらしく片町に行き、文さんも一緒にいて、よく飲みに来ているとか飲み屋に勤める友達が沢山いると話していたそうです。この二次会の話は焼肉屋を出る直前まで誰からも話題に出ていなかったことです。

店を出てから急に決まったのかも知れませんが、本当にそのような二次会があったのかも疑わしく、実際にあったとしても意図的に私をはずした可能性が大です。店を出た時点で東力のアパートまで安田の車で送られたのですが、その時浜口卓也も同乗していて、私のアパートに灯りがついていないのを見てずいぶん意外そうに驚いていました。

翌日の話しでは二次会の後安田敏と浜口卓也は安田敏の知っているスナックに二人で飲みに行っていたそうです。安田敏がお金を持っていなかったとか彼女を紹介しなかったとか浜口卓也の方も不満を口にしていたので、この話しは両者に共通するものです。

私が安田敏に文さんのことを好きだと相談したのは9月の20日過ぎ頃だと思います。繁克と吉浦が完成直後の控室に来たときのことは別のところで書いてあると思いますが、その時の会話の中で安田敏は結婚すると好きな女が出来ても告白できないと語っていたことがありました。あるいは文さんのことを指しているのではないかと感じたことを覚えています。

ずっと以前にも私に好意を寄せてくれているらしい女性を安田敏に紹介し、彼を傷つけてしまったようなことがあったので、友人関係を考える上でも文さんのことは早めに話しておいて方がよいと判断して、その意味でも彼に相談したのですが、私の一抹の不安は杞憂のようであり、彼は意外そうでもなく明るく私の話を聞いてくれました。

彼の口から一番に出たのは、やめておけということと、同じ会社で毎日のように顔を合わせるのでダメだったらお互いに会社にいづらくなる。大変なことになるという口振りだったのです。私はそれまでの文さんの自分に対する態度、つまりフィルム張りを手伝ってくれたことなどを詳細に話したのですが、彼は軽く受け流し、同じ会社やし気遣っとるんや、今時の若い女の子というのは皆そういうものだといひ。特別な気持ちなどないときっぱりと断言していたのです。

今思えば彼のその態度はその場の私の会話に即したのではなく、あらかじめ決められていた言葉をそのままに話していたとしか考えられません。安田敏に相談してすぐに同姓である安田敏の妻にも私は文さんのことを相談したのですが、妻の話はより一般的で世相を反映した説得力のあるような内容でした。

この妻の名前はたしかユミだったとおもいます。漢字は分かりませんが確かこのような名前だったと思うので以下この名前を使います。彼女と知り合ったのも安田と再会した直後、つまりその年のゴールデンウィークの前後でした。

ちょくちょく花里のアパートの方に遊びに行き、彼女もいたことの方が多かったのですが、おかしく感じたことは、彼女が私の前で決して顔を見せなかったことです。8畳一間のアパートだったので必然的に同じ部屋にいることになるのですが、部屋の半分近くを占める別途の上でシーツのような毛布を頭からかぶり何時間もそのままです。私がいることを嫌がっている風でもなく話しはしていたのです。

安田敏にいわせれば妊娠して顔がむくんでいるので人前に出たくないという説明でした。一応納得の出来ないではないような説明だったので深く気にしてはいなかったのですが、印象的だったのはその彼女が、私の前にその姿を見せた日のことです。それは忘れもしない12月22日の夜、浜口卓也に頼めなかった文さんのためのプレゼントを安田敏に頼もうと訪問した時のことです。

彼女は当然のように起きて家事などをしていたのですが、それは出産寸前でお腹が大きく出ている姿で、ほとんどの女性はそのような姿を極力人に見られたいのではないのでしょうか。しかもマタニティの洋服のようなものであれば余り目立たないはずなのですが、彼女の格好は昔高校生か中学生が体育の授業の時に来ていたような地味なトレーナーでお腹の張り具合が大きく目立つものだったのです。

安田敏の自宅での電話の線抜きが始まったのも11月に入った頃からでした。電話に出ない上、その時に限って午前中から仕事の予定が決まっているのに何度連絡してもつながらないと、私は松平や浜上から責められ、花里まで迎えにいけとまでいわれていたのです。

そして今考えれば丁度この線抜きが終わった頃から文さんが自宅の電話に出なくなったのです。今思えば意外なほどに私はこの二つの事実を関連づけて考えることはありませんでした。そう考える余裕がないほど当時は状況がめまぐるしく、不可解で不合理なことが次々と生起していたのです。

ここでは詳しく述べませんが、その一つが東渡の行動で、この頃に東渡が運転手から配車係になったのです。安田敏と東渡の常軌を逸した言動はなにが起こっても不思議ではないような先入観をすでに私の脳に埋め込んでいたのです。これは文さんにおいても同様で、免疫や社会経験から考えればより以上であったことは容易に推定されます。

そしてこの非常識な状況の中で唯一の常識の道標というか水先案内人の役割を担ったのが池田であり、松平であったと考えられます。殊に松平においては東渡の包丁事件でも見られるように自分が被害者で弱い立場の経営者であることを強調していたのです。

10月頃の安田敏の話ですが、文さんは頻繁に片町に飲みに出ているとともに、ロックバンドとも付き合いがあり、兄もそのようなつながりがあるらしいと話していました。このバンドの話の中で安田敏と文さんの共通の友人ないし知人で、「カジ」という名前が出ていました。

これは漢字で書くと「梶」、「鍛冶」、「加地」といった名前が考えられます。この事実も先日まで安藤という名前も知らなかった情報不足の私に、作り上げられた文さんのイメージとして定着していた要素の一つなのです。

なお、この「カジ」という名前については、安田敏のことで後日おかしいことがありました。それは事件直前の3月29日の日曜日、誰もいない会社一階で安田敏が電気もつけず一人で電話をしていたときのことで、たまたまそこに入った私が、別の電話にかかってきた受話器を取り上げると若い女性の声で安田敏を呼び出してのです。

初めは安田敏の名前を出さず、ポケットベルが鳴ったので掛けたというので間違い電話ではないかと聞き返したところ、先方が観念したように安田敏の名前を出したのです。「カジ」という名前は初めに先方から名乗ったものですが、聞き覚えのある名前だと感じていたのです。

これなども文さんと知り合いの今時の最先端のような男、同じ名前の女性で結婚している安田敏と付き合っている女という構図で、私の文さんに対する見方に悪影響を及ぼそうとした工作だったのかも知れません。勘ぐりすぎのようですが連中のやることというのはこの程度のレベルであり、深層心理や個人的社会経験にまで踏み込んだ極めて巧妙なものとしか考えられない事実が他にも散見されるのです。

おそらく心理学や政治的権謀術数、法律にも精通した竹沢や松平、東渡らが立案し、練り上げたものであると思います。私と文さんとともに連中の手練手管に翻弄されていたのです。竹沢は饒舌で講釈師のようなところがありました。人間的には以前からに馬鹿にしていたような私ですが、頭の方はよく世渡りがうまそうでした。

また市場急配センターに移った頃には竹沢夫妻に対し、同情心や恩義のようなものも持つようになってしたのです。実際に市場急配センターでは東渡と浜上の二人が、竹沢が私を養子にして会社の経営を託するという話しも冗談のように本当のように話していたのです。12月の19日頃には夫妻が市場急配センターに来て私にジャンパーとズボンをくれ、翌年の2月頃にも市場急配センターの一階で私を夫妻で食事に誘うことができました。養子になる気など毛頭なかったので冗談でも断ったのですが、老いた哀愁のようなものを漂わせていたのです。因みに竹沢夫妻には子供がありません。精神医学や心理学については添付する資料を参考にしてください。

浜口卓也について

彼が市場急配センターに来たのは平成元年の夏か秋頃でした。正確なことは現在思い出せませんが裁判の資料の中ではもっと正確で詳細な記述があるはずです。

>>> : Linux LibreOffice : 2023-09-29 00:40:36 >>>

平成2年6月の片山津温泉「ホテル長山（あるいはホテルながやま）」での一泊の慰安会は、会社の事務員と認識していた被害者安藤文さんの姿がなく、被告発人浜口卓也はまだ市場急配センターに入っておらず参加していませんでした。すぐ後に退社したYTと藤田さんの姿がありました。

<<< : Linux LibreOffice : 2023-09-29 00:43:59 <<<

私にすれば突然金沢市場輸送の会社で顔を合わせたのですが、その半年ぐらい前に彼は私の自宅に電話をしていたらしく前妻に連絡を取るよう頼んでいたそうです。市内配達の仕事をするので私に相談したかったそうですが、なぜ私に連絡が伝わらなかったかということ確かにそのような電話があったことは妻から聞いていたのですがその相手というのが妻の言葉ではどうもカーボこと中〇〇也を指していたのです。それで能都町姫の中〇の実家の電話番号を探して連絡を入れたのですが話しは全く噛み合わず結局そのままにしていたのです。

二人とも田舎の先輩に当たるのですが浜口卓也の方は年も私より一つ上で中学も高校も同じで自宅の方にも何度か遊びに行ったことがありより親しい間柄でした。中〇の方は私より3つか4つぐらい上で一時期一緒に遊ぶことが多かったのですが先輩を介した間接的な間柄でした。

まず中〇の方が昭和63年の秋頃だったかに市内配達の仕事をするようになったのです。金沢市場輸送の会社が移転して2, 3ヶ月、松平が来て1月ぐらい後のことでした。正式な社員ではなく当初から自分で購入した2トン車で仕事を請け負ういわゆる持ち込みを始めたのです。それから2, 3ヶ月ぐらいして次は同じ先輩で3つ年上の山〇シンイチ（漢字不明）さんが来て同じように持ち込みの仕事を始め半年ぐらいかすると冷凍機付きだったかの新車の2トン車を購入しました。

それからさらに半年ぐらいかして浜口さんが来たのですが彼もシンイチさんと同じような2トンの新車を自分で購入したのです。もちろん持ち込みです。シンイチさんは遊び仲間とは別に中学の時相撲部に入っていた関係でいつも水産高校の方に練習に行っていたので知っていたのですが社会に出てからも間接的な友人関係で何度か遊んだことがあり、昭和59年頃彼を金沢市場輸送に紹介し面接を受けたこともあったのです。

カーボの方も同じ昭和59年の秋私がやめた直後に金沢市場輸送に入社し4トンの長距離に乗っていたようで比較的長く1年以上はいたようでした。この入社の方は私の紹介とは全く関係ありません。オジコこと干〇〇行という珠洲の男の方はやめる一つぐらい前に紹介で金沢市場輸送に入り同じく4トンの長距離に乗っていました。

そもそも私が長距離のトラックに乗るきっかけになったのは昭和58年の8月から11月頃にかけて観音堂の安田敏のアパートに居候していたとき、当時中西水産輸送で4トンの長距離に乗っていたオジコがちょくちょく遊びに来ていて、一度誘われて広島から静岡にかけた運行に同行したことがきっかけのようなものでした。

>>> : Linux LibreOffice : 2023-09-29 00:44:54 >>>

行き荷が山口県の宇部市で、その日に広島県の三原市から荷物を積んで、翌日に静岡県清水市で荷降ろしをして、山梨県内の国道20号線から大糸線経由で新潟県糸魚川市に出て金沢に戻った記憶。

<<< : Linux LibreOffice : 2023-09-29 00:48:07 <<<

観音堂の安田敏のアパートは長屋のような二棟向かい合った古いアパートでその5所帯が知り合いの若者ばかりでたまり場ようになっていたのです。その一つがヒロボこと山〇という珠洲市出身の私より2つ年上の人物で安田とは同じ年になります。彼は遊んでいた半年後ぐらいから、すなわち59年の春先ぐらいから当時はまだ高井水産と呼ばれていたのですが現在の山水運輸に勤め始め現在もいるようです。山水は石川中央魚市の下請けで関西から金沢の鮮魚輸送を独占的に行っている会社でヒロボは現在中央市場で中継と呼ばれる福井、富山方面などの荷物の配送に従事しているようです。つまり毎日夜になれば市場に出て朝方まで荷物の積み替えなどをフォークリフトを中心に行っています。かねてから顔を合わせば暫く話しをしていたのですが彼の口からはいつも安田敏のことが出ていました。現在安田は宇出津から金沢の市場に鮮魚を運送する仕事をしているらしいので頻繁にヒロボとも顔を合わせていることが考えられます。

>>> : Linux LibreOffice : 2023-09-29 00:49:17 >>>

- X ユーザーの刑事告発・非常上告__金沢地方検察庁御中さん：「新崎という運送会社のことは全く知らず、宇出津で聞いたこともない名前だったのですが、柳田運送は割と大きな会社だったのか、トラックを見かけることも多かったのですが、それはずっと前に会社がなくなったようです。

そういえば新崎のトラックもここ数年は見かけていないと思います。」 / X
https://twitter.com/kk_hirono/status/1167234624021360640

この新崎のことは被告発人安田敏に電話で聞いたような記憶。崎山に会社があるとも話していたが、崎山で新崎のトラックをみたことはなく、辺田の浜の農免道路にトラックの駐車場があった。8年ほど前はたまたま宇出津の魚市場でトラックを見かけていたような記憶。

くくく：Linux LibreOffice：2023-09-29 00:51:14 くくく

同じ中継で、こちらは中央市場の正門側の方で仕事をしているのが守田水産で、まずこの中継部門が平成2年頃から都商事の看板を掲げるようになっていたのです。その現場責任者のような男が大西真でした。

浜口卓也が文さんと私の関係についてある程度認識していると初めて私が意識したのは12月21日のクリスマスプレゼントの会った日の夕方のことです。その日の夜、私は藤江陸橋下から投げ捨てたプレゼントを拾いに行き、その足で南新保の彼の自宅アパートに行ったのです。24日のクリスマス当日に会社で文さんにプレゼントを手渡してもらうことが目的でした。結局言い出せなかったのですが、飲みに誘われ二人で片町に行ったのです。

次が年が明けて平成4年の一月の初めのことで、ある日の夕方二階で浜口卓也、河野、竹沢が大型車の増車のことで日産ディーゼルの人と話をしていたとき、丁度会社に戻った私が台所にコーヒーマーカーにコーヒが沸かしてあるのに目を止め、どれともなく「コーヒ飲んでいいけ？」と声を掛けたところ、即座に文さんが「うん」と気持ちを込めた大きな返事で答え、その場で仕事の手を止め私のいた台所に来て食器洗いを始めたのです。

意外な状況に戸惑った私は入れ替わりで台所を出たのですが、出入り口付近まで来たとき丁度話し合いが終わり、浜口卓也が来て笑いながら私の背を押して台所の中に入れようとしたのです。この時咄嗟に私は浜口卓也に前日の夜に追突されたことを話しました。この事故は入江派出所の扱いになったので正確な日付が期待されます。

出所後問い合わせをしてその日付を聞いたのですがやや納得のいかない日付だったかもしれません。その日は天気が余り良くなく、金沢ではまだ雪が降っていなかったように思うのですが山間部では大雪の恐れもあるような気象情報がありました。仕事柄冬場の天気は気に掛けるのですが、そのことでも浜口卓也と話しました。私は今から大阪に行くところで、浜口卓也の方は関東に行くと話していました。

大西真について

大西真は私が初めて金沢市場輸送に来た頃から大型車で長距離に乗務していました。本恒夫と同じ頃から会社にいたようですが勤務態度はあまりよくなかったようです。仕事自体は問題ないのですが時々休んだりしていたのかもしれませんが。本恒夫とほぼ同期だったのですが本恒夫が配車をするようになって衝突が度々あったようで、そのような不満をよく私に話していました。本恒夫より年輩で当時50才ぐらいだったと思います。昭和63年から平成元年のイワシのシーズン、松浦とともにもう一台のダンプに乗務していてこの頃私は毎日のように大西と一緒にいて毎日のように食事をおごってもらったりパチンコや、私はしないのですが雀荘の付き合いをすることもありました。競馬場に行ったこともあります。

大西は池田に気があったのかしれませんがその頃三人で北安江のアップルグリムというレストランに三人で食事に行ったことがあり、大西の奢りで池田、水谷、など5、6人で片町に飲みに行ったこともありました。イワシの仕事が終わって大西も長距離の仕事に戻ったのですが2、3ヶ月ぐらいすると本恒夫に我慢が出来なくなったのかやめて行き、守田水産に行き半年ぐらいか大型の半分持ち込みのようなことをしていたのですが、それから中継の仕事をするようになったのです。

平成3年の春頃には新車のクラウンに乗るほど出世していたのです。その前から大西に守田の大型の持ち込みのような仕事をしないかと誘われていたりしていたのですが、家族のこともあり毎日家に帰れる仕事にかわりたいと考えていた私は大西に大型車での中継の仕事に使ってくれないかと頼んでいたのですが4トン車ならばあるが大型は今のところ空きがないようなことをいわれていたのです。

大西の息子の〇〇の方も当時守田にいたのですが私の入社を歓迎して強く勧めていたのです。〇一はまだ松平が来る前から金沢市場輸送で市内配達の仕事をしていたのですが何度か入退社を繰り返して、大西がイワシの仕事をしていた時期には1年か1年半ぐらい少年院に行っていたのです。その後金沢市場輸送に戻り市内配達の仕事をしていたのですがたぶんその途中で松平が来て、もともと勤務態度がよくない上、若くて血の気が多いので荷主かなにかとトラブルを起こし、そんなことが重なって松平に首にされたそうです。〇一は松平のことでずいぶん腹を立てており私に色々と話していたのですが、〇一の方にも問題があると考えていた私は彼の話をほとんど聞き流していたのです。

浜口卓也も一時期大西真のもとで深夜中継のアルバイトを松平に内緒でしていたようです。YTが守田に行ったのも大西の紹介かどうか分かりませんがその可能性があることは考えられます。YTは同じ中西で配車をしていた藤田という男を金沢市場輸送の配車係として入社させていたのですが、この二人で当時まだ中西運輸商がしていた佐川急便の九州便を金沢市場輸送で取ろうと計画していたのです。

九州の運転手を5、6人ぐらい一度に連れてきていたことがありました。暫く保冷車で金沢市場輸送の長距離のメインである東北便の鮮魚輸送をさせたのですがちょうど雪があった時期でもあり務まらないと考えたのか短期間で皆いなくなりました。

このうち一人だけ残ったの者がいて名前がちょっと思い出せないのですが東渡が来てから彼と親しくしていました。YTらにいわせれば佐川の定期便をひっぱる事業はYTの手柄となるので本恒夫が横やりを入れてねちねちと妨害したそうです。YTはこの話をよく私にしていました。

その後守田で一任するとか別の会社でやると色々言っていたのですが、結果はやや意外な方向に落着しYTは守田に行き、行動を共にするはずであった藤田の方は津幡の方にあるらしい協共運送とかいう会社に行きそこの配車係になったのです。

平成3年の秋頃には松平を訪ねて市場急配センターに来ていたこともあり、その後協共の仕事で加賀の大聖寺の大同からホールを宇都宮まで運ぶ仕事を私も二度ほどしたことがあり、後の方は事件の一週間ぐらい前の仕事でした。

>>> : Linux LibreOffice : 2023-09-29 01:03:54 >>>

長い間、平成4年3月の下旬の一回だけの記憶になっていた運行。

<<< : Linux LibreOffice : 2023-09-29 01:04:44 <<<

平成4年の4月1日が事件当日です。2月に九州に行ったとき帰り荷の世話を受けたのも協共の営業所で電話だけのやりとりでしたが佐川の仕事をしているようでした。藤田の方が松平とは付き合いが表面的にはあったようですが（内部のことはわかりません）、この時の九州からの電話ではYTのところにも電話を掛け、他に津山という以前中西運輸商で配車をしていた人物のところにも電話を掛けたのです。

>>> : Linux LibreOffice : 2023-09-29 01:05:47 >>>

YTに電話をかけた記憶はなく、津山さんが電話に出たのも協共の営業所という記憶になっていた。大牟田市の運転手も同じ。

<<< : Linux LibreOffice : 2023-09-29 01:07:31 <<<

この時私は丸2日ぐらい九州で泊まり結局空荷で金沢に帰ったのですがこの時の状況も何か胡散臭いものがあったのです。出掛けにまず文さんの裏駐車場が終焉したことも私にすれば大きな出来事でショックを受けたのですが、翌朝北九州から会社に掛けた電話で松平が慰めるような声で何回でも電話してくれと言ひ。

午後福岡からの電話では文さんが優しく対応してくれたり、荷物がなくて帰るときの電話で文さんが「また電話してください」と意味ありげなことを言ったり、些細なことなのですが当時の状況に照らせばめまぐるしいことが続いていたのです。松平はまだ九州にいて欲しいと言っていたのですが私の方が断って帰ったのです。

これと似たようなことは市場急配センターでの通常の例外的仕事のもう一つである四国の松山に行った運行の時もそうでした。通常の仕事というのは関東と関西折り返しの運行がメインだったのです。文さんが電話に出ることを一日一回などに限り微妙な状況操作の一角を担っていたのが梅野も梅野で、福岡市須崎埠頭からの電話、愛媛県西条市付近高速道路パーキングからの電話、翌日の姫路バイパスからの電話など随所の現れこの計画性が最も露骨に現れたのが3月18日の清水行きのミールを積んだ夕方の電話でした。

安田繁克

八月中に繁克が私の前に姿を現したのは先述した二回ですが、次に会社に来たのは9月の中旬で、丁度当時建築中だった2階建て市場急配センター事務所の一階を運転手控室のようにした工事が完成した直後でした。

文さんとのフィルム張りの件があったときはまだ建築中で丁度大工さんが出入りしていたのです。当日は特に午前中の方が集中的でした。午後は始めたのが遅いか何かで文さんと二人きりでフィルムを張っていたときにはあるいはいなかったかもしれません。

この時の目撃者は午前中が（9時頃）、山下強と多田敏明。午後の方が、竹沢、松平、カベヤの三人です。記憶のつながりは余りはっきりしていないのですが繁克が金沢市場輸送の吉浦と二人で来たのは完成直後だったのであり、またまだ安田敏には文さんのことを好きだと相談していなかったのも、やはりフィルム張りの直後であったと思います。

この時出来たばかりの控室の中で繁克と吉浦と安田敏と私の四人で暫く雑談をしていたのです。すでにこの前から繁克が仲買の若い女の子と付き合っていることは安田敏から何度か聞いていたのですが、繁克本人の口からそのことを聞いたのはこの時が初めてで、自分の方から彼女に声を掛けただなど安田敏の質問に対して具体的に話していたのです。

私自身少し前まで市内配達の仕事をしていたとき中央市場の仲買から荷物を積んでいたのもその女性の顔は知っていました。特に多田敏明などと長話をする姿を何度か見かけたことがあり、山下強とも話していることがありました。

確か会社の取引上一番有力な感じの片山青果の社員だったと思います。もともと市場急配センターは中央市場内の青果仲買が出資して作られた株式会社だと金沢市場輸送の武田などから耳にしていたのですが、昨年の秋（平成9年）鳴和の職業安定所に行ったとき見た市場急配センターの求人広告で仲買から設立された安定した会社のようなことが謳ってありましたのでこのことはまず間違いありません。

この時繁克はほとんど受身のかたちで大人しく話しをしていたのですが、印象に残っていることはともに来た吉浦の方が彼女の作り方のような話題の中で、脈があると思われる態度の女ならば確実に物に出来るようなことを話していたのです。

その次に繁克が会社に来たのは10月の10日過ぎの私が給料をもらった日でした。大型に乗務して2、3回ぐらいはまだ10日払いの給料日でしたがそのあとは他の市場急配センターの社員と同じく5日払いになりました。この時はまだ10日払いだったと思います。11月も10日払いでした。

この時だったと思いますが、繁克はS藤と一緒に来ていたと思います。ただ繁克とS藤と一緒に話しをしていた姿は記憶にないのです。別行動のような感じを受けた覚えがあります。この時繁克は顔を目のあたりを中心にひどく殴られた痣を作り、目の中にも黒目の三分の一ぐらいの大きさで充血した血の固まりのようなものまで出来ていました。話を聞くと片町でケンカになり一緒にいた者がケンカが始まると逃げて行き自分だけ集中的に殴られたような話で、一緒にいた友人は多田敏明の従兄弟のような話でした。

>>> : Linux LibreOffice : 2023-09-29 01:13:22 >>>

被告発人安田繁克とS藤が二人で市場急配センターに来ていた記憶はない。S藤は9月から10月に2,3度姿を見せ、一緒に食事に行ったこともあったが、頼まれて1万円を貸すと、それ以来姿を見せなくなった。次に姿を見たのが平成4年5月28日で金沢西警察署の二階。

<<< : Linux LibreOffice : 2023-09-29 01:15:35 <<<

控室で話しをしていたのですが、丁度昼時で、文さんが二回から降りてきて私に何か話しかけたのです。確か買い物に行くが買ってきて欲しいものはないかと尋ねたか、頼んでいた弁当のようなものを届けてくれたのだと思います。このように文さんが私に使いを言うてくることは何度かあったのですが、私がいる周辺で同じことを他の社員に尋ねることもありました。

これも文さんの単独の行動とは思えず、池田か松平の指示だと考えられます。この時も文さんは繁克がそばにいるのに全く気にしていない感じでした。7月の繁克の話しや彼の私の事件の供述調書では、少なくとも私が市場急配センターに来る2ヶ月前には市場急配センターを辞めたい話しなのですが、実は私が竹沢会長と直に話しをして金沢市場輸送を辞めた直後、その足で市場急配センターに電話を掛けたとき、電話に出た文さんが安田敏への取り次ぎに対して、どちらの安田ですかと聞き返していたのです。

繁克の他に安田という名前の社員がいたとは考え難く、このことはまだ繁克が市場急配センターで仕事をしていたか、少なくとも文さんの認識ではまだ市場急配センターで仕事をしていると考えていたと強く推認させる事実なのです。市場急配センターでは仕事の内容もありますが毎日会社に

顔を出しているわけではなく、短時間で日報や伝票だけを出していなくなる社員も少なくないのです。

極端に言えば日報や伝票だけを提出することだけが事務所に顔を出す用事のようなもので他の事はほとんど直接市場の売場に出向くか電話で事足りるような感じです。また、この時の繁克との会話ではより個人的な話しをし、かねて繁克が以前暴走族のリーダーをしていたという話しを聞くと、具体的に「狂走恋命」という名前までだし、自分は3代目とか4代目のリーダーで後任のリーダーがよくなかったなどと話し、そのことは多田敏明のことを指しているようでもありました。

ヤクザを辞めたときのことも聞いたのですが、こちら方は2月1日の夜の方だったかもしれません。世話になった兄貴分のような人物の名前や組織の名前も挙げていたのですがほとんど覚えていません。組織の方は滝本組だったような気がします。突然ずらかり、数ヶ月してから兄貴分に会ったがなにも言われなかったと屈託なく話していました。

これ以来繁克の姿を見かけることはなく、問題の2月1日に彼は極めて不自然なかたちで私の前に姿を現したのです。最も、私はすべてが計画的な出現であったと考えてほとんど間違いないと思っています。また、これまでの間、繁克が文さんとの交際を仄めかす言動は一切ありませんでした。また、その日私は、S藤を銀行に付き合わせ、中央市場の前の食堂で食事をおごりました。

その数日後、来たばかりの新車で中央市場の裏の石川丸果倉庫で馬鈴薯を積んでいたとき、佐藤が一人で来て、頼み込んだ挙げ句に1万円借りていったのですが、それっきり姿を見せなくなったのです。

平成4年2月1日の夜のことでした。その日私は夜10時頃だったかぐらいまで会社にいたので、一人ではなく東渡、浜上、水口もいました。解散ということになり乗用車に乗るため皆で裏駐車場に出ていました。そこに見慣れぬ4WDが表の方から入ってきてゆっくりと裏の方に通り過ぎていったのです。不思議に思ったのは他の四人が示し合わせたように押し黙りその不審な車のことを全く無視していたことです。帰りがけに東渡は私に、「これからマツに配車してもらえや」と捨てぜりふを残して行きました。

東渡らが帰ってから私が帰るまで幾らか間があり、会社を出て距離にして100メートル弱ぐらいの金石街道に出る信号待ちでいきなり繁克に声を掛けられたのです。同じ市場急配センターの運転手の多田敏明を探しているということでした。

その日の日中一階控室で東渡らの誰かが多田敏明が珍しく4トンで古河に行っている。雪が多いので戻るのは10時頃になるなどと話していたのです。それを知っていた私はその旨を彼に話し、出来れば一度文さんのことについて彼に話しを聞いてみたいと考えていたので、一緒に会社で多田敏明を待つことにし、二人で会社に戻ったのです。

彼の奢りでビールなどを買に行き、控室で話しを始めました。この時、彼は文さんとは付き合ったことがないと言い、一度だけ文さんの自宅に電話をしたことがあるが、それは会社の者のポケットベルの番号を尋ねるための電話だったと言いました。一方で、切り出しから「あの娘口悪いやろ」、「前に県庁に勤めていたからそのプライドを持っているもんやと解釈していた。」、「「ディスコによくいるような感じやけど堅い女や」、「母親は塾を経営しているか講師をしているらしく、父親も堅いしごとをしている。」、「彼女が泉中で、自分が高校の出身で共通の友人もいたから会社でよく話し、友達を交えて一緒に飲みに行ったことも何度かある。」と言ったようなことを話していたのです。

そして多田敏明が来たのは話しを始めて1時間が長くて2時間ぐらい経った10時半か11時頃でした。いつもはよく喋る多田敏明がその時は大人しく自分から話すことはほとんどありませんでした。多田敏明の前で文さんの話はあまりしなかったと思います。

それ以前だったと思うのですが、会社で文さんのお父さんは弁護士をしていると聞いたことがあったのですが、このことを誰から聞いたのかははっきり思い出せないのですが、多田敏明以外には考えにくいのです。

繁克も文さんの家庭は教育一家だと話していました。普通以上に厳しい家庭と割と奔放な私生活という矛盾したようなイメージが私に植え付けられていたのですが、このことは文さんが繁克と付き合っていたのかどうかと言う話しにも共通する曖昧さだったのです。もともと私としては文さんが繁克と交際していたのかどうかと言うことは重大な関心事ではなく、以前のことは仕方のないことと諦め、聞きたくない気持ちの方が強かったのですが、同じ会社の仲間として顔を会わせることもあるのであまり関係を損ねたくないと考えていたのです。

確かにその10日ぐらい前に浜口卓也から文さんと繁克の交際の事実を知らされたときはショックでした。それは彼女が高校の時以来彼氏がいないと自ら話していたことと、同じ会社の中で男性と交際し、それがうまくいかなかったのに私に対して積極的な行動を示した考え方に普通ではないものを感じ、人間性に疑問を持ったからです。

繁克の口からも間接的に文さんと交際していた時期に人間不信になって苦しんだという言葉がありました。また、「広野さん、女殴ったん。女のためを思ってやろ（若しくは女をよくしようと思って）、ワシ、殴りたくなる女初めからつきあわんぞいね。」と、これも文さんのことを示唆しているような意味ありげなことを自信ありげに話していたのです。

これは私の前妻の話の時に出了ものでありましたが、一方で、あまり知らないはずの前妻のことはあまり話しも聞いていないのに無批判に評価しておりました。繁克の結論は文さんと交際の事実はないと言うことで終始そのことをこだわりすぎているぐらいに強調していたのです。

この件について繁克は供述調書のなかで、トラックに乗っていたら突然前に私の車が割り込んで、降りてきた私が「お前本当に文ちゃんと付きあっとるんか」などと脅迫的に問い質した、という事になっており、多田敏明の存在もなく、無線仲間を探していたという話しになっております。この一事からもこの時の繁克の出現は明らかな計画性を窺わせ、意図的に事実を歪曲して利用していることが明らかです。

多田敏明の方も供述調書の中で私が繁克と会って話しをしたことがあるらしいと供述し、自分がその場にいたことは暗に否定しているのです。

初めて多田敏明に文さんのことを話したのは12月の中頃でしたが、彼の第一声が「広野さん、事務員喰ってしもたん」でした。これは1月21日の火曜日の夜に初めて浜口卓也に文さんのことを話したときと全く同じで、彼も喰ったのかと言って来たのです。

かいつまんで事情を話しと極端に一変して「鬼のような女」だと言いだし、「お前、あの女の顔見て普通の女じゃないがわからんか?」、「ワシやどうも好きになれん、まあ、かもうがだけタダやし会社でかもとるけどな」と言い、続けて「でもいいところがあると一つだけ思ったことがあ

る」と前置きの後、「前にヤス（繁克）と付き合っていたとき毎日弁当を作ってきていた。」と感心したように話していたのです。

そして彼の方からはっきりさせろという話しになり、文さんの自宅に電話を掛けたのですが、この時に初めてお父さんが電話に出られたのです。この直前までの経緯は添付する「証拠番号5」の中に詳細に書いてあります。会社に戻り、文さんが帰った後で控室に入ったところ、そこに浜口卓也の他、浜上、東渡、水口、河野、山下などの安田敏を除くほとんどの大型運転手が居て、入ってくる私の姿を見てニヤニヤしていたのです。

そこで浜口卓也の方から自宅に食事に来るように誘われたのです。浜口卓也は当然の事実のように文さんと繁克の交際を肯定していたのですが、意外なことに彼自身の供述調書のなかでは、会社の中で文さんと繁克が交際している姿を見たことは一度もないようで、繁克本人の口から聞き、あまり親密な交際ではなく知り合いの付き合いのような口振りあったと供述しています。なお、文さんが繁克のために会社に手作り弁当を持ってきたという話は梅野も自分の供述調書の中で認めている事実です。

一方、多田敏明の方ですが、彼には12月に文さんのことを話して以来ちょくちょく文さんのことを相談していました。それまで相談していた安田敏と折り合いが悪くなったので丁度入れ替わったかたちになります。

細かいことは今ははっきりと思い出せないので省略しますが、とにかく彼の態度も何かを隠しているような煮え切らないものでした。繁克のことを私が知ったのは浜口卓也から話しが初めてで、そのことを多田敏明に話したところ彼も白状した感じで、文さんが繁克と一緒に自分のアパートに何度か遊びに来たことがあると言っていたのです。

それでも親密な交際ではないようだったと話していました。一番明確なかたちで彼が文さんのことを話したのは2月の23日の土曜日の昼過ぎから翌日曜日の明け方にかけて新潟行きの仕事に彼を付き合わせた時のことでした。この時は珍しく彼の方から同行したいとしきりに言ってきたのです。

一方で松平と東渡は多田敏明を連れて行くことに反対し、当時険悪な関係になっていた安田敏を連れて行けとしきりに勧めていたのです。結局松平らの意見を私が押し切って多田敏明を連れていったのですが、その仕事というのは前日か前々日に四国の松山から積んできたイヨカンを新潟県の六日町と中条町の各市場に卸しに行く仕事でした。

遊び好きで交友関係もずいぶん賑やかならしい彼が土曜日の夜になぜわざわざ仕事の付き合いを自発的にするのか不思議に思ったのですが、このことは12月24日のクリスマスの夜に古河からの山三青果の定期便の福井中継に来ていた彼がすごくこやかに愛想良く仕事をしていた時にも感じたことです。

>>> : Linux LibreOffice : 2023-09-29 01:29:01 >>>

被告発人多田敏明を連れたい新潟への出発が土曜日ということは全く記憶になかった。四国の徳島行きの出発は長い間、2月18日と勘違いしていて1年ほど前に2月19日と確認。徳島県小松島市でのミールの荷降ろしが2月20日で、愛媛県松山市の上組の仕事でいよかんを積んだのが2月21日、その翌日が2月22日で土曜日と確認。

<<< : Linux LibreOffice : 2023-09-29 01:31:50 <<<

いつものことですが彼は気分の変調が著しく機嫌の悪いときはものすごくムスッとして黙っているのです。この新潟に出掛けたときも1時間ぐらいいは機嫌が良くよく話していたのですが、急に喋らなくなり六日町を出てからは疲れたようで眠たがっていました。

六日町と中条は同じ新潟県内でも逆方向になり普通に走れば2時間ぐらいかかると思います。その中条の市場に着く寸前頃から彼が暗い顔で話しをするようになり、文さんの話題になったのです。土曜日の深夜はどこの市場も休みなので当直の人しかおりません。その当直の人を探すのに時間が掛かったのか、その間に彼は文さんと繁克の事を色々と具体的に話したのです。

今すべてを思い出すことは困難だと思いますが、どれも印象的な話だったのでよく覚えています。まず彼は、文さんが繁克のことを今でもすごく恨んでいると断言しました。そして繁克が仲夏の彼女の方を選んだのは文さんの方が問題があり、人間的にも劣るからであるように話しました。以前文さんの方からいい格好をして来てくれと頼まれ、文さんの自宅に行きお父さんと一緒に酒を飲んだことがあると繁克から聞いたと話しました。お父さんは堅物というか面白みのない人間で話題も乏しく、すごくまずい酒だったと話していたそうです。あの繁克が気を使うくらいだからよほど堅苦しい家だと多田敏明は感心したように話していました。自分も以前ヤクザの娘と付き合ったことがあるが、それ以上に気が張り大変だとも意見を述べていました。

中条を出てから金沢に戻る途中、食事をしたり米山S・Aに立ち寄ったりしたのですが、多田敏明は不機嫌で寝ていることが多くあまり話しませんでした。覚えているのは長岡ジャンクション（関越道との分岐地点）の手前あたりで、彼が働き、同世代の者より高い給料をもらっているのにお金を使わず、手持ちのお金も少ないのは彼女が以前サラ金で作った借金を支払っているからだと言ったと秘密を打ち明けるように話したことです。

丁度この頃会社で東渡が多田敏明は若いのに給料をもらいすぎているなどと多田敏明の生活態度を非難していることもあったのです。これもたぶん作り話だと思いますが、その意図は私の前妻のことで共感と呼び、心を許し、信頼を高め胸襟を開かせることが目的の一つで東渡らの指図であったと考えられます。

金沢に戻った時はまだ暗かったのですが、会社にトラックを止めその中で多田敏明が語りだしていた頃にはすっかり明るくなっていました。2月なので6時過ぎくらいまで多田敏明とトラックの中で話しをしていたと思います。金沢に着き20日くらい前に繁克とビールを買いに行った諸江の24時間の酒屋に寄ったのはまだ4時半頃くらいではなかったかと思うのでかなりの時間多田敏明と話しをしていたことになります。

多田敏明が起きて喋りだしたのは酒屋を出て北安江の交差点を右折した頃からです。それからの話題は文さん一色だったと思います。初っ端から思わず殴りつけてやろうかと思うくらい挑発的な事を話し始めたのです。

これも細かいことまで今思い出せませんが、会社にいると一階で浜上と東渡の二人が、トッチ（多田敏明の通称）文ちゃんと付き合えばいいがい、といい。彼を二階まで連れて上がり文さん本人の前で同じことを話したところ、文さんは「だって多田君、彼女おるんやろ」と言いながらもまんざらではなかったと話していました。

以前にも自分が免停中に松平が市内配達に文さんを同乗させたことがあるらしく、その時だったか彼女が事務員をやめて運転手しようかと考えているなどと自分に話していたそうです。また文さんの軽四を借りて買い物に行ったこともあると自慢げに話していました。この時も私は会社のこ

とを考えて若い多田のことをぐっところえて、最後はお互いに禍根の残らないように話しをまとめたのです。

多田は文さんの隙を狙っているような存在でもあったのです。女をモノにするには失恋直後が一番だと以前聞いたことがありますが、多田は実にその機会を辛抱強く窺っているようでもあり、あるいは文さんの言う好きな人とはまさか多田のことかも知れないと言う思いも僅かながらあったのです。

安田敏と多田敏明は同様に私から情報を収集する諜報員のような存在で、私の考えていることや行動はすべてに近く松平らに筒抜けだったのです。安田敏は東渡らとともに作業員としても活躍しました。長くなるのでここでは書きませんが、11月の工事現場突入事件、1月終わり頃の清水倉庫タイヤ爆発事件、2月14日のバレンタインデー当日の白菜散乱事件、2月終わり頃の追突事故に伴う東渡らとのゆすり事件など尋常ならざる行動を連発していたのです。

バレンタインデー当日の非常識さには私も我慢の緒が切れ50万円の保証人になった借金の残債を一括して池田に支払い借用書もその場で破り捨てたのですが、自分から私に対する支払いもしないで3月の初めには150万円ぐらいだったかの車をローンで購入し、詐病で得た何十万円だったかのお金からも私の返済には充てようとはせず、見かねた東渡の進言で一応何万円だったか会社に払ってやったと自慢げに一言だけ言いに来たのです。会社からもそのお金は私に渡っておらず、今考えれば20万円だったか30万だったか忘れましたが私は丸損したことになります。

そしてこのこと以来、私は極端に安田敏を無視し避けるようになったのですが、彼の方はベルトを無理矢理に渡そうとしたり、泣きそうな顔で私に話しかけて来るようになったのです。この泣き出しそうな顔や声というのは以前から文さんが度々見せていた姿ですが、これさえも連中は利用して私の思考や価値観を攪乱したのです。言い換えれば文さんと安田敏の姿がだぶり重なって見えたことになります。

他にも多田敏明が以前、文さんが会社で若い運転手から階段を上っている途中にパンツが見えたとからかわれ、彼女は上まで登っていたのに下まで降り、相手に詰め寄って「銭とるろお」と凄まじい剣幕で脅しつけたことがあると話していました。この時は相手の男の名前など出なかったのですが、3月の中頃、多田敏明と西口の三人で北安江の焼肉屋に行った時、帰りがけに文さんの話題が出たとき、西口がすぐに「そう言えば、前にパンツ見えたって彼女をからかって怒られたが誰やった、安田（繁克）やったな」と話していました。

>>> : Linux LibreOffice : 2023-09-29 01:40:09 >>>

この被告発人多田敏明の前ふりのような話は記憶になかった。

<<< : Linux LibreOffice : 2023-09-29 01:40:29 <<<

ここでも第三者の裏付けがあって事実の存在を補強しているのですが、西口にも連中の意向を受けて行動していた節がいくつかあるのです。また、この時西口は文さんのことを「いかにも今時の女の子という感じ」といい。初め入社したときとても務まりそうもないと思っていたが意外にがんばっていると感心したように話していたのです。

この「今時の子（娘）」という言葉は、池田が頻繁に文さんを指して使っていた言葉ですが、1月の終わり頃には、「あの娘なんにも分かったらんげん。可哀想な子や、可哀想な子やと思っとりなさいひろのさん。」と電話で私に話していたことがあり、「あの娘会社でしおらしいしとるやろ、でも友達との電話聞いとったら頑固なことはなしとるわ」などもあきれたように話していたのです。

この時の状況は朝から詳細に覚えております。1月25日の土曜日文さんが、事件後お母さんにねだって買ってもらったというネックレスを黒い服一枚の上に付けて会社に来ていて、なぜか退社時刻の5時前に泣きそうな顔で足早に私が居た控室前を通り過ぎていったことがあり、またその時は軽四を裏駐車場の大型車が止める場所のど真ん中に止めていたのです。その夜に気になって文さんの自宅に電話したところ、お母さんが出て、この時初めて不機嫌で警戒した対応を見せたのです。

この件があってから初めて文さんと電話で話したのが、月曜日（27日）かあるいは火曜日（28日）のことで、朝、ハイミールでミール移動をしていた私に会社から連絡が入り、急きょ七尾に関東行きのベニヤか材木（ベニヤならば林ベニヤ、材木なら能登木材、いずれも七尾の丸一運輸の仕事で東渡の紹介によるもので一番多かった行き荷）を積みに向かったときで、まず津幡のスタンドから電話をしたとき対応に出た文さんに1月21日のことを謝ったのですが、分かったと言いながら彼女は不満足な様子で、さらに電話を掛けて謝ったところ彼女が「あん、あん、あん、」などと恫喝するように怒って電話を切ってしまったのです。

津幡の先の能瀬という所から会社に電話を掛け直したところ梅野と池田が交互に出て、文さんは金沢市場輸送に仕事に出掛けたと話したのです。そして池田が私を叱りつけ、彼女の家に電話を掛けるな、さみしくて話したいことがあるなら私の家に電話しなさいと言い、彼女が私のことで悩み会社を辞めると言い出したというのです。池田の方からもこの件で何度か会社の方に連絡を入れるように指示があり、七尾で荷物を積んでからも会社に何度も電話したのですが、文さんが出ることは一度もなく、夕方暗くなってから北陸道に乗り富山の先のパーキングあたりから掛けた電話で、文さんが会社を辞めないことに納得して帰ったと聞き、その時に先の池田の個人的意見というか言葉が出たのです。

>>> : Linux LibreOffice : 2023-09-29 01:43:29 >>>

富山の先ではなく、富山インターの手前の呉羽パーキングエリアだったという記憶。富山インターの先にもトイレだけのパーキングがあったかもしれないが入った記憶がなく、入ったことのあるトイレだけのパーキングは朝日インターの手前の黒部パーキングエリアという記憶。

<<< : Linux LibreOffice : 2023-09-29 01:45:33 <<<

この時私は山梨行きの二カ所卸の荷物を積んでいました。そして予定外に東京で一泊させられ翌日の夕方池袋の三越デパートから展示会の引き上げの荷物を積んで金沢に戻ったのです。展示会の荷物は問屋町のトナミ航空で降ろします。その日は荷物が降りるのが遅く会社に戻ったのはお昼頃でした。会社にほとんど社員はおらず、控室で一人でストーブにあたっていると松平とカベヤが来て、松平が優しく意味ありげに「今日は仕事しないでもいいから一日ここでストーブの番でもしとれ」と言って出掛けていったのです。少しすると次は池田が一人で出掛けて行きました。このような雑用はほとんど文さんがしているので池田が会社を出ることはあまりないのです。これで会社の建物では私と文さんの二人切りになりました。

このような状態が1時間ぐらい続き、途中に市内配達のおじさんが一人少し寄っていったぐらいでした。私は外でトラックの洗車を始めたのですが、まず松平の長靴を借りるのに二階に上がり、一人で居た文さんに長靴の場所を聞いたのです。洗車中もなんとか文さんが二階の窓から顔を出し、私のことを気にしていました。松平らが作ってくれたせっかくの機会を無駄にする気かという非難も込められているように感じられたのです。

ようやく意を決して二階に上がり、彼女に話しかけようとしたときに金沢市場輸送で冷凍イカの積み替えを手伝っていたという多田敏明と和田の二人が二階に上がってきて、文さんとの個人的な話しは実現しなかったのですが、その時の文さんは恥ずかしそうでうれしそうでした。これも松平らの仕組んだことだと考えられるのですが、このように松平らの言葉一つで文さんの態度や気持ちは極端に不機嫌になったり、上機嫌になったり変化していたのです。逆に事件当日は極端に不機嫌で警戒的でした。

松平は供述調書のなかで、私と文さんの関係は全く最近まで気付かなかったと述べているのですが、それは明らかな嘘です。先に2月に松山に行ったことを話しましたが、その行き荷というのは同じ四国の徳島行きのミールでした。これを積んだ当日私は午後まだ早い時間に安田敏に手伝ってもらって積んだのですが、20トン積みだったかの重量オーバーで金沢東インターからの乗り入れが危ぶまれたので秤のない方の料金所が開く確実な夕方6時以降の時間帯を狙ってそれまで会社で待機していたのです。

その夕方、二階で退社しようとする文さんに松平が声を掛け、「今から北野さんのとこ行くんか、それとも例の彼氏と今からどっか行くんか」と意味ありげな調子で言ったのです。彼女は返事をせず足早に階段を下りて帰っていったのですが、そこで池田が横から「あの娘彼氏なんかおらんよ」と心配そうなやさしい声を掛け、それに対して松平が偉そうに「ワシがいい男一人紹介したんや」と言い、続けて繁克のことを話題にし、結婚したらしい、他にもいい娘おったけど今の娘を選んだらしいなどと暗に文さんとの関係は過去のものになっていることをやけに強調していたのです。

また、「ワシや、何してもいいけど子供だけは作るなと言ってあったんや」などと彼らの間に性的関係があったことを当然のものと示唆するような言葉もあったのです。今時の若者だから当然言えば説得力があるようですが、このような意味も含めて池田らは文さんを今時の若者の典型のように型にはめていたようです。松平の安田に対する態度も実に寛容で温かいものでした。私に遠慮しているようにも見せながら直接安田敏を注意することは一度もなく、トラックの気違いじみた暴走運転や度重なる当て逃げ、についてもすべて私に対して間接的に注意していたのです。

こんなことも2月14日、螺旋状の東名高速豊川インター登り口で減速せずウイングのトラックから50個ぐらいの白菜の大箱が飛び出すぐらいの運転で散乱させたという話を当日浜口卓也と飛鳥食堂から戻ったときに会社前で松平から心配そうに聞かされた私は、午後会社に戻り、文さんが買ってきたらしい社員に対するチョコレートが無造作に口に放り込みながら私の説教など問題にしていなかった態度に見切りをつけた私は、松平に安田敏を首にすることを強く進言し、以降安田敏がどのような不祥事をしても一切責任は負えないと厳しく申し渡したのです。

>>> : Linux LibreOffice : 2023-09-29 01:49:42 >>>

喚起されたような飛鳥食堂での食事の記憶。昭和59年はついてもできてよく行っていた飛鳥食堂だが、平成3,4年当時に食事に行った記憶はほとんど残っていない。たぶん昭和59年当時と同じ店舗で、店内は喫茶店のような雰囲気、夜は飲み屋になるような話も聞いていたが、夜遅い時間に行くことはなかったという記憶。

これまでの記憶は、金沢中央卸売市場の裏門の道路で、大型トラック同士すれ違ったところから始まっていた。事実ではない可能性の高い話を、その前に被告発人松平日出男から吹き込まれてことになる。

<<< : Linux LibreOffice : 2023-09-29 01:54:52 <<<

この時も浜上などは私の方が言い過ぎ悪いように言っていました。梅野など私のことを本当の馬鹿だと確信したようにニヤニヤしていましたが、これが彼らの感覚なのです。

浜上らにとって安田敏の存在が大事だったのは、当初から割りの悪い仕事はすべてに近く私と安田敏に押しつけていたからです。また、浜上が事件にどれほど関与していたかは不明ですが、東渡と密接に結びついていたことは確かなことです。

繁克のことにしても2月の終わり頃に、東渡らの麻雀仲間で私が金沢市場輸送にいた頃から会社に麻雀に来ていた内浦町小木出身の男が、金沢市場輸送でイワシ運搬の仕事を始めたらしくその時に若者から怒鳴られ、手鉤まで振り回されて脅されたと控室に来て話し、その場に居た東渡と浜上が示し合わせたようにそれは繁克のことに相違ないと断言していたのです。

その小木の男というのは元漁師らしく体格も恰幅も良い男で、小木の漁師のことは地元のなのでよく知っているのですが、口が悪く気性も荒い者が多いのです。年輩の者ほどその傾向が強いようです。昔は出先の港で刃物を持った殺し合いなど珍しくなかったと聞きます。実際その男は、まだ私が金沢市場輸送にいた頃、会社で東渡をいじめ馬鹿にし、使いもさせていたのです。

こちら芝居だったのかも知れませんが、その男が繁克に恐れをなしていたとは考えにくく、それ以上に社交的で利にさとい繁克が無意味なケンカを仕掛けたとは考えられないのです。私に繁克を怖い男だと思わせることが目的だったのかも知れませんが、その数日後（2、3日後ぐらい）の3月1日の日曜日の夕方、私は会社で繁克の姿を見かけているのです。多田敏明と浜口卓也と一緒に浜口卓也が控室に入ることを勧めたのですが、繁克は嘘がばれたようなそわそわした態度で顔を出して中にも入らずすぐに帰っていったのです。

>>> : Linux LibreOffice : 2023-09-29 01:58:19 >>>

これはずいぶん前に記憶から消えていた事実。3月の10日から15日頃に、市場急配センターの駐車場で被告発人安田繁克の車だけを見た記憶はずっと残っていた。なぜ忘れていたのか不思議に思えるぐらい。

<<< : Linux LibreOffice : 2023-09-29 01:59:40 <<<

その時私は前日の土曜日に七尾で積んだ千葉県我孫子市行きに出るところだったと思います。繁克に会ったのはこれが最後でした。一月ぐらい前の北国新聞に同姓同名で同じ年の男が40代の男と共謀して女性問題をネタに150万円だったかの強請を働き恐喝未遂罪で逮捕されたという記事がありました。

まず繁克本人のことと思いますが、住所は東力ではなく古府だったかで、職業は共犯とともに建設作業員でした。供述調書を作成して当時はイワシの時期も終わっていたようで持ち込みで「金太」という会社の鉄鋼材料を運んでいるように書いてありました。金太という会社は知らなかったのですが最近になって鉄鋼関係の大きな会社だと知りました。

どういう伝で金太の仕事をするようになったのかははっきりしたことは分かりませんが供述調書の中には桐畑運送松任営業所の契約運転手になっています。思い当たる節は私が二度目に中西運輸商に入社したときトレーラーの運転手でその後暫くして免許取消となり、配車係に転向し、YTが金沢市場輸送に来て半年ぐらいだったして同じく金沢市場輸送で配車係をしていた藤田という男が中西運輸商に来る前にいた会社が桐畑で同じ桐畑から中西運輸商に来た運転手が他にも数名いたと思います。

藤田については前にも書いてあると思いますが、それとは別に、私が二度目に金沢市場輸送に入社した頃だったかにいた運転手で、割と長く会社にて確か市内配達をしていたのですが、その男が桐畑に行きその娘だったかと結婚したような話しも聞いたことがあります。ちょっと変人のようなところがある人物でおかしな噂もちょくちょく耳にしたはずなのですが細かいことは覚えていません。

名前の方も思い出せないのですが、根〇（〇〇）という名前だったかも知れません。確かにこのような名前の人は覚えているのですが同一性の保証は出来ないのです。無口な男でしたが割と会社寄りの感じで、突然やめていなくなったのですが、その前までは割と責任のある立場を任されていたようです。

>>> : Linux LibreOffice : 2023-09-29 02:02:33 >>>

最初に東北便の福井中継をしていたという記憶がかすかに残る。

<<< : Linux LibreOffice : 2023-09-29 02:03:09 <<<

この時の上司で市内配達を統括していたのが高田という人物です。間はあったものの松平はこの高田の後任というかたちになり、その間の暫定的な責任者は梅野かあるいはこの根〇だったかも知れません。

高田は竹沢の話では詐欺師のような男で、あちこちで大きな借金をして逃げ回り、最後は会社の金を横領して姿をくらませたそうです。実際会社まで右翼団体のメンバーが数人高田を訪ねて押し掛けてきていたこともありましたが。しかしその中の隊長のような青年は馬鹿に礼儀正しく丁寧で私にはヤクザが他の事務所に挨拶に来ているように見えたのです。その団体は確か富山の方の右翼団体だと聞いたように思います。

いずれにせよ YT と繁克の関係から考えてその筋から紹介されたと考えるのが有力かも知れません。中西運輸商には一時期水谷〇〇〇も行っており、谷内という金沢市場輸送にいた運転手も一時行っていたことがあったらしく（私と同時期だったらしいが会うことはなかった。）、この谷内はその後守田水産輸送に行き、新車で持ち込みをしていたのです。

彼が金沢市場輸送から守田に行った運転手の第一号で、その後山田も持ち込みで守田に行きにかかり、横槍を入れて阻止したのが竹沢で、その時の条件で輸送でも持ち込みを認めるようになったのです。水谷もその後守田で仕事をしていました。水谷は金沢市場輸送に何度も出入りをしていたのですが、初めに入社したのが私が二度目に入社した昭和61年の8月頃の直後でした。彼は輪島出身で、同じ輪島でも気の荒いことで有名な海士町の者でした。江戸時代九州の方から漂流した部落民のようなもので身内で婚姻を繰り返し、血が濃く団体精神が強いのです。子供の頃からスパルタ教育を受け、鍛え上げられているそうです。

金沢ではあまり知られていないかも知れませんが能登では有名です。実は浜上もこの町の者です。水谷が入社して一年ぐらいてから次々と同郷の者を入社させました。職安に募集しても来てのない会社でしたから水谷の貢献度は高いものでした。沖〇、山〇〇、平〇兄弟、〇渡、小〇、〇原などが入れ替わり入社して運転手をしていたのですが、前の三人は持ち込みになりました。出所後安田敏と話しをしたとき彼ら輪島の連中は、一人残らず金沢市場輸送をやめて現在は七尾の共栄運輸で持ち込みをしていてずいぶん稼いでいると聞きました。

金沢市場輸送にいた頃私は彼ら輪島の連中と親しくしていたのですが、もともと内浦の方と輪島の方は仲が良くなく、同じ能登でも遠い存在だったのです。そんなところに安田敏が来たもので私は益々彼と一緒に仕事をさせたいと考えたのです。他に口取修という男がいましたが、彼は同じ内

浦町の松波と小木の間にある新保という在所の者でした。中学校は小木中です。彼は私が一度目に金沢市場輸送に入社して辞めた前後に入社していたらしくそれ以来金沢市場輸送にいて古株の運転手になっていたのです。

地元では嫌われ者というかあまり相手にされない存在だったと聞きます。ただ中〇とは前から知り合いだったように聞いたかも知れません。安田敏にも地元では似たような傾向があり、とりわけ私と同じ宇出津の者からはあまり相手にされていなかったようです。私が間にいたから付き合いをしていたような側面もあり、彼の方でも私を伝にしていたのかも知れません。因みに能登の方では年功序列が著しく昔の軍隊のような上下関係があったのです。

そんなこともあり、さらに宇出津や小木、姫、真脇といったところ以外の者はもともとさげすまされて見られていたようです。私はそのようなことにこだわりがなかったので子供の頃から色々と友達づきあいをしていたのですが、こだわる者はこだわりが強く相手にしないか馬鹿にしていたようです。逆に言えばそのような土地柄の者は宇出津などの者に対して恨みを持ち、上下関係でも激しいじめにであったりして恨んでいたようです。

能登ではこのような部落間の対立のようなものが昔ほどではないと思いますが残っているようです。松波で唯一付き合いがあったのが先輩の友達で〇田という人で、彼は安田と同じ年で同じ水産高校本校を退学してしばらく遠洋漁業の漁師をしていたのです。中〇も同じ頃漁師をしていたようです。小木は県内唯一の遠洋漁業基地ですが（姫も同じだが小さい）、中卒者や高校退学者の多くは小木の漁船で遠洋に出ていたのです。現在は国際問題などもあり儲からなくなったので漁師をする者は少ないのですが、当時の友人の大半は漁師を経験していました。私は一度も乗らなかったのですが誘われることは何度かありました。

山〇シンイチさんも同様で、当時（昭和57年頃）〇田さんとシンイチさんと中〇、それと珠洲の三崎の伏〇〇さんがよくつるんでいたようです。かれらは当時二十歳近かったようですがいまだに集まってシンナーを吸っていたらしく、今あげた全員かどうかは分かりませんが。とにかくこれらのメンバーの中の数人が松波の〇田さんの町営住宅でシンナー遊びをしていて安田敏が発狂したらしいのです。

数日間意識不明で生死の境をさまよったとも聞きますが、その前に彼は深夜に隣の住宅に押し入り、就寝中であった夫人の首を締め上げたそうです。駆けつけた友人に引き離されそこを飛び出して、「カァ、カァ、カラスが呼んでいる」などと叫びそのまま松波駅まで走って駅の周辺をウロウロしているところを通報されてそのまま金沢の松原病院まで送られたそうです。これは個人のプライバシーに関することなのでうかつに話しことは出来ず、他言も控えていただきたいのですが、彼は1年ぐらいだったか入院して、その後22、3歳ぐらいの時にも私と付き合いが途絶えて暫くしてまたシンナーを吸って発病し同じ松原病院に入院していたそうです。

これは私が金沢市場輸送で初めて入社していた頃に相当しますが事実を知ったのはだいぶ後だったかも知れません。この発狂の件も安田敏が地元の仲間から疎んじられた大きな原因です。彼はそのことでかなりの疎外感と孤独感を感じていたようでした。

それでも金沢では珠洲の出身者も含めかなりの数の友人はいたようでした。その首を絞められた夫人の話に戻りますが、夫人の夫は福島組系木下組の組員で名前は忘れたのですが、カズさんと呼ばれていたかも知れません。この人物が私が二度目に金沢市場輸送にいた昭和61年頃に竹沢を訪ねて金沢市場輸送に来ていたことがあったのです。

この人物の上司に当たるのが○田という蛸島出身の人物で一時期頻繁に新聞に出たりして大きなことをしていたようです。パチンコ屋にダンプを突っ込んだり、恐喝をしていたようですが、地元では経営型のヤクザとして力をつけていたそうです。実は昭和57年頃当時私は17才だったのですが、所属していた地元の暴走族が○田の世話を受けるようになり、宇出津のそばの田浦というところに一軒家を借りてそこを事務所のようにしてたまり場のようにさせたのです。

福島組の名前の入った特攻服まで用意され、家財もそろえられていたのです。私たちのほとんどはヤクザを極端に嫌って避けていたのですが、逃げられない立場にいた者もありました。一悶着あったのですがほとぼりが冷めた頃無断で田浦の家を利用することが度々あり、その場によくいたのが中○でした。彼はそれ以前滝本組の司会という事務所に出入りしていたらしくなにか刑事事件を起こして拘置所にも入っていたと聞きます。

実は浜口卓也も17才ぐらいに高校を退学になって暫くしてから19才か20才ぐらいに漁師になるまで金沢の松本組でヤクザをしていたのです。田舎者はかなり極端にヤクザを嫌うこともあって組員当時はほとんど田舎には帰っていなかったようです。

金沢で友達の所で顔を会わせることが、何度かあった程度でした。私が昭和58年の春頃、当時私は18才だったのですが、白菊町の伏○○さんのアパートで居候させてもらっていた関係もあって、そこによく来ていた松元組の○という人物に世話になり、組事務所にも行ったりすることがありました。

彼は北友会という福島組などの上になる組織の幹部をしていたそうです。絶対に組に入れないという話して他にも友達がいて伏○○さんも瓦屋の正業に就いていたので付き合っていたのですが、この人物が中○のことをひどく怒り半殺しにしてやるなどと公言していたのです。その後一緒になったことがあったと思うのですが一応許されひどい目にはあわなかったようでした。

そう言えばオジコも少年時代滝本組だったかでチンピラをしていたと聞きます。他に珠洲のケイタロウと呼ばれる男がいてその後漁師をした後、20代になって福島組の組員になったのですが、安田はこの男とかなり親しくしていました。昭和61年か62年頃カマロという外車を借りて私のアパートに遊びに来ることも何度かありました。私はすでに結婚していたこともあり、安田敏のことはほとんどかまわなくなっていたのです。

自分の方から聞いたこともないのですが、彼も涌波の事務所に出入りしていたのか知れません。私の記憶では福島組が若者を集め派手なことをしていたのはこの涌波の事務所が初めてで新聞にも事件を起こし載っていたようでした。観音堂のアパートにいた時分、ケイタロウは神田のアパートにいて同じアパートに珠洲の三崎の通称コウキという私と同じ年の男がいて彼も山水に入社して長い間働いていたようです。ケイタロウの部屋にも安田敏に連れられて遊びに行ったこともあったのですが個人的に話すことはありませんでした。

以前私の友人に暴行を受けたという話しも聞いていたので同じ宇出津の私とはあまり話したそうでもなかったのです。ケイタロウには彼女がいてその彼女の友達でいつも一緒にいたのが、同じ珠洲市の蛸島の男で○井（通称ミッチョ）の彼女でした。

○井の方も安田と親しくしていたのですが、以前暴狂悪女という暴走族に所属していたとかで交際範囲もある程度あるようで、詐欺師のような感じの男でした。私が観音堂の安田敏のアパートで居候を始めた頃石○という男がいて彼は紺谷組山本総業（通称ヤマソウ）の組員で組から逃走中だったのです。

居候をするようになって暫くしてたまたまスタンドで石○の知人と一緒になり、そこで誘われて増泉の中央防災という昔社会問題にもなった消火器売りを始めたのです。1月だけ売り上げなしに日給を日払いしてくれるというので行ったのですが、私は人を騙すことが出来ずほとんど一本も売らずに辞めたのです。しかし、少し遅れて入った安田敏はその仕事に生き甲斐を見出したらしくずいぶんがんばっていたようです。

石○はその間に安田敏を説得して追い出したような感じになっていたのですが、救いがたいなまくら者だったのです。安田敏は出張が多くなり、県外で消火器を売っていたのですが、それにつれ付き合いも減り、年が明けて金沢市場輸送で長距離の仕事をするようになってからは全く付き合いがなくなっていたのです。私が付き合わないようになってから安田敏は石○を消火器売りに誘い一緒に仕事をしていたそうです。新潟県で逮捕されたとか噂を耳にすることがありましたが、そのうちにシンナーを吸って松原に入院したと聞いたのです。

私といるときはシンナーはやっていませんでした。この中央防災の社長というのが当時25才か28才の男で輪島の○という男でした。一見してヤクザ者かその筋の感じでしたがいわゆる強面のタイプではありませんでした。この○が消火器屋を辞めた後数年して、石○とともに福島組に入り、当時山口組と一和会の抗争が多発していた頃、鉄砲を持たされて鉄砲玉を命ぜられ、二人でそのままとんずらしたと安田敏から聞いたことがありました。

最近まで意識しなかったのですが、やはり安田敏は私の知らないところで暴力団と交際していたのかも知れません。その関係で誰かの紹介で松平らと知り合ったことも十分考えられるのです。カマロに乗ってきていた頃以来、安田敏と付き合いはなかったのですが、その後風邪の噂で「サムライ」という片町のディスコで働き始めたと聞き、さらに一年ぐらいかして電話があり、片町の「ハートブレイク」という店でパーテンをしている。金はいらないから飲みにかいと、パーティがあるから来いなどと何度か電話があったのですが、一度も行かなかったのです。

それからさらに数ヶ月か一年ぐらいて電話があり、アパートを借りて住んでいるから遊びに来てと言われ、丁度暇だったので行ったことが一度あるだけでした。丁度平成二年の秋頃ではなかったかと思います。その時彼はハートブレイクの次の店も辞め、大きなキャバレーのようなところで厨房の仕事をしているような話だったと思います。

福島組のことでもう一つ気になるのは以前市場急配センターで持ち込みの仕事をしていた確か○という名前の人物です。私と同じ宇出津の者と聞きましたが、年はかなり上のようにでした。初めてこの人物を見たのはまだ7599という保冷車に乗務していた頃でトナミ航空の展示会の仕事に行ったとき、展示会の商品を持ってきていたのを見かけたのです。箱に宇出津の住所が書いてあったので目に止まったのですが、たしか大脇昆布という社名でした。それが半年ぐらいかして市場急配センターで市内配達の仕事をするようになっていたのです。数ヶ月かして、平成元年だったと思いますが私は5月頃から11月頃まで野々市の北都運輸で専属の市内配達の運転手をしていました。金沢市場輸送からの出向というかたちでした。配達先多く務まる者がいないような話でしたが終わる時間も早く私には楽な仕事でした。

そんなときに持ち込みの○の姿を見たのですが、松平の方から仕事をやるなというクレームが出たと聞きました。キューピーの製品の配達が主だったのですが、その営業所の担当者がたしか石本という人物で、本恒夫や松平とはかねてから親しかったようでした。彼らからも北都に入社することや持ち込みをすることをしきりに勧められていたのですが断っていたのです。

出所後私は宇出津にいて青年センターのようなところの無料のパソコン教室に通ったのですが、そこは遠島山公園にあり、歩いて通っていたのですが、木下組の家の前を通っていたのです。その時に気付いたのですが、大脇昆布という小さな会社は木下組の隣りにあったのです。木下組は私が子供の頃からあるヤクザです。向かい聞いた話では木下の組長はもともと輪島の者で地元にならずに宇出津に流れてきたと聞きました。

市場急配センターにいたころ、浜上と水口が福島組のことを話題にして福島組の組長は輪島の人間で、七尾に出たと話していました。他にも朝鮮人ということは何度か別のところで耳にした覚えがあります。これが本当だとして、竹沢もNの言うとおりの朝鮮人だとすると昔からの知り合いだったことが考えられます。北都運輸はその後かねての噂通り倒産したのですが、それまでは県内で一番か二番の規模の運送会社だったのです。松平は事前に知っていたらしく損害は受けなかったと自慢げに話していました。

北都運輸などは石貨協という運送業者の団体に属していたそうですが金沢市場輸送もその中に入っていて協会の赤字を高速道の割引をまわすなど補填するようなこともしていると竹沢が話していたことがありました。私の知っていることなどごく一面にすぎないのですが、これらの中に事件の端緒があるのかもしれませんが。可能性として一番考えられるのは保険金目的の偽装殺人ですが、これも金沢市場輸送でかけたものではなく中西運輸商でかけていたものかもしれません。いつ死んでもおかしくないような仕事は中西運輸商にいたときの方が遥かに多く、私の方も若くて命知らずだったからです。

実際に死人が出たことは僅かな数でしたが事故の多さは圧倒的に多く、有名だったのです。佐川急便から切られたのもそれが一番の理由だと聞きますが会社のやり方を変えようとはしていなかったようです。推測の域を出るものではありませんが、むやみに捨てることの出来ない推定の選択肢なのです。

前妻について

私が前妻A子と知り合ったのは昭和60年の4月の終わり頃でした。今思えば安田敏が金沢市場輸送に現れたのも同じ時期です。これも連中が意図的に作出した演出だったのかもしれませんが。私は前妻との離婚自体も連中の作戦が大きく影響していたのではないかと思います。つまり文さんとよく似た立場だったということになります。

池田のような身近で指示をする人間はいなかったと思いますが、よからぬ入れ知恵をしたり、私に関する情報源を収集していたと考えられ人物は、YTの妻だった孝代（漢字のほうははっきりしない）、〇〇の妻、堂野の愛人大野、口取修の妻などです。これはあくまで仮定的な話であって、違法な行為に荷担していたと安易に決めつけることは到底許されず、迂闊に話せることではないのですが、一応このような状況も仮定されと言う意味で書いているのです。

とりわけA子と親密だったのが孝代でした。前妻が初めて家出をしたのは平成元年の5月頃だったと思うのですが、この時孝代と一緒に家出に誘ったり、女性週刊誌に記載されている求人情報と一緒にいたりしていたことはA子から直接聞いていた事実です。私は孝代との交際を好まず、A子にもそのように言うようになったのですが、きつく付き合うなどとは言わず、長距離で家を空けていたのでどれだけ付き合いがあったのか判然としませんが、一時期はかなり頻繁に付き合っていたようです。

孝代に飲みで誘われ、その席で子持ちでもかまわないから結婚してくれと男性に頼まれたとか真偽不明の話しも A 子はしていたことがありました。もともと作り話をするような癖があったので話半分で聞いていたのですが、A 子は細かいことまでよく話し、それで嘘がばれ私に殴られることも度々ありました。家出の件も私の反応を見るというのが大きな目的の一つだったのかも知れません。

私が初めて彼女に泣きを入れたのも初めての家出の時でした。彼女はそれに満足し、味をしめた感があったのですが、2 度目の栃木県行きの際はずいぶん手痛い目に遭い懲りていたのです。痛い目というのは仕事を始めてすぐに連れていた次男もどもお多福風邪のようなものにかかり、数週間寝込んだりして、結局一月ぐらいの間に 20 万円ぐらいだったかの借金を作りその時は弟に尻拭いしてもらったようでした。

3 度目の家出が平成 3 年の 7 月 18 日（17 日のどちらか）になりますが、家出の度に彼女は有り金のほとんどを持ち出し、サラ金からの執拗な催促を残して行きました。これだけ見ればとんでもない悪妻で今時の典型のようですが、彼女がサラ金に手を出すようになったのは私がパチンコでお金を使うようになったことと、彼の父親が三国ボートに狂いサラ金に手を出し、マイホームの資金から娘である彼女の預金通帳にまで手を出したという問題が根本にある他、時期は思い出せないのですが彼女の母親も家出をして行方知れずになっていたことも大きく影響していたはずです。

母親の家出についても男と逃げたとか、いろんな話しをしていたのですが何が本当なのか実態はつかめなかったのですが、今思うと彼女は本当に母親に見捨てられたかたちだったのかも知れません。初めてコンパニオンをしていることがばれた昭和 63 年の秋頃私に血ダルマになるまで殴られ、加藤整形外科に運ばれたとき駆けつけた母親は私を厳しく叱りつけていたのですが、その 2、3 ヶ月後ぐらいに失踪したように思います。このように彼女の両親にはだらしないところがあり、娘に対する根本的な愛情や責任感も感じられなかったことから、私は彼女の両親をまともに相手にせず、正月も盆も実家に返すことはしなかったのです。

本人に親だと思ふなという問題点を指摘することもあったのですが、彼女はひどくショックを受け、「分かっている、分かっているけど言わないで」と泣き崩れていたのです。一人の弟もいたのですが、私は彼女とのトラブルで一度弟を殴ったこともあり、相手が無口な性格だったこともあってほとんど話しをしなかったのですが、弟が金沢に出てきて中央市場で鮮魚の仲買の仕事を始めたのも私と仲良くなりたいたいという気持ちがあったのかもしれない。

少しの間アパートに居候していて、その時は彼女も楽しそうだったのですが、私が仕事でいなかったこともあるのですがほとんど話したり、どこにも誘わなかったのも彼女らを傷つけていたのかも知れません。

私がパチンコに狂うようになったのは出先の県外で時間を持て余すようになったことと、口取修や水谷、山田などの運転手仲間の影響も大でした。会社自体もパチンコオークラの駐車場と隣接していたので、仕事の待ち時間など気楽な会社の連絡先でもあったので、しょっちゅう行っていたのです。鮮魚の仕事は港での待機が長く、泊まりと呼ばれるものがしょっちゅうでした。

一番多かった仕事は九州の博多港と宮城県の石巻、塩釜港からの定期便でしたが、九州はほとんどが泊まりで連休にあたると 2、3 日自由時間が出来たのです。博多港の場合は天神などの繁華街にも近く、歩いてゆける距離で、東北の場合は主に仙台市内でパチンコ屋に行っていたのです。基本的に定期便の得意先だったので現地の会社から現金の前借りをすることも度々でした。このいわゆる運行費の前借りだけで毎月 20 万円ぐらい給料から引かれていたのです。最初のうち会社は私

に相談せず、少ししか引いていなかったのが経済感覚がいよいよおかしくなり、妻の方でもお金がないとは言わず、ぼんぼんと私に現金を渡していたのです。

これは結婚当初からA子が親戚にもらったと嘘をついて家具をローンで買っていたことがあり、自分の罪の意識をごまかすために私に同様のことをさせていたようでした。お金の計算が出来ないということと経済観念がなかったのです。彼女は当時まだ二十歳前でしたのでそれもあるのですが、私の方も経済的に苦しい時期を乗り切りようやく高収入を得るようになったので心に隙が出来ていたのです。

市場急配センターの長距離の仕事などと較べれば遥かにきつい仕事だったのですが、中西運輸商での殺人的な激務を経験していた私は、金沢市場輸送の仕事などかったるく、現地についてもなかなか寝られず、時間を持て余したのです。

他にも博多の市場では当時市場の中にトラックを止めて寝ていたのですが、活気のある市場なのでとてもうるさく寝付けなかったのです。その上市場の前にカモメ会館というパチンコ屋があったことが災いしました。

A子が初めに家出したのは神戸でした。当時私の友人も神戸に住んでいたのもそのことも彼女の動機になっていたのかも知れません。コンパニオンのことで私に殴られたとき、私はそれに誘った近所の主婦のアパートまで血だらけの彼女を連れて行き二度とさせるなと断ったのですが、病院にはその主婦らのリーダー的、近所のマンションに住む主婦が来ていたのですが、その主婦の旦那はヤクザであるのでトラブルを起こすなとA子から言われました。

1週間か2週間ぐらいだったか入院するように言われていたらしいのですが彼女は一晩で退院してきました。近所的主婦というのはいずれも同じ東力です。A子は一時期近所の40代ぐらいの主婦らとも付き合っていたようでした。実は本恒夫も同じ町内だったのです。本恒夫の夫人については見たことがないのでよく分からないのですが、A子の方は関心を持っていたようでした。その後借金のこともうち明けられ、仕方がなかったので暫くコンパニオンをすることを認めたのですが、その時のコンパニオンというのが増泉の会社(?)で、社長というのがなにかの事件で新聞に出たことがあり、A子に教えられたのですが、たしか名前が二つある在日朝鮮人だったように思うのです。

近くまで来るまで送ったことがあったのですが増泉でも竹沢の家があるらしい野町に近いところでした。あるいはこのあたりからすでに竹沢の計画は進行していたのかも知れません。思い出しましたが、A子がコンパニオンをするようになったのは、その前にヤクルトの仕事をしていた集金のお金を自分らの支払いに回したことが大きな失敗につながったようでした。家計のことはしたくないというのを強制的にさせたのが間違いだったのかも知れませんが、極力嫌がっていたのをさせたのも主婦の自覚をもたせるためだったのです。

それに私自身の不徳も重なって家計は破綻していったのですが、表面的には顕著に現れず生活レベルは下がらなかったのです。彼女はサラ金の借金の一部しか明らかにせず、私に不自由をさせるようなことはしませんでした。今思えば私の経済感覚もかなりおかしかったのですが、普通に考えて借金を借金でまかなう連続で金利ばかりが膨れていったようです。そして彼女は借金がばれて私に殴られることに戦々恐々とし、場当たりきに支払いを続け、先に書いたような家族のことで心を痛め悩み、自暴自棄になっていたようです。一方で明るい性格だったので私との生活は決して暗いものではありませんでした。

金沢大学病院での精神鑑定の時、山口教授からなぜ離婚したのかと質問を受けたのですが、返答に窮しました。今はそれが分かります。答えは不信感であって、それは文さんとの関係においても同様のものであったのです。

私の中では前妻との離婚に至るまでの葛藤が文さんとの葛藤に続いていたのです。子供の存在も大きかったと思います。特に長男の秀旭は生まれた頃から私によくなついていたのです。「ぼく、お父さんちゅき」と妙に力を込めて言い切っていました。

そのように性格のはっきりしたところがありました。平成元年の夏頃だったと思います。当時私は北都運輸で市内配達の仕事をしていたのですが、朝が少し早く、終わるのが4時頃で直接家に帰ることが多かったのです。金沢市場輸送の会社には週に何度しか顔を出していなかったように思います。会社の仕事はしていなかったので特に出向く必要もなかったのです。

その頃借金返済のため前妻はコンパニオンの仕事に夕方から出掛けていました。送迎の車が来ていましたがそれが4時頃で、たまに私が遅れるとその間二人の子供達は家に待っていることになったのです。そんなある日、家に戻ると長男と次男の二人が台所で、包丁を手に持って大根を切っていたことがありました。驚いたのと同時によほど腹を減らしていたのかと不憫に思いました。

サラ金屋の若者が二人の子の手を引いて家から出ようとする私に、執拗に返済を迫ったこともあり、情けのようなものは一片もありませんでした。妻の借金状況を正確に把握したようとサラ金屋を回ったこともあったのですが、中には暴力団事務所のようなものもあり、妻がかなり多額の借金をあちこちで借りまくっていると言われ、それでも私より女の妻の方が借りれる資格は高いとも聞いたのです。

貸す方は強気で後ろめたさなど一切ありませんでした。人の家庭などどうなってもかまわないという本性がむき出しになっていたのです。自分の見えないところで膨れ上がる借金は、実際の額よりずっと重く私に精神的負担を与えていたのです。その間隙に生じていたのが不信感であったと思います。平穏で仲のよいような家族生活と、狂ったように借金を続ける妻、この両極端な繰り返しが交互に私に煩悶を与えていたことは、今思えば文さんとのこととも実に共通しています。

もともと前妻はあまりお金を使わない方だったのです。洋服や装飾品にお金かけることなどなく、食事面でも肉類も食べられなかったので粗食な方でした。知り合った頃は中西運輸商のトラックで一緒に運行に出ることが多かったのですが、そんなときでも食堂に入るとうどんか卵どんぶりか焼きめしぐらいしか食べなかったのです。一度だけ広島県の三次トラックステーションで定食を食べさせたのですが、そのことが妙に印象に残っているぐらいなのです。

このことは昭和61年3月に結婚してからも変わりませんでした。中西運輸商を辞めた直後に結婚したのですが、会社を辞めた理由が120日と90日だったかの二つの免停が一度にやってきたからで免許がない以上満足な給料も期待できなかったので辞めたのです。辞めたときの給料も一月まるまるで数万円でした。はっきり思い出せないのですが3万5千円ぐらいだったかも知れません。

なぜそんなに少なかったのかというと中西運輸商の会社の特徴でありとあらゆるものを差し引いたからです。仕事自体もきついものでしたが実に非情なものでした。社長は給料袋を手渡すとき自分は中身を見ていないと言っていました。会社の規則に従った給料だと言いたかったのかも知れません。実に厳しい会社でしたが、それによって得たものも大きかったように思います。

その社長の姿を見て会社の経営とはなりふりも構わず非情に徹しなければならないものかと私は感じ、そのことが私と文さんの関係について松平がとる曖昧な態度の解釈に微妙な影響を与えていたのです。

こんな折りに私の前に現れたのがかつての友人安田敏だったのです。彼の方から訪ねてきたように思うのですが、数年ぶりの再会でした。前年の夏頃に安田敏が金沢市場輸送で市内配達の仕事をしていると耳にした私は、中西運輸商のトラックで金沢市場輸送まで行き安田敏のことを尋ねたのですが丁度少し前に辞めて岐阜に行ったようなことを聞いていたのです。

思えば安田敏が私の元に訪ねてきたのはその年すなわち昭和60年の12月だったかも知れません。それ以来ちょくちょく付き合いがあり、61年の6月2日に長男が生まれて一週間後ぐらいに私は安田敏が働く岐阜県海津町に行ったのです。山下工務所というところで建築のアルバイトのようなことをしていたのですが、それが本来の目的の仕事ではなく、9月から12月の初め頃まで続くライスセンターの仕事をする約束だったのです。

3月ぐらいで120万円ぐらいだったかの給料と出稼ぎ手帳による失業保証金がもらえるという話しだったのです。結局私は8月の20日頃に辞めて戻って来たのですが、出稼ぎの元締めのような存在であった富田という親父がライスセンターの仕事に私の枠がないようなことを言いだしたことで私の方から身を引いたような一面もあったのです。富田というのは珠洲市正院の者でずいぶん前から出稼ぎの仕事をし、若者を珠洲を中心に集めてライスセンターの仕事をさせる人夫出しのようなことをしていたようです。

山本工務所の仕事というのも農協に対するサービスのような側面があったそうですが、人がいなかったんで苦し紛れに安田敏に私にもライスセンターの仕事をさせると行っていたようでしたが、いざ時期が近づくと定員が一杯で困っていたようでした。はっきり断られたわけではなかったのですが何となく避けるような帰ってもらいたいような態度が感じられました。このようにライスセンターの仕事は人気があり、珠洲以外では採用しないのが原則だがその例外が自分だったと安田敏は話していました。この時は二度目のライスセンターで、一度目というのが金沢市場輸送を辞めた直後で、この仕事のために辞めたものと思われれます。

智を紹介したのは○井光雄であったと考えられます。この終わり頃に珠洲から二人の若者が来ていたのですが、そのうちの一人で当時ソアラの新車に乗っていた人物が、後にトナミ航空の社員として働いていました。そして岐阜から戻った私がすぐに働いた先が金沢市場輸送で、長距離ではなく市内配達の運転手として働いたのです。これは当時免許の点数が全然なかったことと、大型免許取得のためでした。点数が戻れば長距離の仕事に移る予定でした。

そして市内配達をしながら試験場に通り9度目ぐらいに大型免許を取得したのです。丁度誕生日の翌日で11月27日の合格でした。この頃にも市内配達の合間にちょくちょく長距離の仕事にも臨時で走っていました。大型を取ってからはポンコツのイスズの10トン車で名古屋にミールを運ぶこともあり、市内配達はしなくなり、浜田漁業金沢工場から松任の日通の倉庫までミール移動をしていたのです。この頃一緒に仕事をしていたのが田舎の先輩の一人で、私が金沢市場輸送に勤める以前に高卒直後に勤めていたこともある蛸島のTSさんでした。彼も当時は免許取消中で、免許を取り直してまもなく前にいた新田商店という金沢港の魚屋に戻り、二、三年後に自殺したのです。

この自殺についても金沢市場輸送との関連の可能性が全くないわけではありません。ただ不幸な結果になって以来、誰もが話題にすることすら憚っているという現実を体験しました。無関係であったにせよ、このことが連中の計画立案について参考になったことは考えられます。水産高校を

出た直後に、金沢市場輸送に働いたと聞きますが、同じ水産高校を出て中央市場のウロコ水産に入社したのが安田敏でした。彼らの間にどの程度の付き合いがあったのかは不明ですが、同じ高校の数少ない同級生同士だったと言うことは確かです。因みに蛸島のTSさんは年齢的には安田敏より一つ上になります。一度別の高校を辞めてから水産高校に入学したからです。蛸島のTSさんは蛸島の出身で、浜田漁業でも働いていたことがあるそうです。金沢市場輸送と蛸島の浜田漁業の関係は濃く、私が初めに入社した当時の配車係が北浜太一という男で、その後金沢市場輸送を辞め蛸島に帰って浜田漁業配車係をしていました。

彼には弟がいて、弟の方も金沢市場輸送で大型の運転手をしていたのですが、事故で免許取消となり、その後浜田漁業金沢工場で倉庫の作業員をしていました。金沢市場輸送がミールの仕事をようになったのも私が中西運輸商にいる当時で市内配達と同じぐらいだと思います。その前から少しの仕事はあったのかも知れませんが、本格的に始めたのはその頃からです。ミールの仕事というのは浜田漁業の持つ、蛸島丸という船団が金沢港近辺を中心にイワシを捕り、工場加工して魚粉の肥料にしたものです。昭和63年の暮れには北海道の釧路から進出した北陸ハイミールという工場が完成し、金沢市場輸送ではその仕事もするようになったのですが、この仕事は山三青果同様市場急配センターが請けて、その下請けで金沢市場輸送が仕事をするスタイルとなっていたのです。

この件で文さんもミールの仕事には関与していたことが考えられるのですが、その過程で会社にとってはまずい情報を知るところとなり、連中に命を狙われたことも可能性の一つとしては考えられなくはないのです。したがって簡単には切り捨てることの出来ない事柄の一つなのです。ハイミールでは輪島丸という輪島の船団を使っていたのですが、蛸島丸からイワシを買うことの方が圧倒的に多かったようです。

平成2年のイワシの時期に市場急配センターから出張員のようなかたちで出向していたのが小〇〇一という男でした。元警察官で白バイ隊員もしていたそうです。金沢市場輸送に入社したのは私が二度目に入社した頃だったと思います。あるいは松浦などと同時期だったかも知れません。

初めのうちは目立たない感じで、会社の雰囲気にもそぐわない感があり、正式な社員ではなくよそから出向しているのではないかと感じていたことは、当初の文さんに対する私の個人的な見方と実に同じでした。彼と親しくするようになったのも一緒にイワシの仕事をすることになってからで、彼も池田同様いつの間にか金沢市場輸送ではなく、市場急配センターの社員になっていたのです。警察官時代の彼は熱血漢で、私用の乗用車にまでサイレンを登載し、それで取り締まりを行い、注意された上司と口論なり、警察を辞めたと話していました。こんなことならばそれほど珍しくない話しだったのですが、イワシの仕事をしていたとき、父親は最高裁の判事だと聞き、当時最高裁が日本に一つしかない裁判所とは知らなかった私ですが、やはり半信半疑でした。金沢市場輸送の事務所で竹沢本人もこの事実を肯定し、判事の父親と自分は旧来から友人であるとも自慢そうに話していました。このことが下地にあったこともあり、丁度一年半後ぐらいに文さんの父親が弁護士であると聞いたとき、それに比較すればありそうなことだと思い、容易に受け入れた嫌いがあったと思います。小〇〇はまた群馬に実家があり、巨大な梅林を所有しているなども話していました。

金沢市場輸送にいるのも父親が若いうちの社会勉強の一環として勧めたような話しでした。そんな彼がイワシの仕事では焼酎のボトルを飲みながら車を運転し、始終酔っていました。自宅の玄関先には何度か行ったことがあったのですが、顔も見ず、帰ってくれと言われたのは彼の妻が初めてでした。この妻の態度も安田敏の妻の態度に共通点がありました。小〇〇が会社を辞めたのは平成2

年の6月頃でYTらと同じぐらいが少し早いぐらいだったと思います。文さんもその時期にはすでに会社にいたと思うのですが、二人を同時に会社内で見た記憶は私の中にはないのです。

父親が病気になったとか家庭の事情で退社するような話しだったのですが、一人寂しく消えていったような去り方で、それより当人に嘘がばれたようなそわそわした落ち着きのなさのようなものが感じられたと印象に残っています。会社を辞めることに気が引けていたのかも知れませんが、逃げ去るような気配が伝わっていたのです。その後一度だけ偶然に彼に会うことができました。平成3年の2月か3月だったと思います。その時私は、富山の魚津から積んだYKKのアルミサッシの荷物を熊本県の八代市内で降ろし、翌日鹿児島市内の市場から白菜を積んで翌日の夜中に長野市内の市場に卸し、空車で古河の山三青果に向かう途中、翌日の朝、群馬県の前橋市内の国道50号線上でバイクに乗った小林に声を掛けられたのです。彼は私の姿を認め引き返してきたような話でした。信号待ち中の話しだったので短かったのですが、確か桐生市の方に住んでいるようなことを聞いたような気がします。

小〇と並んで、いえ、より以上に不審な人物が竹林です。もともと奥の方に家があり、その自宅の方にも一度遊びに行ったことがあったので、小〇ほど素性のはっきりしない男ではないのですが、彼も平成2年のイワシの時期に私と一緒にイワシの仕事をしていました。もともと長距離の運転手をしていて、私が二度目に中西運輸商に行く直前すなわち昭和62年の1月頃に金沢市場輸送に入社していたのです。

一見して坊ちゃんタイプというか童顔でもあり、トラックの運転手という感じではありませんでした。年の方は私より二つ年長で水谷〇〇〇と同じでした。生意気なところもありましたが長距離運転手時代から親しくしていました。彼は高校卒業後、石川トヨタに入社し、6、7年ぐらいいて辞めたような話しでした。長距離に乗るきっかけというのは結婚資金を貯めるためだったそうです。実際長距離時代の彼は、徹底した吝嗇家で食べるものも満足に取らず、仕事をしていました。

それで数十万円だったか百数十万円の指輪をプレゼントしたという話しも社内で知れ渡ったいました。相手の女性は、一度も見たことはなかったのですが、珠洲市の正院の出身のようでした。なにか貧乏というか生活の楽ではない家庭で、父親もいないような話しだったように思います。

そのためずいぶんな援助をしたと彼は後に話していました。彼の話しでは恩義を掛けたのに失礼なことを言われ許せなかったので別れたような内容だったと思います。その女性と別れてから彼は一変して金遣いも派手になりました。

そんな頃に丁度一緒にイワシの仕事をしようになったので私も彼にはずいぶんおごってもらいました。スナックに飲みに行くことも何度かあり、片町に行ったことも一度ありました。すべて彼の奢りで、私が出すという「お前は遊び人でないので出す必要はない」などと独自の哲学のようなものを語っていました。このように頻繁に奢ってもらったことは丁度一年前の大西真と似ていました。両方ともイワシの仕事で、イワシの仕事は船の都合で待機する時間が長く、暇を持て余す反面、夜中でも連絡があれば仕事に出なければならず、それもいつ終わるのか分からず、始終仕事に拘束されていたのです。イワシが捕れる以上は延々ととり続けるというのが基本的方針で、一度ミール製造の機械を止めると70万か80万円の損害になるという話しもありました。それだけ一緒にいる時間が長かったともいえます。

松平が入社した当時から、依然石川トヨタで営業の仕事をしていたと聞いていたのですが、この話しは竹林からも裏付けられ、部署が違ったが松平のことは知っていたと話していました。そして松平が競馬に狂い、会社の金を横領したことも話していました。この横領の話しも松平が来てまも

なく誰かから聞いていたように思うのですが、これも第三者によって裏付けられた感がありました。たぶん初めに聞いたのは水谷からだと考えられます。水谷も昔ブローカーをしていたそうでした。あるいはその当時から松平のことは知っていたと話していたかも知れません。竹林の方もブローカーをしていたらしくオークションの権利を今でも持っていると話していました。彼らに共通するのは車のブローカーという仕事です。

前に私の友人と笹田のトラブルのことを話したと思いますが、友人の話ではその筋で最高実力者の人物から圧力が掛かったので、笹田のことにはもう手が出せないと聞いたのですが、これも松平が中に入って手回しをしたと考えるのが最も自然な解釈だと思います。中〇と一緒に市場急配センターで仕事をしていた「河村（又は川村）」という人物も依然ブローカーをしていたと聞きます。この河村という人物の方が中〇より先輩で、松平の元で仕事をする話しを取り決めたような様子でした。河村というのは私と同じ宇出津の者のようですが、年の方もだいぶ上で、面識はありませんでした。

竹林は反社会的で竹沢や会社の悪口を頻繁に口にし、話していたとおりイワシの仕事が終わるとすぐに辞めていったのですが、それも演技だったのかも知れません。また、彼女と別れた直後に、竹林が池田と肉体関係を持ったという噂も社内がありました。このことも池田の信用性に疑問を持たせていたのです。竹林は水谷よりさらに年上だったかも知れません。

小林よりは下だったと思います。小林は平成2年当時で27才か28才ぐらいという話しでした。また、イワシの仕事が暇になった時期だったので4月頃になっていたと思うのですが、小林が会社に頼まれてコンピューターの入力をしている。しても一銭の手当にもならないが他に操作できる者が会社にはいないので自分に回ってくるとぼやいていたことがありました。このことから考えると文さんはまだ入社していなかったのかも知れません。

文さんのお母さんの供述調書では、確か平成元年の11月頃に入社したような話しだったのですが、それは私にとっては明らかに考えられないことです。文さんが入社したのは竹沢夫人の親戚の税理士が入社した2、3ヶ月後ぐらいだったと思います。その年のゴールドデンウィークに片山津温泉の「ホテルやがやま」で行われた慰安会にも文さんの姿はありませんでした。

なお、この慰安会の時に、金沢市場輸送の輪島の連中と市場急配センターの口取修や中〇や山〇シンイチさんらがケンカになったと聞きましたが、私は宴会場を離れて寝ていて、夜中に輪島の連中に起こされて一緒に金沢に戻ってきたのです。両方ともが自分らが勝ったような話しをしていたようですが詳細は不明で、その存在すら疑問があると私は考えています。

この時に繁克が活躍したという本人の話もありましたが、輪島の連中の屈強さを考えれば大いに疑問です。シンイチさんであればボディビルに近い体格なので簡単に負けることは考えにくいのですが、そのシンイチさんも地元の海士の連中からすればたいしたことないと噂に聞いていたことがありました。

因みに高校時代、水産高校のその年代では彼が一番ケンカに強いと聞いていたのです。その一つ上にも輪島の人がいて一番強いと聞いていたのですが、輪島に帰るといつもいじめられていると聞きました。海士の連中が強いのは集団行動を取るからだと聞いていましたが正確なことは分かりません。中〇も輪島の連中に暴行を受けたことがあると耳にしたことがあります。珠洲の人間も基本的に宇出津などの者を嫌っているようですが、輪島の連中も周辺の者に嫌われているそうです。しかし、〇〇も初め輪島の者は嫌いだと強い口調でいいながら、その後金沢市場輸送の輪島の連中とは仲良くしていました。

彼らの間にどの程度の付き合いやつながりがあったのかは不明ですが、水谷が以前小木の漁船に乗っていたことから中〇や浜口卓也とは顔見知りであったことは確かなようです。水谷が以前トラックに同乗させていた人物で「エイチャペ」と呼ばれる者がいたのですが、彼は以前福島組に所属していたと聞きます。指も何本か落としていました。昔の噂では海士で一番ケンカが強いと耳にしていたのですが、水谷に話すと大笑いで否定していました。

松平が以前石川トヨタに勤めていたという話は、竹林の他、平成三年の八月に市場急配センターに入社した人物からも聞きました。名前の方がすぐに浮かばないのですが、松平のかつての同僚のようで、たまたま競馬場だったかで再会したことがきっかけで市場急配センターに誘われたそうです。彼も松平と同じように会社の金を横領したことで石川トヨタを辞めたと話していました。10月か11月頃、石川丸果の倉庫で馬鈴薯の積み込みを手伝ってもらっていたときに彼の方から話してきたのですが、彼はすでに松平の横領の話を私が知っていることを当然の前提として話を進めたのです。松平本人の話では石川トヨタを辞めてから市内黒田あたりで中古車販売の仕事を1年2年ぐらいしていたが儲からないので辞めたという話でした。また、私に車を買換えることを再三勧め、一度は新型車のカーリーナを試乗車として持ってきたこともありましたが、丁度平成元年の秋頃でした。彼の方で私の信用調査をしたらしくローンを組むことが妻の借金で難しいと知ったようで、彼の態度は一変して、それ以来車の話はしなくなりました。

前妻との結婚生活において一番平穏で懐かしいのが、昭和61年の秋でした。中西運輸商では些細な事故でも給料が半分以下になるなど生活の安定性などまるでなく、一度運行に出ればいつ戻れるか分からず、金沢に戻ったとしても家に寄ることも出来ず、木越の佐川急便から折り返しの運行に出ることが毎度のことでした。1年3ヶ月ほどいた間に運転手の中で継続勤務が2番目に長くほど人の出入りが激しく、また、運転手の大半は地元ではなく、九州の人達で仕事の内容上その方が家に帰れるそうでした。ようやく落ち着いた先が、たまたま思い出して電話を掛けた金沢市場輸送だったのです。

その当時の配車係は藤村という男でした。19才の時金沢市場輸送にいた私のことはよく知っていて、かなり印象が悪かったらしく、なにかあったらすぐに辞めてもらうという条件を何度も念を押されての入社だったのです。

当時は暴走族のようなことをしていた少年時代の延長のようなところがあったので、態度も口も悪かったようでした。辞めるときにも事務所の机を蹴飛ばして怒鳴りつけたりしたことがあったのですが、それで2、3日出勤しても無視されたので自然に行かなくなって辞めたのです。

免停が来ていたことも一つの理由でした。この時も竹沢は情けない感じで何も言わずに黙っていたのです。事故処理のことで会社側の方に問題があったので腹を立てたのですが、確かに私の方にも問題があり、会社の対応はいわば常識的であったといえます。この時金沢市場輸送を辞めてからは一時北海道で働きたいと思い実行したのですが、まともな就職先がなく賃金レベルも金沢とは比較にならないほど低かったので二十日ぐらいで札幌で知り合った二人を連れてその中の一人の車で金沢に戻ってきたのです。

戻ってから暫く土方のアルバイトをし、免停が明けると同時に中西運輸商に就職したのです。仕事がきつくと飛ばすことで有名だったので敢えてそのような会社を求めて入社したのです。思った通り厳しい会社でしたが、魚屋とか水産輸送の名残も残っていて気楽な面もあり、辞めたいと思うこともあまりなかったのですが、長期の免停や先行きの生活不安で辞めたのです。休みも何も要

らないからどんどん走らせてくれと社長に頼んでいたぐらいだったので当時の私はやはり変わっていたようです。

いくら飛ばしても自由だということも魅力で、当時は飛ばすことが好きだったのです。勢い何度も危険な目にあったのですが、幸い大きな事故を起こすことは一度もありませんでした。この性格は次第に治まっていったのですが63年頃まで続いていたように思います。当時は4トン車だったのですが、長さも大型車と変わらず、高さは大型と同じ最高の3.8メートルのトラックに乗務していたのですが、本来押水町の優水化成という発泡スチロールの製品を作る会社の仕事をするために作ったような大きな4トン車で佐川の荷物を満載にして走っていたので重量の方も大型より床が低い分だけよけいに乗るぐらいでずいぶん負担の大きい重量オーバーで走っていたのです。

そのため月に2, 3回ずつぐらい高速道路でタイヤが爆発していました。タイヤの取り替えも自分でするのが社長の絶対命令だったのでずいぶん危険な場所でタイヤ交換をしたりしていたのです。爆発するのをバーストというのですが交通量の多い名神がほとんどで、東名高速の名古屋インター付近でも前輪がバーストしたことがあり、一度に二本バーストとしたこともありました。それをおもちゃのようなジャッキでトラックの下にもぐって作業していたのですから大変危険だったと思います。居眠り運転もしょっちゅうでした。

>>> : Linux LibreOffice : 2023-09-29 03:10:48 >>>

東名高速の名古屋インター付近で前輪のバーストは、金沢市場輸送の大型保冷車 7599 号という記憶。中央自動車道との分岐点付近だったような気もする。

<<< : Linux LibreOffice : 2023-09-29 03:12:17 <<<

居眠りでぶっけたことも何度かありましたが、不思議なぐらい大きなことにはならなかったのです。端から見れば私は世間知らずで命知らずの馬鹿者であったに違いないのですが、会社の評価も高くよく仕事をする褒められていました。

佐川急便では会う相手すべてに挨拶をしなければならないなど、本来の仕事以外でも厳しい面があったのですが、それも次第に日常化していたのです。運行の途中にも何度も会社などに連絡を入れなければならない特徴もあり、この特徴も長い間私に残っていたようです。好きな運転手の仕事に戻れた私はごく普通に与えられた仕事をしていたのですが、別人のように真面目になったと金沢市場輸送でしきりに評価されるようになりました。そうなるまで時間はそれほど掛からなかったと思います。

反面で他の運転手からすれば面白くないところもあったかもしれません。私を持ち上げて他の社員を利用するようなどころも金沢市場輸送の特徴だったのです。私が大型の長距離に乗務するようになってからはバブル景気のもあって仕事量は増えて、運行内容も変化して行きました。例えば九州便でも一泊して帰るのが普通の運行なのですが、私は折り返しを強く希望し、それが当然とも考えていたので次第にそのようなことも増えていたように思います。

本恒夫に配車が替わったことも最大の違いだったのですが、私の存在も他の運転手に影響を少なからず与えていたと思います。何時タイヤが飛ぶか分からず、スピードも出せず、バランスが不安定なトラックで厳しい時間制限の中九州まで折り返しの運行を繰り返していた私が、安定性のよく視界も広い大型車で仕事をするには以前とは考えられないぐらい楽だったのです。

中西運輸商ではたとえ泊まりでも何時荷物が出たという連絡が入るか分からず、佐賀県の鳥栖市という田舎のスタンドにずっと待機させられていたので、次の仕事が決まっていることも精神的に

ずいぶん楽でした。飛ばすことも好きだったのでどんなに急ぎの仕事でも苦にならず、却って熱が入ったものです。

給料の面でもずいぶん楽になりました。当時の私にすれば金沢市場輸送はいいことづくめの会社でもあったのですが、他社に比較すれば条件が良いとは言えないことも分かっていました。一番持て余したのが泊まりの時間でした。これがパチンコをするようになった原因であることはすでに書いています。さらに借金の問題が出て、毎月かなりの額を支払わなければならないと言う精神的負担が向こう見ずだった性格に変化を与え、雪の東北のアイスバーンでスリップしたりしたことも単なる事故以上に生活の問題として恐れるようになったのです。山形では10月の10日過ぎに橋の凍結で車体が斜めになって蛇行したり、鹿児島的高速道路でも140,150キロの最高速度で走行中橋の凍結でスリップしたりしました。

反面でトラックの運転にもすっかり慣れ、初めに7599号で松山に行ったときに居眠りをして以来、以来金沢市場輸送の仕事で居眠りをするのもほとんどなくなっていました。それより生活面での不安や前妻との問題でがより堅実なローカルな仕事を希望するようになり、冬場はイワシの仕事をしたり、日通や北都運輸のローカルの仕事をしたのですが、これも本恒夫の采配によるもので、感謝すべき面もあったのです。本恒夫とは運転手の中で私が一番よく話していたかも知れませんが、彼も仕事と家庭以外には楽しみのない男で私に共通するところもあったのです。本恒夫が中西運輸商に戻った私を会社に戻すために説得に来ていたこともすでに話していると思いますが、その私にすぐに新車の保冷車に乗務させたのが竹沢だったのです。

当時の運送会社では現在と違って古株の運転手が新車に乗務し、早くても5年ぐらい会社にいなければ新車に乗れないような社風があったのです。本来ならば運転手の中からも反対の声が挙がりそうなのですが、ほとんどの運転手と仲良くしていたこととよく仕事をすると思われていたので文句を言う者はいなかったようです。

仕事にも運転にも自信を持っていたので周りのことも気にならずにいたのかも知れませんが、このような状態に持っていたのも竹沢の老獪な状況操作が影響していたと考えられます。逆に私と入れ替えのようなかたちで中西運輸商から金沢市場輸送に来た河野はポンコツのトラックを親不知でぶっただけで長い間ぼろくそに言われ、平成三年の春まで6年ぐらいいも新車を与えられなかったのです。

他にも会社に対し、反抗的な態度などがあったようですが、それは外見上で示し合わせたものであったのかも知れません。彼も私たちの事件に関して一応の注意を要する人物の一人なのです。7599号には昭和62年の4月から63年の12月の末まで乗務していました。水谷や山下、竹林らと仲良くし仕事をしていて楽しい時期だったのですが、私生活の面では次第に悪化していったのです。

仕事から帰ると妻が子供を残していなくなっていたり、財産をほとんど持ったままの家でも何度かあり、一時的な家出も何度かありました。それにつれて前妻に対する不信感も増幅していきました。一度出れば暫く帰れない長距離の仕事上、仕事に響く負担も私には大きかったのです。このことは文さんとの関係にも極めて強く影響を及ぼしています。

何度も文さんの自宅に電話を掛け、清算を求めたのも同じ轍を踏みたくないという気持ちが強かったからだと思います。逆に言えば会社の連中は、普通の仕事をしている人には分からない長距離の仕事上の問題点を巧みに利用したとも言えます。

わざと話の内容の違う仕事を指示したり、嘘をつくことが何度かあり、私が休みたいと同時に当然に休みが期待できる状況に置いて、敢えて次の仕事を指示することもありました。具体的なことは書くとは長くなるのでやめておきますが、事実については事細かに裁判の資料の中に記載してあります。

例えばクリスマスの日に東京に行くことを指示されたのですが、詳しいことは分からないのですが私より文さんの方がショックを受けたようでした。本恒夫もクリスマスの日に二晩続けて羽咋郡の富来の港にイワシを積んで泊らせるなどどうでもいいような仕事を敢えて私に与えたようなことがあり、この時は蛸島の浜田漁業の仕事で北浜太一がしつこく念を押して富来の仕事を私にさせたのですが、家庭持ちの私に敢えてそのような仕事をさせることはやはり普通ではなかったと思います。

このあたりが微妙な線ですが、他のゴールデンウィークでも敢えて集中的に仕事をさせられていたのですが、こちらの方は他の社員が休みを取ったしわ寄せと筈の忙しい時期であったことを考慮すればそれほど不公平でもないのです。盆も正月も他の仕事から較べれば最低限の休日だったのですがこれも仕事柄仕方がなく、他よりも一日ぐらい休みが少ない程度でした。本来ならば運転手の家庭のことも考慮して仕事の割り振りをすべきはずなのですが、金沢市場輸送でも逆にそれを悪用したような嫌いもあったのです。

平成二年の正月前だったかにも本恒夫に九州に行けと命令されたのですが、その言い方もぞんざいだったので、私も怒って断ったのです。以前は基本給の他荷物を積んだ走行距離のみの歩合だったのですが、他の運転手の失敗で九州まで空荷で魚を積みに行ったときも、空車なので会社は一銭の手当も付けず、高速代すらまともに出さなかったのです。もっと不合理なことが沢山あったのですが、それらは徐々に改善され、東渡が来てからはもっと良くなったように思います。

一番良くなったのは高速の利用頻度が高くなったということです。59年当時は鮮魚の仕事でも東京まで大半を下道で走らされたのです。空車の場合高速に乗れないことも徹底されていたのですが、本恒夫が配車をするようになって話し合い如何で状況に応じて乗れるようになりました。

給料も次第に上がり、平成になってからは冷凍車（保冷車を含むが当時はほとんどが冷凍車になっていました。）で手取りで40万前後、多い月で43万円ぐらいの手取りがありました。総支給の明細は税金対策のため正確ではないという話でしたが、50万円を超えたことは一度ぐらいあったかないかぐらいだったと思います。市場急配センターでは50万円の基本給でしたが、手取りでは40万にみたく、38万円ぐらいだったと思います。

仕事の内容は金沢市場輸送の方が格段に濃厚だったのですが、62年当時ではその時の方がよく仕事をし、高速の利用も少なかったのに36,7万ぐらいの手取りだったと思います。

私が一番懐かしく出来るならば出直したいと考えていた時期が61年の秋頃なのですが、当時の私の仕事というのは早朝にマルエーのスーパー松任・寺井などのに魚を配達し、午前と午後の二便で青果の仲買の荷物を片町・小立野方面に配達する仕事だったのです。市内配達の仕事だったので手取り収入も安く、あるいは16,7万円程度だったように思います。

子供のミルク代にずいぶん気を使った覚えがありますが、スーパーで安いものを選んでなんとかの生活でした。車を一方的にぶつけられた時でさえ、非常識な相手の中年に強い態度をとれなかったぐらいに守りの生活になっていたのです。余裕がないので家計の方は私がやりくりしていたのですが、前妻も不服を見せることはありませんでした。

まだ車のローンも残っていたと思うので切りつめても毎月2万円ぐらい竹沢夫人の前借りしていたと記憶にあります。竹沢に中西運輸商に戻るのをやめたいと申し出たときには、すぎるような反対の上、100万円この場で渡すから翻意してくれとまで言われたのです。それでも慢性的な金欠を開くため、収入の良い大型車に乗務するために中西運輸商に行きました。

昭和62年の1月の後半だったと思います。4月まで2、3ヶ月しかいなかったのですが、この時には23日ぐらい一度も金沢に帰れないことがあり、23日ぶりぐらいに家に帰ったときも朝大阪に荷物を降ろしてから夕方に富山の佐川急便に九州行きの定期便を積みにはいるまでの間で日中の数時間でした。

それから2度ほど九州に行って1月弱ぐらいで一晩家にいる休みをもらったように思います。この休みというのは普通の仕事をしている人が夕方に家に帰って翌日にまた出勤するのに似たようなものです。

中西運輸商の仕事を知っている前妻も不安感を募らせていたようでした。刑務所にいることを考えれば比較にならない話しですが、普通に生活することを考えればやはり異常でした。そんなこともあり、配車係の一人もやめることを勧めたので金沢市場輸送に戻ったのですが、その配車係は名前は忘れたのですが本恒夫とも仕事上仲良くしていたようでした。

そんな関係で7599に乗務してからも（金沢市場輸送のトラックで）、中西運輸商の仕事で佐川の仕事をすることがありました。この頃になると中西運輸商もすっかり佐川の傘下になり、特訓道場のような佐川の教育もやらされ、それも私にはなじめなかったのです。街頭で大声を張り上げさせられる予定も組み込まれていたのですが幸い雨で中止になったのです。この頃には金沢の運転手も結構いて先に書いた桐畑からの移籍グループもそうだったのです。

やめたときにも中西運輸商の社長は愛想が良く、給料も手取りで36万円ぐらいありました。金沢にあまり戻れなかったのは九州から大阪・中京方面の佐川の営業所間の往復をやらされていたからです。九州で朝荷物を降ろした夕方に滋賀県や大阪で荷物を積み始め九州に向かうという運行スタイルも他にない特徴でした。運行が長くなる原因が三角運行と呼ばれるもので、例えば九州から東京に行き、東京から金沢に帰るというスタイルですが、これならば長くても一週間ぐらいで家に帰れるのです。

金沢市場輸送では長くてもその程度だったので1週間以上家を空けるということは殆どなかったと思います。市場急配センターでは泊まり自体がほとんどなく、経験したのは1月の終わり頃に池袋、2月の初めの福岡、2月の中すぎの四国、3月の20日頃の清水から向かった古河での泊まりの計4回しかなかったのです。

これは半年で金沢市場輸送の一月分にも満たないぐらいでした。松平も私が泊まりを嫌っていることは熟知していたはずで、私からもそのように話していたと思います。泊まりが嫌になったのも家庭での不和が少なからず影響していると思います。狭いトラックの中で知らない土地で一人で丸一日をつぶすことは体は楽ですが、誰だって嫌なことだと思います。仕事だから我慢していましたが取返して必然的に繰り返す必要は高くはないことだと次第に意識が変わっていったのです。

市場急配センターに移った当時の私の仕事も、早朝の小松方面へのマルエーの青果物の配達の後には、偶然なのか故意なのか、昔と同じ片町・小立野方面の配達でした。安田敏の方は根上だったの

でその間にも話しをする時間はかなりありました。午後は免許中の多田敏明に替わって内灘・高松方面の配達に行っていたようでしたが多田敏明を同乗させて一緒に行くことも多かったようです。

私の方はたまに大野やその友人で夏休みのアルバイトに来ていた高校生の少年を同乗させることがありました。どちらも安田敏の方が仕事量も少なく早く終わっていたので安田敏を午後の配達に付き合わせることも何度かありました。安田敏と岐阜で別れた直後に始めた仕事を同じように始めたことは昔のことを意識せずとも意識させるものがありました。

その頃の私はようやくサラ金や妻の家出のことも落ち着いたと一息ついた気持ちと、長男も来年からは小学生なので心機一転がんばらなければならないという新たな気持ちだったのです。そこに晴天の霹靂のような妻の家出が発生したのは7月の18日のことだったのです。この時の私の衝撃は、事件当日の文さんの話に次ぐ人生二番目の大きさでした。いつもとは違う予感があったので、その数ヶ月前から妻が仕事に出ていた海産物屋に電話したところ、二、三日前にやめたといわれ、家に帰ったところ離婚の書き置きがあったのです。自分自身相当のショックを受けていたので、端から見てもしばらくは普通ではなかったと思います。

多いときで43万円、前借りをせず、逆に有料道路代も自腹で出していたので会社からのバックもあって40万円をくだらない給料を数ヶ月間続けて丸ごと手渡し、妻の方もコンパニオンの仕事で多い日で残業やチップを含めると一日に1万円以上もらっていたらしく、普通でも2時間の仕事で6千円はもらっていたらしいのでサラ金の残債はめっきり減り、その話しを信じてコンパニオンの方もやめてもらい海産物の配達という普通の仕事をするようになっていたのです。

徐々に良くなって来ているという実感がそれまで我慢していた本恒夫の理不尽な指示にも強気な態度をとるようになり、ついにはやめて市場急配センターに移っていたのです。前妻には事後報告になったのですが、長距離の仕事を辞めたことで前妻の方もショックを受けていたようでした。

恐らく誤魔化し続けていた金利のみの返済計画が破綻すると直感してのショックだったものと思います。一日1万五千円という話しを変更した松平の市内配達で30万円の給料という話しも、税金で引かれ手取りでは21万か22万円ぐらいになっていました。ひたすら発覚を恐れての一時的な処置で家出したのかも知れませんが、その時の私は前々からの不信感が一気に高まり、完全な絶望を感じたのです。

それでもなお未練があったので、家に戻ることを頼み込み説得していったんは戻ったのですが、一時的に荷物を取りに来たようなもので先に述べたようにすぐに帰ったのです。これで完全に戻れないと私は確信しました。それまでにも何度か家出をしていた前妻ですが、毎日のように電話を掛けてきていたのも彼女の特長でした。

世間一般の家出とは本質的に違ったところがあったのですが、彼女の人間性にすっかり信用できなくなったのです。得体の知れない背景に覆われているような恐怖感があったのです。それを私は運命的なものと考えることが多かったように思います。

周囲からもそのずっと前から前妻とはうまくいかない別れた方がお互いに良いといわれ、私はそれに反発する気持ちでがんばっていたのですが、完全に負けたという敗北感も強くありました。あれだけ自信を失ったこともそれまでになかったと思います。

思い起こせば、前妻が海産物の仕事をするようになってから毎日子供を預けていた託児所で、長男が教えてもらったらしい、「我と来て遊べや親のない雀」、「やせ蛙負けるな一茶ここにあり」

という俳句を何度も何度も繰り返していたことも感受性の強い子供が肌で感じた気持ちを現したサインだったように思えました。

前年の家出の時は長男を引き取り、妻が次男を連れただけですが、自分と同じ片親の長男の姿を見るのは実に忍びなく、「アキは、アキは、？」と何度も次男晃博の所在を尋ね、次男の方も長男の姿がないと「にいたん、にいたんは？」と悲しそうに訴えていた声が強く心に残っていたのです。

また、長男の方でもお父さんの方が好きだといいいながらも、ふざけていて怖い目にあったとき、「お母さん、たしけてえ、たしけてえ」と呼んでいた声が、明らかに私より妻の方を頼りにしており、長距離に出ていた私より、極端に言えば倍近くも一緒に過ごした時間の長い妻の方が一緒に生活する方がふさわしいと考えるようになっていたのです。二人の兄弟の将来を考えれば引き離すことは酷に失すると結論を出すしかありませんでした。

二度目の家出以来、私は妻に何度も次のことを忠告しました。一つは絶対に家出をするなということ、今度出るならばそれ相当の覚悟で子供も二人とも連れて行けと言うこと、自分の方は絶対に出て行って欲しくないし、別れたくもないということ、そして借金のことは正直に言えさえすれば絶対に怒らないので全部話し、問題があれば相談してくれということでした。

一緒に生活する以上信頼関係こそが一番大切で、お金の問題はいずれ解決できることなのでとにかく正直に話してくれと何度も何度も繰り返していたのです。しかし、後で思えば初めの家出の時点で、彼女は信用を決定的に失い、私の方も心から彼女を理解し、許すことはなかったと思います。結局、最初つまづきから彼女とは溝ができそれが長い年月を掛けて深まっていったのです。しかし、根本は別のところにありました。

もともと彼女との結婚は、私の本意にかなったものではなく、はっきり言って彼女の方から無理矢理のかたちでさせられたようなものでした。私も本心から嫌だったわけではないのですが、決して望ましかたちで結ばれわけではなく、強引さに押し切られたのと同時に、彼女の熱意にもほだされたのだと思います。

結婚式当日の写真を見ても私はふてくされたような顔をしていて実際不機嫌でした。なにか大きな忘れ物をしていてそれを自分でも見つけられないようならだちだったのだと思うのですが、漠然としながらもその答えは分かっていました。結婚したのが21才の時だったので、それまでの21年間において一度も本当に好きになった女性と巡り会えなかったことが心残りだったのです。

その意味においても離婚直後の文さんとの出会いは運命的なものを強く感じ、同時に逆の意味での運命の仕返しのものとも思われたのです。結婚の前後と、最後の離婚の前後に安田敏が登場したことも運命的に思え、なおさら彼の言葉をむげにはできなかったように思います。それまで私は自分から女性に交際を申し込んでうまくいったことも一度もなく、つまりOKの返事をもらったことはありませんでした。本当に思い詰めて交際を申し込んだこともなかったのです、そんな相手すらいなかったことになります。

反対に女性の方から交際を申し込まれることはかなりあり、かなり明確なかたちで好意を示された女性の数を合わせれば20人近くになったと思います。しかし、これにも私は一度としてOK返事をしたことはなかったのです。これらの事実を傍目でみても私の恋愛観は一般とは違っているようです。しかし、求めているものは極めて平凡であって普通の結婚なのです。

恋愛と結婚を別個に考える人の方が多いように思いますが、私の場合、両者は不可分一体の如しであって常に理想の女性を思い描いていたように思うのですが、空想が現実になったように現れたのが文さんだったのです。これは容姿のみを指すものではなく、人柄や価値観を含めた彼女の存在そのものを指すものです。

当初から美人でスタイルも良く、品のある女の子だと思っていましたが、それだけであるならば似たような女性は他にも見かけると思います。顔も人なりといわれますが、意志の強さとかかわいさを表に窺わせる文さんの顔立ちはとても魅力的で、さらに平成三年の秋以降の彼女の私に示してくれた行動は、他に類を見なく見聞したことさえないぐらいにすばらしいものでした。

しかしながら天才と気違いは紙一重といわれる如く絶妙なバランスにおいて不安定なものだったのです。あまりに理想的すぎて自分の考えが先行して色づけ、本当の姿をゆがめているのではないかと自問自答を繰り返しました。

仮に一面を捉えているにせよ、それ以上の問題が彼女自身にあるのではないとも疑いの目を向けたのです。安田敏がゆうように、彼女ほどの女性であれば彼氏がいらない方が確かに不思議でした。そのような男性の存在を常に私は意識していたので、それに沿う文さん本人の言葉も決して嘘や冗談とは思えなかったのです。

はっきりした彼氏がいらないということも彼女の気むずかしさを推認させ、彼女の言動もそれに沿うものだったのです。このような彼女の外見から印象づけられた見方は私個人の特性に基づくものではなく、恐らく普遍的なものであって、そのことは私などより社会経験の豊富な松平らは軽々に熟知していたはずだと思います。

私がかねてから第一印象は良くない方でした。外見のみで一目惚れのようなことをされたことも何度かありますが、自分を知ってもらって好意を持ってもらったことの方が多かったように思います。世間ではラブレターをもらったり、バレンタインデーにチョコレートを沢山もらう男の人がいるようですが、そのようなもて方をしたことは一度もありませんでした。

飾らない性格だということもあると思いますが、全く黙ったままで女が寄ってくるほどの男でもなかったのかもしれませんが、また、21才に結婚してからは一度も別の女性と親しくなることはありませんでした。私の方でもそのような気持ちは全くなかったので機会もなかったのですが、自分からそのような機会を作らないように心がけていたということも事実です。結婚した以上、別れるということは嫌でしたし、妻に対し、本質的な取り立てた不満もなかったのだと思います。正直言って常軌を逸した亭主関白で、妻からも王様のように威張って何もしないと言われていました。周りの見方は妻に対し、同情的であると同時によく我慢して一緒にいるとあきれていたようです。しかし、彼女の真摯な姿も当初からの私と前妻の関係を知る者であれば認めざるをえなかった感じでした。とにかく前妻は熱烈に気違いじみたぐらいに私を愛してくれました。

そして、かたちの上では結婚したものの本当に愛を感じさせなかったのも私だと思います。ただの一度もプレゼントなどしたことがなく、指輪さえ買わなかったのです。どんな安物でもあげていたならば、私と彼女の運命もずいぶん違ったものになっていたかもしれません。彼女の方では結婚を決めた頃から自分からタバコをやめると言いだし、以来6年間一度も私の前でタバコを吸うことはありませんでした。付き合い始めたのが彼女が16才の時、17才の結婚でした。

まだ子供だからタバコも好きで吸っていたわけではなく簡単にやめられたのだろーとしか考えていなかったのですが、最後の平成四年の1月の電話の時、電話の向こうで彼女は長男にタバコのお

使いを頼んでいました。長男の声を最後に聞いたのもその時でした。楽しそうな声で返事をしていましたが、ついに自分一人で買い物に行けるまで成長したのかと思いました。

後になるとあの時長男は金沢に来て私に会えることを期待して楽しみにしていたのではないかと考えてならない声でした。実際私の方から子供は絶対に連れてくるなと言う条件でアパートにいれなければ会うことは出来たはずなのです。前妻の方からもどのように子供に説明していたのか、考えただけで思い気持ちになりました。このような不幸を二度と繰り返したくないという気持ちが結婚を前提に据えた女性との交際をより慎重に考えさせた一因でもありました。

言い換えれば今度結婚できたならば過去の反省のうえにたって同じ失敗は二度と繰り返したくなかったのです。まず最初に出たのは相手をよく見るということだったように思います。羹に懲りて膾をふくという諺がありますが、まさにそのようなものだったと思います。意識しすぎて却って不自然になるという言い方もできると思いますが、そうさせるだけの条件もまたそろっていたのです。

そもそも文さんのような女性が、離婚したばかりの私のような男に本気で好意を抱いていてくれていなどとはとても考えられなかったのです。離婚のことで自分自身にすっかり自信を失っていた時機でもありました。女性にもてた経験がないというわけではなく、どちらかといえば客観的にもてた方だったのですが、相思相愛の成就という経験はなく、そのことがとても信じられないぐらいに大きな重みを持っていたのです。

実は文さんとのこととかなり似たような経験もありました。中学1年の時から好きで、まともに話したこともなかった女の子から、高校に入って電車通学の中で、別の話しやすい女の子を交えて話しかけられるようになり、しばらくすると、好きだった女の子の方から「広野君、女の人と付き合ってみる気持ちない？」と聞かれたあと、続けて「私と付き合ってみない」と言われたのです。突然のことに私は茫然としました。

続けて彼女は恥じらいながら「言っちゃったぁ」と言っていたのですが、その場で私は席を外しました。二、三日してからその場にいた男友達を介して交際を申し込んだのですが、その時点で彼の方から諦めた方がよいと言われ、彼女から伝言で帰った返事も「友達として」というものでした。これも私はすっかり断りの言葉だと解釈したのですが、大きく影響していたのは安田敏と故郷を近くする友人の態度だったのです。

それ以来私の方でも彼女を避け、一緒に話しをするようなこともなくなったのですが、それから一年半ほどすぎた頃、金沢から帰りの電車の中で偶然会い、その場でも親しく話しかけられ自宅の電話番号を教えられて掛けてくるように頼まれたのです。初めの時が高校に上がってすぐの春で、二度目の出会いが17才になったばかりの頃で私は髪を金髪に染めて無職の不良少年だったので。年が明けて金沢の浅野本町の方で自動車整備工場仕事をしようになった頃にも彼女の家に電話掛けていたことを覚えているのですが、私の方では交際しているという意識はありませんでした。

そしてなにかをきっかけに私の方から電話をしなくなったように思います。次に電話をするようになったのは同じ年の秋に名古屋に行きバイク屋に働いていたときのことでした。この頃も彼女は全く普通の高校生でした。いつも私に対して明るい態度で接してくれていた彼女でしたが、手紙の返事で彼女がピンク色の当時流行していたハイティーンブギの手紙を送ってくれたのです。内容は他愛のないものだったのですが、その返事で私はすっかりお前は自分の女になったような自信過剰の内容の手紙を送ったのです。

それで送られてきたのが水色の手紙で、私のことは友達以上に考えられないという内容のことが書いてあったのです。私はすっかり落胆し、二度と電話をも掛けない男らしく諦めるようなことを書いて送ったのです。友達からスタートしようという手紙をもらったこともあったのですが、その水色の手紙だったかどうかは覚えていません。

そしてその年明けのの正月に田舎に戻り、しばらく近くの造船所で働いたりしていたのですが、そんなある日、突然彼女から電話が掛かり、弟のことで相談したいので今から自宅に訪問したいと言われたのです。

相談の内容は中学生の弟が学校でいじめられて困っているというものでした。弟を連れて私の家に来たのですが、相談の内容とは違って彼女はすこぶる明るく楽しそうでした。弟をいじめていた同級生は、当時極めて親しくしていた後輩の弟であったので僅かな影響力のようなものを使えば、それなりの効果も期待できたのですが、友人とも相談した上、それでは却って弟が学校で嫌な思いをすることにもなりかねないという結論を出し、その旨を電話で彼女に伝えたのです。

その時も彼女はいじめの件などどうでもいいような感じで明るく応えてくれ、成り行きは覚えていないのですが、友人を交えて能登半周のドライブに出掛けたりもするようになったのです。電話も何度か掛けました。彼女の方から掛けてくることは弟の件以外になかったかも知れません。このことも文さんの態度と共通するものがありました。

彼女の方から映画に誘われることもあったのですが、見たくない映画だったので他に何も考えずに断ったこともありました。その頃彼女は丁度高校を卒業するところだったのです。高校を卒業すれば故郷の北九州に帰るようなことを話していたのですが、彼女は金沢に出て野々市のスーパーで働くようになり、寮に入っていたようです。この頃が白菊町の伏〇〇さんの所で居候していた時期とほぼ重なります。

そのあとで春頃になると小林運送で長距離運転手の助手をするようになったのですが、金沢の中央市場で仕事をするようになったのもこの時が初めてでした。市場の前から彼女のところに電話をしたこともありました。電話も数回あったのですが、彼女の寮に近い喫茶店で一度あったこともありました。二人切りではなく彼女の方で同郷に近い下関から来たという同僚の女の子とを一人同伴させていました。

そして最後に会ったのが初めて二人で香林坊に映画を見に行ったときでした。外国の恋愛物のような映画でしたが、会話は殆どなく、出たところで食事に誘ったのですが、あっさり断られて別れたのです。明るい感じで帰っていったのですが、そんな食事の誘いを断られたという些細なことも私には大きな打撃となり、映画を見ているときも当時すっかり身に付いていた不良少年の態度が彼女に恥をかかせ不興を買ったと思い込み、小林運送の会社の上にある寮で彼女に完全に身を引く決心の手紙を書いて送ったのです。

彼女との関係はそれが最後でした。返事はいらないようなことも書いていたので返事もなかったのです。私が最後まで彼女と交際したいと考えなかったのは好きな面も大きい反面、価値観に違いのような物を感じ、将来を展望すると一抹の不安を感じたこともあったからです。互いに理解を深められたならばあるいは容易に除去出来る程度のものであったのかも知れませんが、それ以上踏み込むことはせず、けじめというか踏ん切りをつけたのです。今思えば当初の文さんに対する態度にも共通するものがあったようです。

しかし、その意味内容はかなり違ったもので言葉で説明することは難しいのですが、会社のことや前妻のことなどいくつかの要因が絡み合い、前妻のことで傷ついていた状態でこれ以上傷つけば本当に立ち直れないという存在自体にかかわるような危機感が根底にあったのだと思います。文さんの私に対する態度は感謝して余りあるものであり、最高の思い出として残したい、文さんに万が一裏切られるようなことがあれば人も人生も完全に信じられなくなるような根本的な不安が先走っていたのです。自分自身を呑み込むような存在感が文さんにはありました。文さんのことで自分自身を見失わないように私は常に一步一步を確かめるように接することが精一杯だったのです。

その後高校時代の女の子は、＜省略＞本当に私のことが影響していたかどうかは分からないのですが、このようなことも文さんとの関係において考えさせられる材料となっていたことは確かなことです。しかし、その女の子と付き合っていたという意識はなく、片思いだったとばかり思っていました。

そうではなく、交際していたと考えるようになったのは事件後拘置所で考える時間が多くなったときのことでした。文さんともことも同様で、本当に交際していたのではないかとひらめいたのは7月か8月ぐらいだったので事件から4、5ヶ月も先のことになります。もっとも当時は、なにより文さんの容体のことで頭が一杯で他の事など考える余裕がなかったのです。裁判のことも同じように考える余裕はありませんでした。

私の性格について、思いこみが激しいとか、しつこいなどと言われることがあるのですが、実際女の人に対してしつこく交際を迫ったことはなく、そればかりか他の男のような女性をものにするための努力もしたことがなかったように思います。全くなかったとは言えませんが、相思相愛のかたちで成就するのが極めて自然な恋愛だと当然のこのように私は考えていたのです。だから見栄や物を使って相手を落とすという考え方にはなじみませんでした。今思えば非常に贅沢で理想主義的な発想かも知れないのですが、長い人生を共に過ごすパートナーを選ぶと考えればそれほど不合理な考えではないと思います。また、相手に特別なものを求めているわけでもありません。

8月に離婚して以来、前妻から連絡があったのは11月前後に数回と、1月に一度でした。いずれも復縁を望むものであり、文さんとの関係とも奇妙な重なりがありました。前妻が安田敏などと同様に会社の意向を受けて行動していたのではないかと以前は考えたことがあったのですが、それぐらいに微妙なタイミングで前妻から連絡があったのです。離婚後東京の方に行くという電話での前妻の声は実に悲しそうなものでありました。11月頃の電話では、一生懸命に私の機嫌を取り、会話を多く持とうという努力が窺えました。

そしてもう掛けてくるなと言うと、ひどく怒っていたのですが、怒鳴りつけた電話で、それまでならば言い返しの電話を掛けてきていた彼女がそれっきり電話をしなくなり、突然に掛けてきたのが1月の電話だったのです。当時の詳細も裁判の記録の中には沢山書いてあると思いますが、今の私にすればもう書くのも嫌なことです。その時の電話で彼女は、「私のこと好きやったん」と聞いて来たのです。

「嫌だったら結婚しとらんやろ」と返事を誤魔化したのですが、「あんた、嘘いえん人やもんね」という諦めたような言葉が彼女の受け取り方だったのです。文さんのことも好きな女が出来たとはっきり伝えました。その方が文さんにも迷惑が及ばないと前妻の性格から判断したからです。

その前妻のことも端から見れば私の方が一方的に見捨てられ、逃げられたようなかたちになっていたのですが、そうではないのではないかという自分自身の判断の方が強く、事件後もたぶん一度

は面会に来るだろうと言う私の予想も的中し、5月の10日すぎぐらいだったかに西署に面会に来ました。

その場ですぐに復縁を申し出られたのですが、これは即座に断りました。しかし、私たちの会話は離婚前から変わらない雰囲気だったので、留置場の巡査からも「お前ら本当に離婚しとるんか？」と呆れられたぐらいでした。そのような意味でも前妻との離婚は世間一般に考えられているような離婚とは本質を異にしたものだったのです。

これまでに書いた私のこれまでの女の人との関係を見ると、明らかな共通項があるようです。事後的な客観視だから出来ることかもしれませんが、私の方に決断力と実行力がなかったことが知り合った女性を傷つけてきたように思います。今書いた他にも他の数人の女性との間にも似たようなことがありました。

女性に関して恵まれすぎていたという側面もあるかも知れませんが、ある意味でうぬぼれのようなになっていたことも否めないと思います。前妻からの連絡はそれが最後で、その年の秋には友人から再婚したという話も聞きました。子供のことは心配するなということだけが伝言だったようです。

刑務所を出てからも前妻や子供について情報を得たことは一度もありません。友人も恐らく知っていることはあると思うのですが、何も知らないと言います。約五年ぶりに戻った社会で過去の痕跡是一片たりともなくなっており、私のアルバムもなくなっていました。唯一考えられることは前妻が持ち去ったということだけですが、これも確認の術はありません。

>>> : Linux LibreOffice : 2023-09-29 09:47:37 >>>

10年ほど前押入れの中で、カセットケースに入った写真を見つけている。

<<< : Linux LibreOffice : 2023-09-29 09:48:17 <<<

ここではっきりさせておかなければならないことは、当時の私の意識として前妻とのことは文さんのことと別個に考えていて、文さんのことがなかったにせよ、前妻とはやり直すつもりはなかったということです。

11月の初め頃にはその旨を前妻にも文さんにも伝えました。誤解があるといけないので若干の説明をしますが、文さんに前妻との離婚のことを具体的に話したことはありません。正式に交際してもいないのに、そのようなことを話すことは非常識で、文さんの心の負担にもなりかねないと危惧したからです。また、その日は前妻からも電話があり、文さんにも電話をしたのです。たぶん、前妻に電話をするなど断ってから、文さんのこともはっきりさせようと電話を掛け、諦める旨をこの時も伝えたのです。

10月12日、初めて文さんの自宅に電話を掛けた直後にも前妻から電話があり、これが離婚後初めての前妻からの電話だったと思います。当時の私は、離婚したことを会社の安田敏以外の誰にも話さず、ばれることをひどく恐れていました。そしてようやくばれて松平に中央市場前の食堂に誘われて聞かれたり、東渡に嫌みをいわれたのも丁度その頃で11月の中頃でした。人目を気にするというか、そのことは金沢市場輸送において前妻のサラ金のことを知られたくないという気持ちでびくびくしていた頃からの連続で、なにかしら文さんのことも知られたくなく穏便に済ませたいという気持ちがあったのです。

それとは裏腹に文さんの態度は逃げる私に追い打ちをかけるように積極的で、しかも会社を中心にしました。舞台を会社に据えることは文さんの譲らない要求のようでした。実際にそれ

が、11月の終わり頃からの裏駐車場の行動に発展し、それが終わった2月以降は、私が出社に合う時間に合わせた金沢市場輸送への出向きがあったのです。いずれも会社側の協力なしには考えられない行動でした。

現在の生活状況について

私は現在、昨年の11月10日から勤めた加田設備工業で働いています。代表である加田義満君は子供の頃からの友人で、同じ宇出津の出身です。事件前にも付き合いがあり、彼にも彼の妻にも文さんのことは何度か相談していたので事件のこともよく知っています。

出所後7月一日から金沢で生活するようになったのですが、初めに勤めたのは高尾の方にある土建会社で、昔の友人が営業課長をしていてその紹介で入ったのですが、会社にも仕事にもなじまず、仕事に怪我をしたこともありまして10月の中旬ぐらいにやめました。

それから自分で仕事を探し、二社ほど面接にも行ったのですが、先々を考えて事件のことや裁判のことも一応話したところ、相手方の反応は普通と違ったものであり、一つは1週間経っても連絡のないまま、もう一つの運送会社の方は断られました。

正直言って、このままではまともな会社に勤めることは出来ないと確信し、事件のことなどひた隠しにしたまま就職することも考えたのですが、狭い金沢なので何時どこで情報が入るかも知れず、不本意な裁判を黙認することは矜持が許さなかったこともありました。

本当にしたかったのは刑務所で勉強していた法律に関する仕事で、司法書士会にも事務員の斡旋を申し込んでいたのですが、所長らしき人の対応も素っ気なく、とても期待のもてるものではありませんでした。生活のこともあり、事件のことなども考えると、やる気があるなら使ってやると言われた加田君に頼る以外に事実上選択の余地はほとんどなかったと思います。

一つだけ気に入ったのは一人前の職人になって世間から認められれば、場合によって一日7万円の日当をもらうことも可能だと聞かされたことでした。学歴も資格もない私が、人一倍の稼ぎを望むならば、それが一番の近道とも思われたのです。当初は住宅や道路の穴掘りのような仕事だと考えていたのですが、機械や大規模建造物の設備など仕事内容は予想していたより高度なものであり、多くの知識や経験も必要ようです。

最近になって少しは図面も読めるようになりましたが、完全に理解するにはまだまだ時間も掛かるし、それより自分自身の努力が必要だと痛感されます。今年の5月頃に加田さんから「2級管工事施工管理技師」の試験を受けるように勧められ、申し込みをしたのですが、事件のことなど再び考えるようになって、試験の方は事実上諦め、7月の中旬以来勉強をしたことはありません。加田さんには良く聞かれ、勉強をしていると嘘を言っているのですが、この点も心苦しく、嫌いだった嘘つきに自分になっていることにやりきれない思いです。

かといって本格的に試験勉強に取り組めば、この手紙もずいぶん簡素なものにせざる得ず、せっかく与えてもらったあるいは最後の機会を無に帰してしまうので、当初から割り切った判断で今年の試験は捨てたのです。恩に着せるような言い方かも知れませんが、私は自分の判断で手紙の作成に全力を傾注させたのですが、それもほんの初めのうちで、実際この手紙は、これまで事件に関して作成した書類のうちで一番身に入らず、だらだらと時間ばかり掛けてきました。

初めのうちは旧盆の休みのうちに仕上げるつもりだったのですが、ほとんど何もしない日が続
き、つぎはぎの短時間のつなぎ合わせで書いています。全体としてのまとまりもなく、趣旨のはっ
きりしない失礼な手紙かも知れませんが、まともに相手にもされていない以上、現状に即したかた
ちだと思っています。

夏頃から仕事が忙しくなり、家に帰るのは毎日7時半から9時頃で、深夜に及ぶこともありま
す。7時前に家に帰ることは十日に一度ぐらいだと思います。朝も比較的早く、6時20分頃に起
きて7時に会社に着くように向かいます。休みは日曜日のみなのですが、盆前は二回続けて日曜出
勤があり、盆のあとは一度休みがあったほか、日曜日に仕事に出てくれと言われたのを断ってきま
した。

本日は9月6日の日曜日なのですが、本当は今日も仕事で、ずいぶん忙しそうだったところを裁
判所に提出する書類を作成するためだと言って無理を言って休みだのです。夏場は蒸し暑く、雨で
濡れることも多く、正直言って体の方もばてていたのですが、とりたてた加重労働をしているわけ
でもなく、精神的な面でやる気がないことが負担を重くしているようです。

ようやく手紙を読んでくださると言われ、見方によっては進展したともいえるのですが、無駄な
こと、どうでもいいこと、理解できないことなどと言われては、もはや本当にどうでもいいことの
ように思えてきたのです。

社長や、周りの友人からも文さんのことを話すことは露骨に嫌がられるようになりました。二人
だけいた連絡の取れる友人も一人は全く連絡をよこさなくなりました。もう一人が今の社長です。
会社には社長を含め、四人いるのですが、仕事以外に付き合いはしていません。私の方から避けて
いるような感じでもあります。他にも仕事の関係の若者から誘われることもあったのですが、断っ
ていました。

携帯電話にも仕事以外に電話が掛かることはありません。出所後の私は、事件前以上に孤独な存
在となり、完全に身に浸みているようです。どうしてそうなったのかというすべての前提に文さ
んを位置づけていたからなのですが、最近になるとその希望も儚く、消え入れそうなぐらいに薄い
存在になっているのだと思うことの方が多くなりました。

やはり出所後に金沢などに出ず、県外に出れば良かったと思うようになりました。それにしても
安藤さん家族の最終的な納得のゆく、言葉をもらってからでないと出来ないと考えていたので、こ
れまでの経過は一応納得のゆかないものでもありません。とにかく、この事件に関連して友人にひ
とかたならない世話になり、何一つ報いることの出来ないまま、その相手にも終わったこと、過去
のこと、などと厳しいことばかり言われ、裁判をしていること自体がものすごく汚くて恥ずかしい
ことのように嫌みを言われ続けてきました。

あまり知られていないようですが、日本の刑務所では考えられないぐらいの運動不足です。五年
近くも異常な生活をしていた上で、夏場の土方の仕事は想像以上に体にきついものでした。中西運
輸商をやめて土方のような仕事もしたことはあったのですが、その時は夜を日に次ぐ突貫工事でも
なんと楽な仕事だと感心していたぐらいでした。

人一倍のお世話になりながら、不本意な仕事に従事し、不満を口にすることも出来ず、流れに流
されることは自己否定の連続です。まるで覇気がなくなり、腑抜けになったと最近自分でも思うよ
うになりました。仮に再審の裁判が始まったとしても今更どうしたという気持ちの方が強いかも知

れません。逮捕されて以来誰からもまともに相手にされず、それでも刑務所の中でも自分の考えを曲げずに頑張ってきたのですが、出所して以来の現実の方が打ちのめされるに十分なものでした。

すべて私が悪いと言われ続け、最近になると自分でもそう思うようになりましたが、そればかりはどうしようもないことです。憎まれ嫌われて当然かも知れませんが、執拗につきまとったとか、機会に乗じて姦淫したなどと言われ、そのままの事実が裁判所で認定され判決を受け、刑の執行まで受けたことは個人を責めるにしても底知れぬ不気味感を禁じ得るものではありません。

陥穽を設けられ理不尽な仕打ちを受けた会社の連中に対しても、一矢を報いるどころが、逆の立場で馬鹿にされた状況です。推測以上に手応えを得たことも事実なのですが、相殺してもやり切れぬものに変わりはありません。人生の敗北者になったというか、それ以前にまともな扱いを受けていないのです。死にたいと思えば、死ぬと言われた、蓄憤が高じて不感症な腑抜けになりました。日々の生活においても堪え忍ぶことは多々ありますが、大意を貫くために決して問題は起こさずにいます。

私が目指す大意とは悲願成就であります、それはすでにお話ししてあることです。それもどうでもいいことだと言われ、周りからも仕事の方が数倍大事だと説教され、返す言葉もない、情けない状況です。

お父さんやご家族の真意も測りかねている状況で、このようなことを書くことにためらいはありましたが、少なくとも外形や言葉を前提にする以上、このように解釈する以外にないのです。このことは文さんとの関係に実に似ていると思います。文さんの言葉の裏にある本当の意味を理解し、信用しきれなかったことが一番の間違いであったと強い反省に立ち、これまで精一杯の努力をし、それを貫こうと決意していたのですが、ここまではっきりと露骨に嫌がられ、まともな相手にされない以上、自分の気持ちばかりを貫こうとすることは互いにとってさらなる不幸にしかならないと考えるようになったのです。

お金を貯めるようなことも以前言いましたが、全く貯まっていません。弁当代以外にお金を使うことは殆どないのですが、残るはずのお金はすべてパチンコ屋に呑み込まれています。日曜の昼に家にいると昨年と同じような状況が思い出され、気が変になりそうです。行く当てもないのでパチンコで気を紛らし、一時の気休めとともにお金がなくなります。

以前のような射幸心もなく、勝てないことも十分承知しているのですが、見事なぐらいに負けの連続で、盆休みだけで8万円ほど負けました。仕事が忙しいのでパチンコに行く暇もあまりないのですが、僅かな資産がきれいになくなり、最近では生活にも影響が出るようになりました。パチンコ屋にいと昔のことも思いだし、そこから抜け出せないでいる自分を感じますが、将来に希望がもてない以上、それもいいのではないかと最近では考え方も変わってきたように思います。

端から見れば甘え以外の何者でもないかも知れませんが、次元の違うレベルで希望がもてないのです。他に女性を見つけて再婚することも周りから勧められたことがありますが、そんな気持ちにはなれません。まず仮の相手に対しても失礼なことです。相手を傷つけ自分も傷つくことが分かっている生活を始める気にはなれません。

前にいた土方の会社でも、暗いと言われ、周りまで暗くなると言われました。事件まで人から性格が暗いと言われたことはなかったのですが、いよいよ梅野が供述していたように暗くて何を考えているのか分からない人間になりつつあるようです。自分らのシナリオ通りに事が運び、現実化することを密かな楽しみにしていた連中ですが、私は今も為す術もなく、連中の思い通りの人生

に翻弄されているのです。悔しいという気持ちはほとんど感じません。ハッパを掛けられて奮起するほど単純な問題ではなく、大切なものを軽々に扱われることのやり切れぬ憤りで一色です。

加田さんには、アーク溶接の試験も受けさせてもらいました。学科は受かったのですが、実技で落ちました。私は20万円ぐらいの材料を練習のために消費したそうです。協力会社の一つである新本設備では、社長から工場の鍵まで渡してもらい、自由に練習することを勧められたのです。それで仕事が忙しくない頃は、仕事が終わってから安原工業団地の新本設備に行き、一人で溶接の練習を毎日のようにしました。やればやるほど難しさを感じる溶接ですがそれなりに向上もありました。仮付の仕方など基本的なことが分かっていなかったこともあり、試験では失敗しましたが、初めのうちはアークの発生自体低電流の裏波溶接ではなかなか出来なかったもので、それを考えると少しだけ上達したのですが、まだまだ本腰を入れた練習が必要です。

まず基本級を受けてからになりますが、配管屋にとって値のあるのはN-2Fというパイプを巻く試験です。これがなくても普通のパイプは巻けるのですが、これがあればガス管の溶接も出来るようになり、持っている人も少ないらしいので勲章のようにすらなるそうです。ちなみに新本設備でも10人ぐらいの社員がいてうちの会社とは違って溶接配管が主流で毎日のように溶接しているらしいのですが、N-2Fを持っている人は一人もおらず、その前提となる裏波溶接の基本級A-2Fも一人か二人ぐらいしか持っていないそうです。

私が挑戦するのはこのA-2Fです。今度10月に試験があり、数日前に社長が申し込みをしてくれたのですが、この手紙を出した頃からは仕事が終わってから溶接の練習をしなければならないと思います。

本職の現場の方でもかねてから社長に職長になって現場を持つことを勧められています。図面もまともに読めないで、まだまだ早いと思っているのですが、やらなければ分からないことも事実であり、ある程度リスクを払ってまで機会を与えられることは本来感謝しなければならないことだと思っています。

職長になれば材料の拾い出しから注文、現場での打ち合わせもしなければなりません。それだけ自分の時間も減ることにもなります。ただ現場の流れをある程度把握できるので、予定は立てやすくなるかも知れず、その点は好都合かもしれません。管工事の試験も溶接の試験も社長が費用を出してくれました。落ちたら給料引きだと冗談のようにしょっちゅう言っていましたが、本心ではなく、引いたことはありません。

他にも消防設備士や、配管の技能の試験も近いうちに取るように勧められています。12月頃にある配管の2級技能の試験は受けず、10月に予定されていた給水配管責任技術者とかいう試験も勧められたのですが断っていました。

本来ならばこのような仕事の試験にも頑張らなければならない状況なのです。社長からは丁稚からだと言われて、10ヶ月ほど経ったのですが、手元と言われる一応の仕事は出来るようになり、時々自分で配管することもあります。配管の仕事と言っても、大工、鉄筋屋、左官屋、斫り屋と似たような仕事もあり、色々なことをします。基本的なことでは文句を言われることも少なくなり、人数のうちにいれられ、それなりの期待もされているようです。

仕事を覚えて、今まで出来なかったことや、ずいぶん時間の掛かったことを短時間で処理できるようになることはそれなりの楽しみもあり、裁判のこともなく、普通に家庭を持っていたならば、

毎日家に帰れ、休みもあるので悪くない仕事だとも考えています。他の二人の若者にはいつでも独立することを口にしている社長ですが、彼も配管屋を初めて4〜5ねんぐらいで23、4才の頃に独立したのです。

私のように30歳を過ぎてから配管の仕事をするようになり、独立した人もいます。新本の社長もそうです。金沢では大きな会社の配管屋は少ないらしく、一人で仕事をしている人も珍しくありません。私に対して独立は勧めていませんが、力をつけ、その気になれば反対することはないと思います。

仕事を覚えることが直接的に身になると言う意味ではやりがいのある仕事です。仮に独立したとしても会社とは無縁になるわけでも商売敵になるわけでもなく、応援と云って忙しいときに助け合ったり、仕事を回すことも出来るのです。

裁判のことや事件のことを罵る社長ですが、真意は測り難く、お前は溶接だけ覚えて鉄工所で働けばいいと口にすることもありました。そうすれば鉄工所の父ちゃんと毎日話が出来ること冗談のように言っていましたが、本来うちの会社では、溶接を使う、機械の配管や、スプリンクラーの配管は数が少なく、より技術の要求されるらしい衛生の仕事の方が多いのです。

現在の現場は、辰口の新しいしかわ動物園、辰口庁舎の大きな現場の他、瑞樹住宅の三軒の住宅、旭工業団地近くのわかさ屋美術印刷の機械の配管などです。このほかにも細かい仕事を受けることがあり、4人の他、他社の応援を得たり、逆に応援に出ることもあります。わかさ屋の仕事は短期のものですが、溶接の配管です。溶接の配管では仮付と言って面を着けずに溶接をするのでアーク光線で目がやられ、開けているのがやっとなることもあります。

この点も書類の作成などには心配なところですが、仮付も上達すればそれほど負担にはならないようです。私はまだまだ未熟なので、先日も仮付した配管が根本から折れ、下に落ちることが二度ほどありました。あまり高所ではなかったので大事にはなりませんでした。場合によっては大変なことにもなりかねないので、溶接の腕を磨くことはやはり必要不可欠なのかも知れません。パイプの方もまともに巻けません。平板の溶接であれば、一応出来るのですがパイプの溶接は特別難しいように感じます。

お父さんの会社も鉄工所ということなので溶接が連想されるのですが、昨年休職中に偶然見た就職情報誌でマニシングなんとかという特別な加工をしているらしいことを知り、その後テレビ番組で偶然に世界最先端の技術であることを知りました。

溶接の仕事は熱くて危険も伴うのですが、難しいだけにやりがいのある仕事で、一番身につけた技術なのです。新本の社長に頼めばいつでも練習させてもらえ、溶接棒などの材料も社長が用意してくれるので恵まれた環境にあると言える、本当に恵まれているのですが、仕事以外のことで先行き不透明な現在の私にすれば、今ひとつ身が入らないことも正直なところなのです。

今の管工事の仕事にせよ、極めて小さな少人数の会社なので裁判が始まるようなことがあれば影響もそれだけ大きく、迷惑をかけることになる予想されます。新聞やテレビで報道されるようなことがあれば、現場においてもどうなることか予想すらつきません。会社の方でやめてくれと言われるかも知れず、そうなれば今までのことは水泡に帰し、次の仕事の当てもありません。

私一人の力では、生活して行くこと自体どうなるかわかりません。そのように考えると再審の裁判が始まること自体が荒唐無稽な絵空事のようにも思えるのですが、反面で、私の事実主張に、一

度の反論もしなかった検察庁の対応や、会社の者を召喚しなかった裁判所の態度は明らかに通常の裁判手続からはかけ離れたものであり、このままのかたちで終わることは常識的に考えられないのです。

忙しい中何度も裁判の傍聴に来ていたお父さんが、事実審理の私の本人尋問の際に一度も姿を見せず、金銭も真実も目的としない民事訴訟に及んだことも常識的に考えられないことです。これでよいと口にしながら、本当にこんなことで気が済むのか、到底理解できず、かといってその真意も掴みきれないものがあります。

文さんが廃人同様となり、以前の精神というか気持ちや記憶を失っているのかと考えたこともあります。これまで事件以来文さんから連絡のあったことはもちろんのこと噂さえたただの一度も耳にしたことはないのです。社長もこれまで一度も連絡のないこと自体がお前のことなど問題にしている証明だと言いましたが、これも確かに常識的に考えれば至極当然の理と認めざるを得ません。恩讐を超えてアウフヘーベン（物事についての矛盾や対立を、相互の矛盾や対立の否定のうえに、より高次の段階で統一すること。止揚。）することが本当にできるのか、あるいは出来ているのか、ひたすら信じ続けてきたことも最近になっては自信がもてなくなってきました。

やはり私のしたことは絶対に許されず、破廉恥で軽蔑に値する行為だったのか、それ以外の何者でもなかったのかと自問自答するようになりました。見えていた答えが見えなくなってきたというのが正直な気持ちだと思います。強姦などと言うことは最悪最低の評価であって、私と文さんの関係は、そのようなものとして扱われたのです。

思い出すだけでとても嫌な気持ちになりますが、すべて私の行為から出たことだという答えは目に見えています。責任転嫁の詭弁として会社の者を責めていると一般的に見られるとも思います。前に勤めていた土方の会社で、友人の上司で実質的に会社を任せられている人物に、ある程度の事情を話したところ、会社を訴えるなど辞めておけ、現に会社に勤めている従業員にも迷惑が掛かると言われました。

私の存在などそれだけのものでしかなく、現に生活をする社員の利益が優先されるのです。これは単なる世間一般の考え方だけではなく、法律においても共通する考えなのです。すなわち、例えば殺人事件の場合、殺された者の利益と殺した方の利益を対等なものとして考えるならば、殺した方も死刑にするというのが当然のこととなり、被害者に落度がなく、加害者に不正な目的があったならば道徳的评价においても対等な罰を与えるのが当然ということになります。

このような考え方はカント、ヘーゲルに代表される必罰主義で18世紀のヨーロッパにおいて提唱されていたそうです。ともあれ、現代社会においてそう簡単に割り切れるものではないことは言を待たず、犯罪者の更正改善を主目的としたいいわゆる教育刑主義が採られていることは、存在しなくなった被害者より、社会に存在する犯罪者に重きを置いて処理がはかられているのです。殺人事件と言え、最もかたちのはっきりした犯罪であって、正邪が誰の目にも明らかであると考えられますが、そうでないかたちのはっきりしない犯罪であれば、検挙されることは極めて希であって、よほどの契機がなければ表に出ないと言えます。

我が国には古来清濁併せのむという言葉がありますが、うやむやのかたちにされた者はぬくぬくと温存されるようです。とりわけ、会社というのは個人のみならず、社会においては公共の財産として扱われています。全体の利益を優先させるならば、私など虫けらに等しいようです。本来ならば夥しい利益と同時にそれに応じた厳しい義務も課されているはずなのですが、義務を迫られ責

任を負わされることはあまりないようです。極端な例が計画倒産などであって、法人が壊滅しても作り上げ、利益を貪った連中は、ほとんど責任を負わないと聞きます。法人格否認の法理とか、役員の責任も商法には規定されていますが、そのままのかたちで実行されることはほとんどないようです。

一方において過酷とも思える責任を負わされた例もあります。不動産会社の従業員が会社に置いてあった鍵を使って、仕事上紹介した女子大生のマンションに忍び込み強姦した上殺害したという事件で、会社側は鍵の管理不十分と社員の経歴をよく調べずに採用したという点を理由に一億円以上の損害賠償を命じられたのです。一応加害者本人と共に連帯責任というかたちのようでしたが、事実上刑務所に入った加害者に支払い能力はないので、会社が全責任を負わされたのと同じです。このように一見的外れのような判決でも、損害賠償法の理念を貫くならばかような結果になるのです。

民事においては、わざとやる故意の行為と、知らずにやる過失の行為はほぼ同様の扱いにされています。正否を評価する刑事裁判とは異なり、民事の目的は損害の公平妥当な分配なのです。情状酌量という言葉が刑事裁判にあり、それに相当するのが過失相殺ですが、不法行為においては裁判官はそれをしないことも出来るそうです。主張があった場合必ず判断しなければならないのが、債務不履行の場合です。債務不履行とは次の条文に基づくものです。第415条【債務不履行による損害賠償の要件】債務者が其債務の本旨に従いたる履行を為さざるときは債権者は其損害の賠償を請求することを得。債務者の責に帰すべき事由に因りて履行を為すこと能わざるに至りたる時亦同じ。一方の不法行為とは、次の条文です。第709条【不法行為の一般的要件・効果】故意又は過失に因りて他人の権利を侵害したる者は之に因りて生じたる損害を賠償する責に任ず。債務不履行と不法行為の違いについて詳しく説明する暇はありませんが、一言に債務不履行と言っても借りた金を返さないものから婚約破棄にまで多岐に渡ります。不法行為についても一般的なこの条文の他、使用者責任、動物の管理者責任、工作物の瑕疵についての責任などが別の条文に規定されています。業務の執行につき生じた損害を賠償する責めに任ずという第715条【使用者の責任】(1)或事業の為に他人を使用する者は被用者が其事業の執行に付き第三者に加えたる損害を賠償する責に任ず。但使用者が被用者の選任及び其事業の監督に付き相当の注意を為したるとき又は相当の注意を為すも損害が生ずべかりしときは此限に在らず。

(2)使用者に代わりて事業を監督する者も亦前項の責に任ず。

(3)前2項の規定は使用者又は監督者より被用者に対する求償権の行使を妨げず。

は、最近の判例で暴力団の組長の責任問題が論議され、判例は類推適用を認めました。拡張解釈とも言われているようですが、かたちより実質に重きを置いた判例の一つだと私は理解しています。一方、会社の者の責任について会社自体すなわち法人がどこまで責任を負うべきかという問題は、第44条【法人の不法行為能力】

(1)法人は理事其他の代理人が其職務を行うに付き他人に加えたる損害を賠償する責に任ず。

(2)法人の目的の範囲内に在らざる行為に因りて他人に損害を加えたるときは其事項の議決を賛成したる社員、理事及び之を履行したる理事其他の代理人連帯して其賠償の責に任ず。の問題として扱われているようです。これに関係した事件が近年石川県の裁判所でありました。

参考まで紹介します。(賠償請求事件「金沢セクシャルハラスメント事件、証拠番号5に編綴します。) この事件は女性の地位向上や絡んだいわゆるセクハラ事件として全国的にも報道されていたようでした。刑務所の中で読んでいた法律関係の本にも取り上げられていたと思います。因みに当時は郵送で法律時報という本をほぼ毎月読んでいました。その中に出ていたかも知れません。このようなセクハラ問題としての視覚から論じられた姿と実際に読んだ判決文とは印象にかなりの違いがありました。

この被害者の女性にも問題があると感じたからです。とても純粋な被害者とは思えません。実はこの事件の加害者は私の田舎の人で、息子が私の同級生なのです。そんなこともあり、友人にこの事件のことを尋ねたことがあるのですが、実態は経営する建設会社が大きくなり、同業者の画策にはめられた事件だと聞きました。

少なくとも友人は疑いを持たずそのように解釈しているので、地元での評判もほぼ似たようなものだと考えられます。一般の人には理解されていないことだと思いますが、民事裁判において、事実を主張するのは当事者なのです。当事者とは訴える原告と訴えられた被告で、事実とは当事者の間で展開される攻撃防御です。法律的就中民事訴訟法的に言えば、請求の理由であり、刑事訴訟上の訴因に相当するもので、裁判所に持ち出された事実の範囲ということになります。民事裁判においては、裁判官といえどもこの事実の範囲を超えて判断を下すことは許されず、判決に盛り込むことも違法になります。

簡単に言えば、民事裁判の事実とは、歴史的社会的な事実とは異なり、あくまで当事者の主張する言い分が事実として問題にされるのに過ぎないのです。この反面において、当事者には自分に有利な事実を主張する義務があり、これを怠れば、因って生ずる不利益を甘受しなければなりません。裁判官が判断してくれると言う考えは問題の外なのです。法律上立証責任と言われるもので、単に主張するだけでなく、証拠によって証明しなければならないのです。一般に不法行為では権利侵害を受けた原告の方が証明責任を負い、債務不履行では履行義務を負うものに義務を果たした事実を立証する責任があると言われています。一方が立証したならば、他方がそれに対する反証をしなければならず、返答に窮し、何もしなかった場合、相手方の訴えを事実として認めたものと扱われます。いわゆる擬制自白というものです。法律においてよく出てくる言葉の一つなのですが、推定するというのは反証により覆る可能性を含んだ取扱いであり、みなすというのは反証の機会も与えず、そのように確定的に扱うという意味なのです。実質を問題にせず、形式で扱うという意味にも取れると思います。

文さんについて

最近まで私は、文さんが自分のことをどう考えて行動していたのか、そのことばかりにこだわり、気に掛けていたように思います。これは裁判の認定した事実とも絡んでいるのですが、本当に彼女が私のことを嫌がり、迷惑がっていたとしたらどうしようかと真剣に悩みました。

そうであったとすれば私のしたことは全く無意味であり、救いようがないからです。いずれにしたところで救いようがないのかも知れませんが、その時点において悲愴な決意を抱いたことまで無意味であったとすれば、自分はどうなっていたのかと自分自身に疑いの目を向けなければならず、底知れぬ不安を隠せません。

実際に文さんとのことは細部に至るまでこと細かく脳裏に刻まれています。時系列にしたがって順序立てることはこれまでに何度もしてきたことなのですが、正直言って物事が多すぎて収まりがつかないのです。ある程度の時間的な配列は長距離運行という仕事の性質上明らかにすることが出来ました。

事件前半月の運行については確定的に覚えています。しかし、それ以前とすると部分的にはっきりするほか曖昧な点も少なくないのです。迂闊に日時を特定し、裁判に臨めば相手方に虚を衝かれ、自家撞着の憂き目にあわないとも限りません。もとより人間の記憶には限界があり、普通の裁判においては、頃という言葉が当然に使われ日時の特定制などさほど重要なことではないのですが、

しかし、これも本件の特殊性に鑑みれば出来る限りの特定の労を惜しむべきではないと、出来る限りの努力を続けてきたのです。

例えば、1月の16日に文さんのコーヒーマーカーと日産ディーゼルの新車納入打ち合わせの件があったとすれば、その日に私は関西に運行に出ていて、空車で帰ったとは考えがたいので次に会社に夕方いたのは18日の土曜日のみとなり、21日にトラックで文さんと話しをしたことを考えると、それまでに駐車場で二度文さんに声を掛けたことは考えにくくなるのです。全部で三度というのが私の認識なのですが、二度しかなかったことも全然考えられないことではないのです。はっきりしていることは二度目と思われるときに文さんが今から美容院に行くと言っていたことと、その時に事前に中央市場から買ってきていた缶コーヒを彼女に渡したことです。

私の記憶にある一度目の時はほとんど偶然に近いようなかたちで文さんに声を掛けたと記憶しているので、事前に会うことを意識し、コーヒまで準備していたとは考えにくいのです。また、このように彼女に直接声を掛けることを確定的に決意したのは、日野自動車からの電話で文さんに食事の誘いを掛け、会社に掛けた夕方の電話で自宅に電話を掛けてくださいと言われて掛けた電話で、お母さんが出て、この時もないと言われたことがあり、その翌日と思われる電話で文さんに「文ちゃんのお母さんっていい人やね。しばらく家にでんわせんし、そのかわり今度直接声掛けるし。」という話しをしたことが端緒となっていたのです。

なお、この電話は七尾から関東に向かう途中の県境付近の魚市場前の公衆電話から掛けたものでした。この事実も私は1月の中頃のことと記録において記述してきたように思うのです。初めに文さんに自信を持って声を掛けようとしたのは片山津に新年会に行く前日で11日の金曜日の夕方のことでした。この時は北野さんからの電話でダメになったのですが、12日の土曜日に新年会があり、翌日の日曜日に一人だけ仕事で、トナミ航空から池袋行きの展示会の荷物を積んで出たのです。

そして富山県内の高速道から文さんの自宅に電話を掛けたところ11月の終わり頃以来で彼女が出てくれたのです。このことを考えれば、やはり掛けてくれと言われながら彼女が出なかったのもそれ以前であったと考えられます。

3年中は頻繁に自宅に電話を掛けていたのですが、年が明けてから電話を掛けたのは、1月の25日、この時はお母さんが出て、初めての厳しい態度、その前の21日の浜口卓也自宅アパートからの電話では初めてお父さんが出たのです。その次に掛けたのが2月の16か17日で、この時はお父さんが出て、やや厳しい感じでいないと言われました。

そして最後に掛けたのが3月23日の夜で、久安ににいるという文さんに代わって両親と話しがしたいと思って掛けた電話で、すぐに文さんが出たのが最後の電話だったのです。

これらは記録中のどの記述を見ても必ず一致しているはずだと自信を持てます。ところで、出所後に松平からあずかった会社の記録によれば、16日から20日頃に掛けて私は山梨から池袋に行っているのです。細かい点は省きますが、そうだとすれば前妻に会ったことも名古屋から帰りではなくなりますし、多くの矛盾が出てきます。会社の記録は、この点だけに止まらず、ほとんど半分以上の運行が私の記憶と相違しているのです。ですが、会社の記録は高速道の領収書やスタンドでの給油伝票も添付され、体裁を整えたものとなっています。

なぜそのようなことになったのか私には不思議でたまらないのですが、はっきりしていることは運転手が作成する業務日報の筆跡が区々に異なっていることです。このことばかりは誰が見ても明

白であり、裁判所の書記官も納得していました。給油の伝票についても大阪で高速道路の料金所を通過した2時間ぐらい後に津幡で給油しているのです。西インターであればなんとか可能かも知れない時間での移動なのですが、津幡であればまず不可能であり、津幡で給油した理由も見出せません。

河野と宇出津にミカンを運んだこともあったのですが、これも12月中という私の記憶に反して11月10日頃になっています。この時期にミカンが大量に僻地まで出回ったとも常識的に考えられないのです。他にも色々ありましたが、昨年の春頃以来、会社の記録に目を通してはならず、その時点においても十分な精査、検討はしていなかったのでもだまだ、はっきりすることはあると思います。

なぜ会社がそのようなことをしたのか、それよりそのような仕事をどのようにしてすることが出来たのか、不可解という他はありませんが、推察されるのは、事件後に工作したとそれ以前に準備していたという二点です。他にもはっきりしていることは繁克が供述調書において、市場急配センターをやめたのは10月頃だったと供述していることです。

これは私が初めて文さんに交際を申し込んだ時期に相当しますが、連中は繁克との破局と私の登場を結びつけたかったことが窺われ、破局で動揺していた文さんに心の隙があったことを当局に印象づける意図があったと推察されます。いずれにせよ連中が事態を正確かつ詳細に把握していたからこそ出来たことであり、練り上げた計画性が窺えるのです。

このような事件のことを話題にすれば切りがないのですが、それはやはり過去のことであると最近になって気付くようになりました。過去にどんなことがあったにせよ、はっきりしていることは既に6年半も文さんとは会っておらず、声も聞いていないという現実です。

先日の電話の中でも自宅に電話を掛けることは文さんのためにならないというお父さんの言葉がありました。反面において会社に私からの電話を許してくださっていることは僅かにチャンスの余地を与えてくれているのかも知れません。少なくとも自分の都合の良い方に解釈すればそのようになります。

どちらが本心であるか一番答えを分かっているのはお父さん本人だと思いますが、現状においても私の心は傷を深め、諦めることを度々口にするようになりました。思えば、事件前の文さんに対する態度にも酷似するものがあります。事件の一月ぐらい前、友人の奥さんに次のようなことを言われました。「広野さん、その人のこと好きなん、それともその人が自分のことを好いてくれとるから好きなん。」という言葉です。彼女に限らず大方の見方はそのようなものであったと思われる。

見方を変えれば、私がなぜ逡巡を捨て去れず、自分の気持ちだけでどうにもならない状態に置かれていたかは誰にも理解されていなかったことになると思います。どんなに言葉を重ねて説明しても結果は変わらなかったと思います。結果から理由を考えるとというのがほとんどの人のものの見方で、それも不合理な意味ではなく、視界の限られた人間の限界が介在していると私には思われます。カントの批判哲学（ひはん - てつがく【批判哲学】ひはんてつがく（ドイツ kritische Philosophie の訳語）認識の前提、原理、目標、限界などの検討から出発する哲学。カントやカント学派の主張した立場。批判主義。先験哲学。Kokugo Dai Jiten Dictionary. Shinsou-ban (Revised edition) ッ Shogakukan 1988.国語大辞典（新装版）小学館 1988.）が思い起こされますが、このようなことを口にすれば変人思われるのがおちです。情実と利益に従って行動するのがほとんどの人の現実の

ようであり、哲学や法律など非現実的な別世界の物事だと少なくとも私の周りの人は考えているようです。

彼らを非難しているわけではなく、日々の暮らしに負われ、仕事と家庭の生活を維持するならば、そのような余裕など殆どないはずであり、仕事の試験をなおざりにした私など見方によれば最低の人間で、人のことをとやかく言う資格もないのです。これは余談のようですが、私をこれらをすべて含めた現実の姿を対象に据え、自分なりの判断で、自分なりの努力を重ねてました。出所してからずいぶんおろそかになりましたが、刑務所にいるときは司法試験も遙か射程に据えて法律の研鑽に勤しんで来ました。

事件を中心に置いてきたので、勢い刑法と民法が中心になりましたが、体系を把握するため全般的な勉強もしました。刑務所で得たものと言えそのような知識であり、勝つためには必要であると当初から思い立って実行したものです。誰からの教示ありませんでしたし、すべて独学です。パソコンも独学ですが、これも裁判のためです。ちょっと違っていたのは文さんがパソコンを操作していたことが、より興味を引いたことです。事務系の仕事をしたいと思ったのも文さんの影響です。それまでの私にすれば机に座る仕事など全く想像すら出来ないぐらいに嫌な仕事でしかなかったのが、好きになり、今でも心から断ち切れずにいるのですから、不思議なものです。ここで一言お断りしておきたいのですが、私の話はすぐに横道にそれ、主旨が滅裂でいい加減なようですが、一度に多くのことを説明するにはこのような方法も一つなのです。これらの中からより詳しく正確に知りたいとお望みの事があれば別の機会に説明させていただきます。

さらに失礼なことになるかも知れないのですが、この記述において読み返しや校正は時間の都合上行っていません。誤字脱字があるかもしれないのですが何卒お許しください。さて、本題に戻りますが、本件においては私の性格や独自の価値観のようなものの多分に影響していたと思います。くどくど述べることはしたくないのですが、例えば、女を喰うという言葉は私は大嫌いです。性的にものにするを指標する俗語のようですが、食べたと言う表現も虫酸が走ります。

少なくとも金沢市場輸送で運転手を始める前の私の周りはそのような考えの人間がほとんどでした。ほとんどは会社でも比較的重要な位置に就き、自宅も購入して今ではすっかり落ち着いているようですが、やはり彼らとは根本で考え方が違っててなじめないところがあります。当時は意識しなかったのですが、そんなこともあって次第に離れて行きました。今では全くに近く付き合いはありません。そのような点だけで人を評価することにも躊躇を覚えるのですが、長距離の仕事をやるようになってから自分の方から誘いも断り疎遠になっていったのです。

彼らの目から見ても私はやはり偏屈者なのかも知れませんが、しかし、このような偏屈な点が文さんには好感を持っていただけだのでもないかと思うのです。結婚したら自由がなくなるとか、縛られるという考えも私には妥当しません。本当に望んだ結婚であれば厭うことなどないはずではないかと私は考えるのです。とはいいいながら奔放な点も自分にあると自覚し、先に述べた彼らより自分が人間的に高位であると優れていると考えることもありません。自分は自分であり、自分に合った伴侶を見つけたいと私は常々考えていたのです。向こう見ずにこの一点を強行したのが先の結婚の失敗の一つであったという反省もあります。

やはり相手の立場も尊重しなければならないと思います。しかし、その基盤にあるのが信頼関係であって、信頼関係を築くことに急になっていたという側面も前妻とのことにはあるのです。なお、浜口卓也の供述調書では、そのような私の価値観とは裏腹のような内容を本人が私に説諭したような供述があり、文さんのことをそこらにいる女とは違う芯の通った女で一筋縄ではゆかないと

論したように言っていますが、そのようなことを言われた記憶は私にはなく、仮に私の記憶違いだったとしても先に述べた会話の内容は確実な事実であり、趣旨の相反する話を聞いていたならばそのように印象に残っていると思うのです。

私の周りの評価について、傍目には封建主義で、男性優位の戦前の思考の持ち主とされているように感じますが、無粋な論議も望まず、私も己一身の真実を追い求めてきたのです。このような私個人の考え方を敢えて思想上の問題という表現で書きますが、事件に至ったのはそのような個人的な価値観に裏打ちされた思想上の問題だけではありません。私はより現実的に文さんのことを考えていたのです。よくよく考え、考え抜いていたことなので今でもはっきり覚えていますし、基本的な考えも変わりません。

すなわち、文さんの堅持する態度では、好きな人ないし彼氏の存在は明らかであり、それが私でないことも彼女自身が再三再四、口にしていたことでした。初めて文さんに告白した10月5日以来、彼女の態度は一貫したものであり、友達として付き合って欲しいという私の頼みにも即座に「ごめんなさい」と断ったのです。彼女本人が行動で示した態度は明らかに私との付き合いを積極的に考えているとしか考えられなかったのですが、態度と言葉の二律背反はどうにも理解出来なかったのです。

一般的に考えられたのは、当時の若い女性の風潮として、同時に複数の男性と付き合い、本命や足などに使い分けているという自然に耳に入る情報でした。いかにも自分本位な考えのように思われますが、反面において男の方もずいぶんだらしなくなっているという印象がありました。文さんは繁華街を中心にした遊び友達と正反対のような生き方をする私に興味を抱き、会社の同僚として仲良くしたいと考えているのかと解釈したりしたことを覚えています。

一時は彼女が覚醒剤のような薬物を濫用し、自分の行動が制御できないのかとも考えたこともありました。しかし、彼女の行動には一筋の一貫性があり、どのように考えても私のことを真剣に考えていてくれると思われたのです。ほぼ絶対的な論理性を持って理解する一方で、彼女本人もそれを否定し、周囲も誰一人として私の考えを認め、肯定してはくれなかったのです。

初めて彼女に交際の申し出を断られたときも、ずいぶんショックでした。ごめんなさいという言葉が脳裡から消えず、二度と聞きたくないという言葉がその後も続けて連発されました。離婚したこともあるし、自分が社会的にも信用が薄いという引け目や、離婚していることの負い目もありました。品があり、身なりもきちんとしているので一見して普通以上の生活水準の家庭の子であると見受けられたのです。先行きは暗く、早く諦めた方がお互いに傷つかず、その方がよいと考え、すぐに諦めると言ったのです。

この「諦める」という言葉も私が彼女に対して連発した言葉です。私の推測になりますが、彼女もこの言葉に傷つき、避けようとする気持ちが強かったのではないかと思います。それが会社の連中の舵取りによって、自宅での電話対応の拒否、会社での裏駐車場の行動に発展したものと思えてならないのです。その後も彼女の態度は一貫しており、事件後西署前で離れるまでいささかも変わらなかったのです。事件のことを思い出し、それを記述することは私もつらいのですが、結果から一般に想像されるような凄惨さはなかったと思います。信じられないようなことですが、彼女は一度も、「やめて」とか「許して」とかという言葉が発せず、「痛い」とさえ言わなかったのです。

致命傷となった私の蹴りは、悪夢にとりつかれたような感覚が最大限に達し、反射的に出たの行動だったのです。もう殴らないから本当のことを話してくれという何度かの言葉にも彼女は耳を貸

さず、ふいに外に這い出ていたのです。なにかうごめく化け物のようにその時の私の目には映ったのです。会社の者に対する不信感も彼女言動に呼応して最大限に達していました。

既に自分自身を見失い、自分の脳も信じられなくなった私は、彼女本人に問い質すしか方策はないと思い込み、事実を一番知っていると思い込んでいた彼女に問うたのです。民事裁判の過程で私の供述調書を読んでいられるかも知れませんが、強姦の故意を強調した部分を除けば概ねその通りの状況でした。

とりわけ会話の内容はありのままに近いと思います。警察官の令状請求に伴う報告書のようなものにも「彼女に不信感を抱き、その真意を問い質すことを決意とし、」などという下りで、私の動機を明らかにしています。この点も裁判では一切問題にならず、判決では「自己の意に沿わない彼女の態度に立腹」したとか「何度も交際を断られたことに立腹した」ような事実認定がなされています。これは裁判所や検察庁の方で意図的に事件の核心をはずしていたとしか考えられないことです。

警察署においても同様で、明確に私が、犯行の契機となった裏駐車場のことを供述していたのに刑事は全く問題にすらしなかったのです。具体的な状況を訊ねられることもありませんでした。なぜ文さんを殴ったのか、それは裏駐車場のことを尋ね、はっきりと知らないと言われたことでした。それまでの彼女の態度から考えて、話し合いのみで心を開いてもらえるとは考えられず、その他のことも絡んで私は悲憤慷慨の極に達したのです。

私に対して逆恨みの当て付けのような言動を見せていた彼女にもどれほど自分が真剣に思い詰めているかを示したかったのです。殴っても彼女は知らないと言い張り、本当に知らないような態度だったので、何とも言えない恐怖心が心の底から突き上げました。思わず出た言葉が、「お前は、本当に不気味な女やな」でした。

言葉で説明することは難しいのですが、その時の感覚というのは車を運転中大事故を起こしかけた瞬間のようなものでした。なおかつ頭の中がはじけ飛んだような衝撃だったのです。事件後においても長い間私は、自分自身の精神に不安を持ちました。警察で自分の気持ちについて十分なことを言えなかったのもそれがあったからです。皮肉なことに17才の時、偶然に近いかたちで松原病院に安田敏を見舞いに行った時の初めて見る衝撃的な光景が過去の記憶を再燃させ、その半年ぐらい前に突如として鑑別所に収容されたときの独房での恐怖感も留置場での拘禁と連動していたのです。

裁判の過程においても私の行動は常軌を逸したものとして弁護側から請求された精神鑑定が裁判所で認められ、平成5年の3月1日から31日まで間、金沢大学付属病院で精神鑑定を受けたのです。結果として記憶や精神に異常はなく、歪んだ人格特性に基づく人格反応といわれ、爆発型の精神病質の傾向を持つと判断されました。

山口教授の鑑定結果だったのですが、教授の態度も常識的に真意とは考えられませんでした。心臓が止まりそうになり全身のふるえが止まらない恐ろしい薬物検査もされたのですが、それは身体に極度の負荷を与え、極限時の脳の異常反応の有無を検査するらしいものでした。それにおいても異常は出なかったようです。

身体的にもきつい検査でしたが、一昔前なら脊髄から脳まで管を通して検査をしたりしたそうですから、それに比較すればさほどではなかったかもしれません。既にその前から拘置所で精神医学関係の本を何冊も読んでいた私は、精神鑑定についても普通以上の知識はあり、次に何をされるの

かわからないという不安な日々を送っていたのですが、その不安も事件に至るまでの不安感に比較すればそれほどは感じませんでした。

保護房で戒具を付けられたときも、息をするのもやっとで立つこともままらない苦痛が49時間続き、その間痛くて睡眠もとれず、食事もほとんど摂らず体もかなり衰弱したのですが、その時の衰弱感というか独特の感覚は、中西運輸商にいた時に何度も体感した感覚を呼び起こすものでした。

これに近い衰弱感が事件前数日間の私の体にも現れていました。体の限界を超え、生命の綱渡りのような仕事を経験していたので、危機感が一層募っていたのだと思います。中西運輸商では連続運行でそのような状態になったのですが、事件当時は仕事内容以外に文さんのことで眠れず、食欲のないことが多かったのです。

このままでは大事故を起こしかねないという不安も強くありました。特に事件前日の古河から名古屋の運行では、中西運輸商以来の精一杯やっとの思いで運行を終えたという経験があったのです。私がいた頃の中西運輸商は、ハードなことでは有名な佐川急便の配達運転手の間でも中西運輸商は気違いだと言われていました。九州男児などといわれ、日本国民の中でも特に男気があり勇猛果敢と言われる九州の運転手も中西運輸商は日本一きつい運送会社だと言う者が少なくなかったのです。これは自慢話などではなく、客観的状況の比喻として引き合いに出しているのです。

市場急配センターでの仕事内容については割愛しますが、一言で言えば、それまでの長距離の仕事の中で一番楽であったことは間違いありません。比較にならないような仕事内容で、それを金沢市場輸送で大型車に乗務した当時の給料計算に換算すれば総支給で30万円ぐらい、平ボディ車の運転手並かそれ以下です。それが市場急配センターでは50万円だったのです。

業界自体の給料水準もかなり上がっていたので一概には言えないのですが、それだけの違いがあり、松平が運転手を優遇していたことは参考にもなると思うので摘示しました。会社の経営について知識がないのであまりはっきりしたことは言えないのですが、竹沢と松平は当初から営業利益など度外視して私と文さんを計画にはめるためにのみ、長距離部を市場急配センターに設け、舞台を設営したとしか私には考えられないのです。

蹴る瞬間目をつぶったかして状況を見ていなかったのですが、刹那の後の光景は異常に苦しんだ文さんの姿でした。転げ回るようなものではなく、静かに呻くような苦しみ方でした。普通の怪我ではないとすぐに判断できました。頭を打ったとは考えなかったのですが、顔の骨が折れたか、蹴りが鼻か目の周辺の弱い部分に当たってしまったのでないかと危惧しました。

声を掛ける必要などなくとにかく至急病院に搬入しなければならないと判断しました。迂闊に声も掛けられないと言う動揺もありました。消防署が頭に浮かんだのですが、一番近いところで駅西だったので、時間が掛かると思い。直接病院に運ぶことも手続面で時間が掛かると憂慮され、一番近くて適切な手続が期待できるのが西署だったのです。

急いで西署まで向かい、正面向かいの道路横に車を止めた私は、不安の念や後ろめたさが入り交じった状態で文さんに声を掛けたのです。強情を張り通されたという思いもあり、「オレ、お前のために人生棒に振ったようなものやな。刑務所行くかもしれんけど。今から警察入るし、救急車を頼む、病院に連れていってもらう、最後に聞くけど本当に車止めておった覚えはないか？」などいうような言葉を、本当の目的は彼女の容体を窺いながら声を掛けたのです。彼女は子供のよう

な声で、「一体なんの話しや、私知らんよ、」などと言い、最後に少し拗ねたような感じで「なんやそれ」といったのです。

大怪我を負っていると思い込んでいた私だったのですが、彼女が少し眠そうな感じで平然と受け答えをしたので緊急を必要とするほどの大怪我ではないのかも知れないとある種の期待も込めて判断したのです。

同時にそれまで怪我のことで後ろに退いていた不信感も再び顔をもたげ、彼女のこれほど殴られながらも問題にしていけないようなかわいい声に愛しさが倍増し、どんな事情があろうと自分のものにしたいという気持ちと、普通の女性として最も意思確認が確実であると思われる性行為に臨んでみようという気持ちが合致したのです。彼女の行動による一貫した意思を再確認したという自信もありました。

この機会を逃してはたとえどんなに文さんが私との交際を臨んでも両親が許すはずがなく、すべての事情は棄て去られるとも考え、家族の方々に不可解な事実を目を向けてもらうための既成事実の創出という意味でも唯一有効な方法だと思ったのです。これらのことを私は車で交差点を通過するぐらいの短時間で考えたのです。そして近くに車を移動させ、行為に及んだのですが、文さんは黙ったままでした。なすがままに身を任せるとともに一言も口にしなかったのです。

様々な思いが去来し、私は体の方でいうことが聞きませんでした。ずいぶん長い時間が経過し、なんとしても遂げたいと思っていた行為ももはやこれまでかと諦めかけた頃、彼女の方で「イヤ、イヤ、イヤ」と悲しそうな弱々しい声で反応したのです。言葉の上では拒絶なのかも知れませんが、それまでの状況から判断するとこのままで終わるのは嫌だと訴えているように聞こえたのです。「黙れ」と一言いうと、彼女は素直にその前と同じように静かに黙っていました。

本当に嫌なら一言で終わるはずがなく、彼女のそれを望んで静かにしてしてくれたのだと思った私は、気が楽になり体の方もいうことがきいて思いを遂げることが出来たのです。彼女の容体も心配だったので必要最低限の時間で完遂しました。しかし、行為が終わると自分の考えがまたしても自分本位で都合のよいものに思え、彼女の真意が分からなくなり、あるいはさほど重要なことだとも考えず、私に対する義理として身を任せたのではないかとも思えてきたので、またしても彼女を挑発するような言葉を向けたのです。

「このまま街に、放って来てやろうか」などと言いました。文さんは黙ったままでした。既に顔面は血だらけでずいぶん痛いだろうと可哀想になりました。彼女にしてもこれほどの目に遭いながら、それでもなお心を開かなかったということは話したくないよほどの事情があったに違いない。自分の方も大変なことをしてしまった前途多難である、一人では嫌だが彼女と一緒になら最高の幕切れにもなると思い、一緒に死のうかと声を掛けたのです。この時ばかりは力強い声ではっきりと嫌だと答えました。

このメリハリの違いで先程はやはり黙ってしてくれたのだと安心しました。「嫌なら病院行くぞ」と言葉を返したところ、彼女は「ここどこや」と甘えたような声で問いかけたのです。あまり平然としており、病院のことも口にしなかったので、ますます思いの外怪我はひどくないのではないかと思った私は、出しかけた車を止め、迷惑をかけた松平社長に一言謝っておきたいと思い、彼女に松平の電話番号を尋ねたのです。彼女は、会話を遮るように社長など知らないといい、すぐに続けて、「広野さん、目見えん、私目開とる」と言い出したのです。目に怪我をしているかも知れないという先程の危惧感が現実のものとなり、私は急いで西署に戻りました。

その前に彼女の気持ちを落ち着かせ、自分の気持ちも落ち着かせようと自販機に止まり、ジュースを買いに出て、文さんにもいないかと声を掛けたのですが、彼女はまたしても眠そうな甘えた声で「いない」と言いました。途中彼女から「広野さん」と甘えた声で名前を呼ばれたように思うのですが、全体が夢の中の出来事のような状況にあったなか、この言葉だけは、先程までの高ぶった気持ちも落ち着き、病院に一刻も早くという焦燥感に支配されていたこともあり、夢か現か定かではないのです。

それまでの言葉をほとんどすべてははっきり記憶しているのは、全神経が文さんのことに注がれ、集中していたからだと思います。これは文さんとの関係全体にもあてはまることです。福井刑務所で二回目の再審請求をすることになったのは丁度民事訴訟を提起された頃ですが、その段になって初めて見た警察の報告書のような書類の中で、出頭の時に文さんから直接事情を聞いた警察官が、誰に殴られたと声を掛けると、文さんは私の方を指さしたと記載されています。

>>> : Linux LibreOffice : 2023-09-29 10:48:31 >>>

前から気になっていたが、存在が確認できていない書面。

<<< : Linux LibreOffice : 2023-09-29 10:48:54 <<<

このことから目が見えないと彼女が言ったのは、真実ではなく、ここで話し合っても埒があかないと考えた彼女の咄嗟の嘘だったと思われるのです。医学的には脳の怪我の影響で視界もぼやけていたのかも知れないので確定的な根拠にはならないと思うのですが、裁判においてはこのような論駁も相手方から出るかも知れません。

客観的には流血の惨事で痛ましいという他はなく、裁判で事実を争ったりする私の態度は、人間性を疑われ、異常だと決めつけられるかもしれないのですが、私にとって文さんの終始一貫した姿勢の結実は、まさにこの西署での離れの時であり、それが脈々といついていたのです。

皮肉なことにそれを文さん同様お慕いする家族の方々に叩かれ続けてきたことは、やり場のない悲しみと憤りでした。現在では、こんなことでご家族の怒りがおさまるとも期待がもてません。理性や論理の上では、まず自分自身がしっかりして基盤を作り、ご家族のご宥恕とご理解を求めるべきことは重々承知しているのですが、今のていたらくは先にお話ししたとおりです。私の悲願についてはお父さんにお話ししてあり、そのこと自体はいささかの変わりもありません。事件前も今も自分の言動を客観的に観察すれば、変わっていない筋があると思います。

本来諦めるなどと言う言葉は、それにふさわしい場合を除き、相手方にとって失礼であり、口にすべき言葉ではないと反省されることです。それでもなおここで思いの丈を明らかにしたのは、偽りのない真の気持ちを理解していただきたい一念からのものです。この手紙によって今すぐに文さんに会わせて欲しいなどと言う気持ちも毛頭ありません。今回は最初の一步として事実に向け、これからのことを真剣に考えていただきたいのです。直接文さんに謝り、許して欲しいという気持ちもありますが、文さんとのことは、多大のご迷惑とご心痛をおかけしたご家族の理解と協力なしには、絶対にうまくいかず、またしても文さんを傷つけてしまうと憂慮されるので勝手な行動をする気は毫もありません。

ただ、分かって欲しいことは、私の夢になりますが、仕事に専念し、生活を維持向上させ、文さんとともに終生生活し、月に二度ぐらいいは一緒にどこかに出掛けたり、遊びに行くことと、年に一度ぐらいいは一緒に旅行も出来たらいいと思うことです。

ささやかな願いになるかも知れませんが、私にとっては事件前も今も変わらないことで、障害を負われたこともいささかの遜色もなく、消長を来すものではありません。勝手な解釈になるかも知

れませんが、私にすれば、あくまで私にすればになりますが、結婚を互いに前提に約した交際後に彼女が不慮の交通事故に遭い同様の怪我を負ったと考えれば、割り切れないことではなく、私のための証として身を挺してくれた傷であればなおさらのこと愛おしさが募ります。

このことについて一言添えるならば、比較的最近まで私は、文さんのことを「志士仁人は命を惜しんで仁をたがわず、また身を殺して仁を成し遂げることがある」、「朝に道を聞かば夕べに死すもかなり」という言葉に事件当時の文さんの姿を重ね合わせることがありました。事件が発生した同じ年の9月頃に官本という刑務所内のその本の中での解説も私が一番新しく持つ辞書とでは語意の解釈がまるで違っています。

官本の方はかなり古いもので、太古の漢文を翻訳したものですが、明日に道を聞かば、のほうも朝に人間として誠の姿を見たならば夕方に死んでも悔いはない、というような内容だったと思います。

志士仁人の方もはっきり思い出せないのですが似たような意味でした。それが最近の辞書では次のような解釈に変容しています。哲仁人（じんじん）は生（せい）を求めて以（もって）仁を害することなし（「論語 - 衛霊公」の「子曰、志士仁人無二求レ生以害厦仁。有二殺レ身以成厦仁」から）志士や仁者は、自分の生存のために、博愛の徳にそむくようなことはしない。自分の生命を捨てても、人道をまっとうするものである。Kokugo Dai Jiten Dictionary. Shinsou-ban (Revised edition) ヲ Shogakukan 1988.国語大辞典（新装版） ヲ 小学館 1988.、哲に道を＝聞かば [=聞いて] 夕べに死すとも可なり（「論語 - 里仁」の「子曰、朝聞レ道、夕死可矣」による）朝に大事な道を聞いて会得したなら、その晩死んでも心残りはない、の意で、道（真理）のきわめて重要なことを強調したもの。Kokugo Dai Jiten Dictionary. Shinsou-ban (Revised edition) ヲ Shogakukan 1988.国語大辞典（新装版） ヲ 小学館 1988.昔の辞書の方がより謙抑的で誠実だったと思います。

このように同じ物事でも取り扱う人の人生経験やそれに基づく主観が反映されるのです。これは裁判においても似たようなところがあるそうです。そのように私は文さんのことを自分の信念を貫いた孤高の人のように思っていたのですが、次第に現実的に考えるようになり、比較的最近になっては、文さんは自分の好意の行動で、私が憤慨することがどうにも理解できず、会社の連中の布いた布石である（ふ - せき【布石】

ふせき 1 囲碁の序盤戦。戦いが起こるまでの石の配置。配石。石くぼり。

2 （一する）将来のために、前もって手くぼりをしておくこと。「政界進出への布石を打つ」 Kokugo Dai Jiten Dictionary. Shinsou-ban (Revised edition) ヲ Shogakukan 1988.国語大辞典（新装版） ヲ 小学館 1988.）私に対する不信感や恐怖感が先だって金縛りにあって何も言えないような状態ではなかったかということです。

また、それ以前に思っていたことですが、文さんも私とのことがうまくゆかない原因を会社の連中に感じていたのかも知れません。それ故、あえて目先の問題として処理することなく、問題を持ち越したのではないのでしょうか、事件当日はその時期としても寒い方でした。それにも関わらず、文さんは薄い長袖シャツ一枚で、上着を羽織らないまで所持もせず、その初めて見るシャツには道化師すなわちピエロが描かれていたのです。ピエロという存在にも多義があると思いますが、自分のためではなく、人のために演技をする意味があると思います。参考までに辞書をくれば、次の如しです。ピエロ（フランス pierrot）〈ピエロー〉サーカスなどで、演技の合間に登場して道化を演じる者。また、その役。滑稽な化粧とだぶだぶの衣装で、おどけたしぐさや無言劇などをする。道化師。Kokugo Dai Jiten Dictionary. Shinsou-ban (Revised edition) ヲ Shogakukan 1988.国語大辞典

(新装版) ッ小学館 1988.、どうけ - し【道化師・道外師】どうけし(ダウケ..) 1 ⇒どうけがた(道化方) 2 いつもおかしなまねをして人に笑われる者。また、道化を業とする人。

Kokugo Dai Jiten Dictionary. Shinsou-ban (Revised edition) ッ Shogakukan 1988.国語大辞典(新装版) ッ小学館 1988.、私が描くイメージもここにはありません。

当日彼女と会ったときその服を着ていることはすぐに気付いたのですが、その意味するところを深く考える予想はありませんでした。文さんの行動を一々解釈していたならば、ほとんど毎日、会う度の連続で意思表示があり、一日に数回あることも多かったのです。そして私の出した答えは絶えず文さん本人においても否定され続けていたのです。文さん個人特性であるとしか考えられませんでした。

当時の私は客観的事実に反して、主客を転倒して文さんを見ていたのです。すなわち、本来ならば会社の連中が文さんを翻弄していたのに、専ら会社の連中の方が文さんのわがままに振り回されていると見えていたのです。本末転倒の問題を事実として既成化する力も現実にあるのであり、心理学の本でも見たことがありました。これも福井刑務所で読んだ官本で、嘘の社会心理とかいう有斐閣の本でした。名前は思い出せないのですが、西洋の有名な心理学者の著述を引用したものでした。

連中の中でもとりわけ竹沢は心理学や権謀術数の知識に長けていると思えてなりません。私が現在、少し読んでいるマキャベリ(マキアベリマキアベリ(Niccolo di Bernardo Machiavelli ニッコロ＝ディ＝ベルナルド)〈マキャベリ〉イタリア、フィレンツェの政治家、政治学者、歴史家。「君主論」で現実主義的政治論を展開。著「フィレンツェ史」「ローマ史論」「戦術論」など。(一四六九～一五二七) Kokugo Dai Jiten Dictionary. Shinsou-ban (Revised edition) ッ Shogakukan 1988.国語大辞典(新装版) ッ小学館 1988.)の中でも、一般に手段を選ばない策略家で殺戮を好む暴君のように言われているマキャベリが懐柔による人心操作にも意を払っていたことが書かれています。

この本も出所した当日に購入した10冊ぐらいの本のうちの一冊なのですが、ようやく最近になって目を通したものです。精神医学や社会学、哲学などにも関心を寄せ、本を読み漁った私ですが、その目的は首魁(1 さきがけること。また、そのもの。さきがけ。2 かしら。首領。首謀者)竹沢を打倒することが事件の全貌解明であって、勝ちを征するための不可欠の要素であると位置づけていたからに他なりません。犯罪小説もかなり読んだのですが、想像を妄執に発展させ、実社会において実行するという連中に共通した要素を掌握するための参考として聞き置いていたのです。

兵法の本も読み、関連があると思われるあらゆる知識を吸収しました。現実の社会においては、23才と24才の青年がそろって「共謀」という漢字を読めず、一人がしばらく考えて山勘で当てた程度でした。それほどの意識しか犯罪について持ち合わせてはいないのです。

文さんについてお話ししたいことは尽きないのですが、今の段階においてあれこれ話しをすることも適切であるとは思えません。最後に私が一言言わせていただきたいことを話します。それは、文さんを粗野な言葉で傷つけてきたことを謝りたいのです。

互いに傷つけあってきたことでもあります。人としてましてや6才年上の成人として文さんを包み見守る包容力がなかったことは非難されて仕方がありません。度が超えた点も確かにありました。弁明になるかも知れませんが、その言い訳をさせていただくと、やはり文さんの存在が自分にとって大きすぎたことと、文さんがいい加減な男の毒牙にかかって人生を踏み誤ることを極度に恐

れ、嫌われ悪者になってでも、よくなって欲しいと願ったから、あえて苦言を呈し、諫めたのです。

そして自分がどれほど真剣で愛おしく思っているかをストレートに伝えたかったのです。会社の連中に対しても、私は金沢市場輸送時代から不信感を抱き、油断のならない連中であると一線を画していたのです。そんな連中も、ニコニコと雑用や弁当の買い出しに行ってくれる文さんに、邪心を抱いているなどとは露も思わず、そう考えたこともなかったのです。

不審を感じることもあったも、そのような考えをもたげる自分自身を卑小で恥ずかしい男だと思いました。そのような好意的な見方が本来目に映っていたものを歪め、目を曇らせていたのです。当時のことを私が詳細に記憶しているのも常に状況を注視し、分析していたからです。当時の結論は先にも述べたように主客を転倒させたものでした。文さんと知り合うまでの私は、虚無的な思考の持ち主であり、反面において現実のみを重視する理想主義者でした。恋愛物などのドラマも嫌いであり、人の生死を軽々に興味本位に扱う殺人事件のドラマも嫌いでした。作り事を軽視し、嘘を侮っていたことが連中に足下をすくわれる素地になっていたとも思います。連中は、軽蔑されることに喜びを感じるようなマゾヒストであり、その裏で相手を貶めることに至高の快感を感じるサディストなのです。

<<< : Linux LibreOffice : 2023-09-29 11:00:33 <<<

<<< : Linux LibreOffice : 2023-10-04 11:33:37 <<<

3. 令和5年9月30日付 金沢弁護士会に対する求意見書

>>> : Linux LibreOffice : 2023-10-04 11:40:58 >>>

- 令和5年9月30日付 金沢弁護士会に対する求意見書 | 再審請求と刑事告発の証拠方法公開サイト\
金沢地方検察庁御中 <https://note.com/hirono2020kk/n/ncc0a771cf2dc>

令和5年9月30日

〒920-0937 石川県金沢市丸の内7番36号
金沢弁護士会御中

〒927-0431 石川県鳳珠郡能登町字宇出津山分10-3
請求人 廣野秀樹

求意見書

令和5年8月31日付で金沢地方検察庁に提出済みの告発状及び令和5年10月下旬に提出予定の告訴状において、貴会所属の木梨松嗣弁護士、岡田進弁護士、長谷川紘之弁護士、若杉幸平弁護士、野田政仁弁護士、小堀秀行弁護士6名を被告発人・被告訴人としております。

次に参考にしていただくための本件刑事告発・告訴の経緯、理由の概要を記し、この刑事告発・告訴の問題に対する貴会の状況認識及び今後の対応を確認致したく、令和5年11月14日を提出の期限として「意見書」と題する書面を求めます。

意見書の内容が対応として不十分と判断した場合、「令和5年度会長の織田明彦です。副会長の、長澤裕子、中澤彰孝、早川潤、木村弘、杉本隆、小蕎秀臣ともどもよろしくお願いいたします。 (会長からのご挨拶 | 金沢弁護士会 <https://kanazawa-bengo.com/about/greeting/index.html> : 引用) にある貴会役員7名を殺人未遂にかかる刑事告発・告訴の帮助犯とみなし被告発人・被告訴人に追加する旨、令和5年9月26日に電話連絡にて機会にお伝えしたとおりであり、金沢地方検察庁と貴会を人権侵犯事件の対象者とし人権侵犯事件調査を相談している金沢地方法務局輪島支部の担当者には電話でお知らせ済みです。

記

>>> : Linux LibreOffice : 2023-09-30 14:34:01 >>>

令和5年9月28日午前11時31分より25分間、貴会の事務局長とお話をさせていただきました。ちょうど同じ日の午後2時38分頃になりますが、金沢地方検察庁から令和5年8月31日付告発状が返戻ということで自宅に届きました。

金沢地方検察庁からの告発状の返戻・深澤諭史弁護士の「弁護士の護身術」・金沢弁護士会にレターパックの用意 | 再審請求と刑事告発の証拠方法公開サイト\金沢地方検察庁御中
<https://note.com/hirono2020kk/n/na3656e7dc528>

記録として写真を note の記事にしています。

今後のことになりますが、貴会（金沢弁護士会）専用のお知らせ窓口として、次の X（旧 Twitter）アカウントをご用意しました。もともと使っていたものですが、プロフィールの名前とプロフィールの内容を変更しました。

刑事告発告訴・再審請求／金沢弁護士会御中
@s_hirono

しばらく当分の間、金沢弁護士会に刑事告発告訴・再審請求の問題を把握・ご理解いただくための専用アカウントとして情報発信・情報公開を致します。（令和 5 年 9 月 30 日）

石川県鳳珠郡能登町宇出津 note.com/hirono2020kk/2011 年 8 月から Twitter を利用しています

3 フォロー中

105 フォロワー

刑事告発告訴・再審請求／金沢弁護士会御中（@s_hirono）さんの返信があるポスト / X
https://twitter.com/s_hirono/with_replies

ちょうど 9 月 30 日が土曜日ということで、27 日に能都郵便局でレターパックを購入していました。

予定外だったのですが、金沢地方検察庁から告発状の返戻があり、告発状の資料 R5.6.30、令和 5 年 7 月 7 日付告発状、令和 5 年 8 月 31 日付告発状がレターパックに入りきれたので、そのまま貴会に郵送することとしました。

ご参考にさせて頂ければ幸いです。なお、「刑事告発告訴・再審請求／金沢弁護士会御中（@s_hirono）」の X（旧 Twitter）アカウントでご紹介する記事のリンクは、比較的重要性の高いものに限定し、貴会のご負担を軽減致したいと思います。

これまでの情報の整理の必要も考えておりますが、令和 5 年 10 月下旬になる告発状・告訴状の提出を最優先に準備を進めていきます。この期間中に電話でのご連絡・お問い合わせを頂いてもけっこうですが、内容に踏み込んだご質問は金沢地方検察庁に書面の提出後にして頂ければと思います。

今回、作成する告発状・告訴状の内容もこれまでとは違ったわかりやすく伝わりやすい証拠説明に重点をおきます。書面の内容は、その都度、次 note の記事として公開する予定でいますので、順次お読み頂けると思います。

再審請求と刑事告発の証拠方法公開サイト\金沢地方検察庁御中 | note <https://note.com/hirono2020kk>

以上よろしく申し上げます。

<<< Linux LibreOffice : 2023-09-30 14:58:28 <<<
以上

< < < : Linux LibreOffice : 2023-10-04 11:43:21 < < <